

清 水 遺 跡 同所新田遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 20 年 3 月

国土交通省 北首都国道事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第290集

し みず
清 水 遺 跡
どう しょ しん でん
同 所 新 田 遺 跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 20 年 3 月

国土交通省 北首都国道事務所
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は、県土の均衡ある発展を念頭におきながら地域の特性を生かした振興を図るために、高規格幹線道路などの根幹的な県土基盤の整備とともに、広域的な交通ネットワークの整備を進めています。

その一環として整備する首都圏中央連絡自動車道は、首都高中央環状線などと一体となって、首都圏の骨格となる3環状9放射の道路ネットワークを形成し、東京都心部への交通の適切な分散導入を図り、首都圏全体の道路交通の円滑化、首都圏の機能の再編成を図る上で極めて重要な役割を果たすものです。

この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である清水遺跡と同所新田遺跡が所在します。

財団法人茨城県教育財団は、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け、平成18年4月から平成18年11月までこれを実施しました。

本書は、清水遺跡と同所新田遺跡の調査成果を取録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、境町教育委員会、五霞町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成20年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 人見 實 徳

例 言

1 本書は、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成18年度に発掘調査を実施した、茨城県猿島郡境町大字塚崎2468番地の1ほかに所在する清水遺跡と、同郡五霞町大字小福田839番地ほかに所在する同所新田遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調 査

清水遺跡 平成18年4月1日～平成18年6月30日

同所新田遺跡 平成18年6月1日～平成18年11月30日

整 理 平成19年9月1日～平成20年3月31日

3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。

清水遺跡

首席調査員兼班長 川村満博

首席調査員 成島一也

調 査 員 桑村 裕

同所新田遺跡

首席調査員兼班長 川村満博

首席調査員 成島一也

主任調査員 須藤正美 平成18年10月1日～平成18年11月30日

主任調査員 田月淳一 平成18年8月1日～平成18年9月30日

平成18年11月1日～平成18年11月30日

調 査 員 桑村 裕 平成18年6月1日～平成18年8月31日

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長村上和彦のもと、調査員桑村裕が担当した。

5 製鉄関連遺物の化学分析については、JFEテクノリサーチ株式会社に委託し、考察は付章として巻末に抜粋して掲載した。

6 本書を作成するにあたり、製鉄関連施設（第1号掘立柱建物跡、第1号製鉄遺構、第10号井戸跡、第1号廃棄土坑、第6・8・11～13・25号溝跡）については、岩手県立博物館上席専門学芸員赤沼英男氏に御指導いただいた。

凡 例

- 1 地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、清水遺跡は $X = +13,280\text{m}$ 、 $Y = -5,640\text{m}$ の交点を、同所新田遺跡は $X = +12,600\text{m}$ 、 $Y = -6,760\text{m}$ の交点を基準点 (A 1a1) とした。

この基準点を基に遺跡範囲を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」「B2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3、…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1区」「B2b2区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構	SI—堅穴住居跡	SB—掘立柱建物跡	SA—欄跡	SK—土坑	SD—溝跡	SF—道路跡
	SE—井戸跡	TM—方形周溝墓	WT—溜め井跡	PG—ピット群	P—ピット	
遺物	P—土器・陶磁器	TP—拓本記録土器	DP—土製品	Q—石器・石製品	M—金属器・金属製品	
	T—瓦					
土層	K—攪乱					

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 清水遺跡の遺構全体図は250分の1、同所新田遺跡の遺構全体図は400分の1、遺構実測図は60分の1に縮小して掲載することを基本とした。
- (2) 遺物は原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合もある。
- (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土・赤彩・道路跡		炉床面・火床面
	竈・粘土・炭化材・砂・炭化範囲		柱痕・煤
●	土器・陶磁器	○	土製品
□	石器・石製品	△	金属器・金属製品
---	硬化面		

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

- 5 一覧表・遺物観察表の表記については、次のとおりである。

- (1) 計測値の単位はm、cm、kg、gである。なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。
 - (2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率や写真図版番号、その他必要と思われる事項を記した。
 - (3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。
- 6 「主軸」については、竈(炉)を持つ堅穴住居跡については竈(炉)を通る軸線とし、他の遺構については長軸(径)を主軸とみなした。「主軸・長軸方向」は主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E)。
- 7 近世の陶磁器の器種・年代観については、「内藤町遺跡」(新宿区内藤町遺跡調査会ほか、1992)、「瀬戸市史陶磁篇 六」(瀬戸市史編纂委員会、1998)、「九州陶磁の編年」(九州近世陶磁学会、2000)などを参考とした。

抄 録

ふりがな	しみずいせき どうしょしんでんいせき							
書名	清水遺跡 同所新田遺跡							
副書名	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第290集							
編著者名	桑村 裕							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL029-225-6587							
発行年月日	2008(平成20)年3月24日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
清水遺跡	茨城県猿島郡境町 大字塚崎2468番地の 1ほか	08546 — 054	36度 7分 9秒	139度 46分 17秒	12m	20060401 — 20060630	1,414㎡	一般国道468号 首都圏中央連絡 自動車道新設事 業に伴う事前調 査
同所新田遺跡	茨城県猿島郡五霞町 大字小福田839番地 ほか	08542 — 069	36度 6分 40秒	139度 45分 24秒	10 — 12m	20060601 — 20061130	5,612㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
清水遺跡	集落跡	古	墳	竪穴住居跡	2軒	土師器、土製品	同所新田遺跡から、近世後半に比定される製鉄関連遺構が確認されている。	
	その他	近世 不明	溝跡	2条	陶器、磁器			
同所新田遺跡	墳墓	古	墳	方形周溝墓	1基	土師器		
	集落跡	平安	墳	竪穴住居跡	1軒	土師器、須恵器		
	生産跡	中・近世		掘立柱建物跡	6棟	土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、土製品、石器・石製品、鉄器・鉄製品、銅製品、鉄滓、古銭、瓦		
				欄跡	4列			
				製鉄遺構	1基	鉄器・鉄製品、銅製品、鉄滓、梃状滓		
				溝跡	29条			
			井戸跡	4基				
			溜め井跡	8基				
			廃棄土坑	4基				
			土坑	49基				
			ピット群	4か所				
	その他	不明		掘立柱建物跡	1棟	縄文土器、土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、鉄器・鉄製品、石器・石製品、鉄滓		
				欄跡	1列			
				溝跡	21条			
				道路跡	1条			
				井戸跡	6基			
				土坑	221基			
				ピット群	3か所			
要約	清水遺跡からは、古墳時代中期と後期の竪穴住居跡が確認されており、調査区西側に位置していることから、調査区より西部に集落が形成されていた可能性がある。 同所新田遺跡からは、鉄鉄から鋼を精錬した遺構と、製品を加工した遺構が確認されている。							

目 次

序		
例言		
凡例		
抄録		
目次		
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 清水遺跡	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	10
1 古墳時代の堅穴住居跡と遺物	10
2 近世の溝跡と遺物	20
3 その他の時代の遺構と遺物	22
(1) 堅穴住居跡	22
(2) 竈跡	23
(3) 土坑	23
(4) 遺構外出土遺物	29
第4節 まとめ	31
第4章 同所新田遺跡	33
第1節 遺跡の概要	33
第2節 基本層序	33
第3節 遺構と遺物	37
1 古墳時代の方形周溝墓と遺物	37
2 平安時代の堅穴住居跡と遺物	39
3 中・近世の遺構と遺物	42
(1) 掘立柱建物跡	42
(2) 欄跡	52
(3) 製鉄遺構	58
(4) 溝跡	66
(5) 井戸跡	85
(6) 溜め井跡	99
(7) 廃棄土坑	105
(8) 土坑	115
(9) ビット群	124
4 その他の時代の遺構と遺物	130
(1) 掘立柱建物跡	130
(2) 欄跡	130
(3) 溝跡	131
(4) 道路跡	138
(5) 井戸跡	139
(6) 土坑	143
(7) ビット群	165
(8) 遺構外出土遺物	168
第4節 まとめ	171
付章	177
写真図版		

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所は、境町及び五霞町において一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業を進めている。

平成16年8月20日、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及び、その取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成18年1月11日に清水遺跡の現地踏査を、平成18年1月17・18日に試掘調査を実施した。また、平成16年9月14日に同所新田遺跡の現地踏査を、平成17年10月11～14日及び11月22日に試掘調査を実施し、遺跡の所在をそれぞれ確認した。平成18年1月31日及び平成17年12月12日、茨城県教育委員会教育長は国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長あてに、事業地内に清水遺跡及び同所新田遺跡が存在する旨を回答した。

国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、平成18年2月2日に清水遺跡、平成17年12月26日に同所新田遺跡について文化財保護法第57条の3第1項（現 第94条）の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長あてに、平成18年2月15日に清水遺跡、平成18年1月10日に同所新田遺跡について、工事着手前に発掘調査を実施するよう通達した。

平成18年2月20日、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成18年2月21日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長あてに、清水遺跡及び同所新田遺跡についての発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成18年4月1日から平成18年11月30日まで、発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

清水遺跡は平成18年4月1日から平成18年6月30日まで実施した。同所新田遺跡の調査は、平成18年6月1日から平成18年11月30日まで実施した。以下、調査の経過について、概要を表で記載する。

清水遺跡

工程		期間		4 月	5 月	6 月
		調査	準備			
調査	準備	土構	除去認	■		
遺構	調査			■		
遺物	洗浄	写真	整理	■		
補撤	足調		査取			■

同所新田遺跡

工程		期間		6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月
		調査	準備						
調査	準備	土構	除去認	■					
遺構	調査			■					
遺物	洗浄	写真	整理	■					
補撤	足調		査取						■

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

清水遺跡は茨城県猿島郡境町大字塚崎2468番地の1ほか、同所新田遺跡は同郡五霞町大字小福田839番地ほかにか所在している。両遺跡が所在する町域は茨城県の南西部に位置し、利根川を挟んで東側が境町、西側が五霞町である。

境町は、比較的平坦な猿島台地と呼称される洪積台地に展開しており、常陸川水系の氾濫や常陸川水系に流入する小河川などによって形成された下位段丘や谷底平野および氾濫原によって構成されている。町内の標高は東高西低で利根川に向かって低くなり、最高標高は20m、最低標高は10m、平均標高は約14mである。

五霞町は、四方を利根川、江戸川、権現堂川、中川によって区画されている。町内の地形は、利根川及び中・小河川によって開析された低地（谷底平野、自然堤防、三角州平野）と、五霞村台地と呼ばれる下位段丘群によって構成されており、町内の最高標高は17.5m、最低標高は9mで、平均標高は約12mである。

両町域の地質は新生代第四紀沖積統が中心で、約1万年以降までの新しい時代の堆積層で形成されている。また、この沖積統の下には第四紀洪積世後期に形成された洪積統が堆積しており、下層から竜ヶ崎砂礫層、常総粘土層、関東ローム層（武蔵野ローム層、立川ローム層など）に分層される。

清水遺跡は、境町南西部の利根川沿いに位置し、標高12.5mの下位段丘に立地している。遺跡周辺の土地利用状況は主として水田・畑地などの耕作地であり、遺跡の現況は畑地であった。

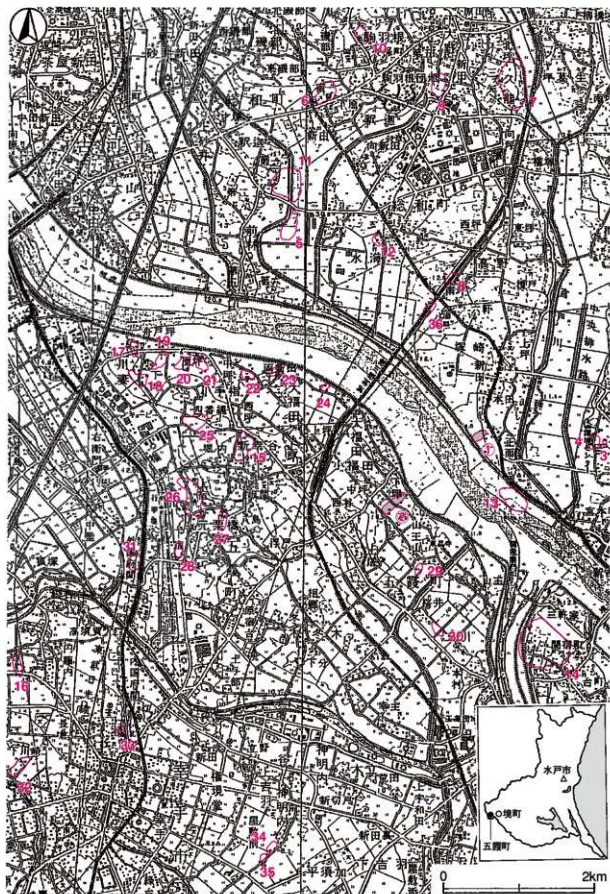
同所新田遺跡は、五霞町北東部の利根川沿いに位置し、標高10～12mの下位段丘に立地している。遺跡周辺の土地利用状況は主として水田・畑地などの耕作地であり、遺跡の現況は水田であった。

第2節 歴史的環境

清水遺跡と同所新田遺跡が所在する現在の利根川流域には、沖積統の低地と洪積統の台地が広がっている。利根川の北側では、利根川の支流によって開析された谷津が広がり、谷津から洪積統の台地にかけて遺跡が存在している。また、利根川の南側は、広大な沖積統が広がり、奥東京湾に面した標高10～13mほどの低地に遺跡が確認されている。ここでは、両遺跡周辺に確認されている遺跡を中心に概要を述べる¹⁾。

古墳時代の遺跡は現在105遺跡確認されており、発掘調査が行われている遺跡は8遺跡である。前期の遺跡では、集落遺跡である末広遺跡〈3〉、かわい山遺跡〈4〉、羽黒遺跡〈5〉のほか、6基の方形周溝墓が確認されている秋連才伝遺跡〈6〉などが確認されている。前期に比べ中期になると、遺跡周辺の集落数が減少する傾向がみられる。その中で確認されている遺跡としては、祭祀遺構と考えられる土坑や、滑石製模造品の未製品が多数出土している住居跡が検出されている香取西遺跡〈7〉や、子持勾玉をはじめとする滑石製品の祭祀関連遺物が多量に住居跡から検出している向坪B遺跡〈8〉などがある。後期の遺跡は、集落遺跡である末広遺跡、羽黒遺跡、久能西原遺跡〈9〉、駒羽根遺跡〈10〉などが確認されている。

奈良・平安時代の遺跡は現在63遺跡確認されており、発掘調査が行われている遺跡は6遺跡である。かわい山遺跡、羽黒遺跡など古墳時代から継続する複合遺跡ではほぼ占められるほか、10世紀代の住居跡1軒と掘立柱建物跡2棟が確認された日下部遺跡〈11〉、住居跡1軒が確認された水海城跡〈12〉がある。また、複合遺跡



第1図 清水遺跡・同所新田遺跡周辺遺跡位置図 (国土地理院「鴻巣」,「水海道」1:50000を使用)

表1 清水・同所新田遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代									
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平			中世	近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世	
①	清水遺跡				○		○	19	大崎穴薬師遺跡		○					○		
②	同所新田遺跡				○	○	○	20	大崎遺跡		○					○		
3	末広遺跡				○			21	寺山遺跡		○					○		
4	かわい山遺跡		○		○	○		22	伊勢塚古墳				○					
5	羽黒遺跡	○	○	○	○	○	○	23	釈迦新田遺跡		○					○		
6	釈迦才仏遺跡	○	○		○			○	24	殿山遺跡		○		○			○	
7	香取西遺跡	○	○	○	○	○		25	小手指貝塚		○			○	○			
8	向坪B遺跡				○			○	26	上舟戸遺跡		○			○	○		
9	久能西原遺跡		○	○	○			27	三島神社古墳		○		○		○			
10	駒羽根遺跡		○		○	○		○	28	元栗橋下宿遺跡		○		○	○		○	
11	日下部遺跡	○	○	○	○	○		29	西新畑遺跡		○						○	
12	水海城跡					○	○	30	桜井浦遺跡		○						○	
13	境河岸							○	31	幸手市No 8遺跡				○			○	
14	関宿城跡						○	○	32	幸手市No 10遺跡						○	○	
15	石畑遺跡		○		○	○	○	○	33	幸手義賑窮乏之碑								○
16	千塚柴原遺跡					○		○	34	幸手市No 19遺跡							○	○
17	幕化遺跡							○	35	幸手市No 20遺跡					○			○
18	堤外遺跡		○		○			○	36	南坪遺跡		○		○	○			

である香取西遺跡からは、鉄製品の生産に関係する遺構や遺物が確認されている。

近世初頭には、「利根川東渡」と呼ばれる大規模な河川改修工事が行われた。承応3(1654)年には会の川から古利根川へ向かっていた利根川本流が常陸川筋と連結し、関東平野の中央部を西から東へ貫流して太平洋へ注ぐようになった。それにより、奥州から鬼怒川を下り、境河岸<13>などを経て利根川や江戸川をさらに下って江戸へと至る輸送ルートが成立し、関宿周辺の河岸は輸送ルートの要として繁栄していくことになった。その交通・流通機能を大きく担うようになる境河岸は、正保期(1644年から1647年)に関宿藩の居城である関宿城<14>の城下町として機能するようになった。

当該期の遺跡は現在44遺跡確認されている。発掘調査が行われた主な遺跡としては、前述した千葉県野田市に位置する関宿城のほか、五霞町に位置する近世の溝一条が確認された石畑遺跡<15>、埼玉県幸手市に位置し、陶磁器や木製品が多く出土した生活廃棄物捨場1基が確認された千塚柴原遺跡<16>などがある。

註)

- 1) a 茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図(地名表編・地図編)』2001年3月
- b 生涯学習課市史編さん室『幸手市史 考古資料編』幸手市教育委員会 2002年3月
- c 総和町史編さん委員会『総和町史 資料編 原始・古代・中世』総和町 2002年3月
- d 生涯学習課市史編さん室『幸手市史 通史編 自然 原始・古代 中世 近世』幸手市教育委員会 2002年6月
- e 境町史編さん委員会『下総境の生活誌 資料編 原始・古代・中世』境町 2004年3月
- f 境町史編さん委員会『下総境の生活誌 因説・境の歴史』境町 2005年3月
- g 総和町史編さん委員会『総和町史 通史編 原始・古代・中世』総和町 2005年3月
- h 野田市史編さん委員会『野田市史 資料編 考古』野田市 2005年3月
- i 石川義信『羽黒遺跡2 一級河川女沼川河川改修工事事業地内埋蔵文化財調査報告書2』『茨城県教育財団文化財調査報告』第262集 2006年3月
- j 千葉県立関宿城博物館『企画展図録 利根川東渡と関宿藩』千葉県教育振興財団 2006年10月

第3章 清水遺跡

第1節 遺跡の概要

清水遺跡は、利根川沿いの標高12.5mの下位段丘に立地している。調査前の現況は畑地であり、調査面積は1,414㎡である。

調査の結果、古墳時代の竪穴住居跡2軒、近世の溝跡2条、時期不明の竪穴住居跡1軒、炉跡1基、土坑48基を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に19箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（坏、高坏、碗、甕、甌）、土師質土器（内耳鍋、焙烙）、陶器（碗、播鉢）、磁器（碗）、土製品（土玉、紡錘車、支脚、勾玉カ、不明土製品）である。

第2節 基本層序

調査区中央部南側のB2e6区にテストピットを設定し、基本土層の観察を行った。地表面の標高は12.4mで、地表面から2.45m掘り下げた。土層は10層に分層され、第3～9層までが立川ローム層、第10層以下が武蔵野ローム層と判断した。以下、観察結果を述べる。

第1層は、暗褐色の耕作土層で、少量の砂粒を含み、層厚は61～66cmである。

第2層は、暗褐色の腐植土で、少量のローム粒子と砂粒を含み、層厚は14～18cmである。

第3層は、褐色のソフトローム層で、層厚は5～15cmである。

第4層は、褐色のハードローム層で、微量のAT（始良丹沢テフラ）を下層に含み、層厚は20～39cmである。

第5層は、黒褐色のハードローム層である。第二黒色帯（BBⅡ）上部と考えられ、層厚は6～16cmである。

第6層は、黒褐色のハードローム層である。第二黒色帯下層で、層厚は10～29cmである。

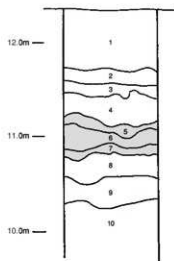
第7層は、黒褐色のハードローム層である。第二黒色帯の最下層で、層厚は4～12cmである。

第8層は、褐色の粘土層で、層厚は20～34cmである。

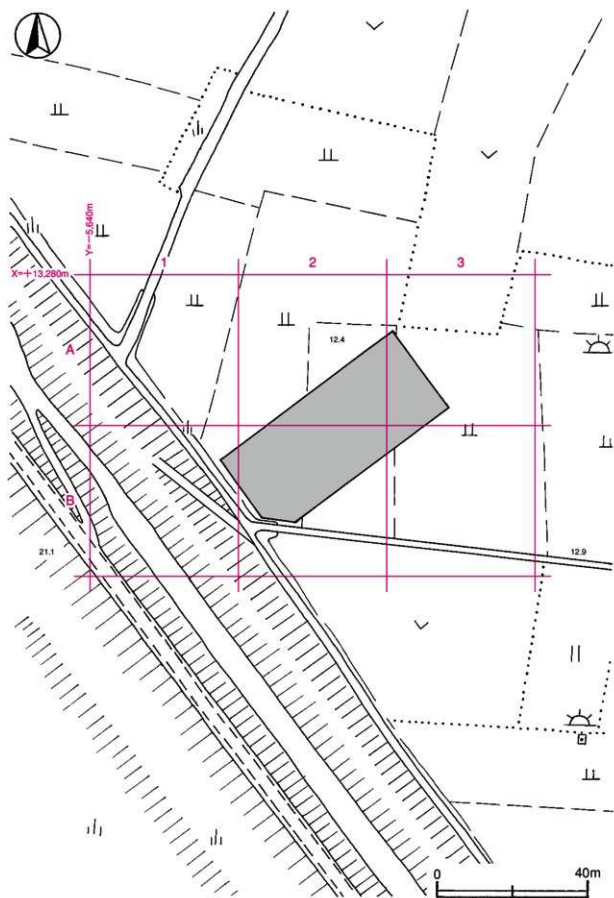
第9層は、褐色の粘土層で、第8層より粘土ブロックを多く含み、層厚は18～33cmである。

第10層は、褐色の粘土層で、微量の赤色粒子を含み、層厚は32～45cmである。

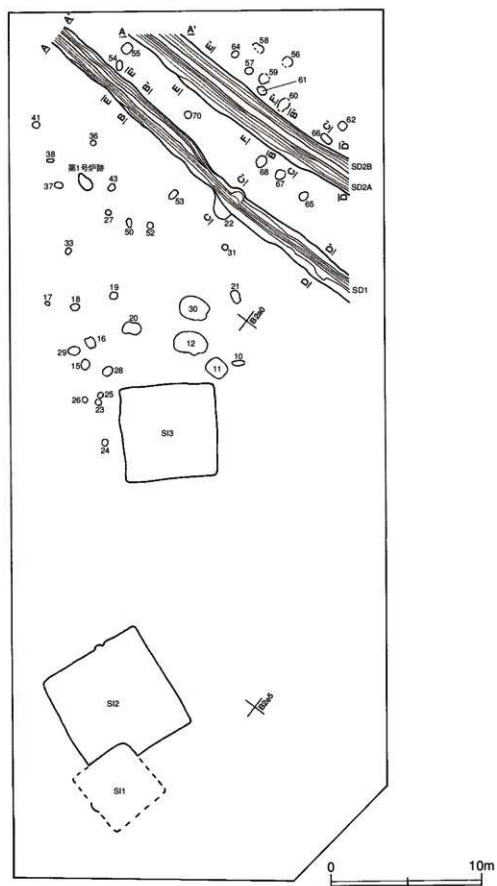
なお、遺構は第3層上面で確認されている。



第2図 清水遺跡基本土層図



第3図 清水遺跡調査区設定図



第4图 清水遺跡遺構全体图

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の堅穴住居跡と遺物

遺構は、堅穴住居跡2軒が確認された。以下、確認された遺構及び遺物について記述する。

第2号住居跡（第5～8図）

位置 調査区南西部のB2b3区、標高11.7mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.52m、短軸7.46mの方形で、主軸方向はN-23°-Eである。壁高は24～46cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈付近からP1にかけた範囲と西壁中央部が踏み固められている。壁下には、幅12～20cm、深さ2～10cmでU字状の断面を呈する壁溝が巡っているほか、長さ28～100cm、幅12～20cm、深さ2～20cmの間仕切り溝が5条確認されている。壁際の床面から土混じりの炭化物と焼土、北東・南東・南部の壁際から粘土がそれぞれ確認されている。

竈 北壁中央部やや東寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで152cm、袖部幅100cmである。袖部は、右袖部は床面を掘り込み、左袖部は床面とほぼ同じ高さを基部とし、砂質粘土を用いて構築されている。火床部は床面を若干掘りくぼめ、火床面は火を受けて赤変している。煙道部は壁外へ20cm掘り込み、火床面から外傾して立ち上がった後、直立気味に立ち上がっている。

遺土層解説

1 におい黄褐色	砂質粘土ブロック・ローム粒子少量	13 におい黄褐色	焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子少量
2 におい赤褐色	焼土粒子中量、砂質粘土粒子少量	14 暗 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
3 におい赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子少量	15 灰 褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
4 におい赤褐色	焼土粒子中量、ロームブロック・砂質粘土粒子少量	16 暗 赤褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
5 におい黄褐色	砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量	17 褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
6 におい橙色	砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量	18 暗 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
7 におい黄褐色	ローム粒子・砂粒少量	19 灰 褐色	砂質粘土粒子・ローム粒子少量
8 におい橙色	ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量	20 におい黄褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量
9 におい黄褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子微量	21 におい赤褐色	砂質粘土ブロック多量、焼土ブロック少量
10 赤 褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・砂質粘土粒子少量	22 におい黄褐色	砂質粘土ブロック多量、焼土粒子少量
11 におい赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・砂質粘土粒子少量	23 暗 褐色	砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量
12 におい橙色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量	24 暗 褐色	ロームブロック・砂質粘土少量、焼土粒子微量

ピット 5か所。P1～P4は主柱穴で、深さは65cmほどである。P5は深さ36cmで、南壁付近の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長軸93cm、短軸64cmの隅丸長方形で、深さは84cmである。底面は皿状で、壁はほぼ直立している。覆土は、不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

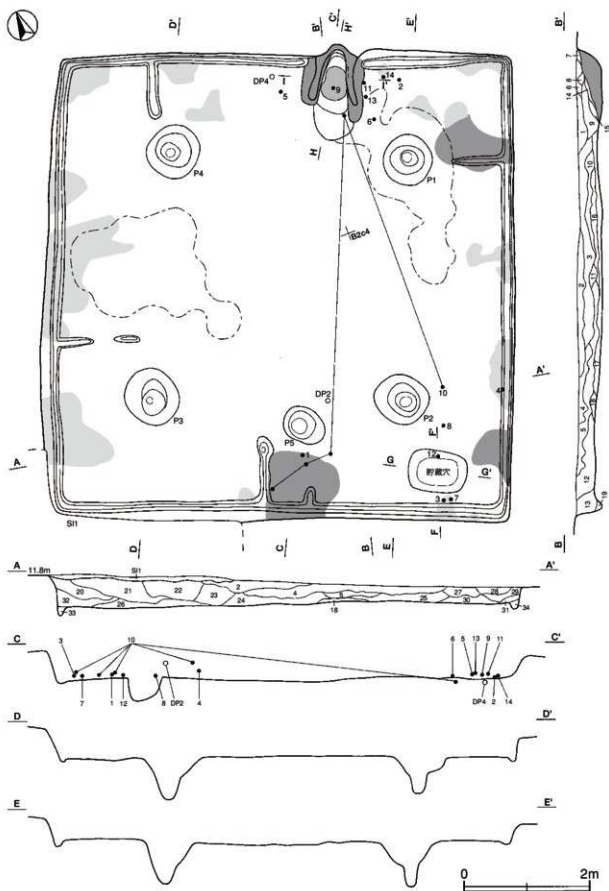
貯蔵穴土層解説

1 暗 褐色	ローム粒子少量	4 褐 色	ローム粒子少量
2 暗 褐色	ロームブロック少量	5 褐色	ロームブロック少量
3 暗 褐色	ロームブロック微量	6 灰 褐色	ロームブロック・粘土粒子少量

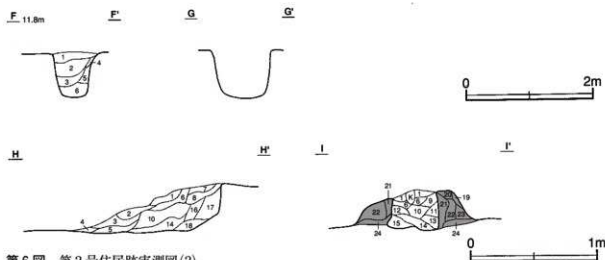
覆土 34層に分層される。不規則な堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗 褐色	ロームブロック少量	9 におい褐色	ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
2 黒褐色	ロームブロック少量	10 黒褐色	ローム粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子少量	11 暗 褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
4 極暗褐色	ロームブロック少量	12 褐色	ローム粒子中量
5 暗褐色	ローム粒子少量	13 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
6 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	14 におい黄褐色	ローム粒子・炭化粒子中量
7 黒褐色	炭化粒子多量、ローム粒子中量	15 極暗褐色	炭化粒子中量、ローム粒子少量
8 褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量	16 明 褐色	ロームブロック中量



第5图 第2号住居跡実測图(1)



第6図 第2号住居跡実測図(2)

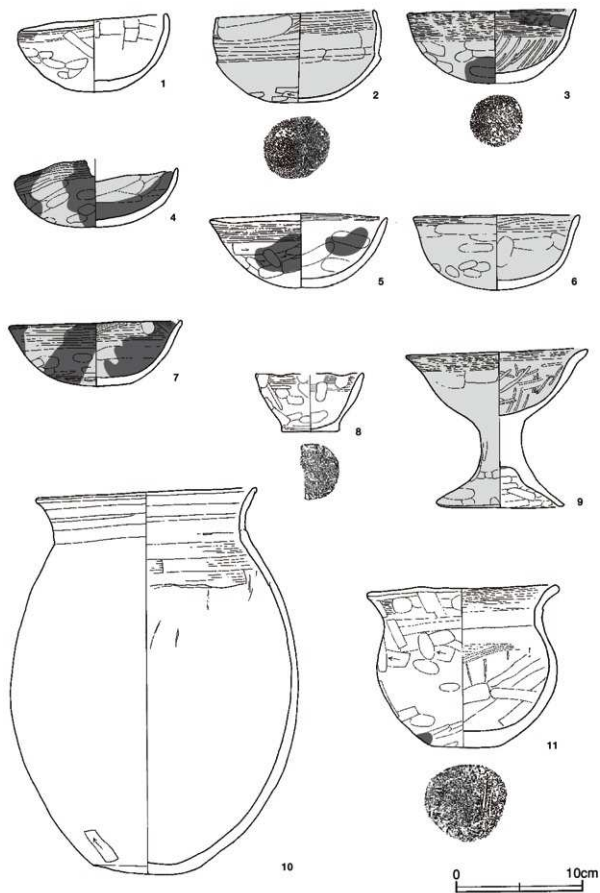
- | | | | | | |
|----|-------|----------------|----|------|------------------|
| 17 | にぶい褐色 | ロームブロック少量 | 26 | 褐色 | ローム粒子中量 |
| 18 | にぶい褐色 | ローム粒子中量 | 27 | 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 19 | 褐色 | ロームブロック微量 | 28 | 極暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 20 | 暗褐色 | ローム粒子微量 | 29 | 褐色 | ロームブロック、炭化粒子少量 |
| 21 | 褐色 | ロームブロック中量 | 30 | 明褐色 | ローム粒子中量 |
| 22 | 極暗褐色 | ローム粒子少量 | 31 | 暗褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 23 | 褐色 | ロームブロック少量 | 32 | 明褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 24 | にぶい褐色 | ロームブロック中量 | 33 | 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 25 | 灰褐色 | ローム粒子・砂質粘土粒子中量 | 34 | 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片736点(坏37, 高坏13, 甕類680, 小形甕1, 甕5), 土製品10点(勾玉カ1, 土玉2, 紡錘車1, 支脚6), 鉄器1点(鎌), 焼土塊, 炭化材のほか, 流れ込んだ縄文土器片1点, 混入した陶器片2点(不明)も出土している。9は竈火床部よりやや浮いた位置から逆位の状態、2・6・11・13・14は竈右袖部の崩落土層内の床面よりやや浮いた位置からそれぞれ出土しており, いずれも廃絶時に廃棄されたものと考えられる。1・3・7は南壁部付近の焼土や粘土の上面, 12は貯蔵穴内の覆土上層からそれぞれ出土しており, いずれも廃絶後に廃棄されたものと考えられる。DP1・DP3は北東部の覆土中, DP2は南部の覆土下層, DP4は竈左袖付近の床面, M1は覆土中からそれぞれ出土している。

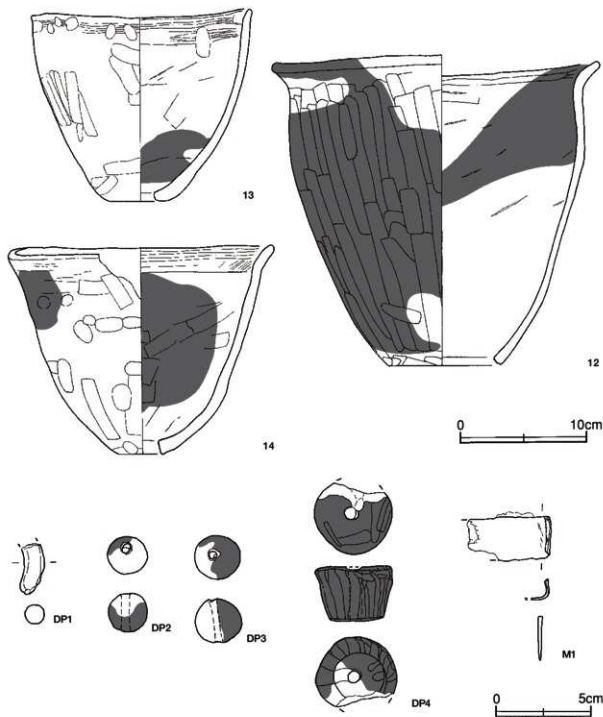
所見 時期は, 出土土器から6世紀前半と考えられる。また, 床面に広がる焼土の検出状況から焼失住居と考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表(第7・8図)

番号	種類	砂椽	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	11.5	6.2	—	長石・石英・雲母・黒色粒子・赤色粒子	橙	普通	1) 辺部外面横ナテ 内面ナテ 体部・底部外面ヘナテ 裏ナテ 体部内面ヘナテ	覆土下層	95% 二次焼成 体部内面から内底にかけて剥離が多い PL.4
2	土師器	坏	12.6	7.4	4.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	1) 辺部横ナテ・丁家ナテ 体部・底部外面ヘナテ 裏ナテ 体部内面丁家ナテ	覆土下層	80% PL.4
3	土師器	坏	13.2	5.8	3.5	長石・石英	にぶい橙	普通	1) 辺部横ナテ 体部・底部外面ヘナテ 裏ナテ 内面ナテ 放射状の縮文	覆土下層	95% 二次焼成 外面小形斜角 内面剥離が多い PL.4
4	土師器	坏	12.8	5.4	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	1) 辺部横ナテ 体部・底部外面ヘナテ 裏ナテ 内面ナテ	覆土下層	85% 二次焼成 PL.4
5	土師器	坏	14.5	5.9	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	1) 辺部横ナテ 体部・底部外面ヘナテ 裏ナテ 内面ナテ	覆土下層	85% PL.4
6	土師器	坏	12.9	6.0	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	良好	1) 辺部横ナテ 体部・底部外面ヘナテ 裏ナテ 丁家ナテ	覆土下層	75% 二次焼成 体部内面から内底にかけて剥離が多い PL.4
7	土師器	坏	13.5	5.2	—	長石	にぶい橙	普通	1) 辺部横ナテ 体部・底部外面ヘナテ 裏ナテ 丁家ナテ	覆土下層	75% PL.4
8	土師器	坏	[8.4]	[4.7]	4.5	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	1) 辺部横ナテ 体部・底部外面ヘナテ 裏ナテ 下層ヘナテ 内面ナテ・ヘナテ 底部ナテ	覆土下層	45% PL.4
9	土師器	高坏	14.3	12.6	10.1	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	1) 辺部横ナテ 坏部外面ナテ 内面ナテ 後ヘナテ 脚部ナテ	竈 覆土下層	100% 坏部・脚部外面剥離が多い PL.5



第7図 第2号住居跡出土遺物実測図(1)



第8図 第2号住居跡出土遺物実測図(2)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
10	土師器	甕	17.4	30.4	8.4	長石・石英・雲母・赤色粘土	にぶい橙	普通	口辺部横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラナデ 底部ナデ	覆土下層 ~ 床面	95% 丸底 体部内面 割痕が濃い PL.5
11	土師器	小形甕	14.9	13.0	5.8	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部外面横ナデ後ヘラナデ 内面横ナデ 体部ヘラ削り後ヘラナデ・ナデ 底部ヘラ削り後外周横ナデ	覆土下層	95% PL.5
12	土師器	瓶	25.6	25.0	8.8	長石・小礫	橙	良好	口辺部横ナデ後ナデ 内面ヘラナデ・ナデ 体部ヘラ削り後縦線ナデ 下端ナデ 底部ヘラナデ	貯蔵穴 覆土上層	100% 二次焼成 内面割痕 PL.5
13	土師器	瓶	17.4	15.2	6.0	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口部ナデ・ヘラナデ 口辺部横ナデ後縦線ナデ 体部外面横ナデ・ヘラナデ 内面ナデ 底部横線ナデ	覆土下層	100% PL.5
14	土師器	瓶	20.6	16.5	3.6	長石・石英	橙	普通	口辺部横ナデ 体部内面ヘラ削り後ナデ・ヘラナデ 縦線 内面ナデ 底部ナデ	覆土下層	80% PL.5

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土・材質	特徴	出土位置	備考
DP1	勾玉*	(2.7)	1.3	1.0	(2.1)	長石・織羅	ナデ	覆土中	PL6
M1	鏃	(4.5)	(2.4)	1.1	(15.1)	鉄	木質残存 刃部欠損	覆土中	

番号	器種	径	高さ	口径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP2	土玉	2.1	2.0	0.5	7.8	長石	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	PL6
DP3	土玉	2.5	2.3	0.4	12.1	長石・石英	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	PL6
DP4	紡錘車	4.1	2.9	2.9	(35.0)	長石・織羅	ナデ後へラ磨き 両方向からの穿孔	床面	PL6

第3号住居跡 (第9～12図)

位置 調査区中央部のB 2 a7区、標高11.5mの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸6.28m、短軸6.18mの方形で、主軸方向はN-43°-Wである。壁高は18～30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦である。壁付近にかけて踏み固められており、床表面は被熱によりほろほろとしている。壁下には、幅14～30cm、深さ4～14cmでU字状の断面を呈する壁溝が巡っている。壁際の床面や壁溝内から炭化材と焼土、P1とP4を結ぶ線上に炭化材、南西壁中央部に熱を受けていない粘土がそれぞれ確認されている。

炉 中央部やや東寄りに2か所重複して付設されている。炉1は長径54cm、短径50cmの円形で、床面を12cm掘りくぼめた地床炉である。炉2は長軸62cm、短軸44cmの隅丸長方形で、床面を14cm掘りくぼめた地床炉である。それぞれの炉の地床面は火を受けて赤変硬化している。

炉1土層解説 (I-1')

1	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6	褐色	ローム粒子中量
2	暗褐色	焼土粒子少量、炭化粒子微量	7	褐色	ロームブロック少量
3	暗赤褐色	焼土粒子中量、炭化物微量	8	暗褐色	ローム粒子中量
4	赤褐色	焼土粒子多量、炭化粒子微量	9	ふい褐色	ローム粒子中量
5	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量			

炉2土層解説 (J-J')

1	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	6	褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2	赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子微量	7	暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
3	褐色	ローム粒子少量	8	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
4	赤褐色	焼土粒子多量、炭化粒子微量	9	褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
5	暗赤褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量	10	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量

ピット 5か所。P1～P4は主柱穴で、P3の深さは56cmで、その他のピットの深さは不明である。P5は深さ33cmで、北西部壁付近の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 東コーナー部に位置している。長軸78cm、短軸51cmの隅丸長方形で、深さは62cmである。底面は南西側へ緩やかに傾斜しており、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

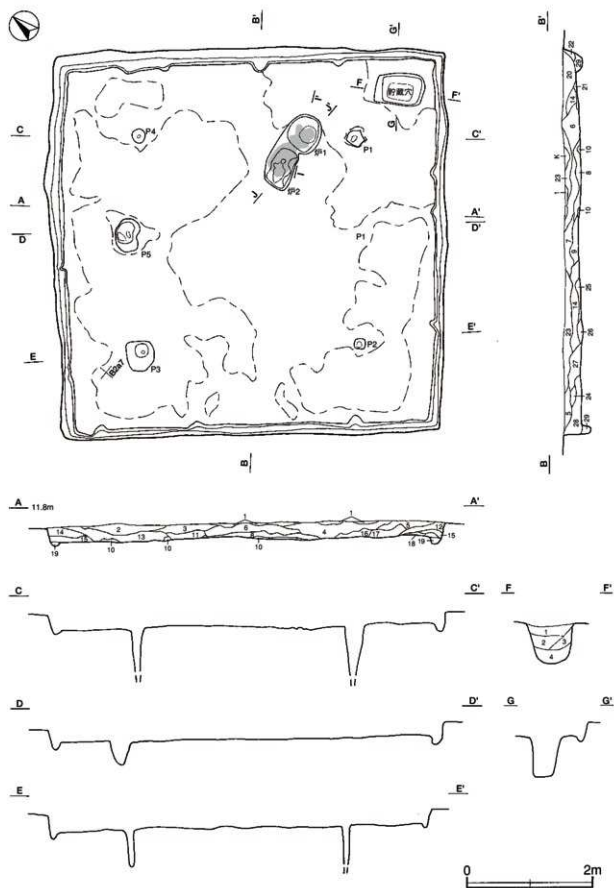
貯蔵穴土層解説

1	暗褐色	ロームブロック・炭化物少量	3	褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
2	暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	4	明褐色	ローム粒子中量、炭化物微量

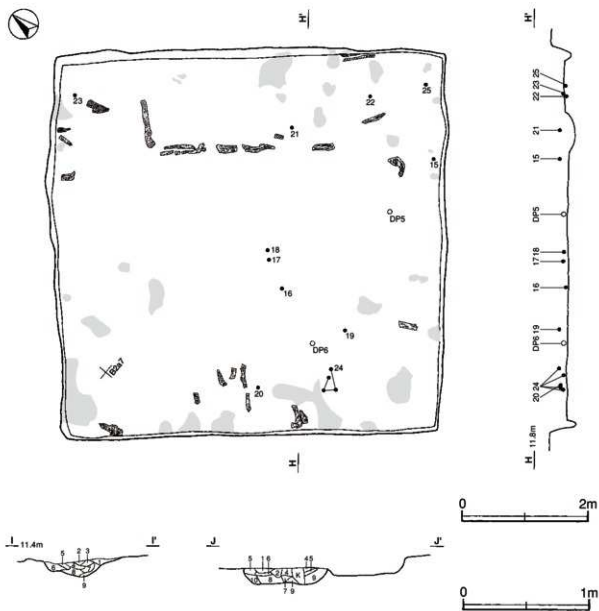
覆土 29層に分層される。不規則な堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

1	灰褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	9	極暗褐色	ロームブロック微量
2	黒褐色	ロームブロック・炭化物少量	10	褐色	炭化材中量、ローム粒子少量
3	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	11	暗褐色	ローム粒子少量
4	黒褐色	ロームブロック少量	12	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
5	暗褐色	ロームブロック少量	13	極暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
6	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	14	褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
7	黒色	ロームブロック微量	15	暗褐色	ローム粒子微量
8	褐色	ローム粒子少量	16	黒褐色	ローム粒子少量、炭化物微量



第9图 第3号住居跡実測图(1)

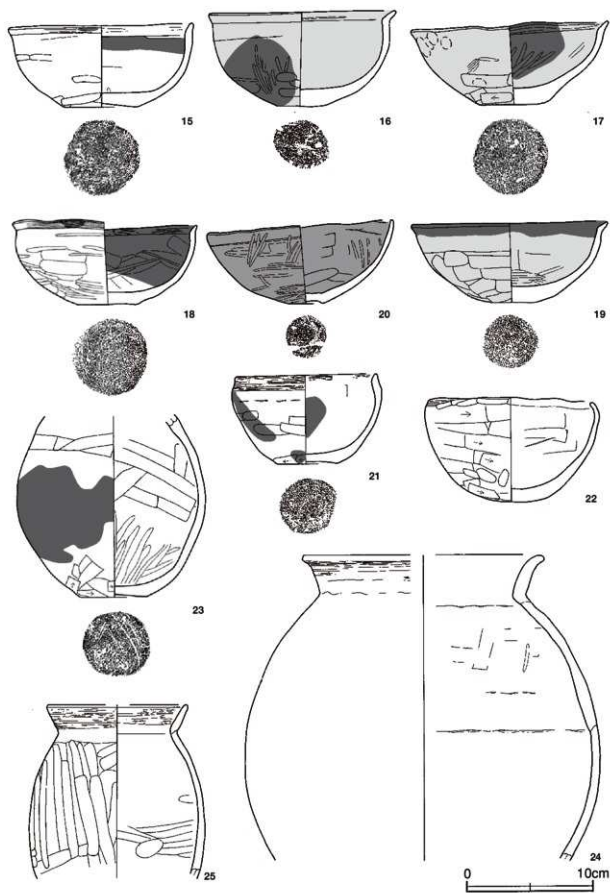


第10図 第3号住居跡実測図(2)

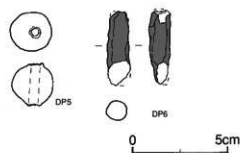
- | | | | |
|---------|-------------------------|---------|----------------|
| 17 極暗褐色 | 炭化粒子少量, ロームブロック微量 | 24 褐色 | ロームブロック少量 |
| 18 褐色 | ローム粒子中量 | 25 明褐色 | ローム粒子中量 |
| 19 褐色 | ローム粒子多量 | 26 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 20 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 27 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 21 暗褐色 | 炭化粒子中量, ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | 28 褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 22 褐色 | ロームブロック中量 | 29 極暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 23 黒色 | ロームブロック極微量 | | |

遺物出土状況 土師器片196点(坏8, 碗2, 高坏2, 甕類184), 土製品2点(土玉, 不明)のほか, 流れ込んだ縄文土器片11点も出土している。15は南東壁際の覆土下層, 16・17は中央部の床面と覆土下層, 19・20は南部の床面, 22・25は東部の床面からそれぞれ出土し, いずれも廃絶時に廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から5世紀後半と考えられる。床面の検出状況や炭化材の広まりから, 焼失住居と考えられる。また, 検出された粘土は焼けていないことから, 本跡焼却後に廃棄されたものと考えられる。



第11图 第3号住居跡出土遺物実測図(1)



第12図 第3号住居跡出土遺物実測図(2)

第3号住居跡出土遺物観察表(第11・12図)

番号	種類	器種	口徑	器高	底徑	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
15	土埴器	杯	14.4	6.6	6.0	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	口辺部横ナデ後ナデ 体部内外面ナデ・ヘラナデ 底部ナデ 内底磨き	覆土下層	100% 二次焼成 内底全磨き剥落痕しい
16	土埴器	杯	14.8	7.7	3.6	長石・石英・小礫	靑	普通	口辺部横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ・磨き 底部ヘラナデ	床面	100% 二次焼成 剥落痕しい PL.4
17	土埴器	杯	15.6	6.6	5.6	長石・石英・雲母・小礫	にぶい靑	良好	口辺部横ナデ後ナデ 体部外面ナデ・磨き 下層ヘラ削り 内面磨き 底部ナデ 内底ナデ・磨き	覆土下層	95% 二次焼成 剥落痕しい PL.4
18	土埴器	杯	14.6	6.8	4.5	長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄靑	普通	口辺部横ナデ 体部ナデ・ヘラ磨き 底部ナデ	床面	95% PL.4
19	土埴器	杯	15.4	6.5	3.2	長石・雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	口辺部横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ・ヘラナデ 内面ナデ・磨き 底部ヘラ削り後ナデ	床面	90% 二次焼成 剥落痕しい PL.4
20	土埴器	杯	14.5	6.7	2.7	長石・石英	にぶい靑	普通	口辺部・体部ヘラナデ後ヘラ磨き 内面丁寧ナデ 底部ナデ	床面	80% 内底のみ剥落 PL.4
21	土埴器	碗	11.1	7.2	4.6	長石・雲母・針状骨針	にぶい黄靑	良好	口辺部横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ・ヘラナデ 内面丁寧ナデ・ヘラナデ 下層左方向のヘラ削り 底部ヘラ削り後ナデ	覆土下層	100% PL.4
22	土埴器	碗	13.1	8.4	—	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい靑	良好	口辺部横ナデ後ナデ 体部ヘラ削り後一部ナデ 内面丁寧ナデ 底部ナデ	床面	95% 二次焼成 内底の剥落痕しい PL.4
23	土埴器	盃	—	14.5	5.2	長石・石英・雲母	にぶい靑	普通	体部外面ヘラ削り後磨きナデ 底部ヘラ削り 体部内面上位ヘラナデ 内底から下位にかけてヘラ磨き	床面	70%
24	土埴器	盃	17.6	24.5	—	長石・赤色粒子	黄靑	普通	口辺部横ナデ後ナデ 体部外面ヘラ削り後丁寧ナデ 内面ナデ・ヘラナデ 輪底靑	覆土下層 一床面	20%
25	土埴器	小形盃	11.0	13.9	—	長石・石英・雲母	靑	普通	口辺部横ナデ 体部外面縦位を中心としたヘラナデ 内面ナデ	床面	30% 二次焼成

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP5	土玉	2.2	2.2	0.5	9.3	長石・雲母	丁寧ナデ 一方からの穿孔	床面	PL.6

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP6	不明土製品	3.9	1.2	1.1	(5.2)	長石	ナデ 両端部欠損	床面	PL.6

表2 古墳時代 堅穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	高さ (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
								土柱穴	出入口 (ピット)	炉	竈	貯蔵穴			
2	B2b3	N-23°-E	方形	7.52×7.46	24~46	平坦	全周	4	1	—	1	1	人為	土埴器、土製品	本跡-S11
3	B2a7	N-43°-W	方形	6.28×6.18	18~30	平坦	全周	4	1	—	2	1	人為	土埴器、土製品	

2 近世の溝跡と遺物

遺構は、溝跡2条が確認された。以下、確認された遺構及び遺物について記述する。

第1号溝跡 (第4・13図)

位置 調査区東部のA3e1～B3b1区、標高11.5mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第22号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 両端部が調査区域外に延びているため、確認できた長さは25.8mである。B3b1区から、北東方向(N-4°-E)へ直線的にA3e1区まで延びている。規模は上幅58～160cm、下幅8～22cm、深さ30～58cmであり、断面はT字状で、壁は直立して立ち上がった後、緩やかに傾斜して立ち上がっている。また、A3il区で、北東へと延びる溝が派生している。規模は長さ16m、上幅24～50cm、下幅8～28cm、深さ10～14cmであり、断面はU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、2条の溝は両端の調査区域外から中央へ向かって傾斜している。

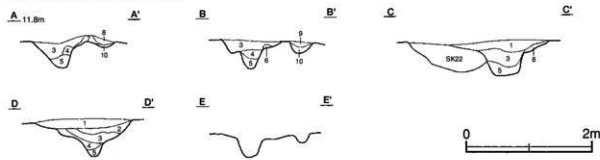
覆土 10層に分層される。レンズ状に堆積した自然堆積である。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	6	明褐色	ローム粒子中量
2	暗褐色	ローム粒子微量	7	褐色	ローム粒子中量
3	暗褐色	ローム粒子少量	8	褐色	ローム粒子多量
4	褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	9	暗褐色	粘土ブロック微量
5	褐色	ローム粒子少量	10	黒褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 陶器片2点(瀬戸・美濃系擂鉢、堺・明石系擂鉢)のほか、流れ込んだ土師器片1点(甕)も出土している。

所見 時期は、細片のため固化できないが、出土している陶器片は近世後半に比定されるものと考えられることから、近世後半と考えられる。



第13図 第1号溝跡実測図

第2号溝跡 (第4・14図)

位置 調査区東部のA3f2～B3a2区、標高11.5mの平坦な台地上に位置している。

確認状況 2条の溝が平行して南北方向に延びており、ここでは西側の溝を溝2A、東側の溝を溝2Bとして報告する。

規模と形状 溝2Aは両端部が調査区域外に延びているため、確認できた長さは17.3mである。B3a2区から、真北へ直線状にA3f2区まで延び、規模は上幅92～120cm、下幅16～27cm、深さ62～70cmである。断面は漏斗状で、壁は直立気味に立ち上がった後、外傾して立ち上がっている。溝2Bは両端部が調査区域外に延びているため、確認できた長さは17.3mである。規模は、上幅48～78cm、下幅8～27cm、深さ21～30cmである。断面はU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、2条の溝は南端から北端へ向かって傾斜している。

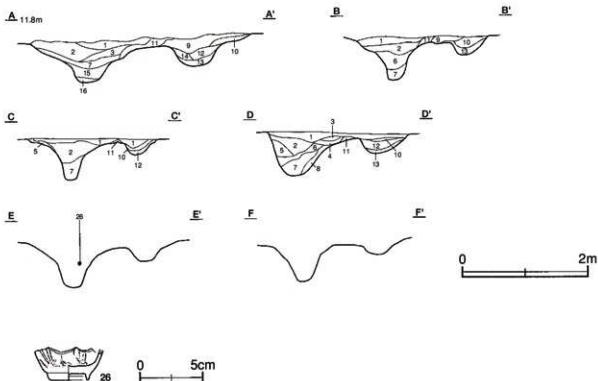
覆土 16層に分層される。含有物と不規則な堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子極微量	9 褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ローム粒子少量	10 暗褐色	ローム粒子微量
3 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	11 極暗褐色	ローム粒子少量
4 褐色	ローム粒子中量	12 暗褐色	ロームブロック微量
5 黒褐色	ロームブロック微量	13 明褐色	ローム粒子多量
6 褐色	ロームブロック中量	14 黒褐色	ローム粒子少量
7 褐色	ローム粒子少量	15 黒褐色	ローム粒子微量
8 明褐色	ローム粒子中量	16 明褐色	ロームブロック中量

遺物出土状況 陶器片2点(瀬戸・美濃系天目茶碗, 明石・堺系鉢類), 磁器片1点(肥前系小坏), 瓦片1点のほか, 流れ込んだ縄文土器片1点, 土師器片2点も出土している。26は溝2A北部の覆土中層から出土しており, 廃絶後の廃棄と考えられる。

所見 出土土器から18世紀前半には廃絶していたと考えられる。



第14図 第2号溝跡・出土遺物実測図

第2号溝跡出土遺物観察表(第14図)

番号	横径	器種	口径	器高	底径	胎土色 釉薬色	成形・ 調整	装飾		印・銘 など	製作		出土位置	備考
								松付/輪索 透明釉	文様 装飾特徴		製作地	製作年代		
26	磁器	小坏	—	(2.5)	[3.0]	灰白	ロタロ 削り高台	染付	内: 外:草花文	—	肥前系	1700~ 1740年代a	覆土中層	40% 高台若干砂付 層 図.6

表3 近世 溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模 (cm 確認長はm)				断面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複図基(古-新)
				確認長	上幅	下幅	深さ					
1	A3e1~B3b1	N-4°E	直線的	(25.8)	58~160	8~22	30~58	U字状	段状	自然	陶器	SK22~本跡
	A3e1~A3i1	N-8°E	直線的	(16.0)	24~50	8~28	10~14	U字状	段状	自然		
2A	A3i2~B3a2	N-0°	直線的	(17.3)	92~120	16~27	62~70	漏斗状	段状	人為	陶器、磁器、瓦	
2B	A3i2~B3a2		直線的	(17.3)	68~78	8~27	21~30	U字状	段状	人為		

3 その他の時代の遺構と遺物

時期や性格が明確でない竪穴住居跡1軒、炉跡1基、土坑44基が確認されている。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第15図)

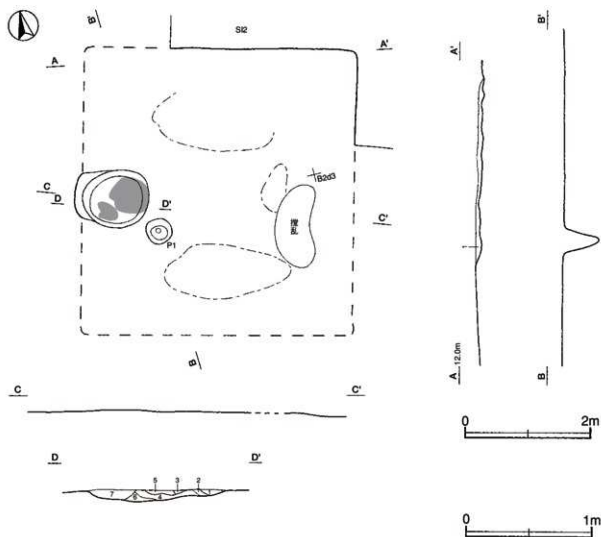
位置 調査区南西部のB 2 c2区、標高11.8mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第2号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 削平により竈の火床部と床面が露出した状態で確認されたため、わずかに残る覆土と火床部の位置から形状を推定した範囲は、南北軸4.6m、東西軸4.3mの方形で、主軸方向はN-72°-Wと考えられる。

床 ほぼ平坦で、硬化面が部分的に確認されている。

竈 西壁中央部に付設されている。確認された規模は、焚口部から煙道部まで118cmである。火床部は床面を10cm掘りくぼめ、火床面は火を受けて赤変している。



第15図 第1号住居跡実測図

覆土層解説

- | | | | |
|---------|------------------|----------|------------------|
| 1 灰褐色 | 焼土粒子多量 | 5 にぶい黄褐色 | 焼土粒子多量、粘土粒子中量 |
| 2 灰褐色 | 焼土ブロック中量 | 6 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量 | 7 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子微量 |
| 4 にぶい褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子少量 | | |

ピット 深さ58cmで、性格は不明である。

覆土 単一層で、層厚が薄いため、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 灰褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片27点（堯類）が出土している。

所見 時期は、不明である。

(2) 炉跡

第1号炉跡（第16図）

位置 調査区東部のA2g0区、標高11.4mの平坦な台地上に位置している。

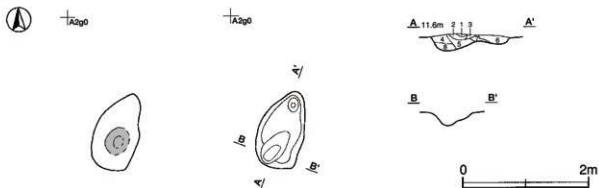
規模と形状 平面形は長径1.25m、短径0.72mの不整形円形で、深さは4～20cmである。長径方向はN-16°-Eで、中央部に長径0.46m、短径0.38m、厚さ8cmの赤変硬化した焼土塊が確認されている。

覆土 8層に分層される。火床面は第1～3層上面である。

土層解説

- | | | | |
|----------|--------------|------|------------------|
| 1 明赤褐色 | 焼土ブロック中量 | 5 褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 にぶい赤褐色 | 焼土粒子中量 | 6 褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック微量 |
| 3 にぶい褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 7 褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック少量 | 8 褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |

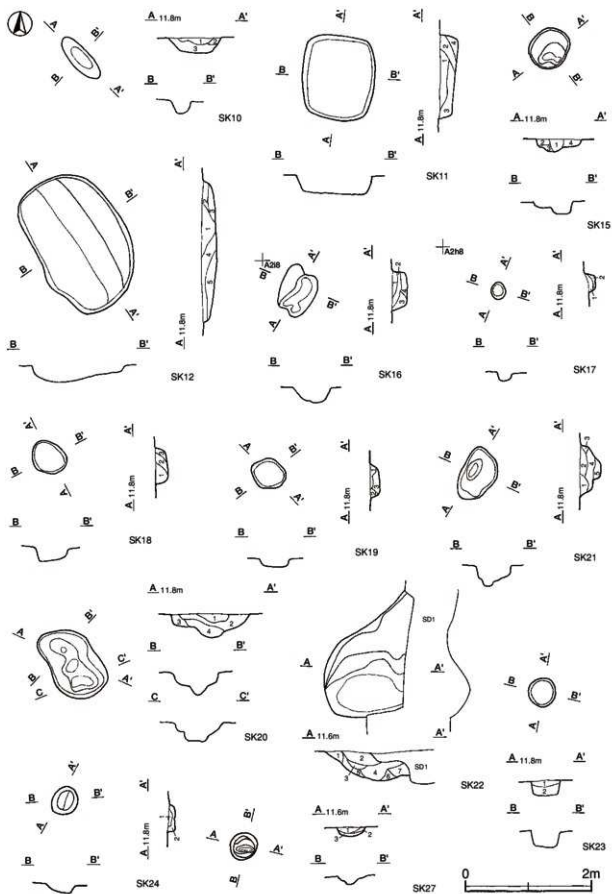
所見 時期は、周辺に古墳時代の竪穴住居跡が位置していることや炉跡の規模から同時期と推測されるが、詳細は不明である。



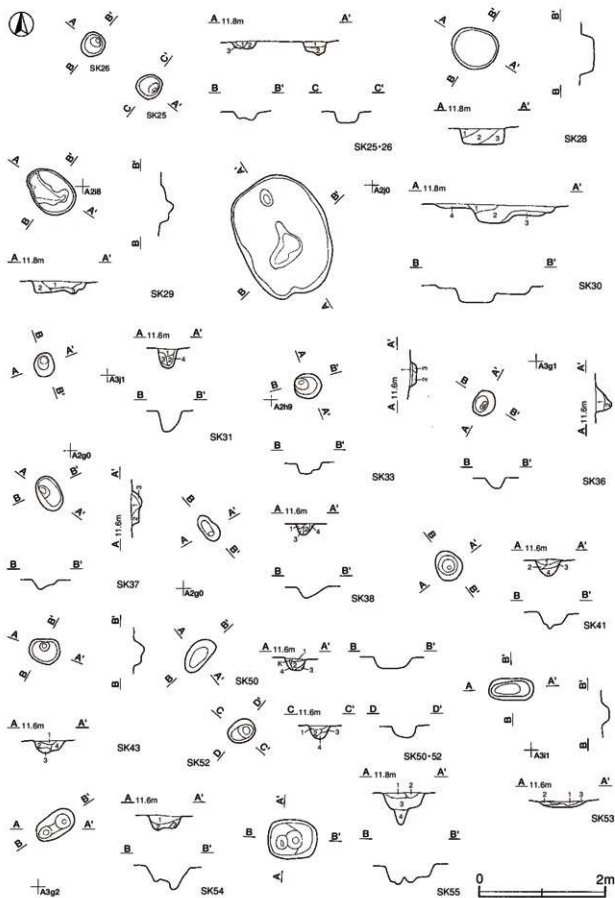
第16図 第1号炉跡実測図

(3) 土坑（第17～19図）

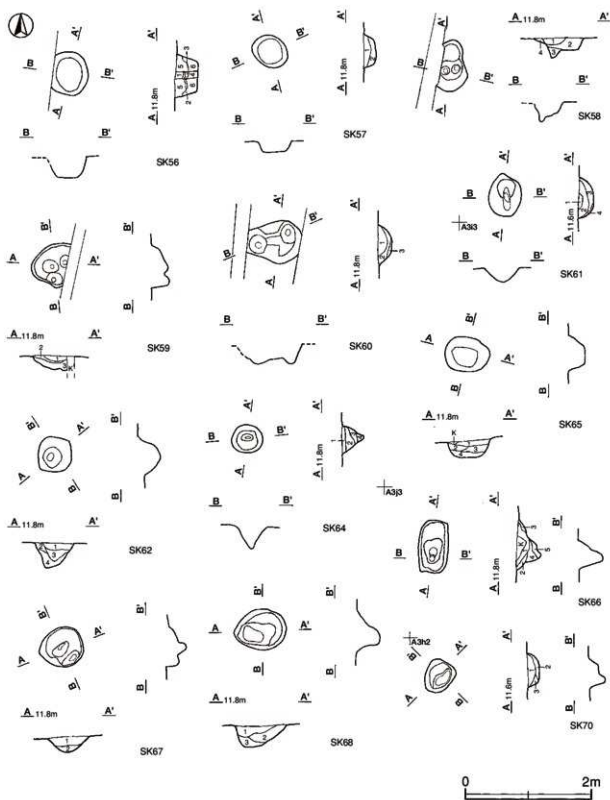
遺物や重複関係から時期及び性格が明確にできなかった土坑は、44基確認されている。以下、実測図と土層解説を記載する。



第17図 その他の土坑実測図(1)



第18図 その他の土坑実測図(2)



第19図 その他の土坑実測図(3)

第10号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第11号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 極暗褐色 ロームブロック微量

第12号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 5 にぶい褐色 ロームブロック多量

第15号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 明褐色 ローム粒子多量
- 4 褐色 ロームブロック少量

第16号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子極微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 明褐色 ロームブロック中量

第17号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 明褐色 ローム粒子多量

第18号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量

第19号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 明褐色 ローム粒子多量
- 3 明褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量

第20号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量

第21号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子極微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 明褐色 ロームブロック中量
- 5 明褐色 ローム粒子多量

第22号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量
- 6 黒褐色 ローム粒子微量
- 7 褐色 ロームブロック少量

第23号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ローム粒子多量

第24号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 明褐色 ローム粒子多量

第25号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 明褐色 ローム粒子多量

第26号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第27号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子少量
- 3 明褐色 ローム粒子中量

第28号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子少量

第29号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

第30号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 明褐色 ローム粒子中量

第31号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 にぶい褐色 ローム粒子中量

第33号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量
- 3 明褐色 ローム粒子多量

第36号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量

第37号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第38号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子中量

第41号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子極微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量

第43号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 褐色 ロームブロック少量

第50号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量

第52号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子少量

第53号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 明褐色 ローム粒子多量

第54号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第55号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子少量
- 4 明褐色 ローム粒子多量

第56号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 明褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 極暗褐色 ローム粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック少量
- 6 にぶい褐色 ロームブロック中量

第57号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第58号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 にぶい褐色 ローム粒子少量

第59号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

第60号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量
- 3 明褐色 ローム粒子多量

第61号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック極微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 4 明褐色 ローム粒子多量

第62号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子極微量
- 2 褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量

第64号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微粒
- 3 褐色 ローム粒子少量
- 4 褐色 ロームブロック少量

第65号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微粒
- 3 暗褐色 ローム粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック少量

第66号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量
- 5 褐色 ローム粒子少量

第67号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量

第68号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第70号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 明褐色 ロームブロック中量

表4 その他の時代 土坑一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模 (m, 深さはcm)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
10	B2a9	N-44°-W	楕円形	0.83×0.34	23	直立	平坦	自然	—	
11	B2a9	N-6°-E	長方形	1.36×1.17	25	直立	平坦	自然	—	
12	A2β	N-34°-W	楕円形	2.23×1.52	25	直立	皿状	人為	—	
15	A2γ	N-46°-E	楕円形	0.68×0.60	21	直立	凸凹	人為	—	
16	A2δ	N-18°-E	不定形	0.71×0.57	22	直立	凸凹	人為	—	
17	A2ε	N-1°-E	円形	0.27×0.24	12	外傾	平坦	人為	—	
18	A2ε	N-50°-W	楕円形	0.59×0.51	18	直立	平坦	人為	—	
19	A2ε	N-76°-W	楕円形	0.58×0.46	17	直立	平坦	人為	—	
20	A2δ	N-43°-W	楕円形	1.26×0.80	32	外傾	凸凹	人為	—	
21	A2β	N-33°-E	楕円形	0.84×0.56	33	直立	平坦	人為	—	
22	A3η	N-30°-E	不定形	2.20×(1.44)	48	傾斜	皿状	人為	—	本層→SD1
23	A2γ	N-9°-E	円形	0.46×0.42	23	直立	平坦	人為	—	
24	A2j6	N-22°-E	楕円形	0.48×0.40	23	外傾	皿状	人為	—	
25	A2γ	N-73°-E	楕円形	0.41×0.36	18	直立	平坦	人為	—	

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模 (m, 深さはcm)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係(古-新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
26	A 2 17	N-53'-E	円形	0.39×0.37	15	外傾	凸凹	人為	—	
27	A 2 10	N-52'-E	楕円形	0.47×0.40	14	縦斜	凸凹	自然	—	
28	A 2 17	N-56'-E	楕円形	0.72×0.62	25	直立	平坦	人為	—	
29	A 2 17	N-44'-W	楕円形	0.83×0.60	18	直立	凸凹	人為	—	
30	A 2 2	N-20'-W	楕円形	1.94×1.47	28	直立	凸凹	人為	—	
31	A 2 10	N-20'-W	楕円形	0.36×0.30	34	直立	皿状	人為	—	
33	A 2 9	N-90'	円形	0.42×0.40	18	直立	凸凹	人為	—	
36	A 2 10	N-30'-E	楕円形	0.41×0.34	28	外傾	皿状	自然	—	
37	A 2 9	N-28'-W	楕円形	0.54×0.36	16	外傾	凸凹	自然	—	
38	A 2 10	N-42'-W	楕円形	0.47×0.24	17	外傾	皿状	人為	—	
41	A 2 10	N-31'-W	楕円形	0.50×0.41	22	直立	凸凹	自然	—	
43	A 2 10	N-75'-W	楕円形	0.48×0.40	18	外傾	凸凹	人為	—	
50	A 2 10	N-44'-E	楕円形	0.62×0.44	21	外傾	平坦	人為	—	
52	A 2 10	N-54'-E	楕円形	0.44×0.35	19	直立	皿状	人為	—	
53	A 2 10	N-88'-W	楕円形	0.71×0.34	13	外傾	平坦	人為	—	
54	A 3 12	N-57'-E	楕円形	0.67×0.38	35	外傾	凸凹	自然	土層露	
55	A 3 12	N-88'-W	楕円形	0.78×0.62	50	外傾	凸凹	人為	土層露	
56	A 3 13	N-14'-E	[楕円形]	0.69×(0.56)	33	外傾	平坦	人為	—	
57	A 3 13	N-68'-W	円形	0.61×0.58	18	外傾	平坦	自然	—	
58	A 3 13	N-16'-E	[楕円形]	0.85×(0.42)	30	外傾	凸凹	人為	—	
59	A 3 13	N-51'-E	不定形	0.76×(0.50)	28	直立	凸凹	自然	—	
60	A 3 13	N-68'-E	[楕円形]	(0.92)×0.68	32	外傾	凸凹	自然	—	
61	A 3 13	N-7'-W	楕円形	0.70×0.50	22	直立	皿状	自然	—	
62	A 3 13	N-51'-E	円形	0.62×0.60	24	外傾	皿状	自然	—	
64	A 3 13	N-66'-E	楕円形	0.60×0.44	34	外傾	凸凹	自然	—	
65	A 3 12	N-51'-E	楕円形	0.70×0.55	26	外傾	平坦	人為	—	
66	A 3 13	N-7'-E	長方形	0.82×0.48	39	外傾	凸凹	自然	—	
67	A 3 12	N-52'-E	楕円形	0.71×0.62	29	直立	凸凹	自然	—	
68	A 3 12	N-52'-E	楕円形	0.80×0.65	36	縦斜	皿状	自然	—	
70	A 3 12	N-45'-E	楕円形	0.52×0.44	28	外傾	凸凹	自然	—	

(4) 遺構外出土遺物(第20・21図)

遺構に伴わない主な遺物については、実測図と出土遺物観察表で紹介した。



第20図 遺構外出土遺物実測図(1)

第4節 ま と め

1 はじめに

清水遺跡は、今回の調査で、古墳時代の住居跡2軒、近世の溝跡2条、時期不明の住居跡1軒、炉跡1基、土坑44基が確認された結果、古墳時代と近世の複合遺跡であることが明らかになった。ここでは、各時代に確認された遺構と遺物についての概要を述べ、まとめとする。

2 各時代の概要

(1) 古墳時代

調査区の中央部に第3号竪穴住居跡（5世紀後半）が、西側に第2号竪穴住居跡（6世紀前半）の住居跡がそれぞれ確認されている。2軒の住居跡の壁際付近から焼土や炭化材などが検出されていることや、二次焼成した遺物が出土していることから、焼失住居であることが明らかになった。

第3号竪穴住居跡からは、P1とP4を直線に結ぶ位置に炭化材が良好な状態で検出され、P4付近や南西壁中央部から炭化材、壁際から焼土が散在した状態で検出されている。住居跡の中央部を除いた床面には、床表面がほろほろに被熱した硬化面が確認されたものの、焼土化した広まりは確認されなかった。ピットの柱痕はすべてのピットから確認され、その覆土は締まりが弱い黒褐色土の単層である。貯蔵穴の覆土堆積状況は、炭化物が混じったローム土が流れ込んでいる。また、住居内から出土した遺物には、二次焼成の痕跡が確認されている。

次に、第2号竪穴住居跡では、壁際に焼土が散在した状態で検出しているほか、間仕切り溝付近や東壁際に粘土が検出されている。床面に広がる硬化面は一部分に認められ、焼土化した範囲は確認されていない。ピットの覆土堆積状況は、ローム土で埋められており、貯蔵穴の覆土堆積状況もローム土で埋められていることが確認されている。住居内から出土した遺物は、第3号竪穴住居跡と同様に二次焼成を受けているほか、重覆土内からは逆位の状態で高坏が確認されている。

焼失住居である2軒の確認状況をみたら、第3号竪穴住居跡では柱を抜き取る前に建物を焼却していることに対し、第2号竪穴住居跡では柱を抜き取り、貯蔵穴を埋めた後に建物を焼却している想定され、住居廃絶後における焼却の違いが見られる。また、竪穴建物の廃絶後ライフサイクル・パターンを提示した森原明廣氏の研究を踏まえて、2軒の焼却に至る経緯を想定すると、前者は住居として機能を停止した後、建物のまま意図的に焼却されたと考えられ、後者は住居機能停止後、取り壊しあるいは部分的な解体後に焼却されたと考えられる。

加えて、石守見氏や高橋泰子氏の研究から、焼失住居内に確認された焼土や炭化材を想定すると、第3号竪穴住居跡から検出した柱と柱を結ぶ線上から検出された炭化材①は梁・桁材、南西壁中央部や北部コーナーから検出された炭化材②は椀、第2号竪穴住居跡の壁際から検出した焼土③については、上屋根上端部が草葺きで下屋根は土葺きであった可能性があり、屋根が焼け残った痕跡と考えられる。

(2) 近世

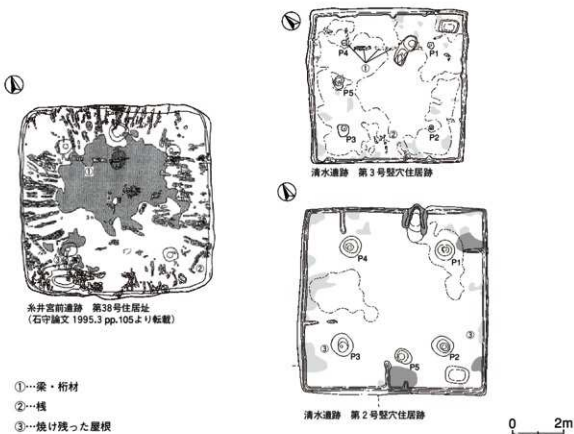
調査区の東側に2条の溝跡が確認されている。2条の溝跡は、現在の畑地の境界と同じ方向である南北方向へ直線的に延びており、それぞれの溝跡からは近世後半の陶器片や磁器片が出土しており、第2号溝跡は18世紀前半には廃絶したと想定される。近世後半の当地域には、1742年に利根川で発生した中で最も大きいとされる水害が発生し、1783年に浅間山の噴火から発生した火山灰が原因で、利根川など関東の主

要な河川の河床が上昇して水害が頻発する地となり、農村が荒廃したと想定されている。

溝内に水が流れた形跡がないことや、歴史的環境や現在の土地利用を踏まえると、2条の溝跡の性格は水害対策のために掘られた流路とは考えにくく、現在まで連続として続いている地境のために利用されていた可能性が高い。

参考文献

- 石守晃「復元住居を用いた焼失実験の成果について」『研究紀要』第12号 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995年3月
 森原明廣「竪穴住居の埋没過程分析の一視点 一住まいの断絶後の再認識へ向けて一」『住まいと住まい方 一道路・遺物から何を読み取るのか』帝京大学山梨文化財研究所研究集会報告集3 岩田書院 2000年5月
 高橋泰子「焼失家屋の一考察 一竪穴建物の上部構造復元をめぐる一」『土壁』第6号 考古学を楽しむ会 2002年5月
 境町史編さん委員会（編）『下総境の生活史 国説・境の歴史』境町 2005年3月



第22図 清水遺跡・糸井宮前遺跡焼失住居跡実測図

第4章 同所新田遺跡

第1節 遺跡の概要

同所新田遺跡は、利根川沿いの標高10～12mの下位段丘に立地している。調査前の現況は水田であり、調査面積は5,612㎡である。調査区は、便宜上調査区の中央を分断している道路から北側をⅠ区、南側をⅡ区とした。

古墳時代の方形周溝墓1基、平安時代の堅穴住居跡1軒、中・近世の掘立柱建物跡6棟、欄跡5列、製鉄遺構1基、溝跡29条、井戸跡4基、溜め井跡8基、廃棄土坑4基、土坑49基、ビット群4か所、時期不明の掘立柱建物跡1棟、欄跡1列、溝跡21条、道路跡1条、井戸跡6基、土坑221基、ビット群3か所を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に33箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（壺、甕、甑）、須恵器（坏、甕）、土師質土器（小皿、受付皿、焙烙、香炉、瓦灯傘、火鉢、鐘類、植木鉢）、陶器（皿、椀、蓋、片口、徳利、燭台、仏飯器、鬘盤、土瓶、急須、甕、鉢、搦鉢）、磁器（皿、碗、猪口、蓋、仏飯器、ちろり、水滴、箸置き）、土製品（羽口、泥面子、土製人形、箱庭道具）、石器・石製品（打製石斧、磨製石斧、管、砥石、硯）、金属製品（小太刀、刀子、鎌、釘、包丁、鏡、煙管、古銭）、腕状洋、自然遺物（刷毛、骨片、貝）、瓦片、板破片などである。

第2節 基本層序

調査区中央部東側のG3h1区にテストビットを設定し、基本土層の観察を行った。地表面の標高は11.2mで、地表面から2.15m掘り下げた。土層は7層に分層され、観察結果は以下のとおりである。

第1層は、褐色の耕作土層で、少量のロームブロックを含み、層厚は45～55cmである。

第2層は、暗褐色の腐植土で、中量のロームブロックを含み、層厚は5～20cmである。

第3層は、明黄褐色のハードローム層で、微量のAT（蛤良丹沢テフラ）を含み、層厚は14～47cmである。

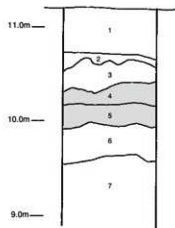
第4層は、暗褐色のハードローム層である。第二黒色帯（B BⅡ）上層と考えられ、層厚は10～37cmである。

第5層は、暗褐色のハードローム層である。第二黒色帯（B BⅡ）下層で、層厚は19～39cmである。

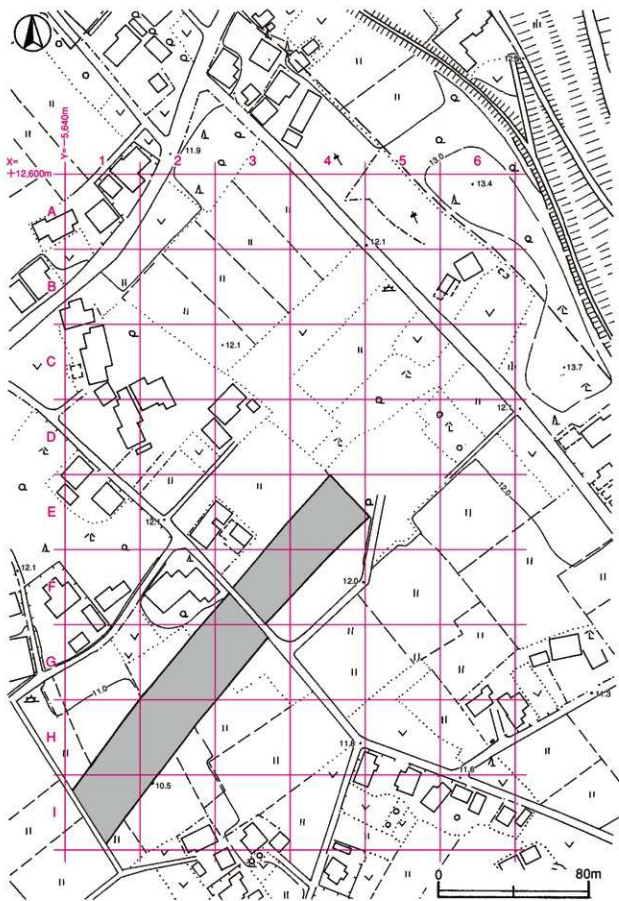
第6層は、明黄褐色のハードローム層で、層厚は32～44cmである。

第7層は、明黄褐色のハードローム層で、第6層より粘性が強く、層厚は20～34cmである。

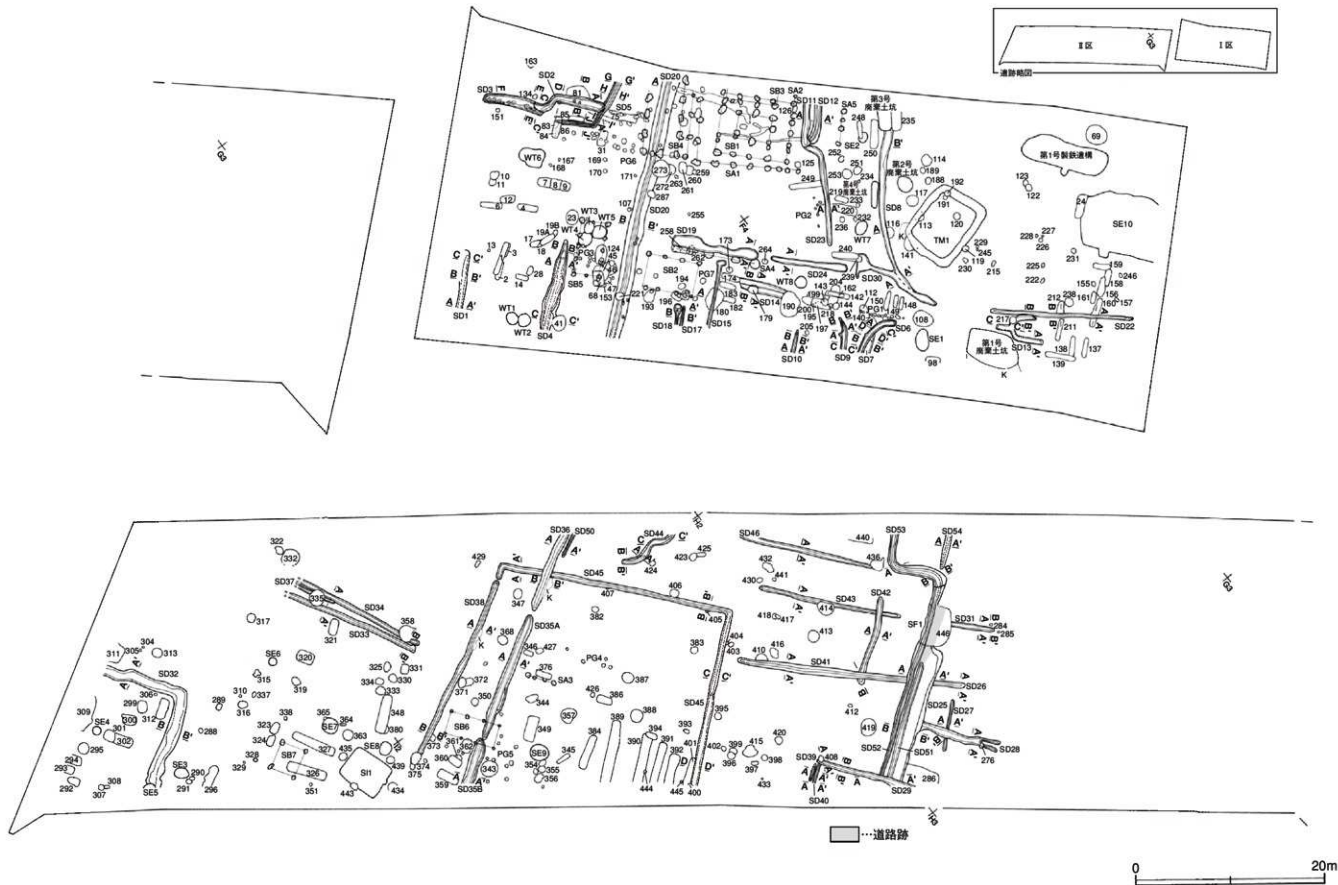
なお、遺構は第3層上面で確認されている。



第23図 同所新田遺跡基本土層図



第24図 同所新田遺跡調査区設定図



第25図 同所新田遺跡遺構全体図

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の方形周溝墓と遺物

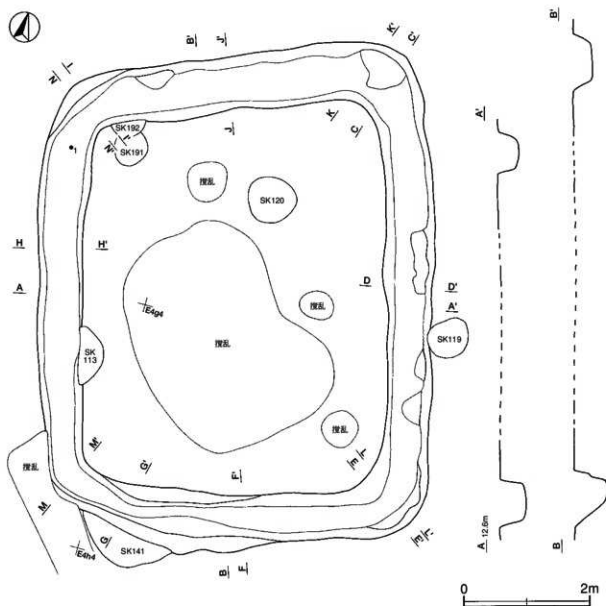
第1号方形周溝墓 (第26～28図)

位置 調査区I区北部のE4f4区、標高12.4mの平坦な台地状に位置している。

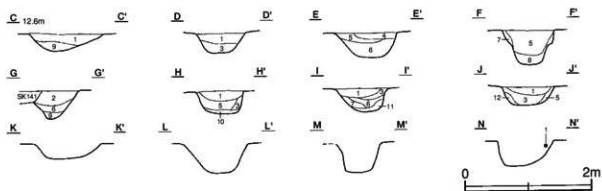
重複関係 第113・119・120・141・191・192号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 内法は東西軸4.9m、南北軸6.2m、外法は東西軸6.3m、南北軸7.9mで、主軸方向はN-14°-Wである。周溝は隅丸長方形に全周し、深さは20～43cmで、西部と南部が深い。北部の底面は凸凹で、その他はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 12層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。



第26図 第1号方形周溝墓実測図(1)



第27図 第1号方形周溝墓実測図(2)

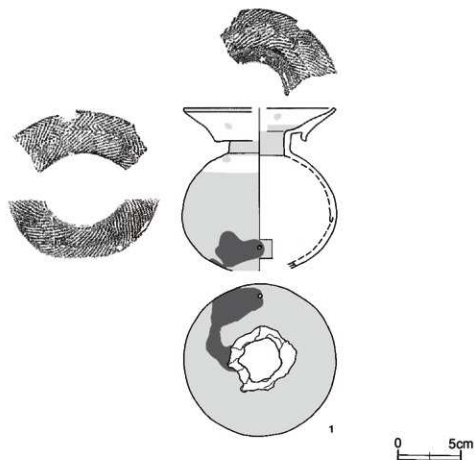
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量
- 4 黒褐色 ローム粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量

- 7 暗褐色 ロームブロック中量
- 8 暗褐色 ロームブロック中量, 粘土ブロック少量
- 9 褐色 ロームブロック少量
- 10 褐色 ロームブロック多量
- 11 褐色 ローム粒子中量
- 12 暗褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片10点(高坏1, 壺1, 甕7, ミニチュア土器1)のほか, 流れ込んだ縄文土器片2点, 混入した土師質土器片1点, 陶器2点, 磁器片1点も出土している。1は北西コーナー部の覆土上層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から4世紀前半と考えられる。



第28図 第1号方形周溝墓出土遺物実測図

第1号方形周溝墓出土遺物観察表(第28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	壺	11.8	13.0	—	長石・石英・雲母	暗赤	良好	口辺部、体部上段に縄文施文後段点状の赤彩 体部外縁ヘラダ後段、内面ヘラダア 体部下端1か所穿孔、底部焼成後の穿孔	覆土上層	90% PL19

2 平安時代の堅穴住居跡と遺物

第1号住居跡(第29・30図)

位置 調査区Ⅱ区南部のI2b1区、標高10.8mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第443号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.64m、短軸3.85mの長方形で、主軸方向はN-72°-Eである。壁高は14~24cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。長軸3.14m、短軸2.13m、深さ10cmほどで、平面凸状の掘り方が竈から中央部までにかけて確認されている。掘り方には、黒色土で平坦に埋められている。また、竈周辺、中央部、北壁付近の床面から焼土と炭化物が確認されている。

竈 東壁中央部やや南寄りに付設されており、両袖部は床面より高い部分が消失している。確認された規模は、焚口部から煙道部まで122cm、袖部幅130cmである。袖部は、掘り方部に砂質粘土を埋め込んで構築している。火床部は床面を20cmほど掘りくぼめ、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ若干掘り込み、火床面からほぼ直立して立ち上がっている。また、火床部より下層の詳細は不明である。

覆土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量、焼土ブロック	7 灰褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量
2 灰褐色	砂質粘土粒子中量、ロームブロック少量	8 灰褐色	砂質粘土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量
3 赤褐色	焼土ブロック多量、砂質粘土粒子中量	9 灰黄褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土粒子少量
4 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・砂質粘土粒子少量	10 暗赤褐色	焼土粒子中量、砂質粘土粒子少量
5 灰褐色	ロームブロック・焼土粒子・砂質粘土粒子少量	11 黒褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量
6 灰褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量	12 灰褐色	砂質粘土粒子中量
		13 灰褐色	砂質粘土粒子少量

ピット 6か所。P2~P4は主柱穴で、深さは25cmほどである。P6は深さ36cmで、西壁付近の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P1・P5の性格は不明である。

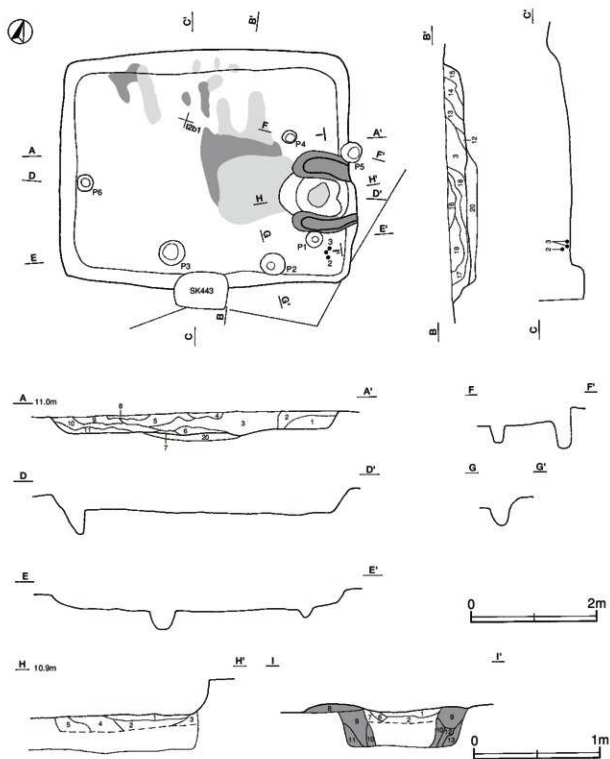
覆土 20層に分層される。不規則な堆積状況や含有物から人為堆積である。また、第20層は黒色土を主体とした貼床に相当する。

土層解説

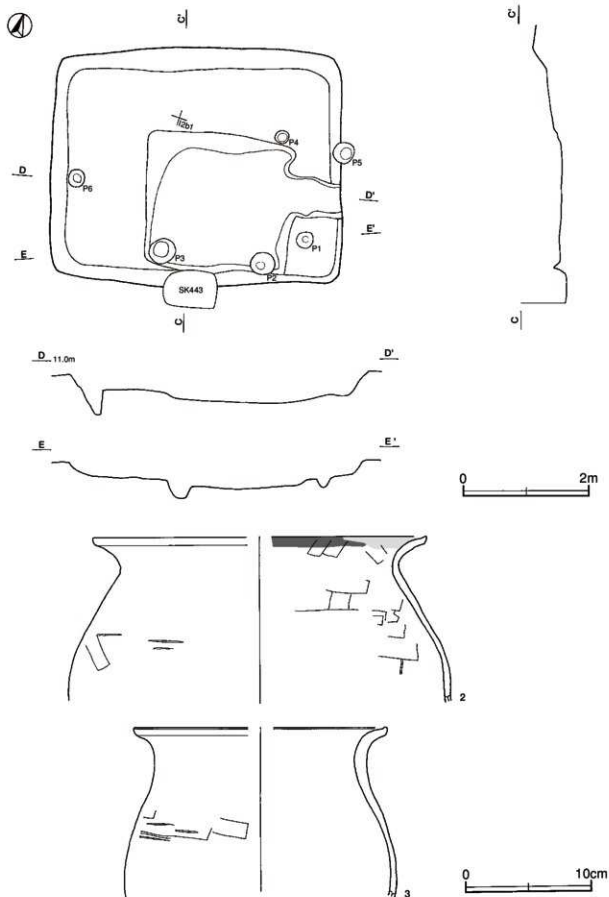
1 褐色	ローム粒子中量	12 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子極微量
2 黒褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子極微量	13 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子極微量	14 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量、炭化粒子極微量
4 黒褐色	粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子極微量	15 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量、炭化粒子極微量
5 黒褐色	粘土粒子微量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子極微量	16 黒褐色	粘土ブロック微量、焼土粒子極微量
6 暗褐色	ローム粒子極微量	17 黒褐色	ローム粒子微量、粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子極微量
7 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子極微量	18 暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
8 黒褐色	ローム粒子微量、炭化粒子極微量	19 黒褐色	粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
9 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック極微量	20 黒褐色	ローム粒子微量
10 黒褐色	炭化物・ローム粒子少量、粘土ブロック極微量		
11 黒褐色	ロームブロック少量		

遺物出土状況 土師器片47点(壺類)、須恵器片1点(坏)、土製品2点(支脚)のほか、流れ込んだ縄文土器片2点も出土している。2は南東部覆土下層、3は南東部床面と竈覆土中からそれぞれ出土しており、廃絶後に廃棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀代と考えられる。また、床面に広がる焼土と炭化材から、本跡は焼失住居と考えられる。



第29図 第1号住居跡実測図



第30図 第1号住居跡・出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表(第30図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土状況	備考
2	土師器	壺	26.6	13.2	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部ナゲ 体部ナゲ ヘラナゲ	覆土下層	10%
3	土師器	壺	20.0	13.5	—	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口辺部ナゲ 体部ナゲ ヘラナゲ	床面・覆土下層	10%

3 中・近世の遺構と遺物

中・近世では、掘立柱建物跡6棟、欄跡4列、製鉄遺構1基、溝跡29条、井戸跡4基、溜め井跡8基、廃棄土坑4基、土坑49基、ピット群4か所を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡(第31～33図)

位置 調査区I区中央部のE3h8～E3j0区、標高12.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第11・20号溝跡、第126号土坑を掘り込み、第3・4号掘立柱建物、第2号欄に掘り込まれている。

規模と構造 桁行4間、梁行3間の建物跡で、桁行方向N-42°-Eである。規模は、桁行7.5m、梁行6.3mで、面積は47.25㎡である。柱間寸法は、桁行は1.8m(6尺)を基調とし、梁行は西より1.8m(6尺)、2.7m(9尺)、1.8m(6尺)である。

炉 中央部やや西側に位置している。長径78cm、短径52cmの楕円形で、確認面を8cm掘り込んだ地床炉である。地床炉は、火を受けて赤変している。炉の覆土中から第1号製鉄遺構と同質の砂鉄が検出している。

伊土層解説

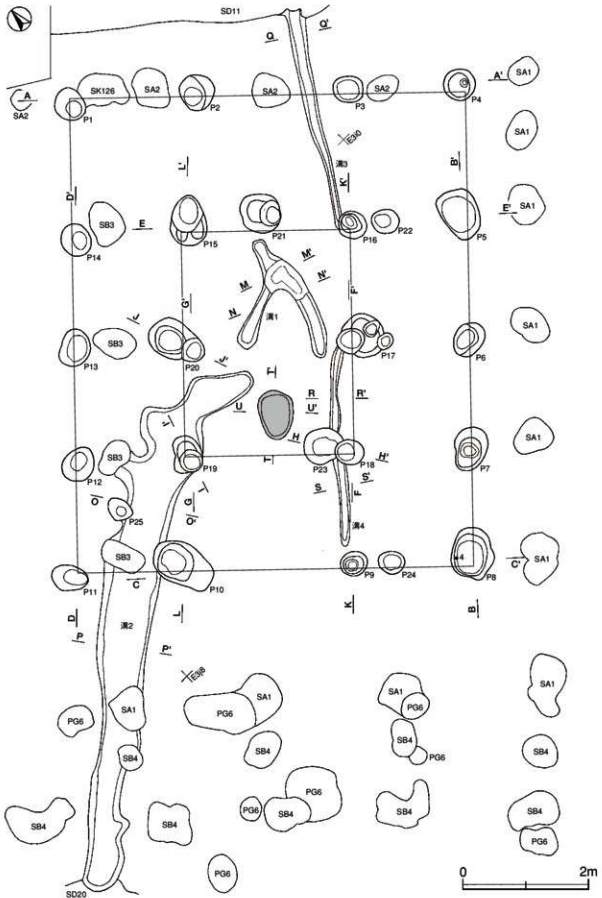
1 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量	10 黒 褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子少量
2 褐 色	砂粒中量、ロームブロック少量	11 灰 褐色	焼土粒子少量
3 暗 褐色	焼土ブロック少量	12 褐 色	ロームブロック少量
4 暗 褐色	ロームブロック少量	13 黒 褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック微量
5 明赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量	14 黒 色	ローム粒子少量
6 褐 色	ローム粒子・砂粒少量	15 暗 褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量
7 暗 褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	16 赤 褐色	焼土ブロック多量
8 暗 褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量	17 褐 色	ローム粒子・焼土粒子少量
9 赤 褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック少量		

溝 4条。溝1は本跡の中央部に位置し、規模は長さ13～21cm、幅14～26cm、深さ10～14cmで、平面形はY字状である。溝2は本跡の中央部から西方向へ延び、第20号溝と連結している。規模は、長さ88cm、幅50～87cm、深さ10cmほどで、平面形は緩曲状である。溝3は本跡の東部に位置し、P16から北東方向へ延び、第11号溝と連結している。規模は長さ35cm、幅12～28cm、深さ2～22cmで、平面形は直線状である。また、第11号溝へ向かうほど深くなっている。溝4は本跡の中央南部に位置し、P17から南西方向へ向かって延び、P9手前で立ち上がっている。規模は、長さ31cm、幅8～22cm、深さ6cmで、平面形は直線状である。溝1の性格は、鍛冶作業時に利用する水を貯水するもの、溝2・3の性格は、鍛冶作業時に生じた汚水などを排水していたものと考えられる。溝4の性格は不明である。

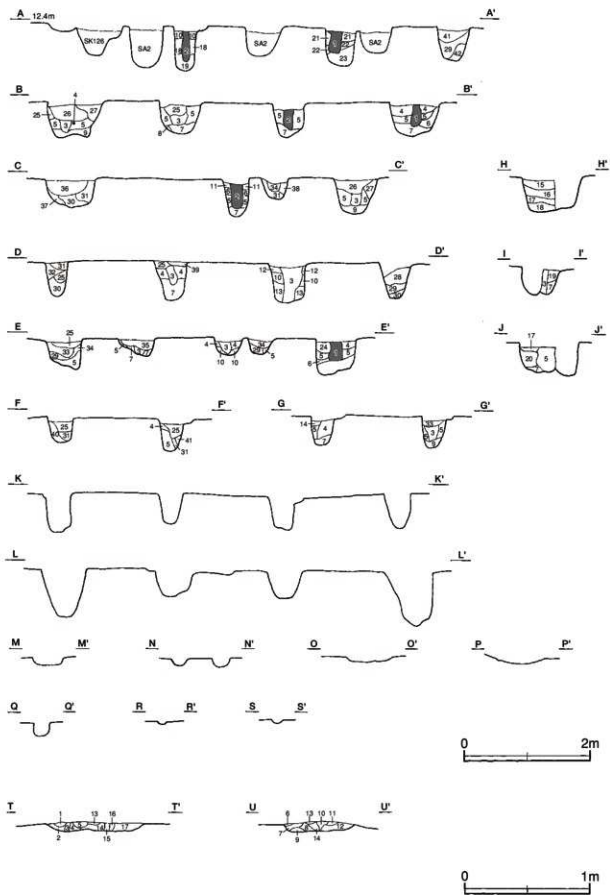
柱穴 25か所。深さは28～84cmである。土層は、第1・2層が柱痕、第3層が抜き取り痕、第4～23層が埋土である。埋土は突き固められている。柱のあたりは、柱穴の底面に凹凸があるため、不明瞭である。

土層解説(各柱穴共通)

1 暗 褐色	ローム粒子中量、粘土粒子少量	7 暗 褐色	ローム粒子少量
2 暗 褐色	ロームブロック少量(締まり弱い)	8 褐 色	ロームブロック微量
3 暗 褐色	ローム粒子少量	9 暗 褐色	ローム粒子・粘土粒子少量
4 灰 褐色	ロームブロック中量、砂粒少量	10 暗 褐色	ロームブロック中量
5 暗 褐色	ロームブロック少量	11 黒 褐色	ローム粒子少量(粘性やや強い)
6 褐 色	ロームブロック中量	12 暗 褐色	ロームブロック中量(締まりやや強い)



第31図 第1号掘立柱建物跡実測図(1)

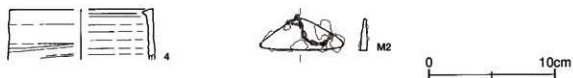


第32图 第1号掘立柱建物跡実測图(2)

13	褐	色	ロームブロック中量	28	褐	色	ロームブロック中量 (締まりやや強い)		
14	暗	褐	色	ローム粒子少量 (粘性やや強い)	29	暗	褐	色	ロームブロック少量 (粘性やや強い)
15	暗	褐	色	ローム粒子中量, 粘土粒子・砂粒少量	30	暗	褐	色	ロームブロック中量 (粘性・締まりやや強い)
16	暗	褐	色	ロームブロック・砂粒少量	31	黒	褐	色	ローム粒子少量
17	黒	褐	色	ロームブロック少量	32	黒	褐	色	ローム粒子微量
18	灰	褐	色	ロームブロック少量	33	灰	褐	色	ローム粒子微量
19	灰	褐	色	ローム粒子少量	34	褐	色	ロームブロック少量	
20	明	褐	色	ロームブロック多量	35	褐	色	ロームブロック微量	
21	暗	褐	色	ロームブロック微量	36	暗	褐	色	粘土ブロック中量, ローム粒子・焼土粒子少量
22	暗	褐	色	ローム粒子微量	37	黒	褐	色	ロームブロック中量
23	灰	褐	色	砂粒少量, ローム粒子微量	38	黒	褐	色	ロームブロック少量 (締まり強い)
24	暗	褐	色	ローム粒子中量	39	灰	褐	色	砂粒少量, ロームブロック微量
25	褐	色	ロームブロック・砂粒少量	40	暗	褐	色	ローム粒子・砂粒少量, 焼土粒子微量	
26	暗	褐	色	ロームブロック中量, 砂粒少量	41	灰	褐	色	ロームブロック少量 (粘性強い)
27	暗	褐	色	ロームブロック中量 (粘性やや強い)	42	褐	色	ローム粒子微量	

遺物出土状況 土師質土器片4点(小皿1, 播鉢2), 陶器片3点(瀬戸・美濃系香炉, 産地不明播鉢, 産地不明瓶類), 磁器片3点(肥前系統類1, 瀬戸・美濃系皿類2), 石器5点(砥石), 金属製品2点(煙管, 火打金カ), 砂鉄(354.26g)のほか, 流れ込んだ縄文土器片1点, 土師器片2点も各柱穴から出土している。4はP8の埋土中層から出土している。

所見 本跡の性格は, 小鍛冶を行っていた鍛冶施設と想定される。時期は, 出土土器や第1号製鉄遺構と同質の砂粒が検出していることから18世紀後半に機能し, 19世紀初頭には廃絶していたと考えられる。



第33図 第1号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第33図)

番号	類別	器種	口徑	器高	底径	粘土色 釉薬色	成形・ 調整	装飾			印・痕 など	製作		出土位置	備考
								筋付/輪索	文様	糸線付帯		製作地	製作年代		
4	陶器	香炉	11.4	(4.0)		灰白 黒褐色	ロクロ	—	—	—	—	瀬戸・ 美濃系	18世紀中葉	P8 埋土中層	15%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M2	火打 金カ	2.5	6.5	0.6	20.4	鉄・銅	上層部に割製でS字状の金具が付けられている	P8 埋土中	PL23

第2号掘立柱建物跡(第34図)

位置 調査区I区中央部のF3c0~F4d2区, 標高12.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第196号土坑を掘り込み, 第7号ピット群に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間, 梁行1間の側柱建物跡で, 桁行方向N-42°-Eである。規模は, 桁行5.4m, 梁行3.6mで, 面積は19.44㎡である。柱間寸法は, 桁行1.8m(6尺), 梁行3.6m(12尺)を基調としている。

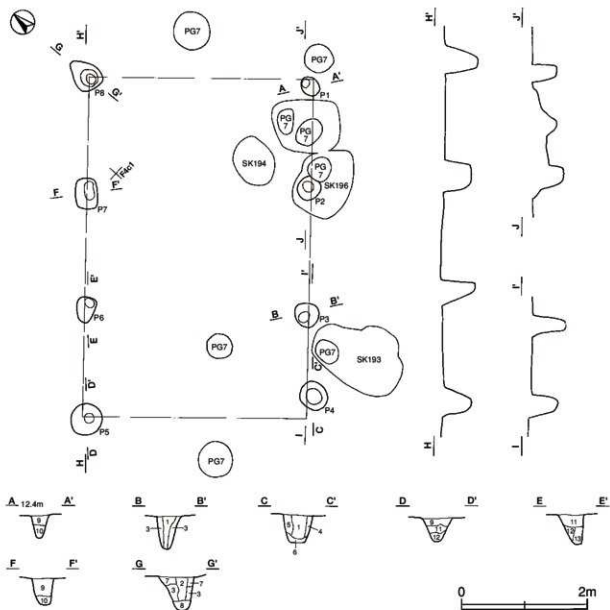
柱穴 8か所。深さは42~54cmである。土層は, 第1・2層が抜き取り痕, 第3~8層が埋土である。埋土は突き固められている。柱のあたりは, 柱穴の底面に凹凸があるため, 不明瞭である。

土層解説(各柱穴共通)

1	黒	褐	色	ローム粒子微量 (締まり弱い)	8	黒	褐	色	ローム粒子・炭化物微量
2	黒	褐	色	ローム粒子・砂粒微量 (締まり弱い)	9	黒	褐	色	ローム粒子微量
3	暗	褐	色	ロームブロック少量	10	黒	褐	色	ローム粒子少量
4	暗	褐	色	ローム粒子中量 (締まりやや強い)	11	暗	褐	色	ローム粒子中量
5	黒	褐	色	粘土ブロック少量, ローム粒子・炭化物微量	12	暗	褐	色	ローム粒子少量 (締まり弱い)
6	暗	褐	色	ローム粒子中量	13	黒	褐	色	ロームブロック少量 (締まり弱い)
7	黒	褐	色	ロームブロック微量					

遺物出土状況 土師質土器片1点(焙烙), 陶器片2点(瀬戸・美濃系天目茶碗, 播鉢), 磁器片1点(肥前系碗類), 砂鉄(0.47g)が各柱穴から出土している。

所見 性格は, 位置関係から, 第1号掘立柱建物跡に付随する倉庫と想定される。時期は, 第1号掘立柱建物跡と同時期である18世紀後半と考えられる。



第34図 第2号掘立柱建物跡実測図

第3号掘立柱建物跡 (第35図)

位置 調査区I区中央部のE3h8~E3i9区, 標高12.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と構造 西側が調査区域外へ延びており, 桁行あるいは梁行3間だけが確認されている。柱間寸法は, 1.8m(6尺)を基調としている。

柱穴 4か所。深さは36~46cmである。土層は, 第1・2層が抜き取り痕, 第5~9層が埋土である。埋土は

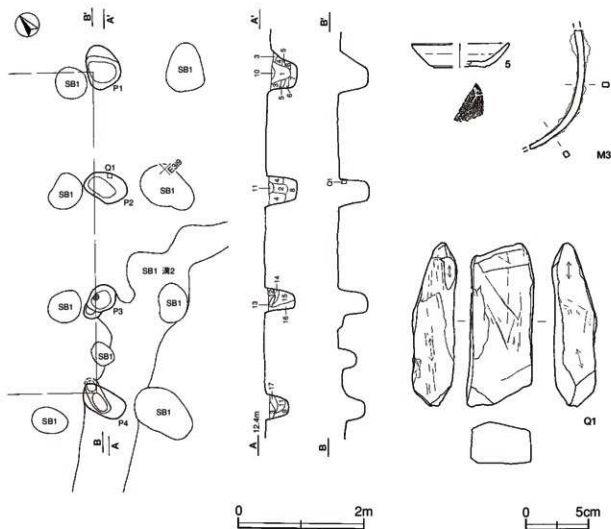
突き固められている。柱のあたりは、P3に1か所確認されたが、その他の柱穴は底面に凹凸があるため、不明瞭である。

土層解説 (各柱穴共通)

- | | | | |
|-------|---------------------|--------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 10 灰褐色 | ロームブロック中量、砂粒少量(締まり強い) |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・砂粒少量 | 11 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量 | 12 灰褐色 | 粘土ブロック中量、ローム粒子・砂粒少量 |
| 4 灰褐色 | ロームブロック中量 | 13 褐色 | ローム粒子少量 |
| 5 褐色 | ロームブロック中量 | 14 灰褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック少量(締まりやや強い) | 15 暗褐色 | ローム粒子少量(粘性やや強い) |
| 7 灰褐色 | ロームブロック中量(締まりとても強い) | 16 暗褐色 | ロームブロック中量(粘性・締まりやや強い) |
| 8 灰褐色 | ロームブロック少量 | 17 暗褐色 | ロームブロック多量 |
| 9 暗褐色 | ローム粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片4点(小皿2, 不明2), 陶器片3点(陶器産地不明碗, 瀬戸・美濃系天目茶碗, 瀬戸・美濃系皿), 磁器片1点(肥前系碗類), 石器1点(砥石), 鉄製品2点(釘)が各柱穴から出土している。5とM3はP3の埋土中から出土している。

所見 性格は、第4号掘立柱建物跡と第2号掘立柱との位置関係から、付属施設と想定される。時期は、周辺の建物と掘立柱との機能的関係から19世紀前半と考えられる。



第35図 第3号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第35図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴	出土位置	備考
5	土師土器	小皿	[7.6]	1.9	[4.5]	長石・雲母	橙	普通	ロクロ成形 底部糸切り痕	P3 埋土中	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	砥石	13.0	5.2	3.3	317.0	泥岩	側面2面が砥面 砥面部と被断面に擦痕あり	P2 埋土上層	
M3	釘	(9.4)	0.5	0.3	[11.0]	鉄	屈曲している 両端部欠損	P3 埋土中	

第4号掘立柱建物跡 (第36・37図)

位置 調査区I区中央部のE3i6～F3b8区、標高12.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号掘立柱建物跡、第20号溝跡を掘り込んでいる。また、重複している第6号ピット群との新旧関係は不明である。

規模と構造 西側が調査区域外へ延びており、桁行4間以上、梁行3間が確認された建物跡で、桁行方向N-44°-Wと考えられる。規模は、桁行8.1m以上、梁行4.8mで、面積は38.88㎡以上と想定される。柱間寸法は、桁行2.1m(7尺)、梁行1.8m(6尺)を基調としている。

柱穴 14か所。深さは30～70cmである。土層は、第1層が柱痕、第2～4層が抜き取り痕、第5～14層が埋土である。埋土は突き固められている。柱のあたりは、柱穴の底面に凹凸があるため、不明瞭である。

土層解説 (各柱穴共通)

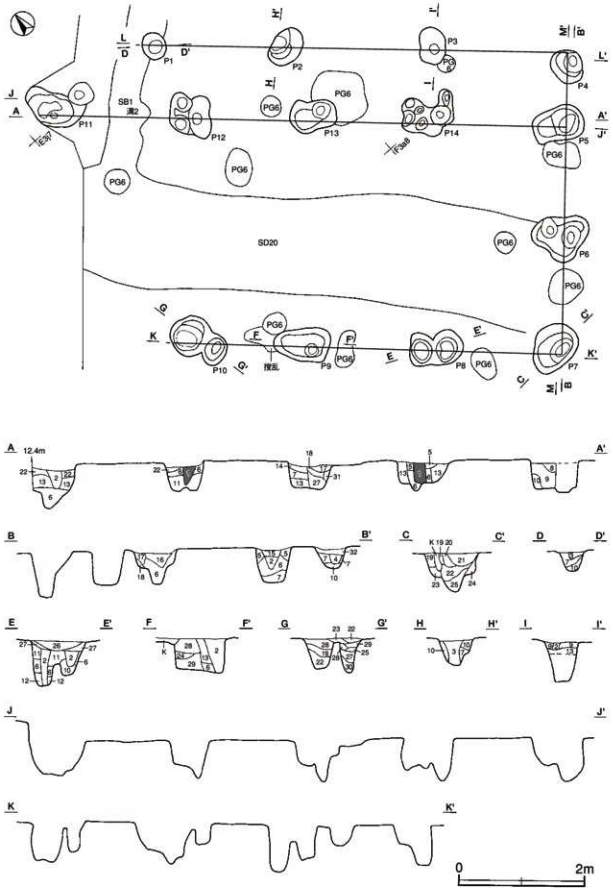
1	黒褐色	ローム粒子少量 (締まり弱い)	17	灰褐色	ローム粒子・砂粒少量
2	暗褐色	ローム粒子微量 (締まり弱い)	18	灰褐色	ロームブロック少量
3	暗褐色	ローム粒子・砂粒少量	19	暗褐色	ロームブロック微量
4	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子少量	20	褐色	ローム粒子中量
5	灰褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量	21	暗褐色	ロームブロック・粘土粒子微量
6	暗褐色	ロームブロック少量	22	褐色	ローム粒子少量
7	暗褐色	ロームブロック少量 (締まりやや強い)	23	明褐色	ローム粒子中量
8	灰褐色	ロームブロック・砂粒少量	24	にぶい褐色	ローム粒子・粘土粒子微量
9	灰褐色	ローム粒子少量	25	褐色	ローム粒子多量
10	褐色	ロームブロック中量	26	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
11	橙褐色	ローム粒子多量	27	褐色	ロームブロック微量
12	褐色	ローム粒子中量 (締まりやや強い)	28	褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
13	褐色	ローム粒子微量 (締まりやや強い)	29	褐色	ローム粒子微量
14	褐色	ロームブロック・砂粒少量	30	明褐色	ローム粒子中量
15	灰褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック・砂粒少量	31	灰褐色	ロームブロック中量
16	褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量	32	灰褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量

遺物出土状況 陶器片4点(瀬戸・美濃系天目茶碗3, 瀬戸・美濃系皿1), 磁器片1点(肥前系碗類), 金属製品1点(煙管), 砂鉄(47.65g)が各柱穴から出土している。7はP5の埋土中から出土している。

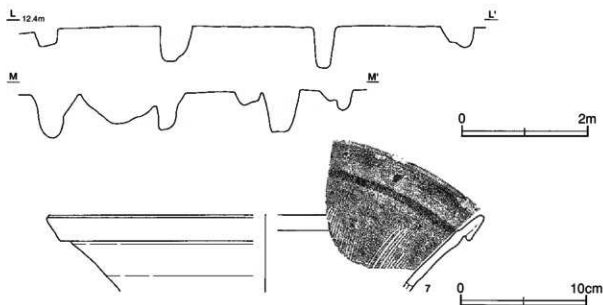
所見 性格は、構造から屋あるいは倉と想定される。時期は、重複関係から19世紀前半と考えられる。

第4号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第37図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土色 釉薬色	成形・調整	装飾			印・跡 など	製作		出土位置	備考
								総括/輪文	文様	裝飾特徴		製作地	製作年代		
7	陶器	腰鉢	[34.4]	(6.1)	—	にぶい褐色	ロクロ	—	内一: 鉄丸	内面磨目	—	瀬戸・ 美濃系	18世紀代	P5 埋土中	10%



第36図 第4号掘立柱建物跡実測図



第37図 第4号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第5号掘立柱建物跡 (第38図)

位置 調査区I区南部のE3d8～F3e9区、標高12.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3・4号溜め井跡、第124号土坑を掘り込み、第45・68号土坑に掘り込まれている。重複している第3号ピット群との新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行4間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向N-43°-Wである。規模は、桁行5.7m、梁行2.7mで、面積は15.39㎡である。柱間寸法は、桁行1.5mを基調とし、梁行きは西より1.2m(4尺)、1.5m(5尺)である。また、建物内に第3～5号溜め井が確認されており、建物内で水を使用する作業が行われていたと想定される。

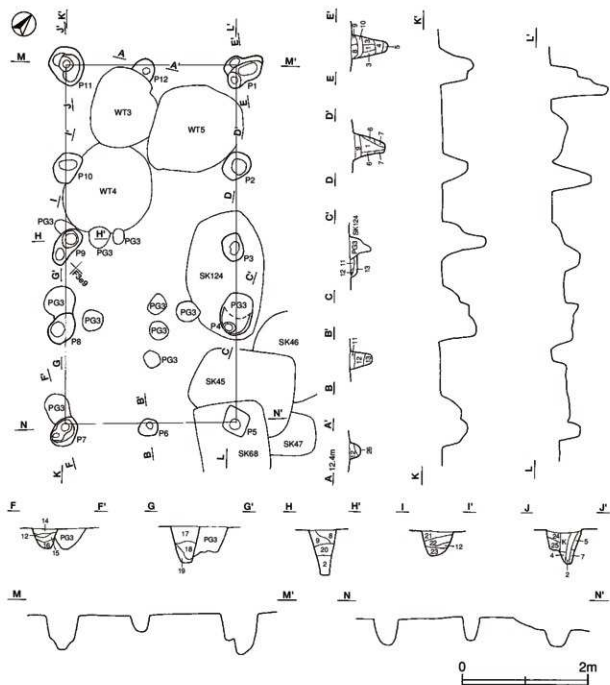
柱穴 12か所。深さは26～110cmである。土層は、第1・2層が抜き取り痕、第3～7層が埋土である。埋土は突き固められている。柱のあたりは、柱穴の底面に凹凸があるため、不明瞭である。

土層解説 (各柱穴共通)

1 黒褐色	ロームブロック極微量	14 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック微量 (締まり弱い)	15 褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
3 極暗褐色	ローム粒子微量(締まり強い)	16 明褐色	ローム粒子多量
4 褐色	ローム粒子少量、粘土ブロック微量	17 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
5 明褐色	ローム粒子多量(締まり強い)	18 褐色	ロームブロック少量
6 褐色	ロームブロック微量	19 褐色	ローム粒子少量
7 褐色	ロームブロック中量	20 灰褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック微量
8 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	21 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック微量
9 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子極微量	22 褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
10 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	23 褐色	ローム粒子少量、粘土ブロック微量
11 黒褐色	ローム粒子・炭化物微量	24 灰褐色	ローム粒子微量、炭化粒子極微量
12 褐色	ローム粒子微量	25 灰褐色	ロームブロック少量
13 橙褐色	ローム粒子多量	26 暗褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師質土器片10点(小皿)がP4の埋土中から出土している。

所見 性格は、建物内に溜め井が確認されていることや付近に位置している製鉄関連施設との機能的関係から、生産された鉄製品を仕上げるための工房と想定される。時期は、周辺に位置している製鉄関連施設との機能的関係から18世紀後半と考えられる。



第38図 第5号掘立柱建物跡実測図

第6号掘立柱建物跡 (第39図)

位置 調査区Ⅱ区中央部のH2h1~H2i2区、標高10.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第35B号溝跡を掘り込んでいる。

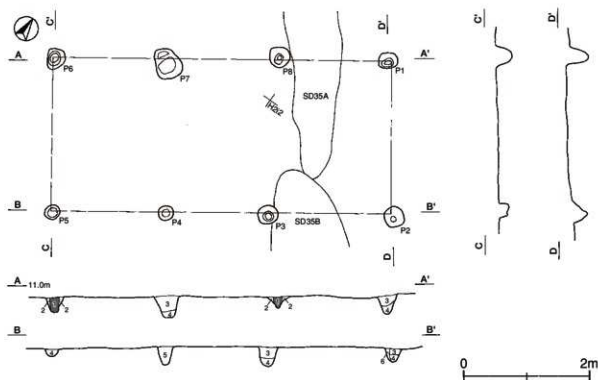
規模と構造 桁行3間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向N-56°-Eである。規模は、桁行5.4m、梁行2.4mで、面積は12.96㎡である。柱間寸法は、桁行1.8m(6尺)、梁行2.4m(8尺)を基調としている。

柱穴 8か所。深さは14~38cmである。土層は、第1層が柱痕、第2層が埋土である。埋土は突き固められている。柱のあたりは、確認されなかった。

土層解説 (各柱穴共通)

- | | | | |
|-------|-----------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 (締まり弱い) | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量 | 5 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量 | 6 黒褐色 | ロームブロック微量 |

所見 性格は、倉庫と想定される。時期は、重複関係から19世紀後半と考えられる。



第39図 第6号掘立柱建物跡実測図

表5 近世 掘立柱建物跡一覧表

番号	区画	桁行方向	柱間数 桁×梁(間)	規模 桁×梁(m)	面積 (㎡)	桁行柱間 (m)	梁行柱間 (m)	柱穴 (cm)			主な出土遺物	備考 (重複関係 古→新)	
								構造	柱穴数	平面形			
1	E 318~ E 319	N-42°-E	4×3	7.5×6.3	47.25	1.8	1.8~2.7	—	25	円形・楕円形	28~84	土器片	SD11-20, SK126→ 本跡→SB3-4, SA2
2	F 310~ F 311	N-42°-E	3×1	5.4×3.6	19.44	1.8	3.6	欄柱	8	円形・楕円形	42~54	土器片	SK196→本跡→PG7
3	E 318~ E 319	—	(3)	1.8	—	—	—	欄柱	4	円形・楕円形	36~46	土器片、石器、 鉄製品	SB1→本跡
4	E 316~ F 318	N-44°-W	(4)×3	(8.1)×4.8	(38.88)	2.1	1.8	—	14	円形・楕円形	30~70	土器片、金属製品	SB1, SD20→本跡
5	E 318~ F 319	N-43°-W	4×2	5.7×2.7	15.39	1.5	1.2~1.5	欄柱	8	円形・楕円形	26~110	土師質土器	WT3-4, SK124→ 本跡→SK45-68
6	H 211~ H 212	N-56°-E	3×1	5.4×2.4	12.96	1.8	2.4	欄柱	8	円形・楕円形	14~38	—	SD35B→本跡

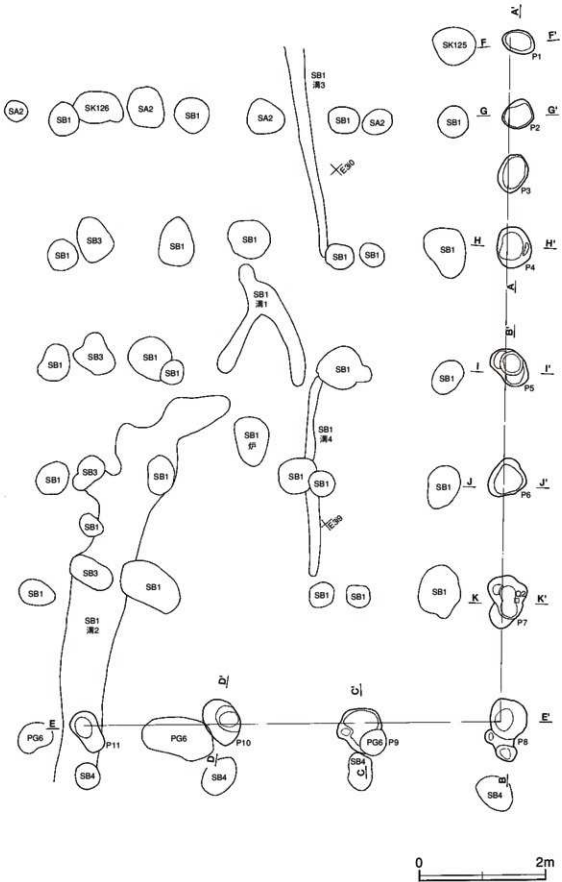
(2) 欄跡

第1号欄跡 (第40・41図)

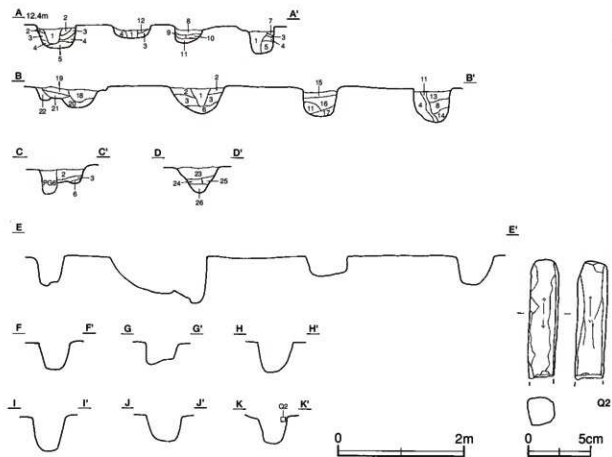
位置 調査区I区中央部のE317~F319区、標高12.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第6号ピット群に掘り込まれている。第1号掘立柱建物跡の南側から東側にかけて、L字状に区画している。

規模と形状 P1からP8までの長さは10.8mで、方向はN-44°-E、柱間寸法が0.9m~2.1mである。P



第40図 第1号柵跡実測図



第41図 第1号柵跡・出土遺物実測図

8からP11までの長さは6.6mで、方向は $N-46^{\circ}-W$ 、柱間寸法は2.1mを基調としている。

柱穴 11か所。平面形は長径44~100cm、短径38~62cmの楕円形または不定形である。断面形はU字状または逆台形状を呈し、深さは18~77cmである。覆土は第1層が抜き取り痕に相当し、第2~6層が埋土と考えられる。

土層解説 (各柱穴共通)

- | | |
|----------------------------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量 (締まりやや弱い) | 15 灰褐色 ローム粒子少量 (鉄分含む) |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量 (粘性・締まりやや強い) | 16 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック少量 | 17 褐色 ロームブロック少量 (粘性やや強い) |
| 4 褐色 ロームブロック中量 | 18 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック・砂粒少量 |
| 5 暗褐色 ロームブロック少量 | 19 灰褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・砂粒少量 |
| 6 褐色 ロームブロック少量 | 20 暗褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量 |
| 7 暗褐色 ロームブロック・砂粒少量 | 21 灰褐色 ロームブロック・粘土ブロック・砂粒少量 |
| 8 暗褐色 ローム粒子少量 | 22 褐色 ローム粒子少量 |
| 9 灰褐色 ローム粒子少量 | 23 灰褐色 粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック・粘土粒子少量 |
| 10 灰褐色 ロームブロック微量 | 24 灰褐色 ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子微量 |
| 11 暗褐色 ロームブロック少量 (締まりやや強い) | 25 褐色 ロームブロック・粘土粒子少量、焼土ブロック微量 |
| 12 暗褐色 ローム粒子・砂粒少量 | 26 灰褐色 ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量 |
| 13 灰褐色 ロームブロック中量 | |
| 14 灰褐色 ロームブロック少量 | |

遺物出土状況 陶器片1点 (産地不明碗類)、磁器片2点 (肥前系碗類)、石器・石製品2点 (砥石、硯)、砂鉄 (21.55g) が出土している。Q2はP7の埋土上層から出土している。

所見 鍛冶施設と考えられる第1号掘立柱建物跡の南側から東側を遮蔽する機能を有していたものと推測される。時期は、第1号掘立柱建物跡との機能的関係から、18世紀後半と考えられる。

第1号柵跡出土遺物観察表(第41図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	砥石	[9.6]	2.4	2.7	(75.6)	凝灰岩	砥面5面 他砥面削 砥面部に溝痕あり	F7 堆土上層	

第2号柵跡(第42図)

位置 調査区I区中央部のE3 i9~E3 i0区、標高12.2mの台地平坦部に位置している。第3・4号掘立柱建物跡の北側に平行して位置している。

重複関係 第1号掘立柱建物跡、第126号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長さは5.7mで、方向はN-45°-W、柱間寸法は1.8mを基調としている。

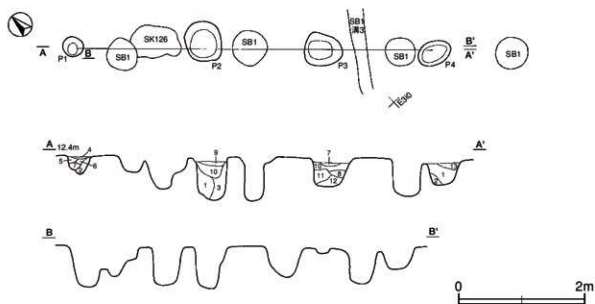
柱穴 4か所。長径32~68cm、短径30~56cmの円形と楕円形である。断面形状はU字状を呈し、深さは27~68cmである。覆土は第1層が抜き取り痕に相当し、第2・3層が埋土と考えられる。

土層解説(各柱穴共通)

- | | | | |
|-------|--------------------|--------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 8 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量(締まりやや強い) | 9 灰褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |
| 3 褐色 | ローム粒子微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 褐色 | ローム粒子中量 | 11 灰褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 褐色 | ロームブロック中量 | 12 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック中量 | 13 明褐色 | ロームブロック多量 |
| 7 暗褐色 | ローム粒子少量(粘性やや強い) | | |

遺物出土状況 土師質土器片1点(小皿)が柱穴から出土している。

所見 第3・4号掘立柱建物跡の北側に並んで東西方向に延びており、建物の北側を遮蔽する機能を有していたと推測される。時期は、重複関係や第4号掘立柱建物跡との機能的関係から19世紀前半と考えられる。



第42図 第2号柵跡実測図

第4号柵跡(第43図)

位置 調査区I区中央部のF3 a0~F4 b2区、標高12.3mの台地平坦部に位置している。第2号掘立柱建物跡の北側に平行して位置している。

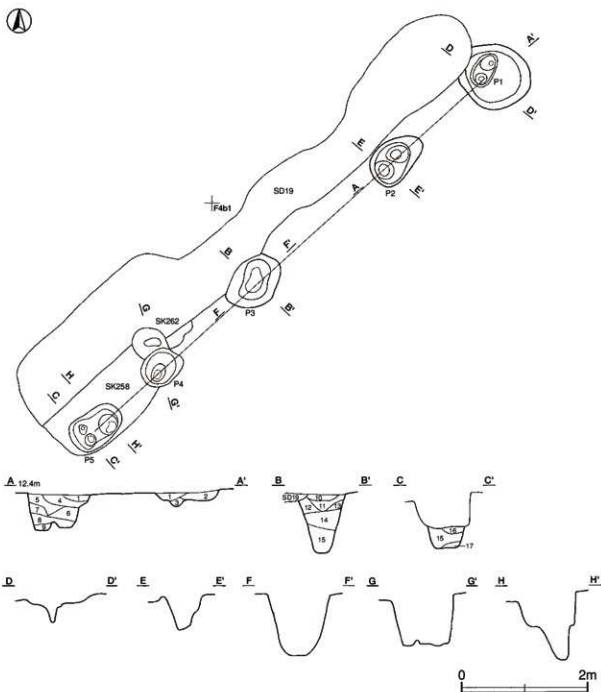
重複関係 第262号土坑を掘り込み、第19号溝、第258号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長さは8.7mで、方向はN-47°-E、柱間寸法が1.5~3.0mである。

柱穴 5か所。長径96~114cm、短径60~100cmの楕円形である。断面形は逆台形状を呈し、深さは42~110cmである。各柱穴の覆土は、柱抜き取りの痕跡を呈している。

土層解説 (各柱穴共通)

- | | | | |
|-------|-----------------|--------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 10 暗褐色 | ロームブロック・砂粒少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子極微量 | 11 暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 3 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 12 褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子極微量 | 13 灰褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 褐色 | ローム粒子中量 | 14 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 6 褐色 | ロームブロック少量 | 15 暗褐色 | ロームブロック少量 (締まりやや強い) |
| 7 明褐色 | ローム粒子中量 | 16 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 8 明褐色 | ローム粒子多量 | 17 褐色 | ロームブロック中量 (締まりやや強い) |
| 9 橙 | ロームブロック多量 | | |



第43図 第4号構跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片1点(小皿), 瓦質土器片1点(焙烙), 陶器3点(瀬戸・美濃系碗類2, 瀬戸・美濃系香炉1)が各柱穴からそれぞれ出土している。

所見 第2号掘立柱建物跡の北側に並んで東西方向に延びており, 建物の北側を遮蔽する機能を有していたと推測される。時期は, 第2号掘立柱建物跡との機能的関係から18世紀後半と考えられる。

第5号欄跡(第44図)

位置 調査区I区中央部のE3g0区, 標高12.3mの台地平坦部に位置している。

確認状況 第11・12・23号溝跡を挟んで, 第1号掘立柱建物跡の北東側に平行し, また, 第1号欄跡の北側に直交して位置している。

規模と形状 長さは3.3mで, 方向は $N-50^{\circ}-W$, 柱間寸法が0.9~1.5mである。

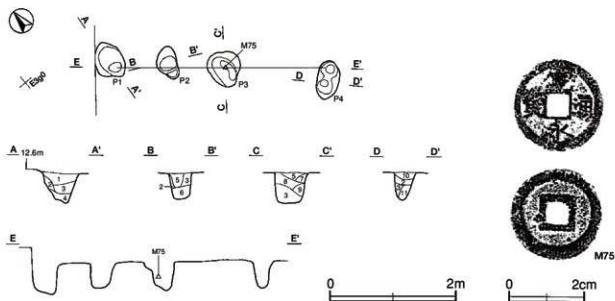
柱穴 4か所。長径54~63cm, 短径36~54cmの楕円形である。断面形はU字状または逆台形状を呈し, 深さは40~50cmである。各柱穴の覆土は, 柱抜き取りの痕跡を呈している。

土層解説(各柱穴共通)

- | | | | |
|-------|------------------|-------|------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量, 炭化粒子極微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量 | 8 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 褐色 | ローム粒子少量 | 9 褐色 | ローム粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームアブロック少量 | 10 褐色 | ロームアブロック少量 |
| 5 暗褐色 | ロームアブロック微量 | 11 褐色 | ローム粒子多量 |
| 6 褐色 | ロームアブロック中量 | | |

遺物出土状況 古銭1点(寛永通宝)が出土している。M75はP3の覆土中層から出土し, 廃絶後に流れ込んだものと考えられる。

所見 第1号欄跡の北側に直交して南北方向に延びており, 建物の北側と3条の溝跡を遮蔽する機能を有していたと推測される。時期は, 建物及び欄, 溝との機能的関係から18世紀後半と考えられる。



第44図 第5号欄跡・出土遺物実測図

第5号欄跡出土遺物観察表(第44図)

番号	銭種	径	孔幅	重量	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
M75	寛永通宝	2.4	0.6	2.8	1668	銅	無背	P3覆土中層	PL24

表6 近世 柵跡一覧表

番号	位置	方向	長さ (m)	柱間 (m)	柱 穴				主な出土遺物	備 考 (重複箇所 古→新)	
					柱穴数	平面形	直径 (cm)	径深 (cm)			深さ (cm)
1	E3 17-F3a9	N-44-E	10.8 6.6	0.9 2.1 2.1 2.1	11	楕円形・ 不定形	44~100	38~62	18~77	陶器、磁器、石器・石 製品	本跡→PG6
2	E3 19-E3 10	N-45-W	5.7	1.8	4	円形・ 楕円形	32~68	30~56	27~68	土師質土器	SB1, SK126→本跡
4	F3 a0-F4 b2	N-47-E	8.7	1.5~3.0	5	楕円形	96~114	60~100	42~110	土師質土器, 瓦質土器, 陶器	SK262→本跡→SD19, SK258
5	E3 g0	N-50-W	3.3	0.9~1.5	4	楕円形	54~63	36~54	40~50	古銭	

(3) 製鉄遺構

第1号製鉄遺構 (第45~50図)

位置 調査区I区北部のE4 b4~E4 c5区、標高12.4mの台地平坦部に位置している。

確認状況 作業面、上部構造は確認されず、地下構造の本床状遺構のみ確認された。

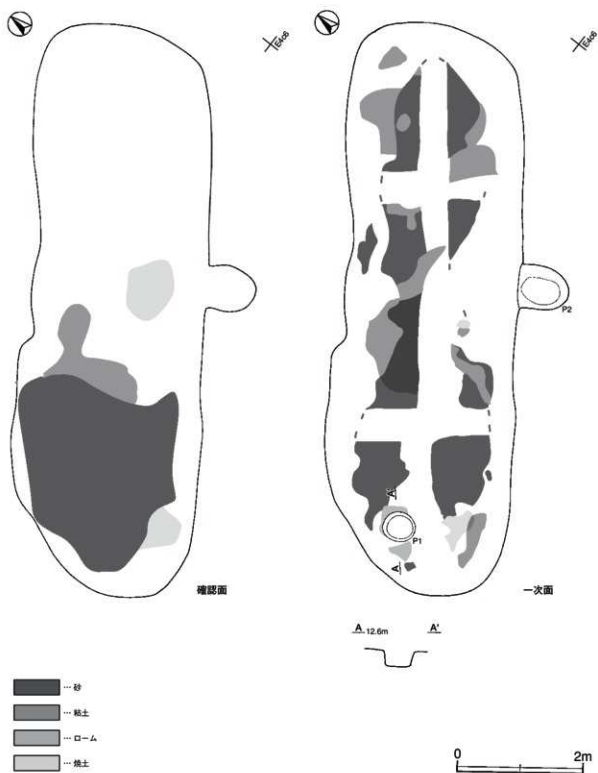
規模と形状 長径9.0m、短径2.7mの楕円形で、長径方向はN-51°-Eである。確認面からの深さは50~70cmで、壁面は外傾して立ち上がっている。底面は中央部に若干の凸部分がある形状である。確認面には中央部と南西部に焼土、南部にかけての広い範囲で砂、砂混じりの粘土が確認されているが、広い範囲で強い熱を受けた状況は見受けられない。確認面から10cm~30cm掘り下げたところで(一次面)、中央部の一部と南西部に焼土があり、ほぼ全面に粘土と砂粒の広まりがある。また、南西部に固くしまったローム土の中心には、P1が確認されている。一次面から確認された砂はロームと混ぜた土で、ほぼ水平状に堆積しており、地下からの湿気を防ぐための工法と考えられる。

ピット 2か所。確認面から、P1の深さは24cm、P2の深さは30cmで、いずれも性格は不明である。

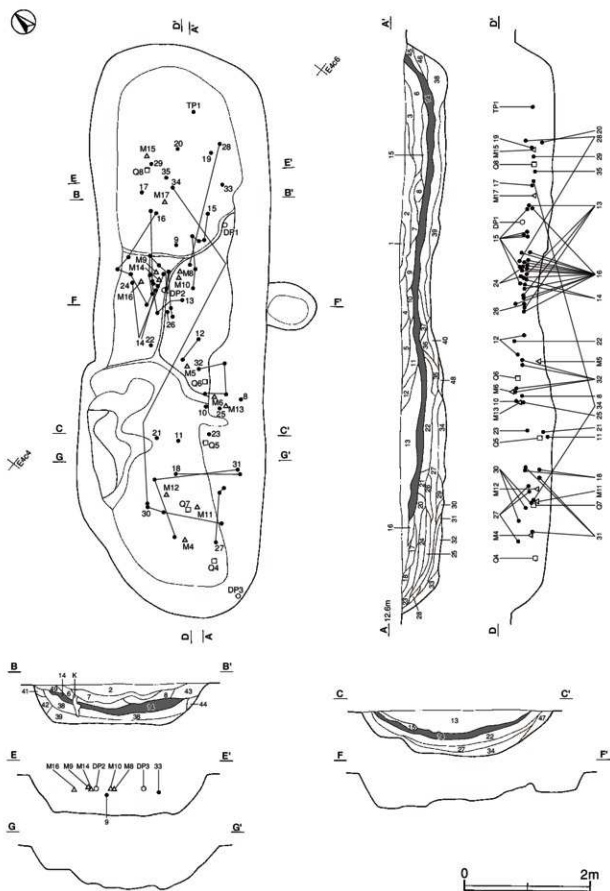
覆土 49層に分層される人為堆積である。また、第14層はロームと砂を混ぜた土で充填した層に相当する。

土層解説

1 灰 褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量	22 暗 褐色	ロームブロック・砂粒少量
2 灰 褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量、焼土 粒子微量	23 褐色	ローム粒子少量
3 灰 褐色	砂粒中量、ロームブロック・粘土粒子少量	24 暗 褐色	ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子・ 炭化粒子・砂粒少量
4 灰 褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・ 砂粒少量	25 暗 褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒 子・粘土粒子・砂粒少量
5 灰 褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・ 粘土粒子少量	26 褐 色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土 粒子少量
6 暗 褐色	砂粒中量、ロームブロック・炭化粒子・粘土 粒子少量	27 暗 褐色	ロームブロック・粘土粒子少量
7 暗 褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量	28 褐色	ローム粒子多量
8 灰 褐色	粘土粒子多量、ロームブロック少量、焼土粒 子・炭化粒子微量	29 灰 褐色	粘土粒子中量、ロームブロック・砂粒少量
9 灰 褐色	粘土粒子多量、ロームブロック・焼土粒子・ 炭化粒子・砂粒少量	30 灰 褐色	ロームブロック・粘土粒子少量
10 灰 褐色	焼土ブロック・砂粒中量、ロームブロック少量	31 灰 褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・砂粒少量
11 灰 褐色	粘土粒子中量、ロームブロック・焼土粒子・ 炭化粒子・砂粒少量	32 褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量
12 灰 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	33 褐色	ロームブロック中量、砂粒少量、炭化粒子微量
13 褐 色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子・ 砂粒少量	34 暗 褐色	粘土粒子中量、ローム粒子微量
14 暗 褐色	砂多量、ロームブロック中量	35 灰 褐色	粘土粒子中量、ロームブロック・焼土粒子・ 炭化粒子・砂粒少量
15 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子・粘土粒子・ 砂粒少量、焼土粒子微量	36 灰 褐色	ロームブロック・砂粒少量
16 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・ 砂粒少量	37 灰 褐色	砂粒中量、ローム粒子・粘土粒子少量
17 暗赤褐色	焼土ブロック・砂粒中量、ロームブロック少量	38 灰 褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量
18 暗 褐色	ローム粒子中量、砂粒少量	39 灰 褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量
19 暗 褐色	ローム粒子・砂粒少量	40 暗 褐色	ロームブロック中量
20 灰 褐色	ローム粒子多量、焼土粒子中量、粘土粒子・ 砂粒少量	41 褐色	ロームブロック少量(細まり弱い)
21 褐 色	ロームブロック多量、砂粒中量、焼土粒子・ 炭化粒子・粘土粒子少量	42 褐色	ローム粒子多量(細まりやや強い)
		43 灰 褐色	ロームブロック・粘土粒子少量
		44 褐色	ロームブロック・炭化物・粘土粒子少量
		45 暗 褐色	ロームブロック・砂粒少量
		46 褐色	ロームブロック少量
		47 褐色	ロームブロック中量
		48 褐色	ロームブロック中量、砂粒少量
		49 暗 褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量



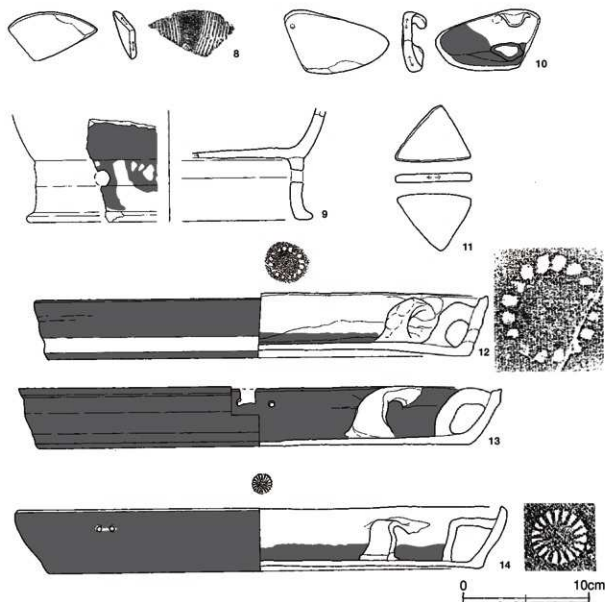
第45図 第1号製鉄遺構実測図(1)



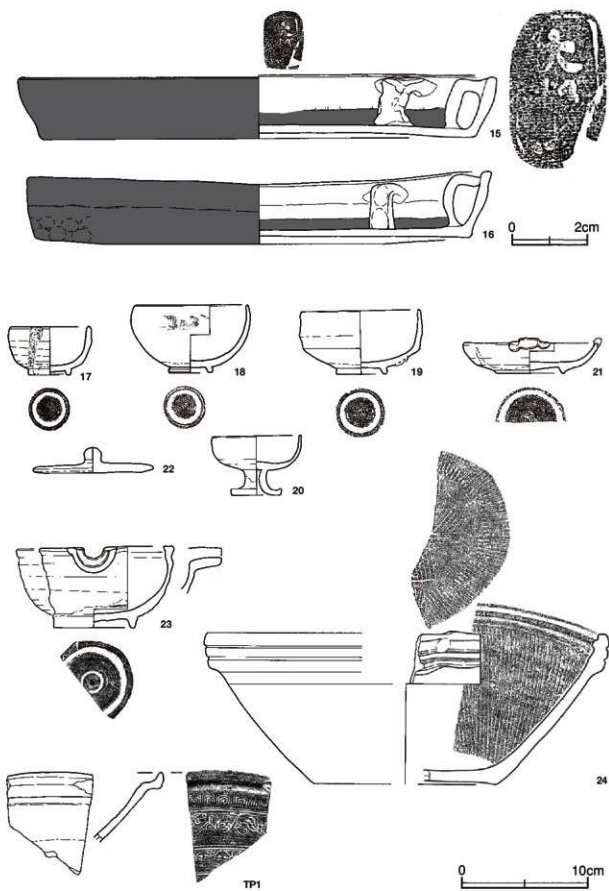
第46图 第1号製鉄遺構実測図(2)

遺物出土状況 土師質土器片102点（小皿1，搗鉢1，焙塔97，鉢類2，焼塩壺1），瓦質土器片15点（焙塔），陶器片53点（瀬戸・美濃系小坏1，瀬戸・美濃系小碗16点，京焼系小碗13，産地不明小碗1，瀬戸・美濃系中碗1，産地不明中碗2，産地不明碗類2，瀬戸・美濃系皿類2，産地不明皿類2，瀬戸・美濃系飯類4，産地不明飯類2，瀬戸・美濃系搗鉢1，明石・堺系搗鉢1，産地不明鉢類1，瀬戸・美濃系香炉1，産地不明仏飯器1，産地不明風炉1，産地不明裘燗1），磁器片12点（肥前系小碗8点，肥前系碗類2，瀬戸・美濃系小碗1，肥前系仏飯器1），土製品2点（羽口），石器38点（砥石26，石臼1，不明11），金属器・金属製品23点（鎌5，鋤先1，釘9，刀子3，煙管5），鉄滓5点，椀状滓30点，板碑片7点，礫19点，砂鉄（256.21g）のほか，流れ込んだ縄文土器片2点も出土している。18・21は南部の覆土下層から，20は北部の覆土下層から，31は南部の覆土上層から覆土中層にかけて出土している。Q7は南部の覆土下層から，Q8は南部の覆土上層からそれぞれ出土しており，表面に火を受けた痕跡が認められている。

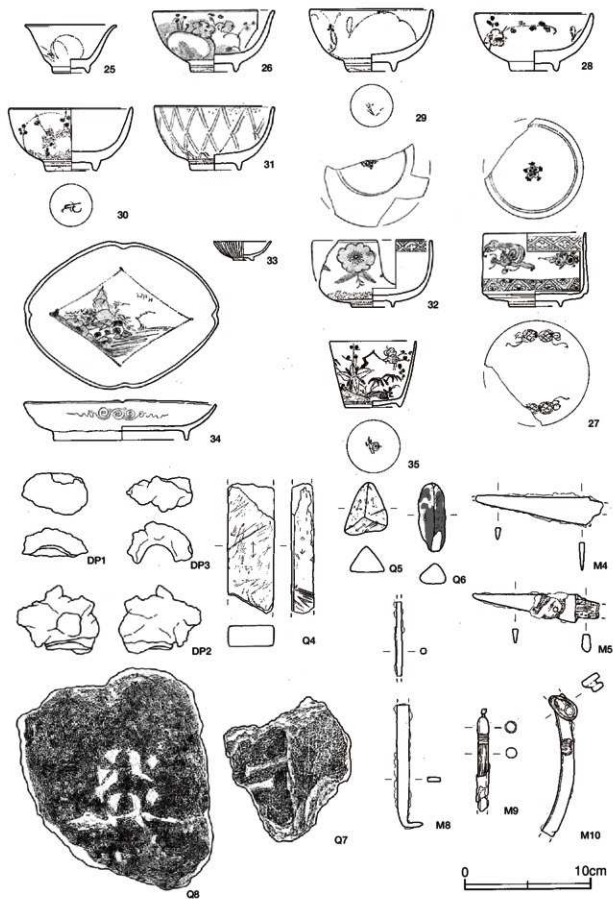
所見 時期は，出土土器から18世紀後半と考えられる。



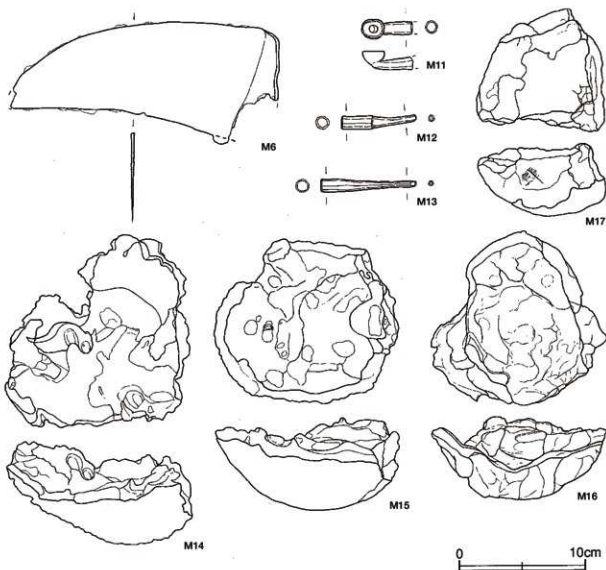
第47図 第1号製鉄遺構出土遺物実測図(1)



第48图 第1号製鉄遺構出土遺物実測図(2)



第49図 第1号製鉄遺構出土遺物実測図(3)



第50図 第1号製鉄遺構出土遺物実測図(4)

第1号製鉄遺構出土遺物観察表(第47~50図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土色・釉薬色	成形・調整	装飾	印・銘々	製作	出土位置	備考		
								絵付/輪華	文様	装飾特徴	製作地	製作年代		
8	土器	鉢鉢	3.4	7.5	0.5	長石・雲母・赤色粒子		普通		内面9条の横目2セット 側面砥面化	覆土上層	転用砥石		
9	土器	鉢鉢	—	(8.9)	(22.8)	赤色粒子・赤色粒子		良好		ロクロナデ・ナデ 高台残り付 高台1か所穿孔 内底壁付着	覆土中層	10%		
10	土器	焙烙	5.0	8.3	1.8	長石・雲母・赤色粒子		明赤釉		側面・耳部砥面化	覆土上層	転用砥石		
11	土器	焙烙	4.4	6.0	0.7	長石・雲母		靑		底部のみ残存 側面砥面化	覆土上層	転用砥石		
12	土器	焙烙	36.1	5.2	33.7	赤色粒子・長石・石英		にぶい靑		ロクロナデ・ナデ 耳部2か所 内底に月星曜紋の刷印	覆土上層	95% PL19		
13	土器	焙烙	38.6	4.7	34.5	雲母・石英・長石		にぶい靑		ロクロナデ・ナデ 耳部3か所 側孔3か所 側面・内底に移	覆土上層	50% PL19		
14	土器	焙烙	38.3	5.1	33.8	長石・石英・雲母		にぶい靑		ロクロナデ・ナデ 耳部3か所 内底に植物紋の刷印	覆土中層	95% PL19		
15	土器	焙烙	37.0	4.9	34.5	長石・石英・雲母		靑		ロクロナデ・ナデ 耳部3か所 内底に「大」の刷印	覆土上層 - 覆土下層	90% PL19		
16	土器	焙烙	37.0	5.8	34.6	白色粒子・赤色粒子		にぶい赤靑		ロクロナデ・ナデ 耳部3か所	覆土中層	85% PL19		

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土色・釉薬色	成形・調整	装飾			印・銘々	製作		出土位置	備考
								絵付/輪華	文様	装飾特徴		製作地	製作年代		
17	陶器	小瓶	6.1	3.9	3.3	灰白	ロクロコ 高台無出	—	—	流し輪	—	瀬戸・美濃系	1800年~	覆土中層	95%
18	陶器	中瓶	9.0	5.4	3.3	浅黄	ロクロコ 高台有出	—	—	内：— 外：鳥文	—	瀬戸・美濃系	18世紀 後半	覆土中層 - 覆土下層	75%

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土色・輪飾色	成形・調整	裝飾			印・具など	製作		出土位置	備考
								絵付/輪飾	文様	裝飾特徴		製作地	製作年代		
19	陶器	中瓶	9.4	5.2	4.0	灰白 浅黄	ロクロ 高台削出	一 灰輪	—	貫入	—	瀬戸・ 美濃系	18世紀後半 以降	覆土中層	80% 体部にひっつき跡あり
20	陶器	仏飯器	6.9	4.8	3.8	灰黄 灰白	ロクロ	灰輪	—	貫入	—	瀬戸・ 美濃系	18世紀後半	覆土下層	95% PL26
21	陶器	灯明皿	10.6	(2.8)	(5.3)	黄灰 黒灰	ロクロ 高台削出	一 灰輪	—	つまみ 貼付	—	瀬戸・ 美濃系	18世紀後半	覆土下層	50% PL26
22	陶器	蓋	9.6	2.0	—	灰白	ロクロ	灰輪	—	—	—	京都・ 白雲系	不明	覆土上層	90% PL28
23	陶器	片口	12.4	6.6	6.5	浅黄	ロクロ 高台削出	灰輪	—	—	—	瀬戸・ 美濃系	18世紀後半 以降	覆土中層	55% PL28
24	陶器	膳鉢	31.8	12.2	14.6	赤	ロクロ	—	見込脚口 クロス状	内面磨目	—	明石・ 海系	18世紀後半 以降	覆土中層	40% PL27
25	磁器	小瓶	7.4	3.9	3.0	灰白	ロクロ 高台砂目	灰付 透明	内:— 外:文	—	—	肥前系	18世紀 前半	覆土上層	80%
26	磁器	小瓶	9.5	5.0	3.5	白	ロクロ 高台砂目	灰付 透明	内:— 外:文	—	—	肥前系	18世紀 後半	覆土中層	70%
27	磁器	小瓶	8.2	5.9	4.1	白	ロクロ	灰付 透明	内:— 外:文	見込五弁花 底部花文	—	肥前系	18世紀 後半	覆土上層 覆土中層	70% PL26
28	磁器	中瓶	9.1	4.6	3.7	灰白	ロクロ 高台砂目	灰付 透明	内:— 外:文	—	—	肥前系	18世紀 後半	覆土上層	85%
29	磁器	中瓶	9.8	4.9	3.8	白	ロクロ 高台砂目	灰付 透明	内:— 外:文	—	—	肥前系	18世紀 前半	覆土中層	60% PL25
30	磁器	中瓶	9.8	5.0	4.0	灰白	ロクロ	灰付 透明	内:— 外:文	—	—	肥前系	18世紀 後半	覆土上層 覆土中層	85% PL25
31	磁器	中瓶	9.6	5.1	3.9	白	ロクロ 高台砂目	灰付 透明	内:— 外:文	—	—	肥前系	18世紀 後半	覆土中層	95% PL25
32	磁器	中瓶	(9.4)	5.4	3.4	白	ロクロ 高台砂目	灰付 透明	内:— 外:文	見込五弁花 花文	—	肥前系	18世紀 後半	覆土中層	30%
33	磁器	紅藍口	(4.6)	1.5	1.6	白	押しし	白輪	内:— 外:—	貝殻状	—	肥前系	1780~ 1810年	覆土中層	50% PL25
34	磁器	皿	15.3	3.2	10.8	白	手ビネリ	灰付 透明	内:— 外:文	四方入隅	—	肥前系	18世紀 後半	覆土中層	95% PL27
35	磁器	楕口	6.8	5.3	4.4	白	ロクロ	灰付 透明	内:— 外:文	—	濃須	肥前系	18世紀 後半	覆土中層	80% PL25-26
TP1	陶器	鉢	—	(5.5)	—	白・赤・黒 黒・白	ロクロ	鉄輪・白灰	内:— 外:—	象嵌	—	肥前系 唐津	17世紀後半	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP1	羽口	(3.4)	(5.3)	2.3	(22.5)	長石・ 石英	外面半滑解状鉄 内面ナデ	覆土中層	PL20
DP2	羽口	(6.5)	(5.5)	4.1	(84.4)	長石	外面半滑解状鉄・ガラス質の光沢有り 粘土部分一部残存	覆土中層	PL20
DP3	羽口	(2.7)	5.2	(3.3)	(21.9)	長石	外面半滑解状鉄 内面ナデ	覆土中層	PL20

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q4	砥石	(10.3)	3.7	1.7	(104.9)	凝灰岩	砥石4面 他破断面	覆土下層	PL22
Q5	砥石	4.0	3.5	2.7	13.7	軽石	砥石4面 三角鎌	覆土下層	
Q6	砥石	5.4	2.2	1.6	20.1	軽石	砥石3面 三角鎌 表面熱を受けている	覆土上層	PL22
Q7	板碑	(11.5)	(10.2)	(1.8)	(246.0)	雲母片岩	表面一部梵字 全面熱を受けている	覆土中層	
Q8	板碑	(17.9)	(14.9)	(2.0)	(831.0)	雲母片岩	表面キリク異体六様 全面熱を受けている	覆土中層	PL21
M4	刀子	(10.2)	2.3	0.4	(22.4)	鉄	基部欠損 刃部に木質部一部付着	覆土中層	PL23
M5	刀子	(9.9)	2.2	0.7	(22.3)	鉄	基部一部欠損 基部に木質部付着	覆土下層	
M6	鎌	(21.4)	9.1	0.3	(166.5)	鉄	先端部・基部一部欠損	覆土上層	PL24
M7	釘	(6.0)	0.4	0.4	(4.0)	鉄	頭部・先端部欠損	覆土中	
M8	不明鉄製品	(9.7)	2.1	0.4	(15.7)	鉄	鎌や 全体が扁平な板状で一端が直角に折れ先端部が尖っている	覆土中層	PL24
M9	不明鉄製品	(8.1)	0.8	0.8	(6.8)	鉄	頭部に鉄製の軸 軸は竹製 竹製の軸内部に鉄製の軸	覆土中層	PL24
M10	不明鉄製品	(11.4)	2.9	1.2	(23.2)	鉄	表面の一部が 扁平な板状が突出している 端部に凸部面あり	覆土中層	
M14	鉋状漆	15.3	14.7	5.1	1110	鉄	鉋状を呈す ガラス質の光沢有り 着磁性質普通	覆土中層	PL23
M15	鉋状漆	13.0	14.5	7.4	1040	鉄	鉋状を呈す ガラス質の光沢有り 着磁性質非常に弱い	覆土中層	PL23
M16	鉋状漆	13.7	13.8	5.5	1120	鉄	鉋状を呈す ガラス質の光沢有り 着磁性質弱い	覆土中層	
M17	鉋状漆	9.8	10.2	5.1	596	鉄	鉋状を呈す 切痕面有り 着磁性質弱い	覆土中層	PL23

番号	器種	長さ	火眼径	小口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M11	煙管	(4.0)	1.5	1.0	(3.4)	銅	煙首のみ 磨反し・小口径欠損	覆土中層	

番号	器種	長さ	口径径	小口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M12	煙管	5.8	0.4	1.0	5.3	銅	喉口のみ 肩部有り	覆土中層	PL24
M13	煙管	7.5	0.5	1.0	4.5	銅	喉口のみ 肩部なし	覆土上層	

(4) 溝跡

第1号溝跡 (第25・51図)

位置 調査区I区南部のF3g7～F3h8区、標高12mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南端が調査区域外に延び、確認できた長さは6.2mである。北西方向(N-43°-W)へ直線的に延び、規模は上幅58～81cm、下幅20～43cm、深さ25～42cmである。断面はU字状を呈し、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。また、南端から北端へ向かって傾斜している。

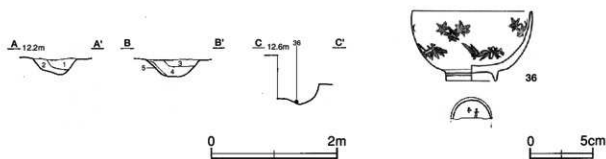
覆土 5層に分層される。各層にロームが多く含まれた人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量 | 5 褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片2点(皿、鉢類)、陶器片7点(瀬戸・美濃系皿1、産地不明鉢1、瀬戸・美濃系香炉1、瀬戸・美濃系瓶類3、信楽系瓶類1)、磁器片4点(肥前系中碗2、肥前系皿類1、肥前系香炉1)、石器1点(砥石)、鉄器1点(刀子)が出土している。遺物出土の分布状況は、中央北部に集中している様相と、中央部より南側に散在した様相とが見られる。36は中央北部の底面から出土している。

所見 時期は、出土土器から17世紀後半と考えられる。



第51図 第1号溝跡・出土遺物実測図

第1号溝跡出土遺物観察表 (第25・51図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土色 釉薬色	成形・ 調整	装飾			印・銘 など	製作		出土位置	備考
								総付/無装	文様	装飾特徴		製作地	製出年代		
36	磁器	中碗	9.5	5.5	2.0	灰白	ロタロ	染付 透明釉	内一 外：紅雲文	—	大口	肥前系	1680～ 1700年	底面	45%

第2号溝跡 (第25・52図)

位置 調査区I区中央部から南部のF2b6～F3c5区、標高12mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3・5号溝跡、第81号土坑、第6号ピット群を掘り込んでいる。

規模と形状 第3・5号溝と重複しているため、確認できた長さは7.7mである。F3b6区で第5号溝から派生し、南西方向(N-128°-W)へ直線的に延び、F3c5区で南方向へS字に屈曲し、第3号溝と連結している。規模は上幅60～110cm、下幅17～47cm、深さ50cmほどである。断面はU字状を呈し、底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。また、北端から南端へ向かって傾斜している。

ピット 4か所。深さは14～32cmで、性格は不明である。

覆土 17層に分層される。各土層断面ごとに含有物の違いが認められる人為堆積である。また、第4層から検

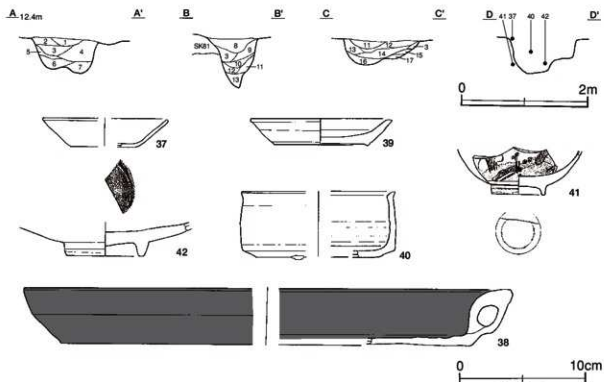
出された砂粒は、第1号掘立柱建物跡や第1号製鉄遺構から検出された砂粒と色調や質感と同質のものである。

土層解説 (A-A', B-B', C-C')

1	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	10	褐色	ローム粒子少量
2	暗褐色	ロームブロック中量	11	褐色	ロームブロック少量
3	暗褐色	ローム粒子少量	12	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
4	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・砂粒少量	13	暗褐色	ローム粒子微量
5	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	14	褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
6	暗褐色	ローム粒子中量	15	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
7	暗褐色	ロームブロック少量	16	褐色	ローム粒子微量
8	暗褐色	ロームブロック・炭化物微量	17	暗褐色	ロームブロック微量
9	明褐色	ローム粒子多量			

遺物出土状況 土師質土器片18点(皿1, 焙烙17), 陶器片7点(京焼系碗類3, 産地不明碗類1, 瀬戸・美濃系志野小皿1, 瀬戸・美濃系香炉1, 瀬戸・美濃系瓶類1), 磁器片9点(肥前系碗類8, 肥前系皿1), 石器2点(砥石), 鉄製品1点(釘), 板碑片4点, 貝1点のほか, 流れ込んだ縄文土器片14点も出土している。38~40・42は第3号溝跡と連結する屈曲部分の覆土上層から中層にかけて, 41は北部の底面から出土している。また, 39は第1号廃棄土坑から出土した遺物との接合関係が確認されている。

所見 時期は, 41・42から17世紀後半には機能を終え, 接合関係が確認された39と覆土中の砂粒から, 18世紀後半にはほぼ埋没していたと考えられる。



第52図 第2号溝跡・出土遺物実測図

第2号溝跡出土遺物観察表(第52図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
37	土師質土器	小皿	[9.8]	2.3	[5.0]	長石・雲母	靑	普通	ロクロ成形 底部余切り痕	覆土上層	20%
38	土師質土器	焙烙	[38.7]	4.5	[32.6]	長石・石英・雲母	赤褐色	良好	ロクロ成形後ナデ 内耳1か所残存	覆土中層	15%

番号	種類	口径	器高	底径	胎土色 釉色	成形・ 調整	装飾			印・基 など	製作		出土位置	備考	
							絵柄/軸差	文様	装飾特徴		製作地	製作年代			
39	陶器	小皿	11.0	2.1	7.4	褐灰	ロクロ 見込目線3	—	—	—	—	瀬戸・ 美濃系	1632~ 1750年	覆土上層	90% 第1号廃棄土灰 出土遺物と接合 P427
40	陶器	香炉	12.0	5.4	12.0	灰黄	ロクロ 野原仕	—	—	—	—	瀬戸・ 美濃系	1650年~	覆土上層	20%
41	磁器	碗	—	3.5	4.3	灰白	ロクロ 高台砂目	染付 透明釉	内:— 外:流釉輪文	—	—	肥前系	1650~ 1690年	底面	20% 高台内1重機軸
42	磁器	皿	—	2.7	6.1	黄緑	ロクロ 高台砂目	—	—	—	—	肥前系	1650~ 1690年	覆土中層	30% 反り地の目録を

第3号溝跡 (第25・53図)

位置 調査区I区南部のF3c5~F3d4区、標高12mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 第2号溝と重複しているため、確認できた長さは5.5mである。F3c5区から南西方向(N-130°-W)へほぼ直線的に延びている。規模は上幅96~122cm、下幅56~68cm、深さ20cmほどである。断面はU字状を呈し、底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。また、北端から南端へ向かって傾斜している。ピット 9か所。深さは10~18cmで、ほぼ直線的に並んでいることから、柱穴列や杭の可能性はある。

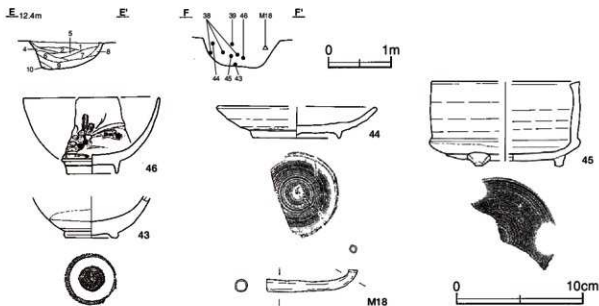
覆土 12層に分層される。各土層断面ごとに含有物の違いが認められる人為堆積である。また、第2号溝の土層解説中(C-C')の第3・15・17層が本溝の覆土に相当する。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック微量	7 褐色	ローム粒子少量、炭化物微量
2 暗褐色	ロームブロック少量	8 明褐色	ロームブロック中量
4 黒褐色	ローム粒子微量	9 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
5 褐色	炭化物・ローム粒子・粘土粒子微量	10 ぶい褐色	ローム粒子少量
6 明褐色	ローム粒子中量		

遺物出土状況 土師質土器片11点(火鉢1, 焙烙10), 瓦質土器片1点(焙烙), 陶器片7点(瀬戸・美濃系碗類3, 瀬戸・美濃系皿2, 瀬戸・美濃系香炉2), 磁器片4点(肥前系中碗1, 肥前系碗類3)が出土している。43は中央部の底面, 44は北東部の覆土上層, 46は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。また, 44は第1号廃棄土坑から出土した遺物との接合関係が確認されている。

所見 時期は, 出土土器から17世紀後半には第2号溝と同様に機能を終えていたと考えられる。



第53図 第3号溝跡・出土遺物実測図

第3号溝跡出土遺物観察表(第53図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土色 釉薬色	成形・ 調整	裝飾			印・款 など	製作		出土位置	備考	
								絵付/軸畫	文様	表繪特徴		製作地	製作年代			
43	陶器	椀	—	(3.3)	4.1	灰白色 明赤色	ロタロ 削り高台	—	—	—	—	—	瀬戸・ 美濃系	1650~ 1700年	底面	15%
44	陶器	中皿	12.4	2.5	6.9	灰青	ロタロ 削り高台	—	—	—	—	—	瀬戸・ 美濃系	17世紀後半	覆土上層	40% 第1号竈室土 坑出土遺物と混合
45	陶器	香炉	11.8	6.7	19.4	灰青 浅黄	ロタロ 削り高台	—	—	—	—	—	瀬戸・ 美濃系	1650年~	覆土上層~ 覆土中層	45%
46	磁器	中皿	10.8	6.1	4.0	灰白	ロタロ 削り高台	—	—	—	—	—	肥前系	17世紀後半	覆土中層	40%

番号	器種	長さ	口径径	小口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M18	煙管	7.2	0.6	0.9	5.5	測	吸口部のみ	覆土上層	

第4号溝跡(第25・54図)

位置 調査区I区南部のF3e8~F3g0区、標高12.1mの台地平坦部に位置している。

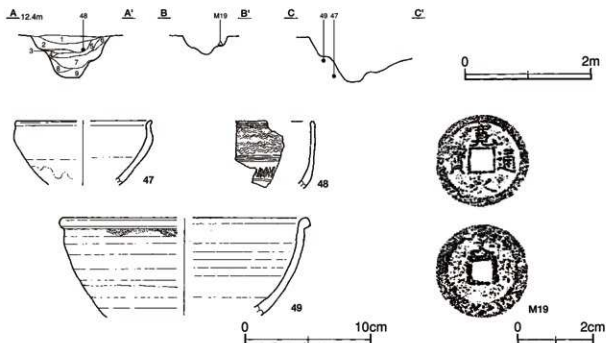
重複関係 第41号土坑との重複部分で攪乱を受けているため、新旧関係は不明である。

規模と形状 南東部が調査区域外へ延び、確認できた長さは9.8mである。南東方向(N-138°-E)へ調査区域外まで直線的に延びている。規模は上幅47~175cm, 下幅25~44cm, 深さ70~75cmである。断面は逆台形状で、底面は緩やかに傾斜し、壁は外傾して立ち上がり、北端部から南端部へ向かって傾斜している。また、北西部の覆土上層から、平面形が楕円形で、長径2.32m, 短径0.87m, 深さ12cmの土坑状に掘り込まれた粘土範囲が確認されている。

覆土 9層に分層される。含有物から人為堆積と考えられる。また、第1層が粘土範囲の覆土に相当する。

土層解説

- | | |
|---------------------|-----------------------|
| 1 灰+リブ色 粘土ブロック中量 | 6 暗褐色 ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック微量 | 7 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 褐色 ローム粒子中量 | 8 褐色 ロームブロック少量 |
| 4 明褐色 ローム粒子多量 | 9 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 5 灰褐色 炭化粒子少量、粘土粒子微量 | |



第54図 第4号溝跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師質土器片5点(焙烙),瓦質土器片1点(搦鉢),陶器片11点(瀬戸・美濃系椀類4,瀬戸・美濃系皿3,産地不明鉢類1,瀬戸・美濃系片口1,瀬戸・美濃系搦鉢1,瀬戸・美濃系飯類1),古銭1点(寛永通宝),板碑片1点が出土している。47は中央部の覆土下層,49は中央部の覆土中層,M19は粘土範囲内の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は,出土土器から17世紀後半には機能を終えていたと考えられる。

第4号溝跡出土遺物観察表(第54図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土色 軸差色	成形・ 調整	裝飾			印・捺 など	製作		出土位置	備考
								絵付/軸差	文様	裝飾特徴		製作地	製作年代		
47	陶器	天目茶碗	10.6	5.1	—	黒 灰青	—	—	—	—	—	瀬戸・ 美濃系	17世紀中葉	覆土下層	10%
48	陶器	椀	—	5.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	覆土中層	PL27
49	陶器	片口	19.2	7.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	覆土中層	10%

番号	種類	径	孔幅	重量	鋳造年	材質	特徴	出土位置	備考
M19	寛永通宝	2.5	0.6	3.2	1668	銅	文銭	覆土上層	PL28

第5号溝跡(第25・55・56図)

位置 調査区I区中央部から南部のF3a6~F3c5区,標高12mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第75・83号土坑を掘り込み,第2号溝,第86号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北端が調査区域外へと延び,確認できた長さは9.5mである。F3c5区から北東方向(N-47°-E)へ直線的に延び,F3b6区でL字状に屈曲し,北西方向(N-22°-W)へ直線的に調査区域外まで延びている。規模は上幅38~72cm,下幅12~21cm,深さ38~56cmである。断面は逆台形状で,底面は緩やかに傾斜しており,壁は外傾して立ち上がっている。また,南端から北端へ向かって傾斜している。

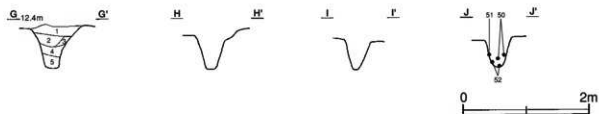
覆土 6層に分層される。各土層断面ごとに含有物の違いが認められる人為堆積である。また,第2号溝の土層解説中(A-A')の第7層が本溝の覆土に相当する。

土層解説

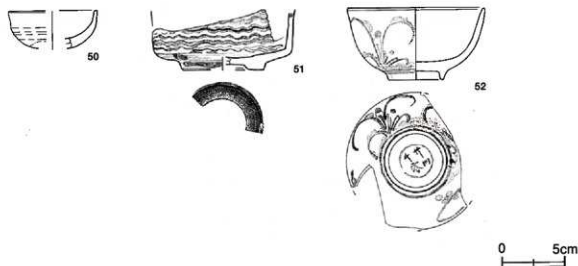
- | | | | |
|-------|------------------|-------|---------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量,焼土粒子微量 | 4 褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量 | 5 暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック微量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片3点(焙烙),陶器片5点(瀬戸・美濃系皿,瀬戸・美濃系香炉,瀬戸・美濃系甕,肥前系平戸火入れ,産地不明油壺),磁器片2点(肥前系中碗,肥前系碗類),石器2点(砥石),鉄鉢1点が出土している。50・51はL字状屈曲部付近の覆土下層,52は同所の底面から,それぞれ出土している。

所見 時期は,出土土器から17世紀後半には機能を終えていたと考えられる。



第55図 第5号溝跡実測図



第56図 第5号溝跡出土遺物実測図

第5号溝跡出土遺物観察表(第56図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土色 釉薬色	成形・ 調整	裝飾			印・款 など	製作		出土位置	備考	
								絵付/輪線	文様	装飾特徴		製作地	製作年代			
50	陶器	小碗	[7.0]	(3.0)	—	ナール黄 赤区	ロクロ	—	灰釉	—	—	—	瀬戸・ 美濃系	不明	覆土下層	30%
51	陶器	火入れ	—	(4.8)	[6.4]	口部緑 灰白区	ロクロ 削り高台	—	灰釉・白 灰	内：一 外：波状文	象嵌	—	肥前系	1650～ 1780年	覆土下層	20% PL27
52	磁器	中碗	10.8	5.8	4.3	灰白	ロクロ 高台付	—	灰釉	内：一 外：草文	—	前18世紀半	肥前系	17世紀 後半	底面	60%

第6号溝跡(第25・57図)

位置 調査区I区中央部のE4i5～E4j5区、標高12.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第7号溝跡、第140号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 南端が調査区域外に伸び、確認できた長さは5.5mである。南西方向(N-150°-W)へ直線のに伸び、E4j5区で屈曲して、南東方向(N-160°-E)へ調査区域外まで伸びている。規模は上幅54～64cm、下幅24～34cm、深さ45～54cmである。断面は逆台形状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、北端から南端へ向かって傾斜している。

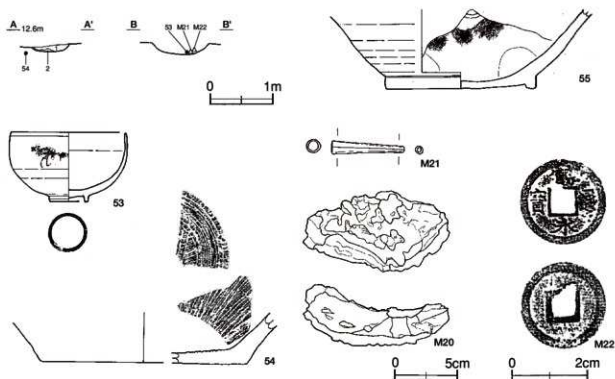
覆土 12層に分層される。ブロック状に堆積した人為堆積である。また、各層から検出された砂粒は第1号掘立柱建物跡や第1号製鉄遺構から検出された砂粒と色調や質感と同質のものである。

土層解説

1 灰褐色	ロームブロック少量	7 暗褐色	ローム粒子少量
2 褐色	ロームブロック・砂粒少量	8 暗褐色	ロームブロック中量
3 褐色	ローム粒子・砂粒少量	9 灰褐色	ローム粒子・砂粒少量
4 にぶい褐色	砂粒多量、ローム粒子少量	10 赤褐色	砂粒多量、ローム粒子少量
5 褐色	ロームブロック少量	11 赤褐色	ローム粒子・砂粒少量
6 褐色	ローム粒子中量、砂粒少量	12 暗褐色	ローム粒子中量

所見 出土遺物は確認されていないが、覆土中に含まれている砂粒と第1号掘立柱建物跡と第1号製鉄遺構に含まれた砂粒とはほぼ同質のものであることから、時期は18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。

所見 時期は、出土土器から19世紀前半には機能を終えていたと考えられる。



第59図 第8号溝跡・出土遺物実測図

第8号溝跡出土遺物観察表(第59図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土色 釉薬色	成形・ 調整	裝飾			印・跡 など	製作		出土位置	備考
								絵付/輪毫	文様	裝飾特徴		製作地	製作年代		
53	陶器	中瓶	9.1	5.6	3.0	灰白	ロクロ 割り高台	鉄絵 灰釉	内: 外:魚+	—	—	瀬戸・ 美濃系	1750~ 1800年	覆土中層	80%
54	陶器	腰鉢	—	(5.1)	(16.4)	にぶい	ロクロ	—	見込欄目 隆状	内面欄目	—	産地不明	不明	覆土下層	
55	陶器	鉢	—	(6.3)	(12.0)	ナリフ	ロクロ 割り高台	— 灰釉	内:藍群の沈着 外:—	—	—	瀬戸・ 美濃系	18世紀 中葉	覆土中	25% 第4号庵裏土坑 出土遺物と複合 見込 目跡2か所 火熱により 輪毫欠落 PL27
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考				
M20	陶瓦片	6.3	11.5	4.9	266	鉄・土	凹凸を呈す 切面有り 着磁性普通			覆土中	PL23				
番号	器種	長さ	口径	小口径	重量	材質	特徴			出土位置	備考				
M21	煙管	5.8	0.5	1.0	4.7	銅	吸口部のみ			覆土下層					
番号	鉄種	径	孔幅	重量	初測年	材質	特徴			出土位置	備考				
M22	萬水通宝	2.3	0.7	(2.1)	1706 ±	銅	無背			覆土中層					

第9号溝跡 (第25・60図)

位置 調査区I区中央部のE4j4~F4a5区、標高12.3mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南端が調査区域外へ延び、確認できた長さは3.7mである。南東方向(N-120°-E)へ緩曲状に調査区域外へ延びている。規模は上幅26~58cm, 下幅9~34cm, 深さ30~50cmである。断面は逆台形状で、壁

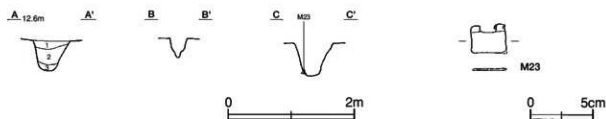
は直立して立ち上がった後、外傾して立ち上がっている。また、北端から南端へ向かって傾斜している。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説				
1	褐色	ローム粒子微量	3 暗褐色	ローム粒子少量
2	褐色	ローム粒子極微量		

遺物出土状況 土師質土器片1点(小皿)、陶器片4点(瀬戸・美濃系椀類3、産地不明搦鉢1)、銅製品1点(錠前カ)のほか、流れ込んだ縄文土器片1点も出土している。M23は覆土中層から出土している。

所見 細片のため図化できないが、南部の覆土下層から近世後半に比定される瀬戸・美濃系の椀が出土していることから、時期は近世後半と考えられる。



第60図 第9号溝跡・出土遺物実測図

第9号溝跡出土遺物観察表(第60図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M23	錠前カ	2.3	2.8	0.1	(2.7)	銅	前面部欠損カ	覆土中層	PL24

第11号溝跡(第25・61図)

位置 調査区I区中央部のE3g9～E3h0区、標高12.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第12・23号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北端が調査区域外へ延び、南端で第12・23号溝と重複しているため、確認できた長さは4.7mである。南東方向(N-133°-E)へ直線的に延び、南端で2条の溝と重複している。規模は上幅60～82cm、下幅24～47cm、深さ70cmほどである。断面は逆台形状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、北端から南端へ向かって傾斜している。

覆土 8層に分層される。含有物や不規則な堆積状況を示した人為堆積である。また、各層から検出された砂粒は第1号掘立柱建物跡や第1号製鉄遺構から検出された砂粒と色調や質感が同質のものである。

土層解説				
1	黒褐色	砂粒少量、ロームブロック微量	5 暗褐色	砂粒多量、ローム粒子少量
2	暗褐色	ロームブロック少量、砂粒微量	6 褐色	ローム粒子多量
3	暗褐色	ローム粒子中量	7 暗褐色	ロームブロック少量
4	暗褐色	ローム粒子少量、砂粒微量	8 褐色	ローム粒子多量(第6層より締まりが弱い)

遺物出土状況 土師質土器片1点(焙烙)、陶器片3点(瀬戸・美濃系椀類、産地不明搦鉢、瀬戸・美濃系瓶類)、磁器片1点(瀬戸・美濃系椀類)、石器1点(砥石)、鉄製品1点(釘)、古銭1点が出土している。M24は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器や覆土中に含まれている砂粒と第1号掘立柱建物跡や第1号製鉄遺構に含まれた砂粒とはほぼ同質のものであることから、18世紀後半から19世紀初頭と考えられる。また、第12号溝からはほぼ同時期

の遺物が出土し、重複している第23号溝から同質の砂粒が検出されていることから、本溝は2条の溝と同時期に機能していたと考えられる。



第61図 第11号溝跡出土遺物実測図

第11号溝跡出土遺物観察表 (第61図)

番号	銭種	径	孔幅	重量	初周年	材質	特徴	出土位置	備考
M24	寛永通宝	2.5	0.6	(1.7)	1698	銅	文銭	覆土中	PL24

第12号溝跡 (第25・62図)

位置 調査区I区中央部のE 3g9～E 3h0区、標高12.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第11号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北端が調査区域外へ伸び、南端で第11号溝と重複しているため、確認できた長さは4.1mである。南東方向(N-138°-E)へ緩曲状に伸び、南端で第11号溝と重複している。規模は上幅77～98cm、下幅13～20cm、深さ53～67cmである。断面はT字状で、壁は直立した後、外傾して立ち上がっている。また、北端から南端へ向かって傾斜している。

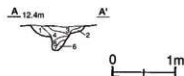
覆土 6層に分層される。含有物や不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|----------------|
| 1 明褐色 | ロームブロック中量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 明褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック微量 |

遺物出土状況 土師質土器片1点(焙烙)、陶器片3点(瀬戸・美濃系碗類2、産地不明碗類1)、磁器片1点(瀬戸・美濃系碗類)、鉄製品1点(釘)、古銭1点が出土している。

所見 時期は、重複関係や出土土器から18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。また、重複している第11号溝からはほぼ同時期の出土遺物が確認されていることから、本溝と同時期に機能していたと考えられる。



第62図 第12号溝跡実測図

第13号溝跡 (第25・63図)

位置 調査区I区北部から中央部のE 4f7～E 4g8区、標高12.4mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第217号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 最大長5.1m、最大幅2.9mで、平面形はY字状である。南端から北東方向(N-44°-E)へ直線的に伸びた後、二又に分かれている。E 4h0区で南西方向(N-112°-W)へ屈曲し、規模は上幅40～60cm、下幅20～40cm、深さ28～43cmである。断面はU字状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。また、中央部が

最も傾斜している。

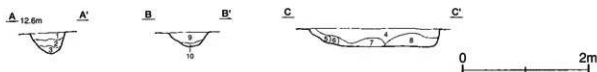
覆土 10層に分層される。含有物やブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子微量	6 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 褐色	ロームブロック中量	7 明褐色	ロームブロック少量
3 明褐色	ローム粒子中量	8 暗褐色	ロームブロック少量
4 黒色	炭化粒子少量、焼土粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック・炭化物微量
5 褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	10 褐色	ローム粒子少量

遺物出土状況 土師質土器片1点(小皿)、陶器片3点(瀬戸・美濃系碗類、笠間系播鉢、瀬戸・美濃系瓶類)、磁器片1点(瀬戸・美濃系碗類)、石器1点(砥石)、鉄製品1点(釘)、古銭1点が出土している。

所見 時期は、出土土器から19世紀前半と考えられる。



第63図 第13号溝跡実測図

第14号溝跡 (第25・64図)

位置 調査区I区中央部のF4a2～F4b3区、標高12.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第174・179・190号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 両端が掘り込まれているため、確認できた長さは4.5mである。北東方向(N-50°-E)へ直線的に延びている。規模は上幅106～122cm、下幅30～44cm、深さ20cmほどである。断面は逆台形状で、壁は外傾して立ち上がっている。

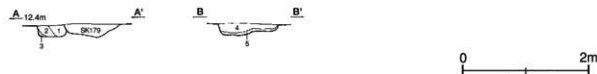
覆土 5層に分層される。含有物やブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・粘土粒子微量	4 黒褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック・炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子微量	5 褐色	ロームブロック・粘土粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子少量		

遺物出土状況 土師質土器片1点(焙烙)、瓦質土器片1点(焙烙)、陶器片7点(瀬戸・美濃系天目茶碗3、瀬戸・美濃系皿類2、瀬戸・美濃系志野皿1、産地不明皿類1)、磁器片2点(肥前系碗類)、瓦片1点が出土している。

所見 時期は、出土土器から近世後半と考えられる。また、本跡の形状から掘り返しがなされた可能性がある。



第64図 第14号溝跡実測図

第19号溝跡 (第25・65図)

位置 調査区I区南部のF3a0～F4b1区、標高12.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第4号柵跡を掘り込み、第258・262号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長さは9.2mで、南西方向(N-131°-W)へ直線的に延びている。規模は上幅72~110cm、下幅50~108cm、深さ10cmほどである。断面は逆台形状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、南西部へ向かって傾斜している。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | | |
|---|-----|-----------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 | 褐色 | ロームブロック微量 |



第65図 第19号溝跡実測図

遺物出土状況 陶器片1点(瀬戸・美濃系椀類)が出土している。

所見 時期は、重複関係から近世後半と考えられる。

第20号溝跡 (第25・66図)

位置 調査区I区南部のF3j6~F4e1区、標高12.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1・4号掘立柱建物、第6号ピット群、第221・272・287号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 両端が調査区域外へ延び、確認できた長さは28mである。南東方向(N-138°-E)へ直線的に延びている。規模は上幅152~168cm、下幅20~30cm、深さ55~60cmである。断面は逆台形状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、南東部へ向かって傾斜している。

ピット 4か所。性格は不明である。

覆土 8層に分層される。北端部はブロック状の堆積状況を示した人為堆積(A-A')で、中央部はレンズ状の堆積状況を示した自然堆積(B-B')である。

土層解説(A-A')

- | | | | | | |
|---|-----|-----------|---|-----|-----------|
| 1 | 黒褐色 | ロームブロック微量 | 3 | 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 | 黒褐色 | ローム粒子微量 | 4 | 暗褐色 | ロームブロック少量 |

土層解説(B-B')

- | | | | | | |
|---|-----|----------|---|----|-----------|
| 1 | 黒褐色 | ローム粒子極微量 | 3 | 褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 | 黒褐色 | ローム粒子微量 | 4 | 褐色 | ロームブロック微量 |

遺物出土状況 土師質土器片4点(小皿3, 甕1)、石器1点(砥石)のほか、流れ込んだ縄文土器片19点も出土している。

所見 時期は、重複関係から18世紀後半と考えられる。



第66図 第20号溝跡実測図

第22号溝跡 (第25・67図)

位置 調査区I区北部のE4d6~E4g9区、標高12.4mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第160・212号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長さは15.2mで、南西方向(N-138°-W)へ直線的に延びている。規模は上幅26~50cm、下幅14~28cm、深さ23~57cmである。断面は逆台形状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、南西部へ向か

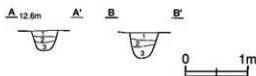
て傾斜している。

覆土 3層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化物微量

- 3 黒褐色 ロームブロック少量



第67図 第22号溝跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片2点(焙烙)、陶器片2点(瀬戸・美濃系碗類, 産地不明碗類)のほか、流れ込んだ縄文土器片2点も出土している。

所見 時期は、出土土器から近世後半と考えられる。

第23号溝跡 (第25・68図)

位置 調査区Ⅰ区中央部のE3h0-E4i2区, 標高12.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第249号土坑を掘り込み, 第11号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北端が第11号溝と重複し, 確認できた長さは10.5mである。北西方向(N-55°-W)へ直線的に延び, E4h0区で南西方向(N-112°-W)へ屈曲し, 第11号溝と重複している。規模は上幅36~74cm, 下幅20~44cm, 深さ23~44cmである。断面は逆台形状で, 壁は外傾して立ち上がっている。また, 南端から北端へ向かって傾斜している。

覆土 3層に分層される。含有物やブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

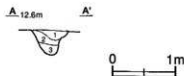
土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ロームブロック・砂粒少量

- 3 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師質土器片9点(小皿2, 焙烙7), 陶器片5点(産地不明小碗, 瀬戸・美濃系碗類, 肥前系皿類, 瀬戸・美濃系播鉢, 瀬戸・美濃系瓶類)のほか, 流れ込んだ縄文土器片2点も出土している。

所見 時期は, 出土土器や覆土中に含まれている砂粒と第1号掘立柱建物跡や第1号製鉄遺構に含まれた砂粒とほぼ同質のものであることから, 18世紀後半~19世紀初頭と考えられる。また, 重複している第11号溝から同質の砂粒が検出されていることから, 本溝と同時期に機能していたと考えられる。



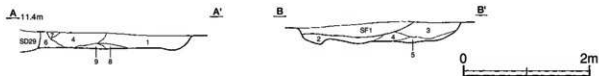
第68図 第23号溝跡実測図

第25号溝跡 (第25・69図)

位置 調査区Ⅱ区北部のG2h7-H2a9区, 標高11.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第26・28・41・51・52号溝跡, 第286号土坑を掘り込み, 第29号溝, 第1号道路, 第446号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北端が第446号土坑に掘り込まれ, 南端が調査区域外へ延び, 確認された長さは7.4mで, 北西方



第69図 第25号溝跡実測図

向(N-35°-W)へ直線的に延びている。規模は上幅110~146cm, 下幅98~128cm, 深さ22~42cmである。断面は逆台形状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、中央部が最も深くなっている。

覆土 9層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 褐色	ロームブロック中量	6 褐色	ロームブロック少量
2 黒褐色	ロームブロック微量	7 褐色	ロームブロック多量
3 暗褐色	ロームブロック微量	8 暗褐色	ローム粒子少量
4 暗褐色	ロームブロック少量	9 褐色	ロームブロック中量(締まりやや強い)
5 暗褐色	ロームブロック少量(粘性強い)		

遺物出土状況 土師質土器片5点(焙烙), 陶器片6点(瀬戸・美濃系統類1, 産地不明椀類3, 瀬戸・美濃系蓋1, 塚系揉鉢1), 磁器片4点(肥前系統類3, 瀬戸・美濃系統類1), 鉄製品2点(不明)のほか、流れ込んだ縄文土器片1点も出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から18世紀後半から19世紀前半と考えられる。

第30号溝跡(第25・70図)

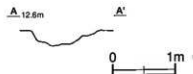
位置 調査区Ⅰ区中央部のE4h5~E4i3区, 標高12.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第8号溝, 第239・240土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南西方向(N-114°-W)へ波状に延び、南端は不定形な形状になる。規模は、長さ9.7m, 上幅50~254cm, 下幅33~238cm, 深さ27cmである。断面は逆台形状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、北端から南端へ向かって傾斜している。

遺物出土状況 土師質土器片4点(焙烙1, 甕3), 瓦質土器片1点(焙烙), 陶器片3点(瀬戸・美濃系統類, 瀬戸・美濃系揉鉢, 瀬戸・美濃系瓶類), 鉄滓1点のほか、流れ込んだ縄文土器片4点も出土している。

所見 時期は、重複関係や出土土器から近世後半と考えられる。



第70図 第30号溝跡実測図

第32号溝跡(第25・71図)

位置 調査区Ⅱ区南部のI1e4~I1g7区, 標高10.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第5号井戸跡を掘り込んでいる。

規模と形状 両端が調査区域外へ延びているため、確認できた長さは19.2mである。西端から北東方向(N-54°-E)へ直線的に延びて、I1e6区で屈曲し、南東方向(N-148°-E)へ直線的に延びている。規模は上幅91~155cm, 下幅36~101cm, 深さ20~38cmである。断面は逆台形状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、南端へ向かって傾斜している。

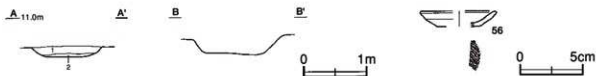
覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

1 褐色	ロームブロック・粘土ブロック微量	2 褐色	ロームブロック微量
------	------------------	------	-----------

遺物出土状況 土師質土器片4点(小皿2, 焙烙1, 焼塩壺1), 鉄滓1点のほか、流れ込んだ縄文土器片3点も出土している。56は、覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から近世後半と考えられる。



第71図 第32号溝跡・出土遺物実測図

第32号溝跡出土遺物観察表 (第71図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
56	土師質土器	小皿	[5.9]	1.2	[3.5]	長石・石英・雲母・赤色鉄子	橙	普通	ロクロ成形 底部糸切り痕	覆土中	20%

第35A号溝跡 (第25・72図)

位置 調査区Ⅱ区中央部のH1f0～H2i2区、標高10.8mの台地平坦部に位置している。

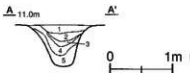
規模と形状 長さは14.2mで、南端から北西方向(N-31°-W)へ直線的に延びている。規模は上幅70～129cm, 下幅42～120cm, 深さ44～54cmである。断面はU字状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。また、北端へ向かって傾斜している。

覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|---------|
| 1 褐色 | ローム粒子微量 | 4 灰褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量 | 5 褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 灰褐色 | ロームブロック・粘土ブロック微量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片3点(壺2, 焙烙1), 瓦質土器片3点(搦鉢2, 焙烙1), 陶器片3点(瀬戸・美濃系皿類, 瀬戸・美濃系片口, 産地不明徳利)のほか、流れ込んだ縄文土器片1点, 須恵器片3点, 板碑片2点も出土している。



第72図 第35A号溝跡実測図

所見 時期は、本跡と第36号溝跡が同規模で、その延長線上に位置していることから、第36号溝跡の同時期の19世紀前半と考えられる。

第35B号溝跡 (第25・73図)

位置 調査区Ⅱ区中央部のH2i2～H2j2区、標高10.8mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南端が調査区域外へ延び、確認できた長さは4.9mで、南端から北西方向(N-40°-W)へ直線的に延びている。規模は上幅120～126cm, 下幅25～48cm, 深さ40～60cmである。断面はT字状で、壁は直立後、外傾して立ち上がっている。また、北端へ向かって傾斜している。

覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。



第73図 第35B号溝跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片1点(焙烙), 陶器片2点(瀬戸・美濃系碗類), 土製品1点(不明)のほか, 流れ込んだ縄文土器片1点, 須恵器片1点, 中世の陶器片2点(常滑)も出土している。

所見 時期は, 本跡と第36号溝跡が同規模で, その延長線上に位置していることから, 第36号溝跡の同時期の19世紀前半と考えられる。

第36号溝跡 (第25・74図)

位置 調査区Ⅱ区中央部のH1d9～H1f0区, 標高10.9mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第45号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北端が調査区域外へ伸び, 確認できた長さは9.1mである。南端から北西方向(N-32°-W)へ直線的に調査区域外へ伸びている。規模は上幅43～97cm, 下幅21～42cm, 深さ48～61cmである。断面は逆台形状で, 壁は外傾して立ち上がっている。また, 北端へ向かって傾斜している。

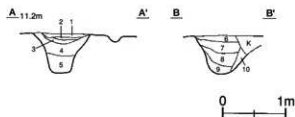
覆土 10層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|--------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック微量 | 6 暗褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 粘土粒子微量, ローム粒子極微量 | 7 灰褐色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック微量 |
| 3 灰褐色 | 粘土ブロック多量 | 8 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子極微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子微量(粘性・締まり強い) | 9 褐色 | ローム粒子少量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子極微量(粘性・締まり強い) | 10 暗褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 瓦質土器片1点(焙烙), 陶器片1点(瀬戸・美濃系蓋), 磁器片3点(瀬戸・美濃系碗類)のほか, 流れ込んだ土師器片2点も出土している。

所見 時期は, 出土土器から19世紀前半と考えられる。



第74図 第36号溝跡実測図

第38号溝跡 (第25・75図)

位置 調査区Ⅱ区中央部のH1f9～I2a1区, 標高10.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第373号土坑を掘り込み, 第374号土坑に掘り込まれている。また, 第45号溝跡とともに井戸跡や土坑を区画している。

規模と形状 南端が第374号土坑に掘り込まれているため, 確認できた長さは20mである。北端から南東方向(N-150°-E)へ直線的に延びている。規模は上幅40～62cm, 下幅4～37cm, 深さ10～20cmである。断面はU字状を呈し, 壁は外傾して立ち上がっている。また, 南端へ向かって傾斜している。

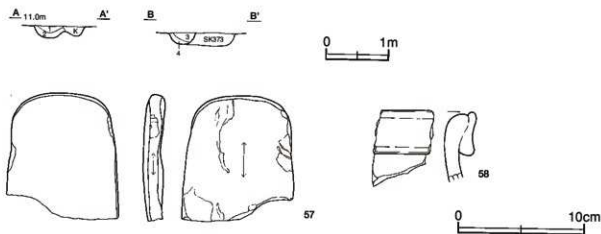
覆土 4層に分層される。含有物から人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 明褐色 | ローム粒子中量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 明褐色 | ロームブロック中量 | 4 暗褐色 | ロームブロック微量 |

遺物出土状況 須恵器片1点(甕(転用砥石)), 陶器片3点(常滑系甕)のほか, 流れ込んだ縄文土器片1点も出土している。57・58は覆土中から出土している。

所見 時期は, 出土土器や第45号溝との位置関係から中世後半と考えられる。



第75図 第38号溝跡・出土遺物実測図

第38号溝跡出土遺物観察表 (第75図)

番号	種類	器種	口径(長)	底径(幅)	底径(厚)	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土状況	備考
57	須恵器	葉	8.1	8.8	1.7	長石	灰	普通	内面・背面刷毛化	覆土中	転用碱石
58	陶器	葉	—	6.1	—	長石・石英	灰黄	普通	縁部部・口辺部ナデ	覆土中	常滑系

第45号溝跡 (第25・76図)

位置 調査区Ⅱ区中央部のH1f8～H2e6区、標高10.9～11.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第401・404・405・407号土坑を掘り込み、第36号溝、第400・406号土坑に掘り込まれている。また、第38号溝跡とともに井戸跡や土坑を区画している。

規模と形状 南東端が調査区域外へ延びているため、確認できた長さは46.7mである。南端から北西方向(N-41°-W)へ直線的に延び、H2b3区で南西方向(N-131°-W)へ屈曲して直線的に延び、さらにH1f8区で南東方向へ(N-142°-E)へ屈曲している。規模は上幅46～78cm、下幅14～51cm、深さ20～48cmである。断面は逆台形状またはU字状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。また、H2b3区の屈曲部に向かって傾斜している。

覆土 12層に分層される。各層ごとに異なった堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説 (A-A')

1 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子極微量

3 暗褐色 ローム粒子中量

2 黒褐色 ローム粒子中量

土層解説 (B-B')

4 暗褐色 ローム粒子中量

6 褐色 ロームブロック中量

5 黒褐色 ローム粒子中量

土層解説 (C-C')

7 褐色 ロームブロック微量

9 暗褐色 ローム粒子微量

8 暗褐色 ロームブロック中量

土層解説 (D-D')

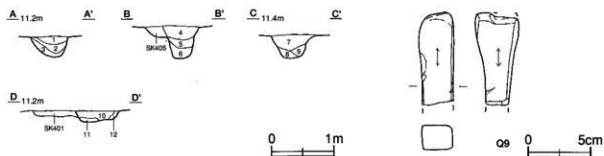
10 暗褐色 ロームブロック・砂粒少量

12 褐色 ロームブロック微量

11 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 瓦質土器片1点(焙烙)、石器1点(砥石)、鉄器1点(刀子)のほか、流れ込んだ縄文土器片8点、混入した磁器片1点も出土している。Q9は覆土中から出土している。

所見 時期は、重複関係や中世後半に比定される第38号溝跡との位置関係から中世後半と考えられる。



第76図 第45号溝跡・出土遺物実測図

第45号溝跡出土遺物観察表(第76図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q9	磁石	(7.4)	2.9	3.6	(88.5)	粘板岩	縦溝4面 他縦断面	覆土中	PL22

第51号溝跡(第25・77図)

位置 調査区Ⅱ区北部のG 2 h7～H 2 a9区、標高11.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第25・29号溝に掘り込まれている。

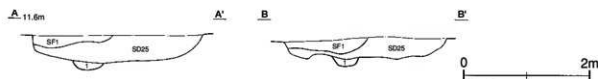
規模と形状 北西部を第25号溝、南端を第29号溝に掘り込まれているため、確認できた長さは12.6mである。南端から北西方向(N-35°-W)へ直線的に延びている。規模は上幅44～64cm、下幅20～24cm、深さ10cmほどである。断面は半円形で、壁は外傾して立ち上がっている。また、北西部へ向かって傾斜している。

覆土 単一層である。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック中量

所見 時期は、重複関係から近世後半と考えられる。



第77図 第51号溝跡実測図

第52号溝跡(第25・78図)

位置 調査区Ⅱ区北部のG 2 g6～H 2 a9区、標高11.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第25・29・53号溝、第446号土坑に掘り込まれ、第41号溝跡との新旧関係は不明である。

規模と形状 北端を第53号溝に、南端を第29号溝に掘り込まれているため、確認できた長さは21.6mである。南端から北西方向(N-35°-W)へ直線的に延びている。規模は上幅44～64cm、下幅20～24cm、深さ12～20cmである。断面は半円形で、壁は外傾して立ち上がっている。また、北端へ向かって傾斜している。

覆土 単一層である。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

所見 時期は、重複関係から近世後半と考えられる。



第78図 第52号溝跡実測図

第53号溝跡 (第25・79図)

位置 調査区Ⅱ区北部のG 2 f4～G 2 g6区、標高11.4mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第52号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北端が調査区域外へ延び、確認できた長さは8.8mである。北端から南東方向(N-140°-E)へ直線的に延び、G 2 g5区で屈曲して北東方向(N-50°-E)に延び、G 2 g6区で第52号溝跡と重複している。規模は上幅60～100cm、下幅8～28cm、深さ20～35cmである。断面は半円形で、壁は外傾して立ち上がっている。また、中央部から北端及び南端へ向かって傾斜している。

覆土 10層に分層される。中央部付近(A-A')はレンズ状に堆積した自然堆積で、第52号溝跡と重複する付近では(B-B')ブロック状に堆積した人為堆積である。

土層解説(A-A')

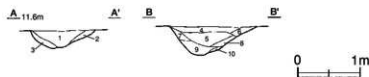
- | | |
|-----------------|----------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子極微量 | 3 褐色 ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量 | |

土層解説(B-B')

- | | |
|--------------------------|-------------------------|
| 4 褐色 ロームブロック中量(粘性・締まり強い) | 8 暗褐色 ローム粒子少量 |
| 5 暗褐色 ロームブロック少量 | 9 暗褐色 ロームブロック少量(粘性やや強い) |
| 6 灰褐色 ロームブロック中量 | 10 褐色 ローム粒子中量 |
| 7 褐色 ロームブロック中量 | |

遺物出土状況 土師質土器片1点(甕)、陶器片1点(産地不明鉢類)のほか、流れ込んだ縄文土器片1点も出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から近世後半と考えられる。



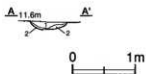
第79図 第53号溝跡実測図

第54号溝跡 (第25・80図)

位置 調査区Ⅱ区北部のG 2 f5～G 2 f6区、標高11.5mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北端が調査区域外へ延び、確認できた長さは3.8mである。北端から南東方向(N-145°-E)へ直線的に延びている。規模は上幅40～56cm、下幅10～32cm、深さ8～12cmである。断面は逆台形状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、南端へ向かって傾斜している。

覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。



- 土層解説
- | |
|-----------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 褐色 ロームブロック少量 |

所見 時期は、周辺に位置している溝跡との位置関係から近世後半と考えられる。

第80図 第54号溝跡実測図

表7 中・近世 溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模 (cm 確認長はm)				断面	成因	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				確認長	上幅	下幅	深さ					
1	F 3 g7-F 3 h8	N-43°-W	直線的	(6.2)	58-81	20-43	25-42	外傾	平坦	人為	土師質土器、陶器、磁器、石器、鉄器	
2	F 2 h6-F 3 c5	N-128°-W	直線的	(7.7)	60-110	17-47	50	外傾	平坦	人為	土師質土器、陶器、磁器、石器、鉄器、板碑	SD3-5, SK81, PG6 →本跡
3	F 3 c5-F 3 g4	N-130°-W	直線的	(5.5)	96-122	56-68	20	外傾	平坦	人為	土師質土器、瓦質土器、陶器、石器、古銭、板碑	本跡→SD2
4	F 3 a8-F 3 g4	N-138°-E	直線的	(9.8)	47-175	25-44	70-75	外傾	傾斜	人為	土器片、古銭、板碑	
5	F 3 a6-F 3 c5	N-47°-E N-22°-W	L字状	(9.5)	38-72	12-21	38-56	外傾	傾斜	人為	土器片、石器、鉄器	SK75-83→本跡→SD2, SK86
6	E 4 i5-E 4 j5	N-150°-W N-160°-E	直線的	(5.5)	54-64	24-34	45-54	外傾	平坦	人為	-	SD7, SK140→本跡
7	E 4 j5	N-148°-E	直線的	(2.0)	48-61	22-38	28-40	外傾	平坦	人為	土器片、石器	本跡→SD6
8	E 4 f1-E 4 h4	N-138°-E	直線的	(16.3)	40-88	24-60	8-20	傾斜	面状	人為	土器片、石器、金属器、漆器	SD10, SK136→本跡→第3号埋藏土塊, SK225
9	E 4 h-F 4 a5	N-120°-E	直線的	(3.7)	26-56	9-34	30-50	外傾	平坦	自然	埋藏品	
11	E 3 g9-E 3 h0	N-133°-E	直線的	(4.7)	60-82	24-47	70	外傾	平坦	人為	土師質土器、陶器、磁器、石器、鉄器、古銭	SD12-23→本跡
12	E 3 g9-E 3 h0	N-138°-E	直線的	(4.1)	77-96	13-20	53-67	直立・外傾	平坦	人為	土師質土器、陶器、磁器、鉄器、古銭	本跡→SD11
13	E 4 i7-E 4 g6	N-44°-E N-112°-W	Y字状	5.1	40-60	20-40	28-43	外傾	面状	人為	土器片、鉄器、古銭	本跡→SK217
14	F 4 a2-F 4 b3	N-50°-E	直線的	(4.5)	106-122	30-44	20	外傾	平坦	人為	土器片、瓦片	本跡→SK174-179-190
19	F 3 a0-F 4 b1	N-131°-W	直線的	9.2	72-110	50-108	10	外傾	平坦	自然	陶器片	SA4→本跡→SK258-262
20	F 3 j6-F 4 e1	N-138°-E	直線的	(28.0)	132-168	20-30	55-60	外傾	面状	自然・人為	土師質土器、石器	本跡→SB1-4, PG6, SK221-272-287
22	E 4 d6-E 4 g9	N-138°-W	直線的	15.2	26-50	14-28	23-57	外傾	面状	人為	土師質土器、陶器	SK160-212→本跡
23	E 3 h0-E 4 i2	N-55°-W N-112°-W	L字状	(10.5)	36-74	20-44	23-44	外傾	面状	人為	土師質土器、陶器	本跡→SD11
25	G 2 h7-H 2 a9	N-35°-W	直線的	(7.4)	110-146	98-128	22-42	外傾	面状	人為	土師質土器、陶器、磁器、金属器	SD16-26-41-52, SK266
30	E 4 i5-E 4 i3	N-114°-W	流状	9.7	50-254	33-238	27	外傾	平坦	-	土師質土器、瓦質土器、陶器、鉄器	本跡→SD8, SK239-240
32	I 1 e4-I 1 g7	N-54°-E N-148°-E	L字状	(19.2)	91-155	36-101	20-38	外傾	平坦	自然	土師質土器、鉄器	SE5→本跡
35A	H 1 i0-H 2 i2	N-31°-W	直線的	14.2	70-129	42-120	44-54	外傾	面状	自然	土師質土器、陶器	
35B	H 2 i2-H 2 j2	N-40°-W	直線的	(4.9)	120-126	25-48	40-60	直立・外傾	面状	自然	土師質土器、陶器、土器片	
36	H 1 i0-H 1 i0	N-32°-W	直線的	(9.1)	43-97	21-42	48-61	外傾	面状	自然	瓦質土器、陶器、磁器	SD45→本跡
38	H 1 i9-I 2 a1	N-150°-E	直線的	(20.0)	40-62	4-37	10-20	外傾	面状	人為	埋藏品、陶器	SK373→本跡→SK374
45	H 1 i8-H 2 e6	N-41°-W N-131°-W N-142°-E	コ字状	(46.7)	46-78	14-51	20-48	外傾	面状・平坦	人為	瓦質土器、石器、鉄器	SK401-404-405-407→本跡→SD36, SK400-406
51	G 2 h7-H 2 a9	N-35°-W	直線的	(12.6)	44-64	20-24	10	外傾	面状	人為	-	本跡→SD25-29
52	G 2 g6-H 2 a9	N-35°-W	直線的	(21.6)	44-64	20-24	12-20	外傾	面状	人為	-	本跡→SD25-29-53, SK446
53	G 2 f4-G 2 g6	N-140°-E N-50°-E	L字状	(8.8)	60-100	8-28	20-35	外傾	面状	自然・人為	土師質土器、陶器	SD2→本跡
54	G 2 f5-G 2 f6	N-145°-E	直線的	(3.8)	40-56	10-32	8-12	外傾	平坦	自然	-	

(5) 井戸跡

第1号井戸跡 (第81図)

位置 調査区I区中央部のE4i6区、標高12.3mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径2.24m、短径1.44mの楕円形で、断面は漏斗状である。確認面から110cm掘り下げた時点で、崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

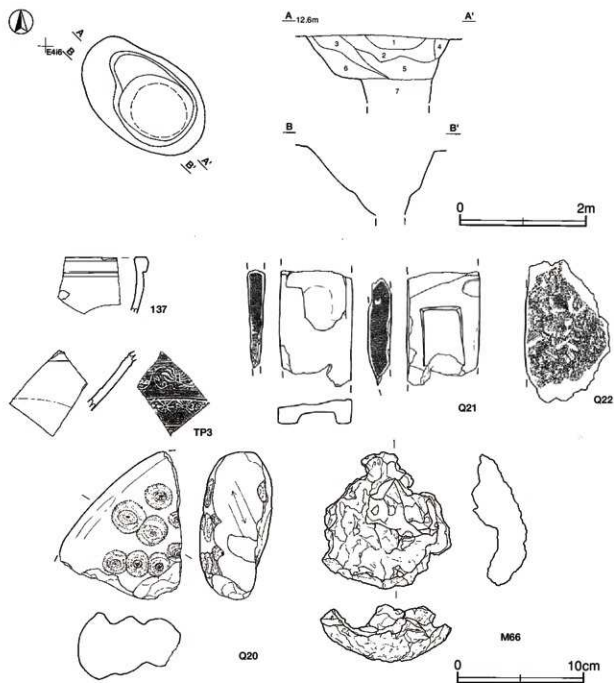
土層解説

- | | | | |
|-------|-------------|-------|-------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・砂少量 | 5 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量 | 6 褐色 | ロームブロック・砂少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・砂少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 褐色 | ローム粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片1点(壳)、陶器片6点(瀬戸・美濃系鉢類、肥前系唐津大鉢、肥前系片口、瀬戸・美濃系搦鉢、瀬戸・美濃系瓶類、瀬戸・美濃系土瓶)、石器・石製品3点(石皿、砥石、硯)、板碑片1点、

碗状洋1点のほか、流れ込んだ縄文土器片5点、混入した石版1点も出土している。図化した遺物は全て覆土中から出土しており、TP3は第1号廃棄土坑のTP2と接合関係が確認されている。

所見 時期は、出土土器や接合関係があるTP3から、18世紀末～19世紀前半には廃絶していたと考えられる。



第81図 第1号井戸跡・出土遺物実測図

第1号井戸跡出土遺物観察表(第81図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土色	胎質	成形・調整	裝飾		印・瓦 文など	製作		出土位置	備考
									絵付/輪郭	文様		製作地	製作年代		
137	陶器	片口	—	(5.5)	—	灰褐色	—	—	—	内：一 外：白化粧の 刷毛目状文	—	肥前系	1690～ 1780年	覆土中	
TP3	陶器	大鉢	—	(3.0)	—	灰白	ロケロ	—	—	内：三島子 底輪・白漆	象嵌	肥前系 唐津	1650～ 1700年	覆土中	第1号廃棄土坑の TP2と接合

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q20	石皿	(11.8)	(9.7)	5.4	(471)	砂岩	内底に8か所・底部に6か所の凹み 側面砥面化	覆土中	私用砥石 PL22
Q21	瓶	(9.0)	5.8	2.0	(128)	粘板岩	瓶面一部残存 右縦線に「二年六月十日の日」の左縦線に「三門」横骨に輪面を形成	覆土中	PL22
Q22	板碑	(11.3)	(6.7)	2.5	(246)	雲母片岩	梵字	覆土中	乾熱痕

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M56	碗状洋	10.8	10.2	4.6	220	珉	細状を呈す ガラス質の光沢有り 着磁性弱い	覆土中	PL23

第2号井戸跡 (第82図)

位置 調査区Ⅰ区中央部のE4g1区、標高12.4mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第248号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 径1.04mの円形で、断面は漏斗状である。確認面から104cm掘り下げた時点で、崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

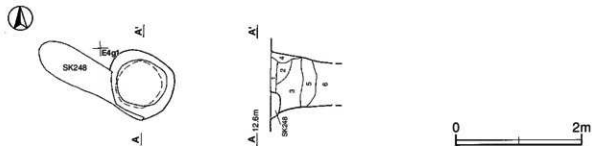
覆土 6層に分層される。黒色土を主体とした自然堆積である。

土層解説

1 黒色	ローム粒子・炭化粒子極微量	4 褐色	ローム粒子中量
2 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子極微量	5 黒褐色	ローム粒子極微量
3 暗褐色	ロームブロック微量	6 黒色	ローム粒子極微量

遺物出土状況 土師質土器片2点(焙烙), 砂鉄(12.2g)のほか、流れ込んだ縄文土器片2点も出土している。

所見 時期は、出土土器や周囲に第1号掘立柱建物跡が位置していることから、18世紀後半と考えられる。



第82図 第2号井戸跡実測図

第8号井戸跡 (第83図)

位置 調査区Ⅱ区南部のⅠ1a0区、標高10.7mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.38m、短径1.23mの楕円形で、断面は漏斗状である。確認面から112cm掘り下げた時点で、崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

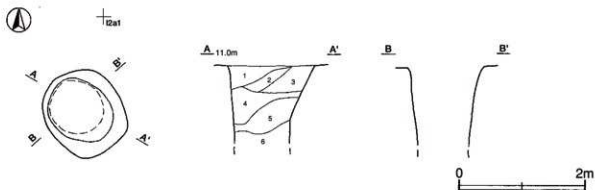
覆土 6層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック微量	4 にぶい褐色	ロームブロック中量
2 褐色	ロームブロック中量	5 褐色	ロームブロック多量
3 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子極微量	6 褐色	ローム粒子中量

遺物出土状況 陶器片1点(常滑系鉢類)が出土している。

所見 時期は、細片のため図化できないが、第38号溝跡から出土している陶器片と酷似しており、中世後半に所産されたものと考えられる。出土土器から中世後半と考えられる。



第83図 第8号井戸跡実測図

第10号井戸跡 (第84～90図)

位置 調査区I区北部のE4c7区、標高12.4mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第24号土坑に掘り込まれている。

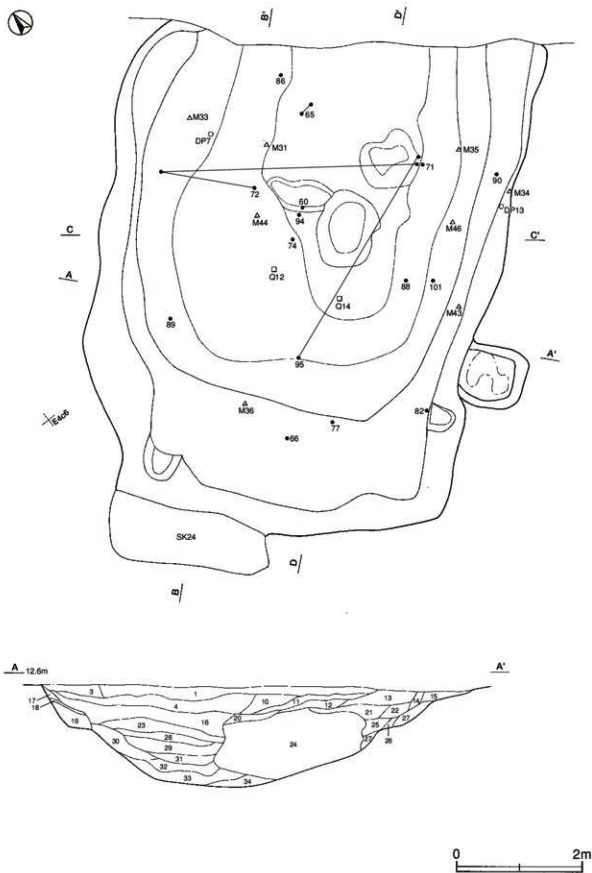
規模と形状 北東部が調査区域外へ延び、長軸7.8m、短軸6.5mの長方形と考えられる。底面は、確認面から68cmで平場が形成され、下端は確認面から220cmまでスロープ状に掘りくぼめられている。また、南東部の張り出し部から、平場を経て北側へ向かい、螺旋状に降りた後に、底面へと至る通路状の痕跡が確認されている。

覆土 57層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 灰褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	31 暗褐色	ロームブロック少量(締まり弱い)
2 灰褐色	炭化粒子・砂粒少量、焼土ブロック微量	32 暗褐色	ローム粒子中量
3 灰褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	33 暗褐色	ローム粒子少量(水分含み・締まり弱い)
4 灰褐色	ローム粒子・灰・砂粒少量、炭化物微量	34 褐色	ロームブロック多量
5 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	35 暗褐色	ロームブロック少量(締まりやや強い)
6 褐色	ロームブロック・砂粒少量、炭化粒子微量	36 暗褐色	ローム粒子中量、粘土粒子少量
7 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量	37 暗褐色	ロームブロック微量
8 灰褐色	炭化物・ローム粒子・粘土粒子少量	38 褐色	ロームブロック少量(締まり弱い)
9 灰褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・砂粒少量	39 褐色	ローム粒子微量(締まり弱い)
10 灰褐色	ローム粒子中量、炭化物微量	40 褐色	ロームブロック中量
11 灰褐色	ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量	41 灰褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量
12 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量	42 褐色	ロームブロック少量
13 灰褐色	ローム粒子・砂粒少量、炭化物・焼土粒子微量	43 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子微量
14 暗褐色	ローム粒子・灰・砂粒少量	44 暗褐色	粘土粒子中量、砂粒少量、炭化粒子微量
15 暗褐色	ローム粒子少量	45 暗褐色	粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
16 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	46 暗褐色	粘土ブロック多量、炭化物・鉄分少量、焼土ブロック微量
17 暗褐色	ロームブロック少量	47 暗褐色	粘土ブロック中量、ローム粒子少量
18 暗褐色	ローム粒子・砂粒少量	48 暗褐色	ローム粒子少量、炭化物微量
19 黒褐色	ローム粒子少量	49 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
20 暗褐色	ローム粒子少量(粘性・締まりやや強い)	50 褐色	炭化物・ローム粒子少量
21 灰褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	51 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
22 灰褐色	ロームブロック・炭化物微量	52 灰褐色	粘土ブロック・鉄分中量、焼土粒子・炭化粒子少量
23 暗褐色	ロームブロック少量(粘性やや強い)	53 暗褐色	ロームブロック少量(粘性・締まりやや強い)
24 明褐色	ローム粒子少量	54 暗褐色	ロームブロック・砂粒少量、炭化物・焼土粒子微量
25 灰褐色	ローム粒子少量	55 暗褐色	鉄分多量、ローム粒子・炭化粒子少量
26 灰褐色	ロームブロック少量	56 暗褐色	鉄分中量、炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子微量
27 灰褐色	ローム粒子・砂粒少量(締まり強い)	57 灰黄褐色	ロームブロック微量
28 暗褐色	ロームブロック・砂粒少量		
29 暗褐色	ロームブロック多量(締まり弱い)		

遺物出土状況 土師質土器片217点(小皿12, 鉢3, 鉢類12, 植木鉢8, 火入1, 火鉢5, 焼塩壺3, 焙烙130, 鉢類2, 甕3, 不明38), 瓦質土器片40点(摺鉢2, 火鉢1, 焙烙37), 陶器片230点(瀬戸・美濃系小坏2, 産地不明小坏2, 瀬戸・美濃系小碗1, 瀬戸・美濃系中碗4, 肥前系中碗1, 瀬戸・美濃系碗類21, 肥前系碗類1, 産地不明碗類4, 瀬戸・美濃系小皿3, 京焼系小皿1, 産地不明小皿1, 瀬戸・美濃系皿類17, 京焼系



第84図 第10号井戸跡実測図(1)

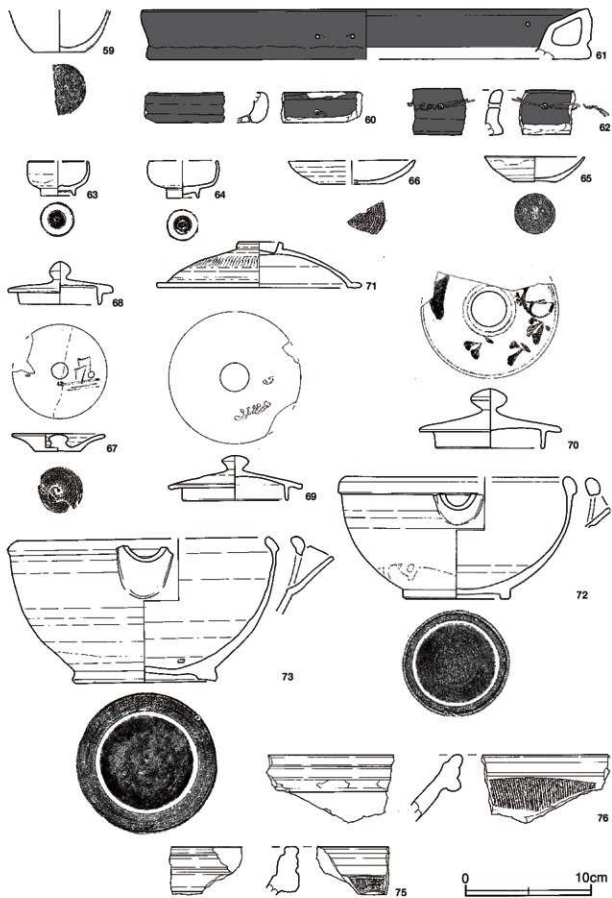
皿類1, 萩系皿類1, 産地不明皿類2, 産地不明蓋2, 瀬戸・美濃系小鉢1, 瀬戸・美濃系搦鉢14, 肥前系搦鉢2, 明石・堺系搦鉢5, 備前系搦鉢1, 産地不明搦鉢1, 瀬戸・美濃系片口11, 京焼系片口3, 瀬戸・美濃系鉢類2, 肥前系鉢類1, 瀬戸・美濃系香炉6, 産地不明香炉2, 明石・堺系甕燗1, 瀬戸・美濃系小壺1, 笠間系壺1, 瀬戸・美濃系甕類3, 笠間系甕類5, 益子焼系行平鍋1, 瀬戸・美濃系鍋類1, 瀬戸・美濃系灰吹1, 瀬戸・美濃系徳利3, 益子焼系徳利4, 産地不明徳利1, 瀬戸・美濃系急須12, 京焼系急須1, 益子焼系急須8, 産地不明急須13, 瀬戸・美濃系土瓶3, 明石・堺系土瓶1, 益子焼系土瓶4, 万古焼系土瓶1, 瀬戸・美濃系瓶類39, 備前系瓶類4, 産地不明瓶類8, 京焼系不明1, 磁器片196点(瀬戸・美濃系小坏2, 瀬戸・美濃系小碗29, 肥前系小碗25, 産地不明小碗3, 瀬戸・美濃系中碗14, 肥前系中碗12, 瀬戸・美濃系大碗1, 瀬戸・美濃系碗類54, 産地不明碗類1, 肥前系紅猪口5, 瀬戸・美濃系皿類2, 肥前系小皿1, 肥前系皿類18, 瀬戸・美濃系蓋1, 肥前系蓋1, 瀬戸・美濃系小鉢1, 肥前系小鉢1, 産地不明小鉢1, 肥前系合子2, 肥前系仏花瓶1, 肥前系神酒徳利6, 瀬戸・美濃系箸置1, 肥前系箸置3, 瀬戸・美濃系瓶類6, 肥前系瓶類5), 土製品41点(羽口1, ままごと道具3, 箱底道具3, 人形2, 泥面子32), 石器・石製品92点(砥石86, 石白1, 簪1, 硯2, 不明2), 金属器・金属製品800点(小皿1, 釘544, 刀子108, 小太刀1, 包丁9, 鎌23, 鑿カ3, 鋸1, 煙管12, 不明鉄製品61, 不明銅製品37), 板碑片4点, 古銭(銅)7点, 古銭(鉄)2点, 鉄滓21点, 桶状滓23点, 刷毛1点, 砂鉄(544.47g)のほか, 流れ込んだ縄文土器片15点, 土師器片10点, 須恵器片1点, 中世に比定される常滑片2点, 混入した石板5点, 葉莖2点も出土している。遺物出土量は, 覆土上層の調査区域外へ向かうほど遺物点数が増加し, 覆土中層から底面にかけては遺物点数は減少していく傾向が見られる。74, 94は中央部の覆土下層より出土しており, 廃絶後まもなく廃棄されたものと考えられる。

所見 本跡の性格は, 形状からまがいまいず井戸と考えられる。また, 井戸としての機能を終えた後, 廃棄場に転用されたものと考えられ, 平場の深さまで土を埋めたのは, 安全のためと想定される。時期は, 出土土器から18世紀後半には機能が終え, 19世紀代には廃棄土坑として機能していたと考えられる。

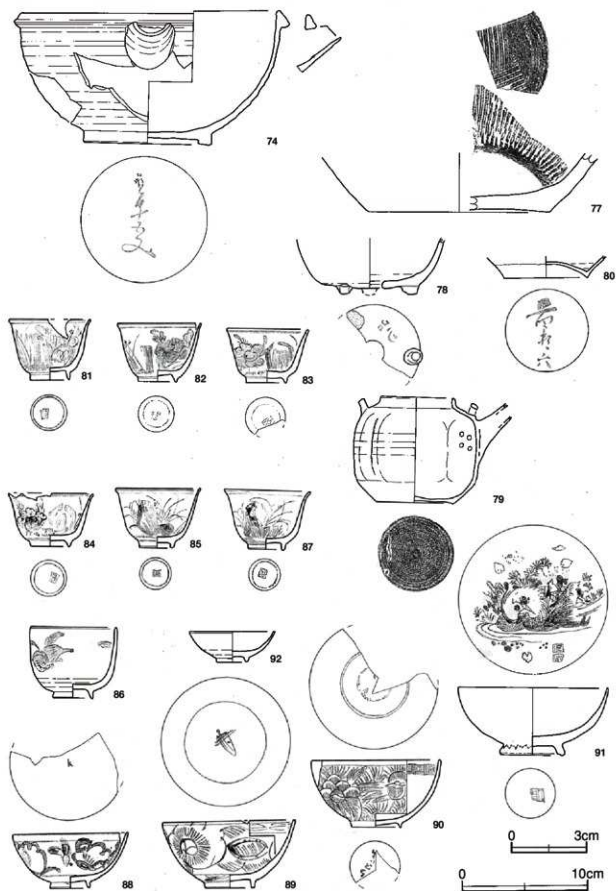
第10号井戸跡出土遺物観察表(第86~90図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
59	土師瓦土器	筒	—	(3.4)	3.8	石英	—	普通	ロクロナデ 底部糸切痕	覆土中	30%
60	土師瓦土器	始巻	—	2.4	—	長石	にんべい色	普通	ロクロナデ 修繕孔に銅線残存	覆土上層	PL25
61	瓦葺土器	始巻	35.6	4.0	34.8	長石・雲母	灰黄	普通	ロクロナデ 耳部2小所 修繕孔3小所	覆土中	20%
62	瓦葺土器	始巻	—	(3.6)	—	長石	黒陶	普通	ロクロナデ 修繕孔に銅線残存	覆土中下層	PL25

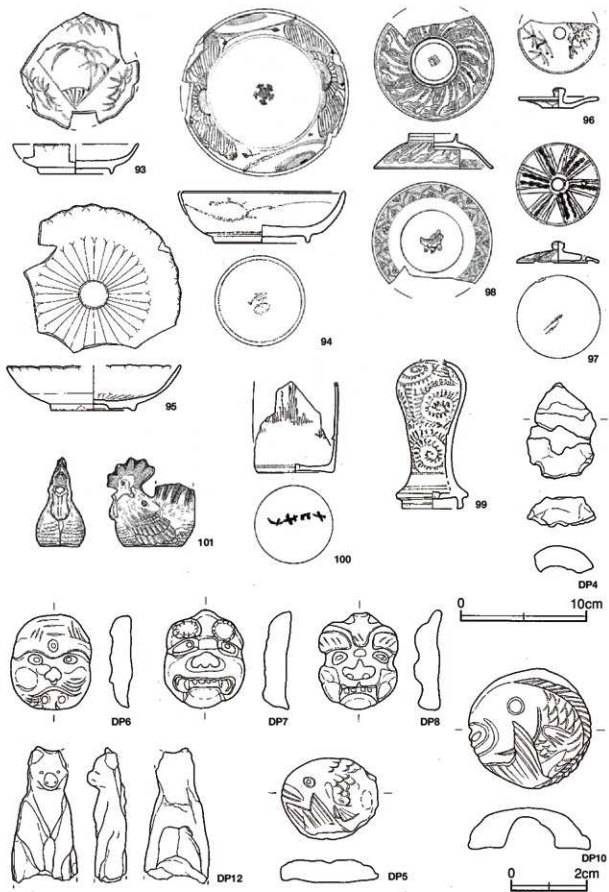
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土色 輪彩色	成形・調整	裝飾			印・銘 など	製作		出土位置	備考
								絵付/輪彩	文様	裝飾特徴		製作地	製作年代		
63	陶器	小坏	[4.7]	2.8	2.7	灰白	ロクロ 削出高台	—	灰輪	—	—	信楽 ^o	不明	覆土中	60% PL25
64	陶器	小坏	[5.4]	3.0	2.5	灰白	ロクロ 削出高台	—	灰輪	—	—	瀬戸・ 美濃系	1750年 ^o	覆土中	40%
65	陶器	小皿	7.8	2.0	3.2	浅黄	ロクロ	—	灰輪	—	—	瀬戸・ 美濃系	1800- 1850年 ^o	覆土中層	100% 1口道徳に油 埋付着 PL26
66	陶器	灯明籠	[10.1]	1.9	[5.0]	灰黄 埋赤褐色	ロクロ	—	鉄輪	—	—	瀬戸・ 美濃系	1770年 ^o	覆土上層	20%
67	陶器	蓋	7.5	1.4	—	にんべい青 緑黄	ロクロ	—	灰輪	内: 青 外: —	—	産地不明	不明	覆土中	90% 2色の輪彩が掛け られている。蓋子系 ^o PL28
68	陶器	蓋 (急須)	8.4	3.4	—	灰白	ロクロ	—	白輪	—	—	産地不明	不明	覆土中	95%
69	陶器	蓋	10.6	3.6	2.2	にんべい青 緑黄	ロクロ	—	灰輪	内: — 外: 草花文	—	産地不明	不明	覆土中	90% 益子系 ^o PL28
70	陶器	蓋	11.3	4.7	—	浅黄 灰白	ロクロ	銅線結 白輪	—	内: — 外: 草花文	—	石浜系 ^o	不明	覆土中	70% PL28
71	陶器	蓋	16.2	3.6	—	にんべい青 埋赤褐色	ロクロ	—	内面鉄輪	—	—	益子系 ^o	不明	覆土上層	75% PL28
72	陶器	片口	[17.4]	9.7	8.1	にんべい青 埋赤褐色	ロクロ	削出高台	灰輪	—	—	京焼系 ^o	不明	覆土上層	50% 足込目跡5
73	陶器	片口	[20.0]	12.4	11.2	浅黄 (ワニワ)	ロクロ 削出高台	灰輪	—	—	—	瀬戸・ 美濃系	18世紀 後半 ^o	覆土中	50% 足込目跡5



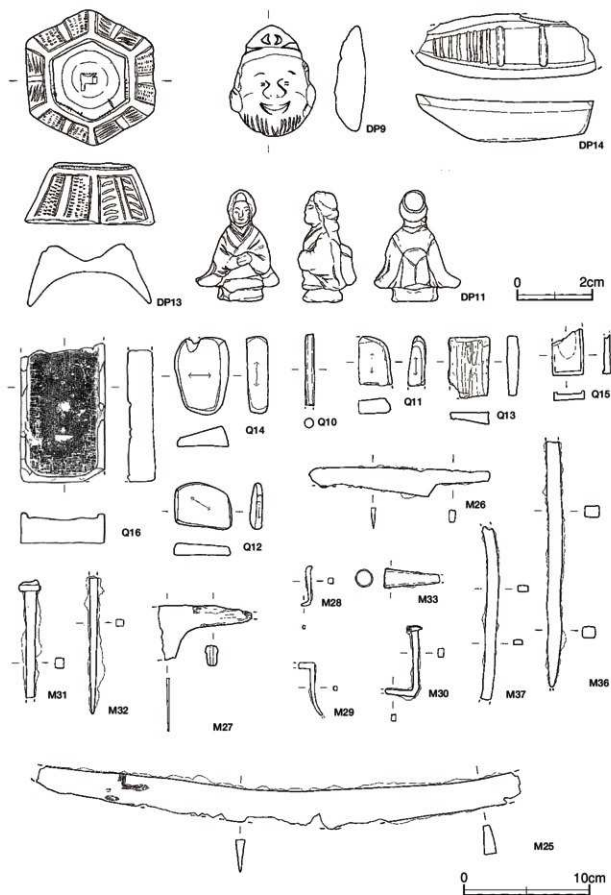
第86图 第10号井戸跡出土遺物実測図(1)



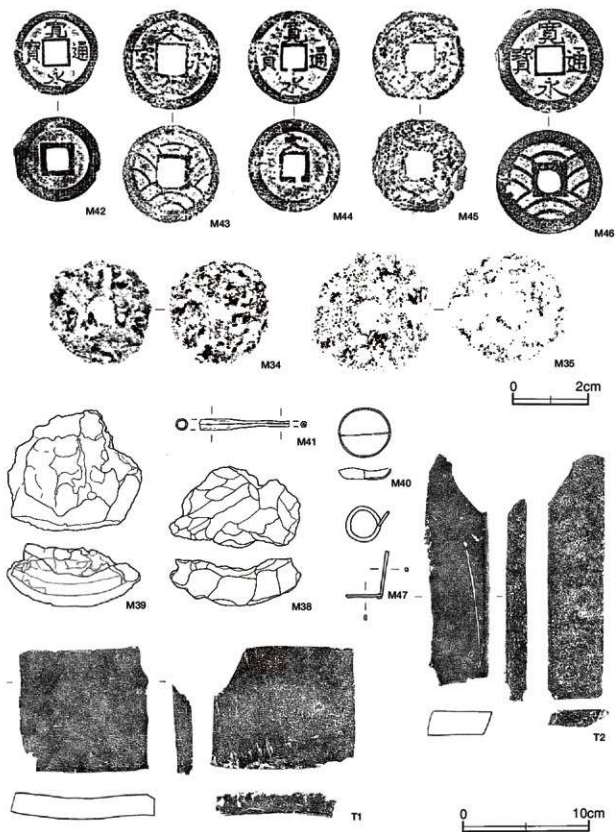
第87図 第10号井戸跡出土遺物実測図(2)



第88图 第10号井戸跡出土遺物実測図(3)



第89図 第10号井戸跡出土遺物実測図(4)



第90图 第10号井戸跡出土遺物実測図(5)

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土色 輪彩色	成形・ 調整	裝飾			印・具 金 [○]	製作		出土位置	備考	
								絵付/輪彩	文様	裝飾特徴		製作地	製作年代			
74	陶器	片口	20.7	10.9	10.3	白	口ノコ 二ノコ 灰 [○] - 灰 [○] - 白 [○]	口ノコ 無出高台	一 灰輪	—	—	—	瀬戸・ 美濃系	18世紀 後半～	覆土下層	60% 底部墨書「□ 子ノ子」 P120-28
75	陶器	膝鉢	—	(3.7)	—	白	無赤帯	口ノコ	—	—	内面磨目	—	産地不明	不明	覆土中	
76	陶器	膝鉢	—	(5.4)	—	白	略赤帯	口ノコ	—	—	内面磨目	—	瀬戸・ 美濃系	不明	覆土中	
77	陶器	膝鉢	—	(4.7)	14.4	白	赤帯	口ノコ	—	—	内面磨目	—	瀬戸・ 美濃系	不明	覆土上層	10%
78	陶器	横木鉢	—	(4.0)	[7.6]	灰白	口ノコ	口ノコ	一 白輪	—	—	—	瀬戸・ 美濃系	不明	覆土中	15% 底部墨書「呂 人」 P120
79	陶器	土瓶	5.8	8.3	6.0	灰白	口ノコ	口ノコ	一 緑灰	—	—	—	信楽系	19世紀前半	覆土中下層	70% PL28
80	陶器	土瓶	—	(1.7)	6.5	白	口ノコ	口ノコ	一 白	—	—	—	瀬戸・ 美濃系	19世紀代	覆土中	底部墨書「□白口 六」 P120
81	磁器	小瓶	6.4	4.9	3.1	白 灰白	口ノコ	口ノコ	灰付 透明	内: 一: 外: 赤文	—	福	瀬戸系	18世紀前半	覆土中	95%
82	磁器	小瓶	6.6	4.7	3.0	白 灰白	口ノコ	口ノコ	灰付 透明	内: 一: 外: 赤文	—	福	瀬戸系	18世紀前半	覆土上層	90% PL25
83	磁器	小瓶	6.4	4.3	3.2	白 灰白	口ノコ	口ノコ	灰付 透明	内: 一: 外: 赤文	—	福	肥前系	17世紀後半	覆土中	70%
84	磁器	小瓶	6.6	4.3	3.0	白 灰白	口ノコ	口ノコ	灰付 透明	内: 一: 外: 赤文	—	福	肥前系	17世紀後半	覆土中	95%
85	磁器	小瓶	6.6	4.8	2.5	白 灰白	口ノコ	口ノコ	灰付 透明	内: 一: 外: 赤文	—	福*	肥前系	18世紀前半	覆土中	100% PL25-26
86	磁器	小瓶	6.8	5.7	3.2	白 灰白	口ノコ	口ノコ	灰付 透明	内: 一: 外: 赤文	—	—	瀬戸系	19世紀後半	覆土中層	80%
87	磁器	小瓶	6.8	4.7	2.9	白 灰白	口ノコ	口ノコ	灰付 透明	内: 一: 外: 赤文	—	福*	肥前系	18世紀前半	覆土中	80%
88	磁器	中瓶	[9.2]	4.4	3.1	白 灰白	口ノコ	口ノコ	色絵 透明	内: 一: 外: 赤文	—	—	瀬戸系	19世紀代*	覆土上層	50% PL26
89	磁器	中瓶	10.4	5.4	4.0	白 灰白	口ノコ	口ノコ	灰付 透明	内: 一: 外: 赤文	—	—	瀬戸系	19世紀代	覆土上層	75% PL26
90	磁器	中瓶	10.2	5.4	3.9	白 灰白	口ノコ	口ノコ	灰付 透明	内: 一: 外: 赤文	—	—	瀬戸系	19世紀代	覆土上層	70% 墨による墨線 PL25・26
91	磁器	菓子器所	5.9	2.7	2.5	白 灰白	口ノコ	口ノコ	白 透明	内: 一: 外: 赤文	—	—	瀬戸系	19世紀代	覆土中	95%
92	磁器	小皿	6.7	2.4	2.4	白 灰白	口ノコ 高台砂目	口ノコ 透明	灰付 透明	内: 一: 外: 赤文	—	—	肥前系	17世紀後半	覆土中	80%
93	磁器	小皿	10.0	2.4	5.8	白 灰白	口ノコ 高台砂目	口ノコ 透明	灰付 透明	内: 一: 外: 赤文	—	—	肥前系	18世紀後半- 19世紀前半	覆土中	60%
94	磁器	小皿	13.0	4.2	7.5	白 灰白	口ノコ 高台砂目	口ノコ 透明	灰付 透明	内: 一: 外: 赤文	—	—	瀬戸系	18世紀後半- 19世紀前半	覆土下層	95% PL25-27
95	磁器	五寸皿	14.8	3.6	6.8	白 灰白	口ノコ	口ノコ	透明	内: 一: 外: 赤文	—	—	肥前系	19世紀前半	覆土上層	60% 墨の目四角高 台 及びハマ 墨付
96	磁器	蓋	6.4	1.6	—	白 灰白	口ノコ	口ノコ	灰付 透明	内: 一: 外: 赤文	—	—	肥前系	19世紀代	覆土中	60%
97	磁器	蓋	6.6	1.7	—	白 灰白	口ノコ	口ノコ	灰付 透明	内: 一: 外: 赤文	—	—	肥前系	19世紀代	覆土中	95% 裏面墨書 「子」 P120・28
98	磁器	蓋	9.6	2.7	—	白 灰白	口ノコ	口ノコ	灰付 透明	内: 一: 外: 赤文	—	青*	肥前系	19世紀代	覆土中	80% PL25・26
99	磁器	神酒器類	—	(4.8)	4.8	白 灰白	口ノコ 高台砂目	口ノコ 透明	灰付 透明	内: 一: 外: 赤文	—	—	肥前系	18世紀後半	覆土中下層	60%
100	磁器	ちぢり	—	(7.3)	6.2	白 灰白	口ノコ	口ノコ	灰付 透明	内: 一: 外: 赤文	—	—	瀬戸系	19世紀代	覆土中	25% 墨書「ナヒキ ノ」 P120
101	磁器	水筒	7.0	7.1	3.9	白 灰白	口ノコ	口ノコ	灰付 透明	内: 一: 外: 赤文	—	—	瀬戸系	19世紀代	覆土上層	80% 体部に穿孔1 ヶ所

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP4	羽口	(7.6)	(5.5)	2.4	(64.6)	長石・ 石英	外周半遊解状 ナテ 内面ナテ	覆土中	PL20
DP5	泥面子	2.6	2.1	0.6	3.3	長石・石 英・雲母	裏面ナテ	覆土中	PL21
DP6	泥面子	2.5	2.1	0.6	3.2	長石・石 英・雲母	人面 裏面ナテ	覆土中	PL21
DP7	泥面子	2.6	2.1	0.7	3.5	長石・石 英・雲母	灰穴陶* 裏面ナテ	覆土上層	PL21
DP8	泥面子	2.6	2.1	0.8	3.2	長石・石 英・雲母	灰穴陶* 裏面ナテ	覆土中	PL21
DP9	泥面子	2.9	1.2	0.8	3.4	長石	窓比寿 裏面ナテ	覆土中	PL21
DP10	泥面子	3.2	3.2	1.1	7.0	長石・雲 母	裏面ナテ・内面	覆土中	PL21
DP11	土人形	3.0	2.2	1.6	4.9	雲母	人面隆 底部穿孔	覆土中	PL21
DP12	土人形	(3.6)	1.7	1.1	(3.2)	長石	爪 前後顔面合わせ	覆土中	PL21
DP13	箱庭道具	3.5	3.4	1.6	12.0	長石	灯籠の基壇* 底部内面	覆土上層	PL21
DP14	箱庭道具	(4.8)	1.7	1.3	(5.9)	長石	船 透明輪	覆土中	PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q10	管	(5.7)	0.8	0.7	(4.6)	凝灰岩	陶磁器欠損 表面研削	覆土中	PL21
Q11	砥石	(3.9)	(2.7)	1.4	(19.1)	砂岩	砥石3ヶ所 他破断面	覆土中	
Q12	砥石	3.7	4.6	1.0	22.0	砂岩	全面砥面	覆土下層	PL22

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q13	砥石	4.9	3.3	0.9	(19.9)	凝灰岩	砥面2面 内1面筋目痕跡あり 側面破断面	覆土中	PL22
Q14	砥石	6.1	4.3	1.7	(54.9)	砂岩	砥石 全面砥面 孔部欠損	覆土上層	PL22
Q15	硯	(3.6)	2.4	0.7	(8.8)	泥岩	砥面欠損 患堂牽耗	覆土中	PL22
Q16	硯	(11.0)	6.7	2.4	(249.0)	砂岩	砥面欠損 患堂に線条痕 3か所の凹み	覆土中	PL22

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M25	小太刀	(38.6)	4.7	1.0	(237.0)	鉄	先端部欠損 錆化により刃先の機能なし	覆土中	PL24
M26	刀子	(14.3)	2.1	0.6	(34.6)	鉄	先端部・基部部欠損 刃部に若干の木質部付着	覆土中	PL23
M27	包丁	(7.4)	4.3	0.2	(16.7)	鉄	刃部欠損 基部に木質部付着	覆土中	
M28	釘	3.1	0.3	0.4	(1.4)	鉄	頭部若干欠損 先端部で直角に折り曲げられる	覆土中	
M29	釘	(4.2)	0.4	0.4	(2.4)	鉄	先端部欠損 頭部付近で直角に折り曲げられる	覆土中下層	
M30	釘	5.6	0.5	0.7	(14.4)	鉄	頭部若干欠損 木質部付着 先端部で直角に折り曲げられる	覆土中	PL24
M31	釘	(9.3)	0.7	0.8	(23.7)	鉄	頭部若干欠損 先端部欠損	覆土中層	
M32	釘	(10.8)	0.6	0.5	(19.6)	鉄	頭部・先端部欠損	覆土中	
M36	釘	(19.5)	1.1	0.9	(76.9)	鉄	頭部・先端部欠損	覆土上層	PL24
M37	不明鉄製品	(13.8)	1.4	0.5	(17.4)	鉄	両端部欠損 若干の曲がり	覆土中	
M38	腕状洋	6.2	10.3	2.6	163.4	鉄	皿状を呈す ガラス質の光沢有り 木質部残存 着磁性質非常に弱い	覆土中	PL23
M39	腕状洋	9.6	10.5	4.2	515.0	鉄	皿状を呈す 木質部残存 着磁性質弱い	覆土中	PL23
M40	小皿	4.1	0.9	—	8.0	銅	内面に浴液面あり	覆土中	PL23
M47	常張環	3.7	2.8	0.3	3.3	銅	扁平な輪に棒軸が嵌合している	覆土中	高道具 別称採立 PL23
N1	銅毛	8.8	1.1	0.1	5.3	植物	銅線によって束ねられ、先がよれている	覆土中	写真のみ PL24

番号	器種	長さ	口付径	小口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M33	樽管	(4.4)	—	1.5	(4.2)	鉄	喉口部のみ 口付欠損	覆土上層	
M41	樽管	7.2	0.8	0.5	6.1	銅	喉口のみ 肩部なし	覆土中	

番号	器種	径	孔幅	重量	初周年	材質	特徴	出土位置	備考
M34	判読不能	2.7	0.4	4.1	—	鉄	錆により文字の判読不能	覆土上層	
M35	判読不能	3.0	0.6	4.9	—	鉄	錆により文字の判読不能	覆土上層	
M42	寛永通宝	2.3	0.7	2.0	1739	銅	無背	覆土中	
M43	文久永宝	2.6	0.7	2.8	1863	銅	裏面波紋文様	覆土上層	PL24
M44	寛永通宝	2.5	0.6	2.2	1698	銅	文銭	覆土上層	PL24
M45	□入永口	2.5	0.8	2.3	—	銅	裏面波紋文様	覆土中	PL24
M46	寛永通宝	2.9	0.6	5.6	1866	銅	裏面波紋文様	覆土上層	PL24

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
T1	瓦	(10.3)	(11.3)	1.7	(255)	石質・灰母	全面ナテ 外側に焼土付着 破断面縦面化一部あり	覆土中	
T2	瓦	(20.0)	(5.2)	1.9	(220)	砂岩系土質・灰母	全面ナテ 外側に焼土付着 破断面縦面化一部あり	覆土中	

表8 中・近世 井戸跡一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	縦横(m)		断面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (重複関係 古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ(m)					
1	E4j6	N-40°-W	楕円形	2.24×1.44	(110)	漏斗状	不明	自然	土師質土器、陶器、石器・石製品、板碑、腕状洋	
2	E4j1	N-60°-W	円形	1.04	(104)	漏斗状	不明	自然	土師質土器	本跡→SK248
8	I1a0	N-45°-W	楕円形	1.38×1.23	(112)	漏斗状	不明	人為	陶器	
10	E4c7	N-40°-E	長方形	7.8×6.5	220	漏斗状	凸凹	人為	土師質、土師土、石器・石製品、金銅器・金銅製品、板碑、古銭、漆器	本跡→SK24

(6) 溜め井跡

第1号溜め井跡 (第91図)

位置 調査区I区南部のF3g9区、標高12.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号溜め井に掘り込まれている。

規模と形状 北東部が第2号溜め井に掘り込まれ、確認できた長径1.34m、短径は1.22mの楕円形と考えられる。深さ47cm、底面は凸凹で、断面は逆台形状である。また、壁面に粘性が強い粘土が貼られ、炭化物が環状に広がっている。

覆土 8層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 褐色	ロームブロック少量	5 褐色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
2 暗褐色	粘土粒子少量、ローム粒子微量	6 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子極微量
3 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック微量	7 褐色	ローム粒子中量
4 におい黄褐色	ローム粒子・炭化物・粘土粒子少量、焼土粒子微量	8 におい褐色	ローム粒子・粘土粒子少量

遺物出土状況 土師質土器片1点(焙烙)、陶器片1点(瀬戸・美濃系皿類)、磁器片3点(肥前系碗類)、鉄製品8点(釘)のほか、流れ込んだ縄文土器片1点も出土している。Q23は南部の底面よりやや浮いた状態で、M70は南西部の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 性格は、形状及び壁面に貼られた粘土や環状に広がる炭化物から溜め井と考えられる。時期は、出土土器や重複関係から17世紀後半と考えられる。

第1号溜め井跡出土遺物観察表 (第91図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q23	砥石	(8.1)	2.7	1.6	(57.0)	凝灰岩	砥面1面 磨痕のある面3面	覆土下層	PL22
M70	釘	(5.8)	0.6	0.5	(10.2)	鉄	端部が半円状に曲がる 木質部付着 断面長方形	覆土上層	

第2号溜め井跡 (第91図)

位置 調査区I区南部のF3g9区、標高12.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号溜め井跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.46m、短径1.34mの円形である。深さ42cm、底面は平坦で、断面は逆台形状である。また、壁面に粘性が強い粘土が貼られ、炭化粒子が三日月状に広がっている。

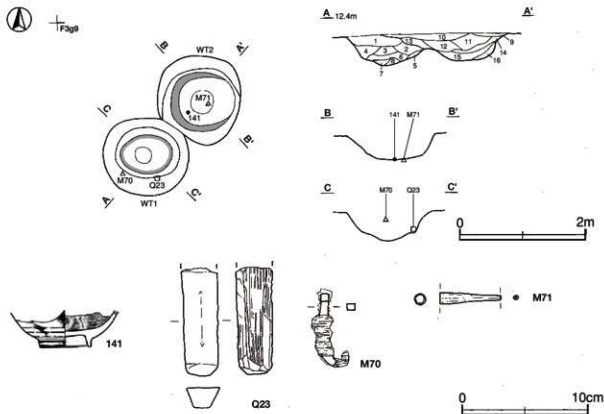
覆土 8層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

9 帯びり黄褐色	粘土粒子少量、ローム粒子微量	13 暗褐色	ローム粒子多量
10 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子微量	14 黒褐色	炭化粒子・粘土粒子中量
11 灰黄褐色	粘土粒子少量、ロームブロック微量	15 黒色	ローム粒子微量(ふかふかとしている)
12 黒褐色	粘土ブロック中量、炭化物少量	16 明褐色	ローム粒子中量

遺物出土状況 土師質土器片5点(焙烙)、瓦質土器片1点(焙烙)、陶器片10点(瀬戸・美濃系碗類3、肥前系碗類1、産地不明碗類1、瀬戸・美濃系瓶類1、在地系留鉢2、産地不明2)、磁器片5点(肥前系碗類3、肥前系皿類2)、金属製品4点(釘1、煙管2、不明1)のほか、流れ込んだ土師器片1点も出土している。141・M71は中央部の底面から出土している。141は廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

所見 性格は、形状及び壁面に貼られた粘土や三日月状に広がる炭化粒子から、溜め井と考えられる。時期は、出土土器や重複関係から17世紀後半と考えられる。



第91図 第1・2号溜め井跡・出土遺物実測図

第2号溜め井跡出土遺物観察表(第91図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土色 釉薬色	成形・ 調整	裝飾		印・跡 など	製作		出土位置	備考	
								絵付/軸車	文様		裝飾特徴	製作地			製作年代
141	陶器	碗	-	(2.9)	(3.9)	暗赤褐色	ロケロ	-	内:白化粧の陶 毛目文様 外:三方割に藍	-	-	肥前系	1650~ 1690年	覆土底面	30%

番号	器種	長さ	口径径	小口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M71	溜め管	4.8	0.4	0.9	2.4	銅	噴口部のみ	底面	

第3号溜め井跡 (第92図)

位置 調査区I区南部のF3d8区、標高12.1mの台地平坦部に位置している。また、第5号掘立柱建物跡の屋内に位置している。

重複関係 第4号溜め井跡を掘り込み、第5号掘立柱建物、第5号溜め井に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.30m、短径1.08mの楕円形である。深さ30cm、底面は平坦で、断面は逆台形状である。また、底面はローム土で埋め込まれており、非常に硬化している。

覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|---------------------|
| 1 黒色 | ローム粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量 | 5 明褐色 | ロームブロック多量(締まり非常に強い) |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量 | | |

所見 性格は、形状及び底面に確認された硬化面から溜め井と考えられ、その上部構造として第5号掘立柱建物跡が構築されていたと推測される。また、本跡と同様の形状をした溜め井を掘り込んでいることから、屋内で溜め井が造り直されていたと考えられ、時期は、第5号掘立柱建物跡との機能的関係から18世紀後半と考えられる。

第4号溜め井跡 (第92図)

位置 調査区I区南部のF3d8区、標高12.1mの台地平坦部に位置している。また、第5号掘立柱建物跡の屋内に位置している。

重複関係 第5号掘立柱建物、第3号溜め井に掘り込まれ、第3号ビット群との新旧関係は不明である。

規模と形状 長径1.52m、短径1.34mの楕円形である。深さ36cm、底面は平坦で、断面は逆台形状である。また、底面はローム土で埋め込まれており、非常に硬化している。

覆土 6層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|-------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック微量、焼土粒子・炭化粒子極微量 | 4 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 5 明褐色 | ロームブロック中量(締まり非常に強い) |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子極微量 | 6 褐色 | ローム粒子中量 |

遺物出土状況 土師質土器片1点(焙烙)、磁器片1点(肥前系碗類)が出土している。

所見 性格は、形状及び底面に確認された硬化面から溜め井と考えられ、その上部構造として第5号掘立柱建物跡が構築されていたと推測される。また、本跡と同様の形状をした溜め井に掘り込まれていることから、屋内で溜め井が造り直されていたと考えられ、時期は、第5号掘立柱建物跡との機能的関係から18世紀後半と考えられる。

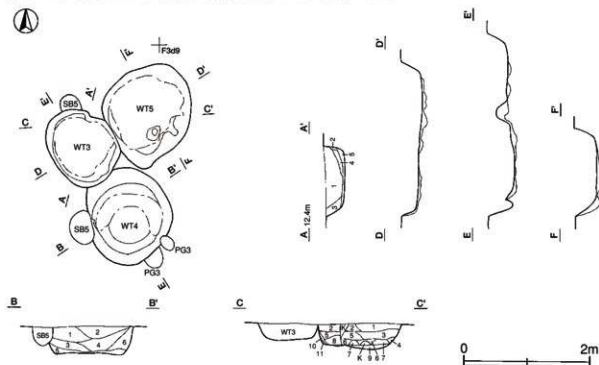
第5号溜め井跡 (第92図)

位置 調査区I区南部のF3d8区、標高12.1mの台地平坦部に位置している。また、第5号掘立柱建物跡の屋内に位置している。

重複関係 第3号溜め井跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.62m、短径1.50mの円形である。深さ34cm、底面は平坦で、断面は逆台形状である。また、底面はローム土で埋め込まれており、非常に硬化している。

覆土 11層に分層される。不規則な堆積状況を示した人為堆積である。



第92図 第3・4・5号溜め井跡実測図

土層解説

1	暗褐色	炭化物・ローム粒子少量	7	黒褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量(締まり強い)
2	褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	8	黒褐色	ローム粒子少量
3	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	9	明褐色	ローム粒子多量
4	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	10	橙褐色	ロームブロック多量(締まり非常に強い)
5	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子極微量	11	暗褐色	ローム粒子少量
6	褐色	ローム粒子・炭化粒子微量			

遺物出土状況 土師質土器片10点(焙烙)、陶器片1点(瀬戸・美濃系皿類)、板碑片1点のほか、混入した石板1点も出土している。

所見 性格は、形状及び底面に確認された硬化面から溜め井と考えられ、その上部構造として第5号掘立柱建物跡が構築されていたと推測される。また、本跡と同様の形状をした溜め井を掘り込んでいることから、屋内で溜め井が造り直されていたと考えられ、時期は、第5号掘立柱建物跡との機能的関係から18世紀後半と考えられる。

第6号溜め井跡 (第93図)

位置 調査区I区南部のF3d6区、標高12.0mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径2.81m、短径1.99mの不定形である。深さ10~17cm。底面は平坦で、断面は逆台形状である。南西部の底面から、深さ6~14cmで平面形が円形の掘り方に粘土が貼られている。北東部の底面から、深さ8cmで平面形が双円形の掘り方上にローム土が埋め込まれており、硬化している。

覆土 12層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。また、第9~12層が掘り方に貼られた粘土層に相当する。

土層解説

1	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	7	明褐色	ローム粒子多量
2	褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック・炭化粒子微量	8	褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック微量
3	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	9	褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量(粘性やや強い)
4	明褐色	ローム粒子中量(締まり強い)	10	褐色	ローム粒子・粘土粒子少量
5	褐色	ローム粒子少量	11	浅黄色	粘土粒子多量(粘性強い・締まり弱い)
6	褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量	12	灰白色	粘土粒子多量(粘性強い・締まり弱い)

遺物出土状況 土師質土器片6点(焙烙)、陶器片8点(瀬戸・美濃系小皿1、瀬戸・美濃系碗類1、瀬戸・美濃系小皿1、瀬戸・美濃系皿類1、瀬戸・美濃系小甕1、瀬戸・美濃系香炉2、瀬戸・美濃系仏飯器1)、磁器片5点(瀬戸・美濃系碗類)、鉄製品1点(釘)、鉄滓3点が出土している。142は南西部の覆土中層、143は北部の底面からそれぞれ出土している。また、細片のため図化できないが、古銭・銅製品が附着した鉄滓が、南西部の粘土層内から出土している。

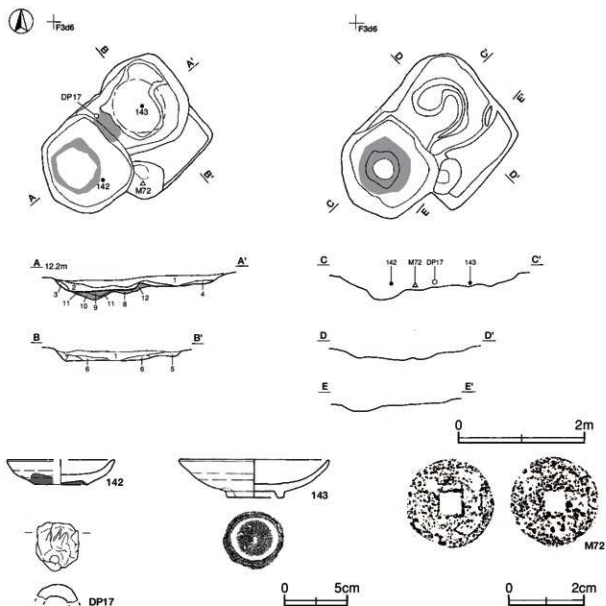
所見 性格は、形状及び底面に確認された硬化面、粘土層から溜め井と考えられる。時期は、出土土器から18世紀後半から19世紀前半と考えられる。

第6号溜め井跡出土遺物観察表 (第93図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	粘土色 輪軸色	成形・ 調整	装飾			印・款 など	製作		出土位置	備考
								紐付/輪軸	文様	装飾特徴		製作地	製作年代		
142	陶器	小皿	(8.6)	2.0	(4.2)	灰黄褐色	ロクロ 削り出し	一 鉄軸	—	—	—	瀬戸・ 美濃系	18世紀 後半	覆土中層	30% 底部から体部 下にかけて被熱
143	陶器	小皿	11.8	3.0	4.6	灰黄褐色	ロクロ 削り出し	—	—	—	—	肥前	1690~ 1780年	底面	60% PL27

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	粘土 長石・ 石英	特徴	出土位置	備考
DP17	瓶口	(3.8)	(3.4)	1.4	(9.0)	—	外面黒褐色・暗赤褐色の平滑磨状肌 ガラス質の光沢	覆土下層	PL20

番号	器種	径	孔幅	重量	初銜年	材質	特徴	出土位置	備考
M72	寛水濁口	2.4	0.6	2.1	—	銅	跡による損傷が激しい 表面の一部銅層により地金露出	覆土下層	PL24



第93図 第6号溜め井跡・出土遺物実測図

第7号溜め井跡 (第94図)

位置 調査区I区中央部のE4h3区、標高12.3mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.47m、短径1.25mの楕円形である。深さ18cm、底面は平坦で、断面は逆台形状である。

また、掘り方の壁面から底面にかけて10cmほどの粘土が貼られており、上面が非常に硬化している。

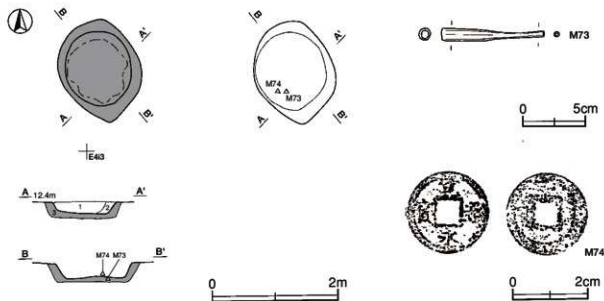
覆土 3層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。また、第3層が貼られた粘土層に相当する。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|---------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子中量 | 3 灰褐色 | 粘土ブロック多量、ロームブロック・焼土ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片3点(焙烙)、陶器片1点(瀬戸・美濃系碗類)、金属器・金属製品5点(刀子1、釘1、煙管3)、古銭1点(寛永通宝)のほか、流れ込んだ縄文土器片1点も出土している。M73は南部の粘土層上層、M74は南部の覆土下層から出土している。

所見 本跡の性格は、形状及び底面に確認された硬化面から溜め井と考えられる。時期は、出土遺物から近世後半と考えられる。



第94図 第7号溜め井跡・出土遺物実測図

第7号溜め井跡出土遺物観察表(第94図)

番号	器種	長さ	口径径	小口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M73	横管	8.1	0.4	0.9	8.0	銅	喉口のみに肩部分なし	底面	

番号	器種	径	孔幅	重量	鋳造年	材質	特徴	出土位置	備考
M74	寛永通宝	2.2	0.6	2.2	1768	銅	縁により文字やや摩滅	覆土下層	

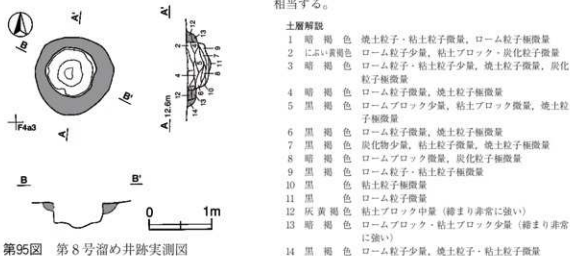
第8号溜め井跡(第95図)

位置 調査区I区南部のF3j3区、標高12.3mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.23m、短径1.21mの円形である。深さ34cm、底面は凸凹で、断面は不定形である。

また、上端から20~28cmの段状の部分に粘土が貼られており、非常に硬化している。

覆土 14層に分層される。不規則な堆積状況を示した人為堆積である。また、第12~14層が貼られた粘土層に相当する。



第95図 第8号溜め井跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片1点(焙烙)、磁器片1点(肥前系統類)、石器1点(砥石)が出土している。

所見 性格は、形状及び壁面に確認された粘土層から溜め井と考えられる。時期は、出土土器から近世後半と考えられる。

表9 近世 溜め井跡一覧表

番号	位置	長短方向	平面形	規模(m)		断面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (重複四角 古→新)
				長径×短径	深さ (cm)					
1	F 3 g9	N-45°-W	楕円形	1.34×1.22	47	逆台形	凸凹	人為	土師質土器、陶器、磁器、鉄製品	本跡→WT 2
2	F 3 g9	N-40°-W	円形	1.46×1.34	42	逆台形	平坦	人為	土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、金属製品	WT 1→本跡
3	F 3 d8	N-32°-W	楕円形	1.30×1.08	30	逆台形	平坦	自然	—	WT 4→本跡→SB 5, WT 5
4	F 3 d8	N-35°-W	楕円形	1.52×1.34	36	逆台形	平坦	人為	土師質土器、磁器	本跡→SB 5, WT 3
5	F 3 d8	N-42°-E	円形	1.62×1.50	34	逆台形	平坦	人為	土師質土器、陶器、磁器	WT 3→本跡
6	F 3 d6	N-40°-E	不定形	2.81×1.99	10~17	逆台形	平坦	自然	土師質土器、陶器、磁器、鉄製品、瓦	
7	E 4 h3	N-15°-W	楕円形	1.47×1.25	18	逆台形	平坦	人為	土師質土器、陶器、金属製品、古銭	
8	F 3 β	N-20°-E	円形	1.25×1.21	34	不定形	凸凹	人為	土師質土器、磁器、石器	

(7) 廃棄土坑

第1号廃棄土坑 (第96~99区)

位置 調査区I区中央部のE 4 g7区、標高12.4mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南東部が傾斜を受けており、長径5.3m、短径3.7mの楕円形で、深さは64cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 23層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

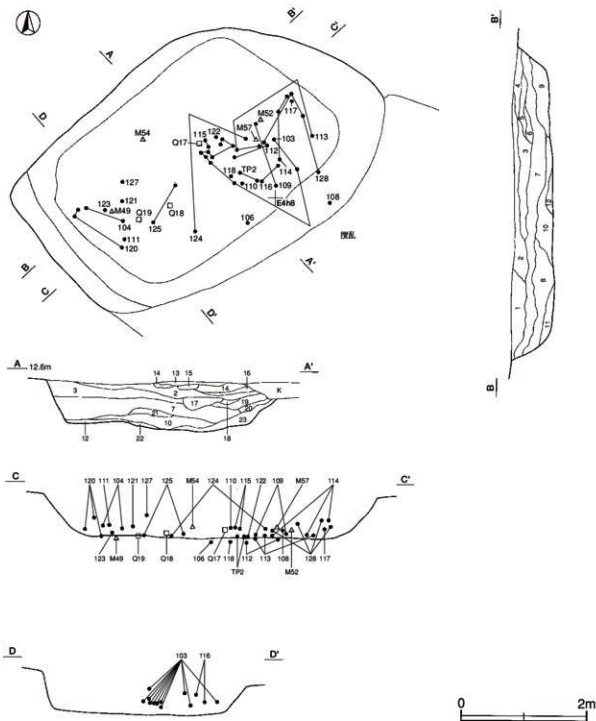
土層解説

1 灰褐色	焼土ブロック・炭化粒子中量、ロームブロック少量	12 黒褐色	ロームブロック少量
2 灰褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量	13 灰褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 灰褐色	ロームブロック中量	14 褐色	ロームブロック多量
4 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	15 暗褐色	ロームブロック少量(締まりやや強い)
5 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	16 暗褐色	ロームブロック少量(粘性やや強い)
6 暗褐色	ロームブロック少量	17 明褐色	ロームブロック多量
7 灰褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	18 暗褐色	ローム粒子少量(締まりやや強い)
8 暗褐色	ローム粒子少量(粘性やや強い)	19 褐色	ローム粒子多量
9 褐色	ロームブロック中量	20 黒褐色	ロームブロック・灰少量
10 灰褐色	ロームブロック少量、炭化物少量	21 灰褐色	ローム粒子少量(粘性強い)
11 暗褐色	ローム粒子少量	22 暗褐色	ロームブロック微量
		23 暗褐色	ロームブロック中量

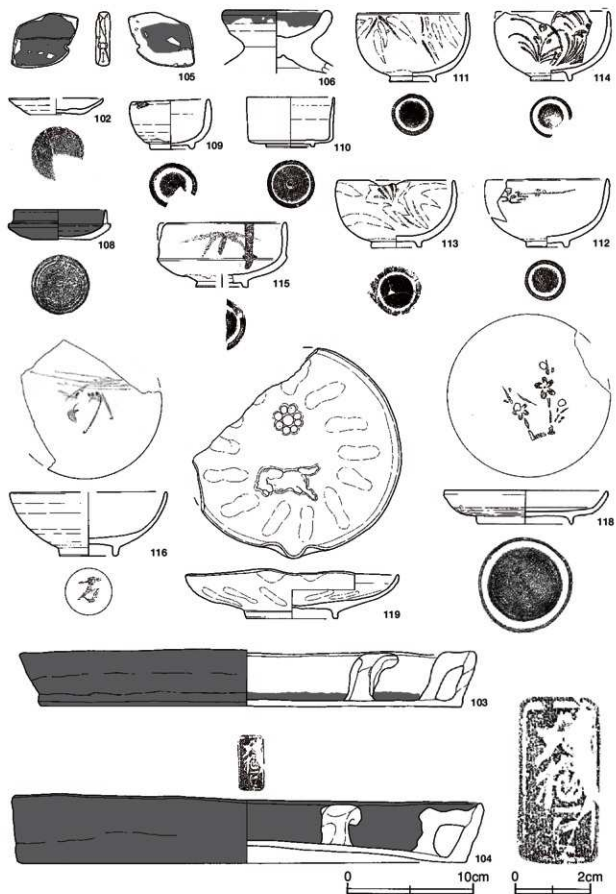
遺物出土状況 土師質土器片67点(小皿4、植木鉢1、火鉢2、甕類1、焼塩壺2、焙烙56、瓦灯傘1)、瓦質土器片15点(小皿1、焙烙7、不明7)、陶器片52点(瀬戸・美濃系小坏1、瀬戸・美濃系小碗1、肥前系小碗1、瀬戸・美濃系中碗3、京焼系中碗5、瀬戸・美濃系大碗1、瀬戸・美濃系碗類9、肥前系統類1、瀬戸・美濃系小皿3、相馬焼系五寸皿1、瀬戸・美濃系製壺1、瀬戸・美濃系製油壺1、瀬戸・美濃系仏飯器1、瀬戸・美濃系中鉢1、瀬戸・美濃系片口1、瀬戸・美濃系摺鉢4、瀬戸・美濃系鉢類1、堺系鉢類1、笠間系甕類4、瀬戸・美濃系香炉1、京焼系香炉1、肥前系灰吹1、瀬戸・美濃系蓋1、京焼系息須1、瀬戸・美濃系德利1、益子系德利1、瀬戸・美濃系瓶類3、瀬戸・美濃系灯明受皿1)、磁器片46点(瀬戸・美濃系小碗1、肥前系小碗2、肥前系中碗8、肥前系大碗1、瀬戸・美濃系碗類9、肥前系統類11、肥前系小皿2、肥前系五寸皿2、肥前系皿類1、肥前系猪口4、瀬戸・美濃系灰吹2、瀬戸・美濃系蓋1、瀬戸・美濃系中水注1、

肥前系仏花瓶1, 石器・石製品16点(砥石6, 石臼1, 硯1, 不明石器6, 瑪瑙2(火打石カ)), 金属器・金属製品60点(刀子8, 釘35, 鉈1, 鏢1, 鎌1, 煙管2, 鏡1, 不明鉄器11), ミニチュア土器1点, 椀状滓5点, 瓦片3点, 板碑片2点, 古銭1点, 砂鉄(2.33g)のほか, 流れ込んだ縄文土器片12点, 須恵器片1点も出土している。出土状況はほぼ全面の覆土中層から底面にかけて出土しており, 111は南部の覆土下層, 122は中央部の底面, 125は南部の覆土下層から底面, 119は覆土中上層からそれぞれ出土している。また, 攪乱部から多量の瓦片が出土している。

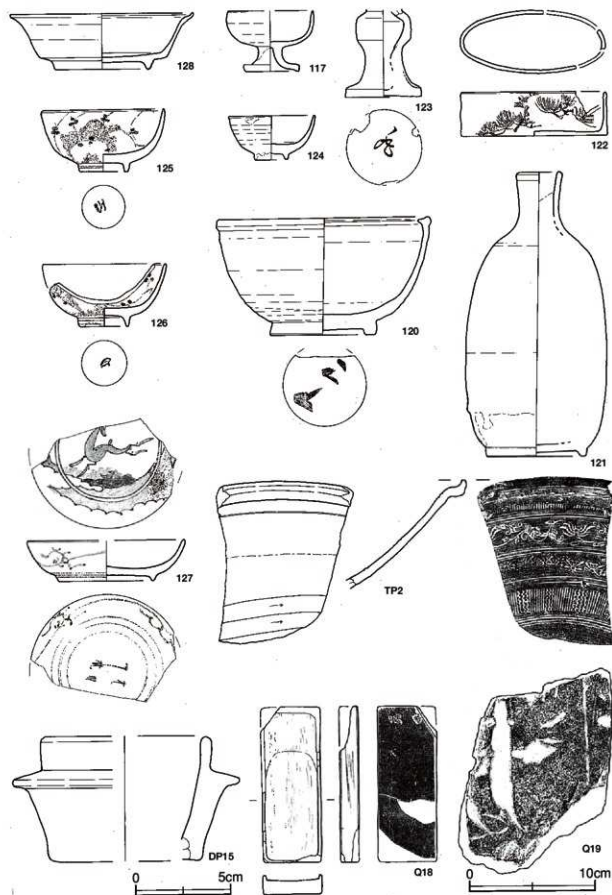
所見 時期は, 出土土器から18世紀後半から19世紀後半と考えられる。



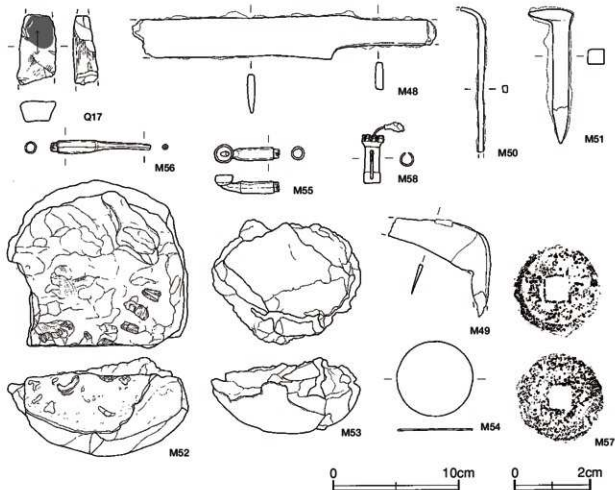
第96図 第1号廃棄土坑実測図



第97図 第1号廃棄土坑出土遺物実測図(1)



第98图 第1号废弃土坑出土遗物实测图(2)



第99図 第1号廃棄土坑出土遺物実測図(3)

第1号廃棄土坑出土遺物観察表(第97~99図)

番号	種類	器種	長さ	口径	器高	底径	胎土色・軸影色	成形・調整	胎付/軸影	裝飾・文様	裝飾特徴	印・跡など	製作地	製作年代	出土位置	備考
102	土製土器	小皿	[7.5]	1.3	4.0		長石・石英・雲母	轆	普通	ロクロナデ	底部未切痕	内底面を受けている			覆土中	50% PL19
103	土製土器	始器	36.2	4.5	33.5		長石・石英	轆	普通	ロクロナデ	耳部3か所	修繕孔1か所 未穿孔1か所			覆土上層	90% PL19
104	土製土器	始器	37.4	5.5	36.9		長石・石英・雲母	にひい貫焼	普通	ロクロナデ	耳部3か所	修繕孔12か所 中央部に押印			覆土下層	100% 押印「大塚区」± PL19
105	土製土器	始器	4.3	5.2	1.2		長石	灰貫焼	普通	ロクロナデ	側面部縦面化	修繕孔1か所			覆土中	転用砥石
106	土製土器	瓦灯傘	8.0	(5.0)	—		長石・石英・雲母	轆	普通	ロクロナデ	下層研磨				底面	口辺油埋付者 PL19
108	陶器	灯明皿	7.7	2.4	4.5		暗褐色	成形・調整	—	—	—	—	不明	不明	覆土下層	80% 全面油埋付者 PL19
109	陶器	小瓶	6.1	4.0	3.6		灰黄灰白	ロクロ口辺刷付	—	灰焼	—	流し輪	—	—	覆土下層	80% PL25
110	陶器	小瓶	7.0	4.0	3.8		淡黄灰白	ロクロ口辺刷付	—	灰焼	—	—	—	—	覆土下層	80% PL25
111	陶器	中瓶	[8.8]	5.5	3.7		淡黄灰白	ロクロ口辺刷付	—	灰焼	内:一色給	貫入	—	—	覆土下層	50% PL25
112	陶器	中瓶	9.6	5.5	3.2		灰黄灰白	ロクロ口辺刷付	—	灰焼	内:一色給	貫入	—	—	底面	90% PL25
113	陶器	中瓶	9.4	5.4	4.0		淡黄灰白	ロクロ口辺刷付	—	灰焼	内:一色給	貫入	—	—	底面	95%
114	陶器	中瓶	8.9	5.6	3.3		灰白	ロクロ口辺刷付	—	灰焼	内:一色給	貫入	—	—	覆土中層	50%
115	陶器	中瓶	10.2	5.1	4.2		灰白	ロクロ口辺刷付	—	灰焼	内:一色給	貫入	—	—	覆土下層	50% PL25
116	陶器	大瓶	[12.4]	5.1	4.5		淡黄灰白	ロクロ口辺刷付	—	灰焼	内:一色給	貫入	—	—	覆土中層	90% 底部埋付者「方」 PL30-25
117	陶器	仏飯器	[6.8]	4.9	4.1		灰	ロクロ	—	灰焼	—	台座無輪	—	—	覆土下層	70% PL26
118	陶器	小皿	12.9	2.7	7.5		淡黄灰白	ロクロ口辺刷付	—	灰焼	内:一色給	貫入	—	—	底面	95% PL27
119	陶器	五斗皿	17.0	3.5	7.4		灰	ロクロ口辺刷付	—	灰焼	内:一色給	貫入	—	—	覆土中上層	80% PL27

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土色・釉薬色	成形・調整	装飾			印・款など	製作		出土位置	備考	
								絵付/輪差	文様	装飾特徴		製作地	製作年代			
120	陶器	中鉢	16.7	9.4	8.4	淡青灰白	ロクロ 削出高台	—	灰軸	—	—	瀬戸・美濃系	18世紀後半～	覆土中層～ 覆土上層	30% 底部器書「了」を PL20	
121	陶器	徳利	3.0	22.7	7.9	淡青灰白	ロクロ 削出高台	—	灰軸	—	—	瀬戸・美濃系	18世紀中葉～	覆土下層	95% PL28	
122	陶器	甕	11.6	3.5	11.6	灰白 灰黄	轆漉り	—	灰軸	内：一 外：灰文	—	瀬戸・美濃系	18世紀後半	底面	90% PL26	
123	陶器	打明燈籠	—	10.0	6.0	灰白 白	ロクロ	—	灰軸	—	—	瀬戸・美濃系	不明	底面	60% 底部器書「九」を PL20-28	
124	磁器	小碗	6.9	3.6	2.6	白 灰白	ロクロ 高台付目	—	透明	—	—	肥前系	1680～ 1780年	覆土下層	70% PL25	
125	磁器	中碗	9.8	5.0	3.8	白 灰白	ロクロ 高台付目	—	透明	内：一 外：雲輪筋文	—	山	肥前系	18世紀後半	覆土下層～ 底面	95% PL25
126	磁器	中碗	9.7	5.0	3.9	青灰白 灰白	ロクロ	—	透明	内：一 外：雲輪筋文	—	山	肥前系	18世紀後半	覆土中	50%
127	磁器	小皿	12.4	3.3	7.4	灰白	ロクロ	—	透明	内：一 外：雲文	—	大明 系	肥前系	18世紀前半	覆土中層	50%
128	磁器	五寸皿	14.6	4.5	7.6	灰白	ロクロ	—	口唇部輪 白地軸	内：一 外：一	—	肥前系	不明	覆土中層～ 覆土下層	80% PL27	
TP2	陶器	鉢	—	9.7	—	白	ロクロ	—	灰軸・白地軸	内：一 外：一	兼款	—	肥前系 厚土	17世紀後半	底面	PL27

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土・石 灰・書	特徴	出土位置	備考
DP15	ままと道具	4.4	3.3	4.0	(9.4)	—	羽釜 ロクロナデ	覆土中	PL21
Q17	砥石	(5.2)	2.8	1.7	(42.0)	—	砥石 1面 轆漉痕の面3面 表面灰化	覆土下層	PL22
Q18	硯	12.4	4.7	1.5	(133.0)	—	粉板石 一部欠損 裏面「小福田村」□小□□□年正月 篆刻	底面	PL22
Q19	硯牌	(16.4)	(12.3)	(3.1)	(888.0)	—	滑石片着 表面一部欠字 裏面一部欠字を受けている	底面	PL21

番号	器種	長さ・径	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M48	錠	(24.2)	3.5	0.6	(185.0)	鉄	先端部・基部端部欠損 基部若干平部付着	覆土中	
M49	鎌	(7.4)	3.5	0.3	(44.5)	鉄	先端部・受け部欠損	底面	
M50	釘	(11.5)	0.4	0.5	(12.9)	鉄	骨針針先 頭部・先端部欠損	覆土中	PL24
M51	釘	10.6	1.3	1.2	(147.5)	鉄	頭部若干欠損	覆土中	PL24
M52	陶状洋	13.0	14.4	6.7	1680	鉄	頭部を呈す ガラス質の光沢有り 本質残存 着磁性質	覆土下層	PL23
M53	陶状洋	10.0	11.9	5.0	794.0	鉄	頭部を呈す 頭口付着 ガラス質の光沢有り 着磁性質	覆土中	PL23
M54	鏡	6.0	—	0.1	21.2	銅	銅正体	覆土下層	PL24
M56	不明銅製品	3.4	1.7	1.1	9.3	銅	筒の中に湾曲した棒が嵌合している	覆土中	PL23

番号	器種	長さ	火皿径	小口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M55	横管	5.1	1.4	1.0	6.4	銅	断面のみ 扉字残存	覆土中	PL24

番号	器種	長さ	口付径	小口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M56	横管	7.4	0.4	0.9	6.0	銅	喉口のみ 扉部有り 扉字残存	覆土中	

番号	鏡種	径	孔幅	重量	初周年	材質	特徴	出土位置	備考
M57	□本通□	3.5	0.6	1.8	—	銅	鏡により2文字堂減	覆土下層	

第2号廃棄土坑 (第100図)

位置 調査区I区中央部のE4g2区、標高12.3mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.8m、短径1.5mの楕円形で、深さは80cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 9層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

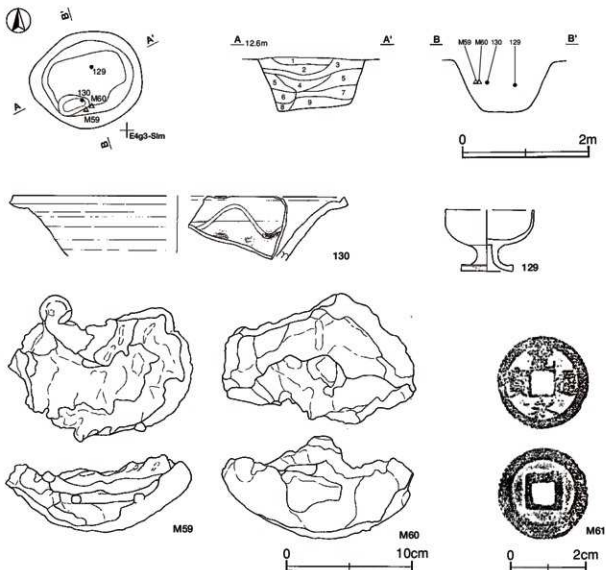
土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子少量	6 褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック少量
3 灰褐色	砂粒中量、ロームブロック・粘土ブロック少量	8 褐色	ロームブロック少量 (締まり弱い)
4 黒褐色	ロームブロック・炭化物少量	9 暗褐色	ロームブロック中量 (締まり弱い)
5 褐色	ロームブロック中量 (締まり強い)		

遺物出土状況 土師質土器片2点(焙烙、風炉)、陶器片8点(瀬戸・美濃系椀類3、瀬戸・美濃系仏飯器1、瀬戸・美濃系鉢1、瀬戸・美濃系鉢類2)、磁器片6点(肥前系統類)、石器3点(砥石

2, 石白1), 鉄器・鉄製品2点(釘, 不明), 古銭1点, 輪状滓5点のほか, 縄文土器片4点, 土師器片1点も出土している。129は中央部の覆土中層, 130・M59・M60は南部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土遺物及び覆土から検出された砂粒が, 第1号製鉄遺構の時期と一致すると考えられることから, 18世紀後半と考えられる。



第100図 第2号廃棄土坑・出土遺物実測図

第2号廃棄土坑出土遺物観察表(第100図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	粘土色 輪彩色	成形・ 調整	裝飾			印・款 など	製作		出土位置	備考
								絵付/輪毫	文様	裝飾特徴		製作地	製作年代		
129	陶器	仏飯器	[6.8]	4.9	4.1	灰白 白～黄	ロクロ	—	—	—	—	瀬戸・ 美濃系	1750～ 1860年	覆土中層	60% PL26
130	陶器	鉢	26.4	(5.0)	—	灰白 黄～黄 浅黄	ロクロ	—	—	—	—	瀬戸・ 美濃系	18世紀 中葉	覆土中層	55・135と同一
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴					出土位置	備考		
M59	輪状滓	11.5	14.7	3.5	780	鉄	磁状を呈す 性質普通	ガラス質の光沢有り	磁状の薄付着	着磁	—	—	覆土中層	—	
M60	輪状滓	10.4	15.3	4.9	1010	鉄	磁状を呈す	ガラス質の光沢有り	着磁性非常に弱い	—	—	覆土中層	PL23		
番号	鉄種	径	孔径	重量	初鋳年	材質	特徴					出土位置	備考		
M61	薬水通宝	2.5	0.6	3.1	1767	銅	無背	—	—	—	—	—	覆土中	—	

第3号廃棄土坑 (第101・102図)

位置 調査区I区中央部のE4f1区、標高12.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第8号溝跡、第250号土坑を掘り込み、第235号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北端が調査区域外へ延び、長軸2.1m、短軸1.4mが確認され、平面形は長方形であると考えられる。深さは76cm、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

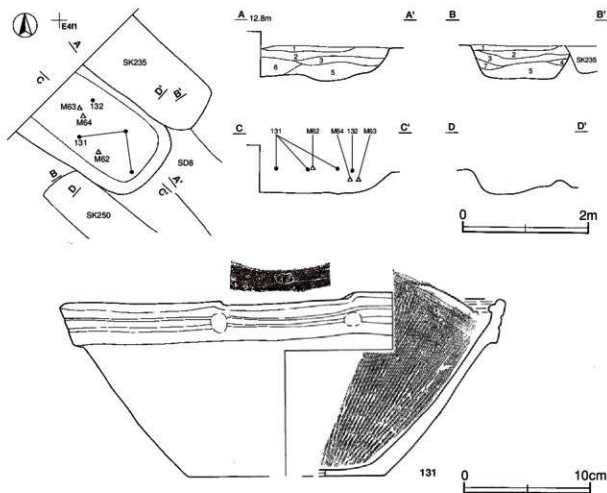
覆土 7層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

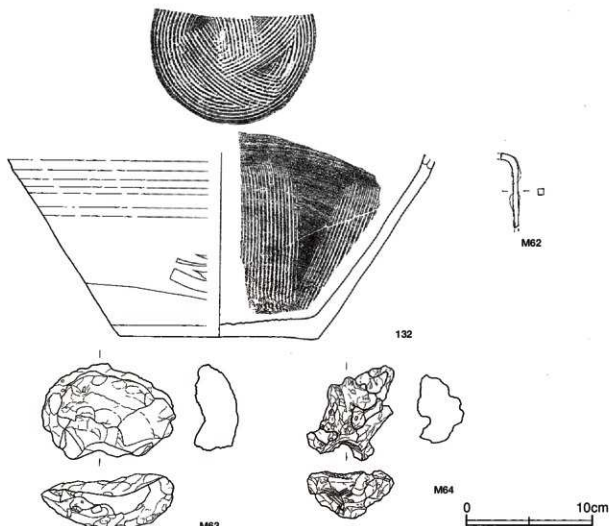
- | | | | |
|-------|--------------------------|-------|-----------------------|
| 1 灰褐色 | 砂粒中量、ロームブロック少量 | 4 暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子・砂粒少量、焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量(粘性・締まりやや強い) |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| | | 7 褐色 | ロームブロック多量 |

遺物出土状況 土師質土器片18点(皿類1, 甕13, 焙塔4), 陶器片12点(瀬戸・美濃系中碗1, 瀬戸・美濃系碗類4, 瀬戸・美濃系皿類2, 瀬戸・美濃系鉢類1, 瀬戸・美濃系鉢鉢1, 瀬戸・美濃系香炉1, 明石系鉢鉢2), 磁器片6点(肥前系碗類4, 水滴1, 不明1), 石器2点(砥石), 鉄器・鉄製品6点(刀子2, 釘4), 碗状滓2点のほか、流れ込んだ須恵器片1点, 中世の常滑片1点, 石皿1点も出土している。M63・M64は覆土中層, 131・132・M62は覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土遺物及び覆土から検出された砂粒が、第1号製鉄遺構の時期と一致すると考えられることから、18世紀後半と考えられる。



第101図 第3号廃棄土坑・出土遺物実測図



第102図 第3号廃棄土坑出土遺物実測図

第3号廃棄土坑出土遺物観察表(第101・102図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土色・釉色	成形・調整	裝飾			印・銘など	製作		出土位置	備考
								絵付/輪毫	文様	裝飾特徴		製作地	製作年代		
131	陶器	鉢鉢	34.5	14.6	15.6	にぶい赤褐色	ロクロ	—	内面から見るへらつぎの痕跡	内面輪目	「長上」*	明石・伊豆	18世紀後半	覆土上層	40%
132	陶器	鉢鉢	—	14.8	15.7	灰白・黒赤褐色	ロクロ	—	見込輪目	環状	—	瀬戸・美濃系	17世紀中葉～	覆土上層	40%

番号	器種	長さ・径	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
M62	釘	(6.0)	0.4	0.5	(6.2)	鉄	さっぱ釘*	頭部・先端部欠損	覆土上層	
M63	輪状片	7.5	10.5	3.0	307	鉄	面状を呈す	器口付着 ガラス質の光沢有り 着磁性强い	覆土中層	PL23
M64	輪状片	7.3	6.9	3.0	87	鉄	面状を呈す	ガラス質の光沢有り 着磁性强い	覆土中層	

第4号廃棄土坑(第103図)

位置 調査区I区中央部のE4g2区、標高12.3mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸2.8m、短軸1.6mの長方形で、深さは44cmである。底面は中央部に凹みがあり、壁は直立して立ち上がっている。

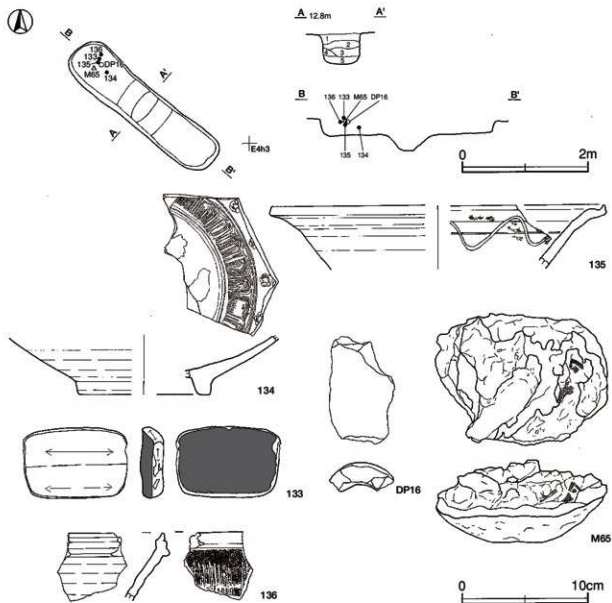
覆土 5層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・砂粒少量 | 4 灰褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 5 褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片26点（焙烙），瓦質土器片1点（焙烙），陶器片9点（瀬戸・美濃系椀類1，瀬戸・美濃系小皿2，瀬戸・美濃系鉢類1，肥前系鉢類1，瀬戸・美濃系搥鉢2，瀬戸・美濃系瓶類2），磁器片6点（肥前系小碗1，肥前系碗類4，肥前系大皿1）。土製品1点（羽口），石器2点（砥石，石臼），鉄滓1点，椀状浮11点，貝2点のほか，流れ込んだ縄文土器片1点も出土している。134・135・M65・DP16は北部の覆土上層から中層にかけて出土している。

所見 時期は，出土遺物及び覆土から検出された砂粒が，第1号製鉄遺構の時期と一致すると考えられることから，18世紀後半と考えられる。



第103図 第4号廃棄土坑・出土遺物実測図

第4号廃棄土坑出土遺物観察表(第103図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考				
133	土質土器	焙烙	(5.6)	(8.3)	(1.9)	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ロクロナデ 外面・側面砥面化	覆土上層	転用砥石				
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土色 輪彩色	成形・ 調整	裝飾			印・銘 など	製作	出土位置	備考	
								絵付/輪彩	文様	裝飾特徴		製作地	製作年代		
134	陶器	鉢	—	(4.8)	10.4	赤褐色 にぶい赤	ロクロ 削出高台	—	内：三島子 外：—	襷足	—	肥前系	17世紀 後半～	覆土中層	跡目2か所 PL27
135	陶器	鉢	16.4	(5.1)	—	赤褐色 にぶい赤	ロクロ	—	—	—	—	瀬戸・ 美濃系	18世紀 前半	覆土中層	55-130と同一
136	陶器	鉢鉢	—	(5.4)	—	暗褐色	ロクロ	—	—	内面磨目	—	産地不明	不明	覆土上層	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴			出土位置	備考				
DP16	羽口	(8.6)	(5.2)	2.4	(64.9)	長石・ 石英	全面丁寧なナデ 外面強い筋ナデ			覆土上層	PL29				
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考				
M65	輪状鉢	10.4	13.5	5.4	979	珪	面状を呈す 切煎面有り ガラス質の光沢有り 本質残存 着磁性普通			覆土上層	PL23				

表10 近世 廃棄土坑一覧表

番号	位置	長径(輪)方向	平面形	規模(m, 深さ42cm)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径(輪)×短径(輪)	深さ					
1	E 4 g7	N-50°-E	楕円形	5.3×3.7	64	外傾	平坦	人為	土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、石器、金属器、輪状土、古銭	
2	E 4 g2	N-75°-E	楕円形	1.8×1.5	80	外傾	平坦	人為	土師質土器、陶器、磁器、石器、鉄器、輪状土、古銭	
3	E 4 f1	N-50°-W	[長方形]	(2.1)×(1.4)	76	外傾	平坦	人為	土師質土器、陶器、磁器、石器、鉄器、輪状土	SD8, SK250→本跡→SK235
4	E 4 g2	N-48°-W	長方形	2.8×1.6	44	直立	凹状	人為	土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、土製品、石器、鉄器、輪状土	

(8) 土坑

近世と考えられる土坑は、49基確認されている。ここでは、特徴ある1基について記述し、その他の遺構については、実測図と遺物、一覧表と土層解説で記載する。また、図示した遺物については、出土遺物観察表で記載する。

第273号土坑(第104図)

位置 調査区I区中央部のF3a8区、標高12.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第20号溝跡、第272号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径2.00m、短径1.74mの不整形円で、深さは38cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 9層に分層される。不規則な堆積状況を示した人為堆積である。また、北部から焼土が投げ込まれ、覆土中層に堆積している(第2層)。

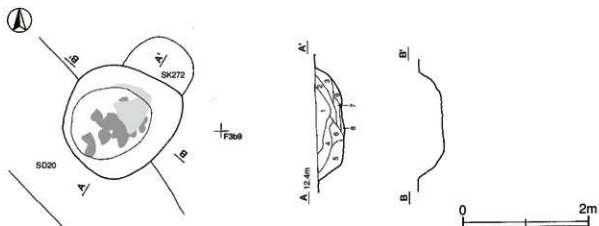
土層解説

1	灰褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック微量(粘性・締まり強い)	5	暗褐色	ロームブロック少量
2	暗赤褐色	焼土ブロック多量、ロームブロック・粘土ブロック微量	6	暗褐色	ロームブロック中量
3	灰褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック微量	7	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量
4	褐色	ロームブロック中量	8	褐色	ロームブロック多量
			9	灰褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量

遺物出土状況 土師質土器片10点(小皿2、焙烙8)、陶器片1点(瀬戸・美濃系小皿)、磁器片3点(肥前系碗類)が出土している。

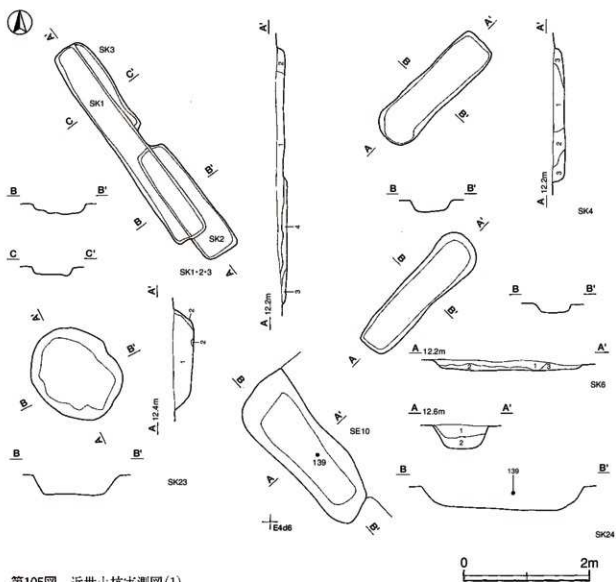
所見 時期は、重複関係から19世紀前半と考えられる。また、本跡と同時期である第4号掘立柱建物跡の間近

の南東側に位置していることから、その建物内で生じた焼土の後片付けのために廃棄されたものと考えられる。

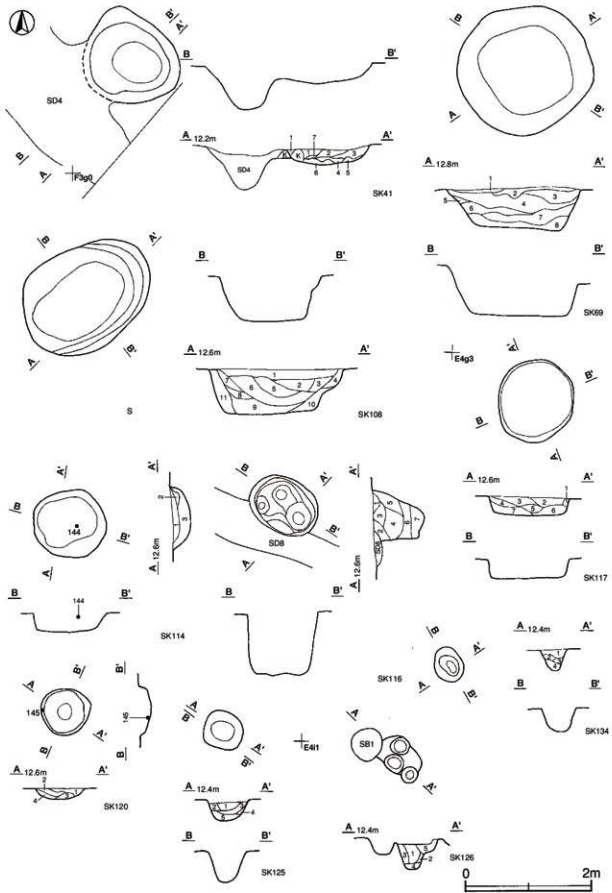


第104図 第273号土坑実測図

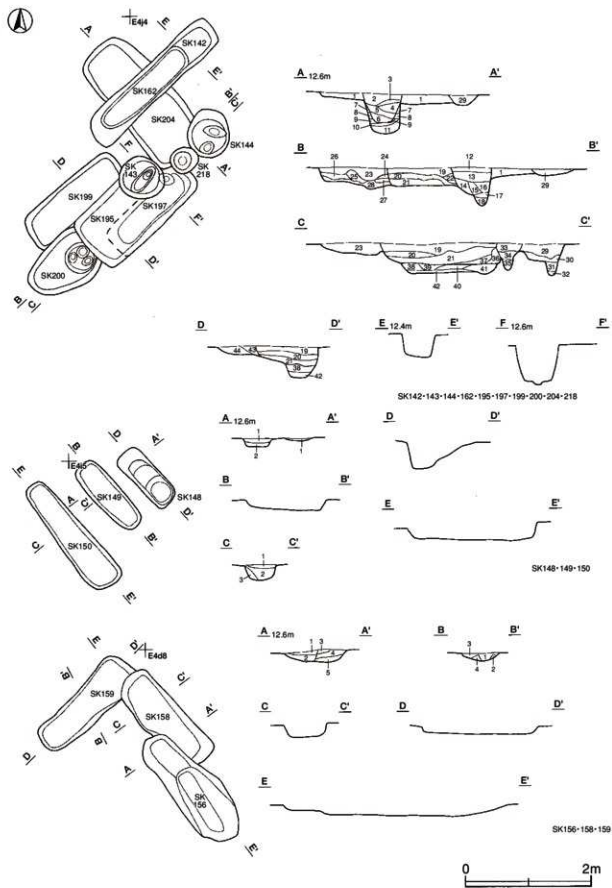
近世 その他の土坑 (第105~109図)



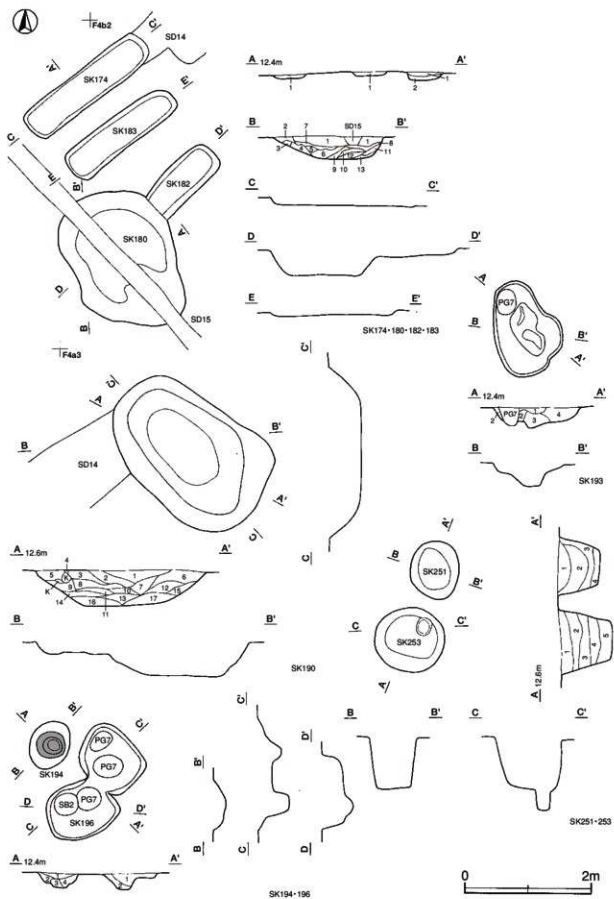
第105図 近世土坑実測図(1)



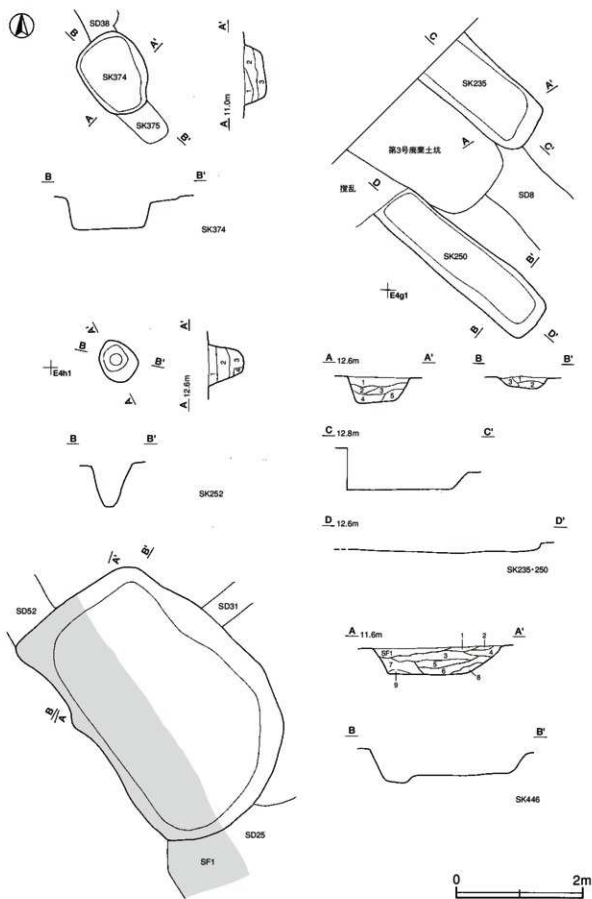
第106図 近世土坑実測図(2)



第107图 近世土坑实测图(3)



第108図 近世土坑実測図(4)



第109图 近世土坑实测图(5)

近世 その他の土坑 (第105-109図)

第1号土坑土層解説 (A-A')

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量

第2号土坑土層解説 (A-A')

- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量

第4号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量 (締まり弱い)

第6号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量 (締まりやや強い)
- 2 暗褐色 ローム粒子中量 (締まりやや強い)
- 3 暗褐色 ローム粒子中量

第23号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量
- 2 褐色 ロームブロック多量

第24号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・砂粒少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第41号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量 (粘性やや強い)
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量 (締まりやや強い)
- 4 暗褐色 ローム粒子少量 (粘性やや強い)
- 5 褐色 ローム粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量
- 7 暗褐色 ローム粒子微量

第69号土坑土層解説

- 1 暗褐色 炭化物多量, 焼土ブロック・砂粒少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子多量 (粘性やや強い)
- 4 黒褐色 ロームブロック微量
- 5 褐色 ロームブロック中量
- 6 褐色 ローム粒子多量
- 7 暗褐色 ロームブロック中量 (締まり非常に強い)
- 8 暗褐色 ロームブロック中量 (締まり強い)

第108号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 褐色 ロームブロック多量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量
- 6 黒褐色 ローム粒子多量
- 7 褐色 ロームブロック少量 (締まりやや強い)
- 8 褐色 ローム粒子少量
- 9 褐色 ロームブロック少量 (粘性やや強い)
- 10 褐色 ロームブロック多量
- 11 暗褐色 ロームブロック少量 (粘性強い)

第114号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

第116号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量 (粘性・締まりやや強い)
- 7 暗褐色 ローム粒子少量

第117号土坑土層解説

- 1 明褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子・粘土粒子微量

- 2 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子・粘土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子微量
- 7 黒褐色 ローム粒子極少量

第120号土坑土層解説

- 1 明褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子少量

第125号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量 (粘性・締まりやや強い)
- 2 灰褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量

第126号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量 (締まりやや強い)
- 3 暗褐色 ロームブロック中量 (締まりやや強い)
- 4 黒褐色 ロームブロック少量 (締まりやや強い)
- 5 褐色 ロームブロック少量

第134号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック少量

第204号土坑土層解説 (A-A', B-B')

- 1 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック微量

第142号土坑土層解説 (A-A')

- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量
- 5 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック微量
- 6 暗褐色 ローム粒子微量

第162号土坑土層解説 (A-A')

- 7 暗褐色 ローム粒子中量
- 8 褐色 ローム粒子多量
- 9 黒褐色 ローム粒子微量
- 10 褐色 ローム粒子中量
- 11 暗褐色 ローム粒子微量

第143号土坑土層解説 (B-B')

- 12 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子極微量
- 13 黒褐色 ローム粒子微量, 焼土粒子極微量
- 14 黒褐色 ローム粒子微量, 粘土粒子極微量
- 15 褐色 ローム粒子中量, 粘土粒子微量
- 16 暗褐色 ローム粒子少量
- 17 褐色 ロームブロック少量
- 18 褐色 ローム粒子中量

第195号土坑土層解説 (B-B', C-C', D-D')

- 19 黒褐色 ローム粒子少量
- 20 暗褐色 ローム粒子微量
- 21 褐色 ロームブロック少量, 粘土粒子極微量
- 22 褐色 ロームブロック少量
- 36 明褐色 ローム粒子多量
- 37 黒褐色 粘土ブロック・ローム粒子微量

第200号土坑土層解説 (B-B', C-C')

- 23 褐色 ロームブロック少量
- 24 褐色 ローム粒子微量
- 25 褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子極微量
- 26 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子極微量
- 27 褐色 ロームブロック・粘土粒子極微量
- 28 暗褐色 ローム粒子中量

第144号土壌層解説 (A-A', B-B', C-C')

- 29 黒 褐色 ローム粒子極微量 (締まりやや弱い)
- 30 暗 褐色 ローム粒子少量
- 31 黒 褐色 ローム粒子極微量
- 32 褐 色 ローム粒子少量

第218号土壌層解説 (C-C')

- 33 灰 黄 褐色 ローム粒子中量
- 34 暗 褐色 ローム粒子少量
- 35 明 褐色 ローム粒子多量

第197号土壌層解説 (C-C', D-D')

- 38 暗 褐色 粘土粒子微量, ローム粒子・炭化粒子極微量
- 39 暗 褐色 ロームブロック少量
- 40 暗 褐色 ロームブロック微量
- 41 黒 褐色 ローム粒子極微量
- 42 黒 褐色 ローム粒子・粘土粒子極微量

第199号土壌層解説 (C-C', D-D')

- 43 暗 褐色 ロームブロック微量, 炭化物極微量
- 44 褐 色 ローム粒子中量

第148号土壌層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子少量

第149号土壌層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック少量
- 2 褐 色 ローム粒子少量

第150号土壌層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐色 ロームブロック中量
- 3 暗 褐色 ロームブロック中量 (締まりやや強い)

第156号土壌層解説 (A-A')

- 1 暗 褐色 ローム粒子・焼土粒子極微量
- 2 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子極微量

第158号土壌層解説 (A-A')

- 3 暗 褐色 ロームブロック・焼土粒子極微量
- 4 褐 色 ローム粒子少量, 焼土粒子極微量
- 5 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子極微量

第159号土壌層解説

- 1 褐 色 ローム粒子少量
- 2 褐 色 ローム粒子中量
- 3 にぶい褐色 ローム粒子中量
- 4 明 褐色 ローム粒子多量

第174号土壌層解説

- 1 褐 色 ロームブロック・炭化粒子少量, 粘土ブロック微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック・粘土ブロック微量

第182号土壌層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子少量

第183号土壌層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量

第180号土壌層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子極微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック少量
- 3 暗 褐色 ロームブロック微量
- 4 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 5 褐 色 ローム粒子少量
- 6 明 褐色 ローム粒子中量
- 7 暗 褐色 ローム粒子微量
- 8 褐色 ローム粒子少量 (締まりやや強い)
- 9 明 褐色 ローム粒子多量
- 10 暗 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 11 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 12 褐 色 ローム粒子中量
- 13 明 褐色 ローム粒子少量

第190号土壌層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 2 褐 色 ローム粒子中量
- 3 暗 褐色 ロームブロック少量
- 4 褐 色 ローム粒子多量
- 5 暗 褐色 ローム粒子中量
- 6 暗 褐色 ローム粒子少量, 炭化物微量
- 7 暗 褐色 ローム粒子微量
- 8 暗 褐色 ロームブロック・炭化物微量
- 9 暗 褐色 炭化物・ローム粒子中量
- 10 暗 褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 11 暗 褐色 ロームブロック中量
- 12 暗 褐色 ローム粒子少量
- 13 黒 褐色 ローム粒子少量
- 14 黒 褐色 ローム粒子微量
- 15 褐 色 ロームブロック中量
- 16 明 褐色 ローム粒子多量
- 17 明 褐色 ロームブロック中量

第193号土壌層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック微量
- 3 暗 褐色 ローム粒子少量
- 4 暗 褐色 ローム粒子中量

第194号土壌層解説

- 1 黒 褐色 粘土ブロック中量, ローム粒子少量
- 2 黒 褐色 粘土ブロック中量, ロームブロック・炭化物微量
- 3 暗 褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量
- 4 暗 褐色 粘土ブロック中量, ロームブロック少量

第196号土壌層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐色 ローム粒子少量

第235号土壌層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐色 ロームブロック少量
- 3 褐 色 ロームブロック少量
- 4 褐 色 ロームブロック中量
- 5 灰 褐色 ロームブロック少量

第250号土壌層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐色 ローム粒子中量
- 3 褐 色 ロームブロック少量

第251号土壌層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子極微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子少量
- 3 褐 色 ロームブロック少量
- 4 褐 色 ローム粒子中量

第252号土壌層解説

- 1 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子極微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子少量
- 3 暗 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子極微量
- 4 褐 色 ロームブロック少量

第253号土壌層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 暗 褐色 ローム粒子少量
- 4 明 褐色 ローム粒子中量
- 5 明 褐色 ローム粒子多量

第374号土壌層解説

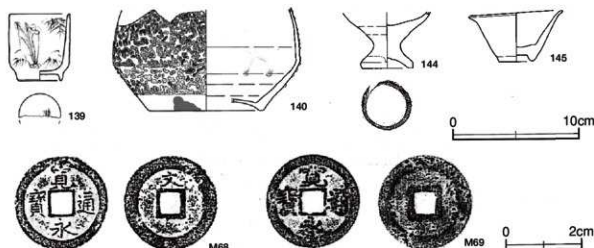
- 1 褐 色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック中量
- 3 褐 色 ロームブロック多量

第446号土壌層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック微量
- 3 黒 褐色 ロームブロック微量 (締まりやや強い)
- 4 褐 色 ロームブロック中量

- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
 6 暗褐色 ロームブロック少量
 7 黒褐色 ロームブロック微量

- 8 暗褐色 ローム粒子微量
 9 暗褐色 ロームブロック少量(粘性強い)



第110図 第2・24・114・120号土坑出土遺物実測図

第2号土坑出土遺物観察表(第110図)

番号	鉄種	径	孔径	重量	初周年	材質	特徴	出土位置	備考
M68	寛永通宝	2.5	0.6	3.4	1668	銅	文銭	覆土中	PL24
M69	寛永通宝	2.5	0.6	2.3	1668	銅	無背	覆土中	

第24号土坑出土遺物観察表(第110図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土色 釉薬色	成形・ 調整	裝飾		印・具 など	製作		出土位置	備考
								絵付/軸差 文様	裝飾特徴		製作地	製作年代		
139	陶器	小杯	4.8	5.3	3.4	淡青白 白	ワクラロ 口ワロ	—	—	不明	瀬川系	近代	覆土中層	50%
140	陶器	土瓶	—	(8.0)	(9.0)	淡青白 淡青	ワクラロ 口ワロ	—	—	—	—	大塚相馬 19世紀代	覆土中	30%

第69号土坑出土遺物観察表

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
N2	不明	4.3	2.3	0.6	2.6	自然遺物	炭化物に酸化したものが見られている	覆土中	PL24 写真のみ

第114号土坑出土遺物観察表(第110図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土色 釉薬色	成形・ 調整	裝飾		印・具 など	製作		出土位置	備考
								絵付/軸差 文様	裝飾特徴		製作地	製作年代		
144	陶器	仏飯器	—	(4.4)	4.0	淡青白 ワクラロ	—	—	—	—	肥前系	1630~1650	覆土中層	

第120号土坑出土遺物観察表(第110図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土色 釉薬色	成形・ 調整	裝飾		印・具 など	製作		出土位置	備考
								絵付/軸差 文様	裝飾特徴		製作地	製作年代		
145	磁器	小碗	7.3	4.0	2.7	白	ワクラロ 口ワロ	—	—	—	肥前	1680~ 1740年	底面	90% PL26

表11 近世 土坑一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模(m, 深さ4cm)		東面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
1	F 3 f7	N-33'-W	長方形	3.64×0.49	12	外傾	平照	人為	—	SK2・3→本跡
2	F 3 g8	N-35'-W	長方形	2.07×0.60	14	外傾	平照	人為	瓦質土器、古銭	本跡→SK1
3	F 3 f7	N-35'-W	長方形	1.69×0.28	12	外傾	平照	人為	—	本跡→SK1
4	F 3 e7	N-45'-E	不整長方形	2.16×0.63	18	外傾	平照	人為	土師質土器, 陶器	
6	F 3 f6	N-45'-E	不整長方形	2.34×0.66	17	外傾	凹状	人為	土師質土器	
23	F 3 d8	N-42'-W	楕円形	1.54×1.32	32	外傾	凸凸	人為	土師質土器, 磁器	
24	E 4 c6	N-38'-W	隅丸長方形	2.60×1.00	39	縦斜	凸凸	人為	土師片, 鉄製品, 石器, 鉄滓	SE10→本跡
41	F 3 f0	N-53'-W	不整楕円形	1.50×1.36	23	縦斜	凹状	人為	陶器, 磁器, 銅製品	

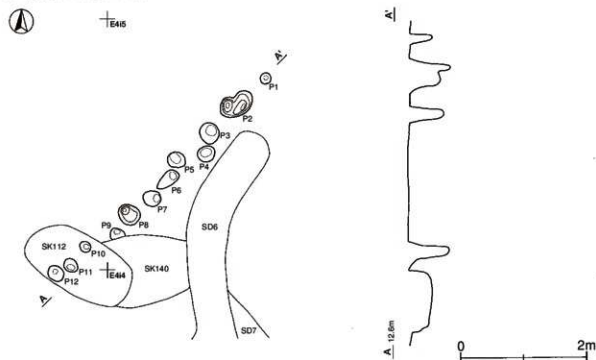
番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模 (m, 長さ12cm)		壁面	底面	覆土	出土遺物	遺 考 重複関係 (古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
69	E 4 b4	N-0°	円形	2.00	54	外傾	平坦	人為	瓦質土器, 陶器, 石器, 自然遺物	
108	E 4 b5	N-61°-E	楕円形	2.20×1.56	72	外傾	平坦	人為	土師質土器, 陶器	
E 4 f2	N-72°-W	円形	1.15×1.07	30	直立 横斜	平坦	自然	土師質土器, 陶器, 鉄滓		
114	E 4 b3	N-60°-W	楕円形	1.12×0.86	96	直立	凸凹	人為	—	本跡→SD 8
117	E 4 g3	N-37°-E	楕円形	1.32×1.18	29	直立	平坦	人為	土師質土器, 磁器, 鉄器	
120	E 4 f4	N-0°	円形	0.76	19	横斜	皿状	人為	磁器	TM 1→本跡
125	E 3 b0	N-0°	円形	0.65×0.62	48	外傾	皿状	人為	—	
126	E 3 b9	N-42°-W	楕円形	0.79×0.50	50	外傾	凸凹	人為	—	本跡→SB 1
134	F 3 c5	N-28°-W	楕円形	0.57×0.45	36	外傾	皿状	人為	陶器	
142	E 4 j4	N-48°-E	長方形	2.55×0.54	45	直立	平坦	人為	陶器	SK162-204→本跡
143	E 4 j4	N-0°	円形	0.73×0.67	63	外傾	凸凹	人為	—	SK195-197・199-204→本跡
144	E 4 j4	N-6°-E	楕円形	0.76×0.67	50	外傾	凸凹	自然	土師質土器, 陶器, 磁器	SK204→本跡→SK218
148	E 4 i5	N-40°-W	長方形	1.32×0.42	51	直立	横斜	自然	—	
149	E 4 i5	N-40°-W	長方形	1.29×0.44	20	横斜	凸凹	自然	陶器	
150	E 4 i5	N-40°-W	長方形	2.04×0.53	24	外傾	平坦	人為	土師質土器	
156	E 4 d8	N-41°-W	楕円形	2.08×0.79	19	横斜	平坦	人為	—	SK158→本跡
158	E 4 d8	N-43°-W	長方形	1.80×0.66	20	外傾	平坦	人為	土師質土器, 陶器	SK159→本跡→SK156
159	E 4 d7	N-45°-E	[長方形]	1.84×0.63	11	直立	凸凹	人為	陶器	本跡→SK156
162	E 4 j4	N-48°-E	[楕円形]	(1.74)×(0.39)	64	直立	皿状	人為	—	本跡→SK142
174	F 4 b1	N-52°-E	長方形	2.29×0.55	14	外傾	平坦	人為	陶器, 磁器	SD14→本跡
180	F 4 b2	N-43°-W	[楕円形]	(2.42)×(1.80)	36	横斜	平坦	人為	陶器	SK182→本跡→SD15
182	F 4 b2	N-44°-E	[長方形]	(1.28)×(0.57)	13	横斜	凸凹	人為	—	本跡→SK180
183	F 4 b2	N-52°-E	長方形	2.00×0.54	7	横斜	平坦	人為	—	
190	F 4 a3	N-46°-W	不定形	2.80×2.08	50	横斜	凸凹	人為	土師質土器, 陶器, 鉄滓	本跡→SD14
193	F 4 d1	N-7°-W	不整形円形	1.53×1.02	30	直立	凸凹	人為	土師質土器, 陶器, 石器	本跡→PG 7
194	F 4 c1	N-33°-E	楕円形	0.90×0.60	17	外傾	皿状	人為	土師質土器, 磁器	
195	E 4 j4	N-48°-E	[長方形]	(2.00)×(1.00)	29	外傾	平坦	人為	土師質土器, 陶器, 磁器, 石器	SK197-199-200→本跡→SK143-204-218
196	F 4 c1	N-30°-E	不定形	1.93×1.08	34	外傾	平坦	人為	土器片, 鉄製品, 鉄滓	本跡→SB 2, PG 7
197	E 4 j4	N-48°-E	[長方形]	[1.68]×[0.55]	46	外傾	平坦	人為	—	本跡→SK143-195-204-218
199	E 4 j3	N-51°-E	[長方形]	1.82×(0.56)	43	外傾	平坦	人為	—	本跡→SK143-195-200
200	E 4 j3	N-47°-E	楕円形	0.94×0.82	25	外傾	凸凹	人為	土師質土器, 陶器, 鉄器	SK199→本跡→SK195
204	E 4 j4	N-40°-W	[長方形]	(2.15)×(0.97)	15	外傾	平坦	人為	土師質土器	SK195-197→本跡→SK142-144-218
218	E 4 j4	N-0°	円形	0.44×0.40	60	外傾	皿状	人為	—	SK144-195-197-204→本跡
235	E 4 f1	N-50°-W	長方形	(1.92)×(0.84)	82	横斜	凸凹	人為	土器片	SD 8・第3号南家土坑→本跡
250	E 4 f1	N-50°-W	[長方形]	(3.15)×(0.80)	20	横斜	凸凹	人為	土師質土器, 陶器, 磁器	本跡→第3号南家土坑
251	E 3 g1	N-6°-W	楕円形	0.94×0.77	84	外傾	平坦	人為	—	
252	E 3 g1	N-22°-W	楕円形	0.70×0.57	71	外傾	凸凹	人為	—	
253	E 3 h1	N-71°-W	円形	1.12×1.03	112	外傾	凸凹	人為	—	
273	F 3 a8	N-70°-E	不整形円形	2.00×1.74	38	外傾	平坦	人為	土師質土器, 陶器, 磁器	SD20, SK272→本跡
374	H 2 j1	N-27°-W	楕円形	1.31×0.99	48	直立	平坦	人為	瓦質土器, 陶器	SD38, SK375→本跡
446	G 2 g7	N-43°-W	長方形	4.32×(2.08)	42	横斜	平坦	人為	瓦質土器, 陶器	SE25-31-51-52→本跡→SF 1

(9) ビット群

第1号ビット群 (第111回)

調査区 I 区中央部の E 4 i4 ~ E 4 j5 区に, 12か所のビットが検出された。標高12.3mの台地平坦部に位置し,

平面形は長径16~54cmの円形や楕円形または不定形で、深さは35~65cmである。土師質土器片1点(焙烙)、磁器片2点(肥前系統, 肥前系皿), 石器1点(不明), 鉄製品2点(不明), 鉄滓1点のほか、流れ込んだ縄文土器片5点もピット内から出土している。焼土がP6の確認面付近を中心に検出されており、廃棄物などが焼却されたと考えられる。また、第1号掘立柱建物跡と第1号製鉄遺構、第6号溝跡に含まれた砂粒とはほぼ同質のものが、P4の覆土中層から検出されている。時期は、18世紀後半に比定される第6号溝跡に沿うように位置していることや、覆土から検出された砂粒が、第1号製鉄遺構の時期と一致すると考えられることから、18世紀後半と考えられる。



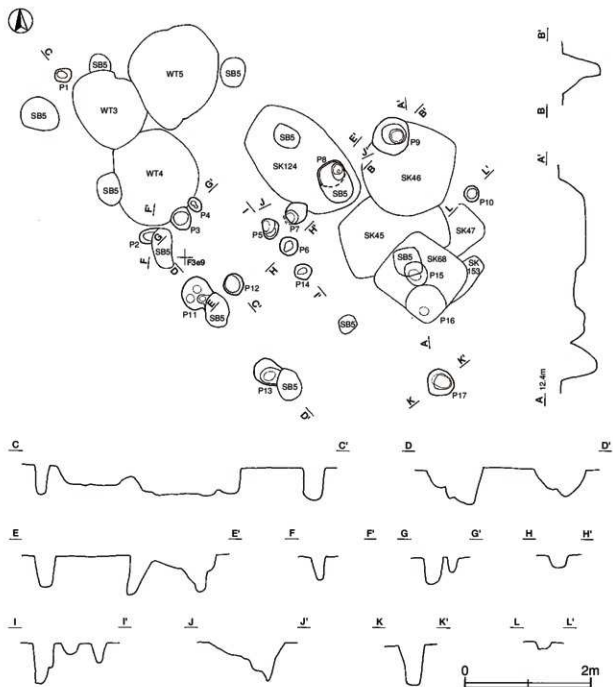
第111図 第1号ピット群実測図

表12 第1号ピット群ピット一覧表

ピット番号	位置	形状	規模 (cm)		ピット番号	位置	形状	規模 (cm)	
			長径×短径	深さ				長径×短径	深さ
1	E 4 i5	円形	16	35	7	E 4 i5	楕円形	29×25	-
2	E 4 i5	不定形	54×36	65	8	E 4 i5	楕円形	35×30	-
3	E 4 i5	楕円形	33×29	33	9	E 4 i5	楕円形	24×21	64
4	E 4 i5	楕円形	30×24	-	10	E 4 i4	円形	17×15	-
5	E 4 i5	楕円形	30×23	-	11	E 4 i4	円形	20	-
6	E 4 i5	楕円形	40×20	-	12	E 4 j4	楕円形	28×23	-

第3号ピット群 (第112図)

調査区I区南部のF3 d9~F3 e0区に、17か所のピットが検出された。標高12.1mの台地平坦部に位置し、平面形は長径24~62cmの円形と楕円形で、深さは12~70cmである。土師質土器片4点(焙烙)、陶器片3点(瀬戸・美濃系碗類, 京焼系碗類, 瀬戸・美濃系瓶類)、磁器片3点(肥前系統碗類2, 産地不明碗類1)、石器1点(砥石)がピット内から出土している。時期は、周囲に18世紀後半から19世紀初頭に比定される掘立柱建物跡が確認されていることから、近世後半と考えられる。



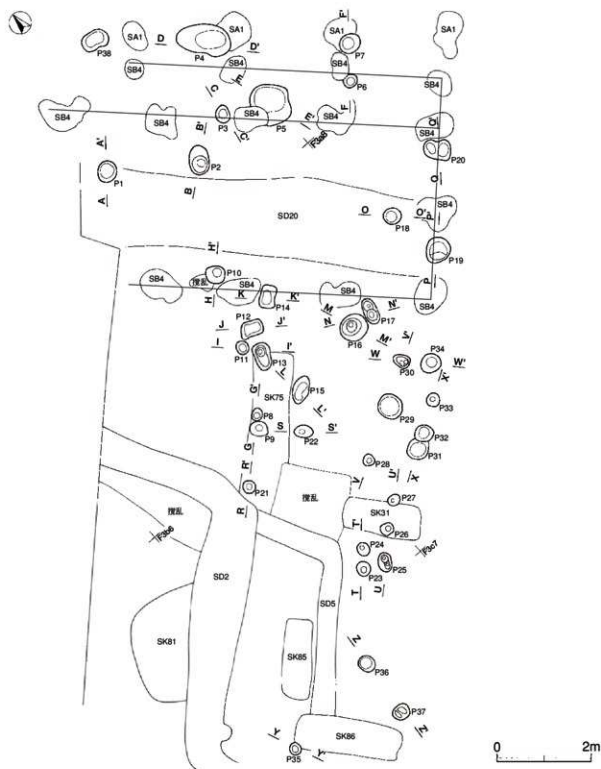
第112図 第3号ビット群実測図

表13 第3号ビット群ビット一覧表

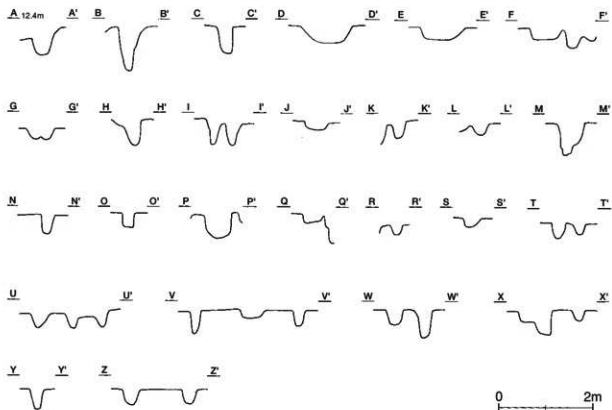
ビット番号	位置	形状	規模 (cm)		ビット番号	位置	形状	規模 (cm)	
			長径×短径	深さ				長径×短径	深さ
1	F 3 d8	楕円形	26×20	48	10	F 3 d0	円形	24×23	12
2	F 3 d8	[楕円形]	(22)×22	35	11	F 3 e9	[楕円形]	50×(42)	42
3	F 3 d8	[楕円形]	(43)×32	37	12	F 3 e9	円形	32	50
4	F 3 d9	楕円形	24×18	20	13	F 3 e9	[楕円形]	(40)×38	33
5	F 3 d9	楕円形	32×24	64	14	F 3 e9	円形	27×26	30
6	F 3 d9	円形	30	17	15	F 3 e9	[楕円形]	(40)×(31)	43
7	F 3 d9	楕円形	38×33	61	16	F 3 e9	[円形]	(62)×(56)	57
8	F 3 d9	楕円形	50×40	57	17	F 3 e0	楕円形	44×41	70
9	F 3 d9	円形	58×57	60					

第6号ピット群 (第113・114図)

調査区I区中央部から南部のE3i5～F3c8区に、38か所のピットが検出された。標高12.1mの台地平坦部に位置し、平面形は長径22～110cmの円形や不定形のもの、長軸24～86cmの方形状のものがあり、深さは18～90cmである。時期は、周囲に18世紀後半から19世紀初頭に比定される掘立柱建物跡が確認されていることから、近世後半と考えられる。



第113図 第6号ピット群実測図(1)



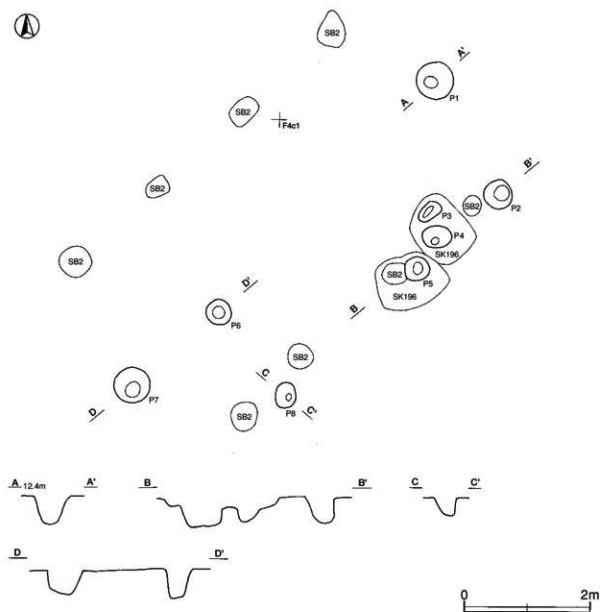
第114図 第6号ビット群実測図(2)

表14 第6号ビット群ビット一覧表

ビット 番号	位置	形状	規模 (cm)		ビット 番号	位置	形状	規模 (cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ				長径(軸)×短径(軸)	深さ
1	E 3 7r	円形	42×40	40	20	F 3 a8	不定形	58×36	30
2	E 3 7r	楕円形	60×44	90	21	F 3 b6	円形	28×27	20
3	E 3 7r	楕円形	38×32	—	22	F 3 b6	楕円形	40×29	20
4	E 3 7r	楕円形	110×65	68	23	F 3 b6	円形	28×26	22
5	E 3 8s	方形	86×84	26	24	F 3 b6	円形	22	34
6	E 3 8s	円形	30	18	25	F 3 b6	楕円形	33×21	26
7	E 3 8s	楕円形	46×40	30	26	F 3 b6	隅丸長方形	28×24	31
8	F 3 a6	円形	25×23	22	27	F 3 b7	楕円形	27×21	33
9	F 3 a6	楕円形	40×30	22	28	F 3 b7	隅丸方形	24×22	50
10	F 3 a7	円形	41	53	29	F 3 b7	不定形	70×40	18
11	F 3 a7	円形	29×28	51	30	F 3 b7	楕円形	33×28	29
12	F 3 a7	長方形	47×28	19	31	F 3 b7	[楕円形]	42×(34)	50
13	F 3 a7	楕円形	43×32	43	32	F 3 b7	円形	39	21
14	F 3 a7	長方形	50×30	36	33	F 3 b7	楕円形	30×27	21
15	F 3 a7	楕円形	62×35	24	34	F 3 b7	楕円形	44×39	62
16	F 3 a7	楕円形	44×26	31	35	F 3 c5	円形	23	33
17	F 3 a7	楕円形	63×56	65	36	F 3 c6	円形	38×35	32
18	F 3 a8	楕円形	39×33	30	37	F 3 c6	方形	33×30	31
19	F 3 a8	円形	54×51	48	38	E 3 i7	楕円形	58×36	—

第7号ピット群 (第115図)

調査区I区南部のF3b0～F4d1区に、8か所のピットが検出された。標高12.2mの台地平坦部に位置し、平面形は長径39～60cmの円形や楕円形で、深さは29～47cmである。時期は、周囲に18世紀後半に比定される掘立柱建物跡が確認されていることから、近世後半と考えられる。



第115図 第7号ピット群実測図

表15 第7号ピット群ピット一覧表

ピット番号	位置	形状	規模 (cm)		ピット番号	位置	形状	規模 (cm)	
			長径×短径	深さ				長径×短径	深さ
1	F 4 b1	円形	60×39	42	5	F 4 c1	円形	39	45
2	F 4 c1	円形	46×43	40	6	F 3 c0	円形	42×40	37
3	F 4 c1	楕円形	39×26	—	7	F 3 d0	円形	57×54	47
4	F 4 c1	楕円形	48×36	36	8	F 4 d1	楕円形	40×31	29

4 その他の時代の遺構と遺物

今回の調査で、時期や性格の明確でない掘立柱建物跡1棟、柵跡1列、溝跡2条、道路跡1条、井戸跡6基、土坑221基、ピット群3か所を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 掘立柱建物跡

第7号掘立柱建物跡 (第116図)

位置 調査区Ⅱ区南部のI 1 c9～I 1 d0区、標高10.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第326号土坑との新旧関係は不明である。

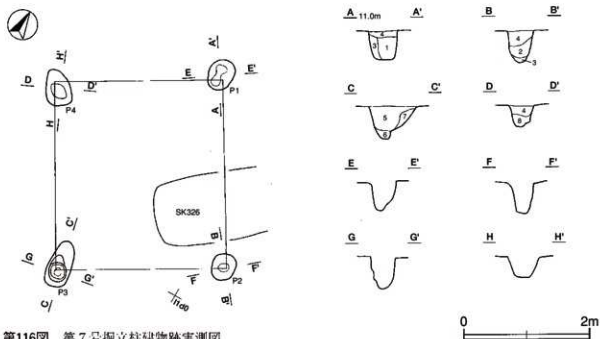
規模と構造 桁行1間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向N-32°-Wである。規模は、桁行3.0m、梁行2.7mで、面積は8.10㎡である。柱間寸法は、桁行3.0m (10尺)、梁行2.7m (9尺)を基調としている。

柱穴 4か所。深さは34～59cmである。土層は、第1・2層が抜き取り痕、第3層が埋土である。埋土は突き固められている。柱のあたりは、柱穴の底面に凹凸があるため、不明瞭である。

土層解説 (各柱穴共通)

- | | |
|-------------------------|------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量 | 5 黒褐色 ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子微量 | 6 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量 (締まり強い) | 7 褐色 ロームブロック中量 |
| 4 黒褐色 ローム粒子中量 | 8 黒褐色 ロームブロック極微量 |

所見 性格は、構造から倉庫と想定されるが、時期は不明である。



第116図 第7号掘立柱建物跡実測図

(2) 柵跡

第3号柵跡 (第117図)

位置 調査区Ⅱ区中央部のH 2 f1～H 2 g2区、標高10.9mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第376号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長さは2.7mで、方向はN-55°-E、柱間寸法が0.9～1.2mである。

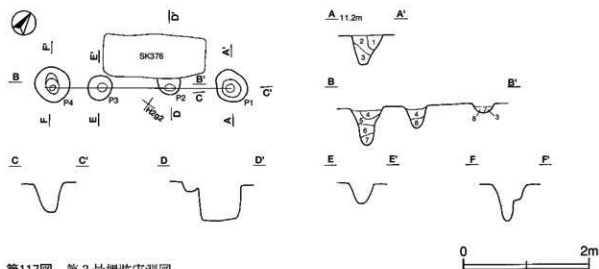
柱穴 4か所。長径32～71cm、短径14～47cmの円形と楕円形または不定形である。断面形はU字状または箱状を呈し、深さは14～47cmである。各柱穴の覆土は、柱抜き取りの痕跡を呈している。

土層解説 (各柱穴共通)

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量

- 5 黒褐色 ローム粒子微量 (しまり強い)
- 6 黒褐色 ロームブロック微量 (しまり強い)
- 7 暗褐色 ロームブロック微量 (しまり強い)
- 8 褐色 ロームブロック中量

所見 時期は、不明である。



第117図 第3号溝跡実測図

(3) 溝跡

第10号溝跡 (第25・118図)

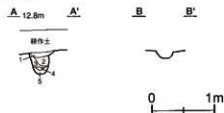
位置 調査区I区中央部のF 4 a4～F 4 b4区、標高12.2mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南端が調査区域外へ延び、確認できた長さは2.0mである。南東方向(N-138°-E)へ直線的に調査区域外へ延びている。規模は上幅26～35cm、下幅12～28cm、深さ12～28cmである。断面はU字状で、壁は直立して立ち上がっている。また、北端から南端へ向かって傾斜している。

覆土 5層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 褐色 ローム粒子少量
- 5 褐色 ローム粒子多量



所見 時期は、不明である。

第118図 第10号溝跡実測図

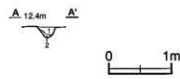
第15号溝跡 (第25・119図)

位置 調査区I区中央部から南部のF 4 b1～F 4 c2区、標高12.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第18号土坑を掘り込んでいます。

規模と形状 北端が掘り込まれ、南端が調査区域外へ延び、確認できた長さは6.6mである。南東方向(N-137°-E)へ直線的に延びている。規模は上幅30cmほど、下幅10cmほど、深さ10～20cmである。断面はU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、南端へ向かって傾斜している。

覆土 2層に分層される。含有物やブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。



第119図 第15号溝跡実測図

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

2 暗褐色 ローム粒子少量

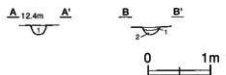
遺物出土状況 流れ込んだ縄文土器片1点が出土している。

所見 時期は、不明である。

第17号溝跡 (第25・120図)

位置 調査区I区南部のF4c1～F4d2区、標高12.2mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南端が調査区域外へ延び、確認できた長さは2.2mである。南東方向(N-138°-E)へ直線的に延びている。規模は上幅18～26cm、下幅7～11cm、深さ20cmほどである。断面はU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、南端へ向かって傾斜している。



覆土 2層に分層される。含有物やブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量

2 黒褐色 ロームブロック少量

第120図 第17号溝跡実測図

所見 時期は、不明である。

第18号溝跡 (第25・121図)

位置 調査区I区南部のF4c1～F4d2区、標高12.2mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南端が調査区域外へ延び、確認できた長さは2.2mである。南東方向(N-137°-E)へ直線的に延びている。規模は上幅23～78cm、下幅12～67cm、深さ10～18cmである。断面はU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、南端へ向かって傾斜している。

覆土 2層に分層される。含有物やブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。



土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量

2 暗褐色 ロームブロック少量

第121図 第18号溝跡実測図

遺物出土状況 流れ込んだ縄文土器片1点が出土している。

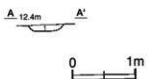
所見 時期は、不明である。

第24号溝跡 (第25・122図)

位置 調査区I区中央部のE4i2～E4j3区、標高12.3mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長さは8.2mで、南西方向(N-134°-W)へ直線的に延びている。規模は上幅52～76cm、下幅40～64cm、深さ10cmほどである。断面は逆台形状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、南西部へ向かって傾斜している。

覆土 単層である。レンズ状に堆積した自然堆積と考えられる。



土層解説

1 黒褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師質土器片1点(焙烙)、磁器片2点(肥前系統碗類)が出土している。

所見 時期は、不明である。

第122図 第24号溝跡実測図

第26号溝跡 (第25・123図)

位置 調査区Ⅱ区北部のG 2 h8区、標高11.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第25号溝に掘り込まれている。

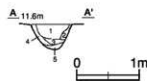
規模と形状 南端が第25号溝と重複しているため、確認された長さは3.5mである。南西方向(N-134°-W)へ直線的に伸び、第25号溝と重複している。規模は上幅44~56cm、下幅20~28cm、深さ32~38cmである。断面は逆台形状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、南西部へ向かって傾斜している。

覆土 5層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | |
|---|-----|-----------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 | 褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 | 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 | 褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 | 褐色 | ロームブロック中量 |

所見 時期は、不明である。



第123図 第26号溝跡実測図

第27号溝跡 (第25・124図)

位置 調査区Ⅱ区北部のG 2 h9~G 2 i9区、標高11.4mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第28号溝に掘り込まれている。

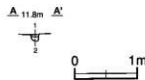
規模と形状 長さ5.4mで、北西方向(N-43°-W)へ直線的に伸び、中央部で第28号溝と重複している。規模は上幅16~28cm、下幅4~16cm、深さ6~12cmである。断面はU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、中央部が最も深くなっている。

覆土 2層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | |
|---|-----|-----------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 | 褐色 | ロームブロック中量 |

所見 時期は、不明である。



第124図 第27号溝跡実測図

第28号溝跡 (第25・125図)

位置 調査区Ⅱ区北部のG 2 h9~G 2 i0区、標高11.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第27号溝跡を掘り込み、第25号溝、第276号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 最大長8.8m、最大幅1.0mで、平面形はY字状である。二又に分かれた北端から南西方向(N-122°-W)へ直線的に伸びた後、第25号溝と連結している。断面は逆台形状及びU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、第25号溝へ向かって深くなっている。

覆土 7層に分層される。各層ごとに異なった堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説 (A-A')

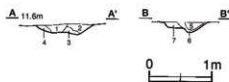
- | | | |
|---|-----|-----------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 | 灰褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 | 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 | 灰褐色 | ロームブロック少量 |

土層解説 (B-B')

- | | | |
|---|-----|-----------|
| 5 | 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 6 | 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 7 | 灰褐色 | ローム粒子少量 |

遺物出土状況 流れ込んだ縄文土器片1点が出土している。

所見 時期は、不明である。



第125図 第28号溝跡実測図

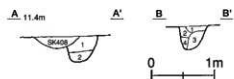
第29号溝跡 (第25・126図)

位置 調査区Ⅱ区北部のH 2 a8～H 2 b0区, 標高11.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第25・40・51・52号溝跡, 第286号土坑を掘り込み, 第408号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北端が調査区域外へ延び, 確認できた長さは10.8mである。南西方向(N-54°-E)へ直線的に延び, 調査区域外へ延びている。規模は上幅40～80cm, 下幅8～39cm, 深さ34～40cmである。断面はU字状で, 壁は外傾して立ち上がっている。また, 北東へ向かって傾斜している。

覆土 4層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。



土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 粘土粒子多量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 瓦質土器片1点(焙烙)が出土している。

所見 時期は, 不明である。

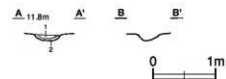
第126図 第29号溝跡実測図

第31号溝跡 (第25・127図)

位置 調査区Ⅱ区北部のG 2 f7～G 2 g7区, 標高11.7mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第446号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南端が第446号土坑に掘り込まれているため, 確認できた長さは4.7mである。南西方向(N-130°-W)へ直線的に延びている。規模は上幅40cmほど, 下幅30cmほど, 深さ25cmほどである。断面はU字状で, 壁は外傾して立ち上がっている。また, 南西部へ向かって傾斜している。



覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

所見 時期は, 不明である。

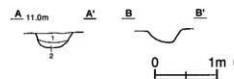
第127図 第31号溝跡実測図

第33号溝跡 (第25・128図)

位置 調査区Ⅱ区中央部のH 1 i6～H 1 j9区, 標高10.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第335号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西端が調査区域外へ延び, 確認できた長さは14.8mである。北端から南西方向(N-121°-W)へ直線的に調査区域外へ延びている。規模は上幅46～72cm, 下幅24～36cm, 深さ18～22cmである。断面は逆台形状で, 壁は外傾して立ち上がっている。また, 南端へ向かって傾斜している。



覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子中量

所見 時期は, 不明である。

第128図 第33号溝跡実測図

第34号溝跡 (第25・129図)

位置 調査区Ⅱ区中央部のH1i6～H1j9区、標高10.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第37号溝跡を掘り込み、第335・358号土坑に掘り込まれている。

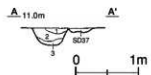
規模と形状 西端が調査区域外へ延び、確認できた長さは14.4mである。北端から南西方向(N-116°-W)へ直線的に調査区域外へ延びている。規模は上幅46～68cm、下幅24～32cm、深さ6～18cmである。断面は逆台形状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、南端へ向かって傾斜している。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子極微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量

所見 時期は、不明である。



第129図 第34号溝跡実測図

第37号溝跡 (第25・130図)

位置 調査区Ⅱ区中央部のH1j6区、標高10.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第36号溝、第335号土坑に掘り込まれている。

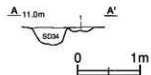
規模と形状 西端が調査区域外へ延び、北端が第36号溝に掘り込まれているため、確認できた長さは4.4mである。西端から北東方向(N-62°-E)へ直線的に延びている。規模は上幅40～46cm、下幅32～36cm、深さ6～8cmである。断面は逆台形状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、北端へ向かって傾斜している。

覆土 単一層である。含有物から自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量

所見 時期は、不明である。



第130図 第37号溝跡実測図

第39号溝跡 (第25・131図)

位置 調査区Ⅱ区北部のH2h8区、標高11.2mの台地平坦部に位置している。

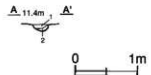
規模と形状 長さは1.9mで、南端から北西方向(N-32°-W)へ直線的に延びている。規模は上幅20cm、下幅6～10cm、深さ8～12cmである。断面はU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、北端へ向かって深くなっている。

覆土 2層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 褐色 ロームブロック中量

所見 時期は、不明である。



第131図 第39号溝跡実測図

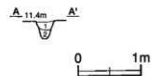
第40号溝跡 (第25・132図)

位置 調査区Ⅱ区北部のH2b8区、標高11.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第29号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北端が第29号溝に掘り込まれ、南端が調査区域外へ延び、確認できた長さは2.1mである。北端から南東方向(N-151°-E)へ直線的に調査区域外へ延びている。規模は上幅22～28cm、下幅7～12cm、深

さ8~14cmである。断面はU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、南端へ向かって深くなっている。



第132図 第40号溝跡実測図

覆土 2層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ロームブロック中量

所見 時期は、不明である。

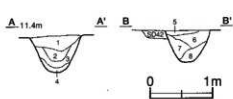
第41号溝跡 (第25・133図)

位置 調査区Ⅱ区北部のG 2 h4~H 2 b8区、標高11.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第42号溝跡、第410号土坑を掘り込み、第25号溝、第1号道路に掘り込まれている。

規模と形状 北端が第25号溝に掘り込まれているため、確認できた長さは17.8mである。北端から南西方向(N-138°-W)へ直線的に延びている。規模は上幅58~80cm、下幅16~20cm、深さ12~21cmである。断面はU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、南端へ向かって深くなっている。

覆土 8層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。



第133図 第41号溝跡実測図

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量
- 6 極暗褐色 ローム粒子少量、粘土ブロック微量
- 7 暗褐色 ロームブロック少量
- 8 褐色 ロームブロック中量

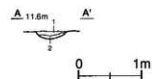
所見 時期は、不明である。

第42号溝跡 (第25・134図)

位置 調査区Ⅱ区北部のG 2 h4~G 2 j6区、標高11.4mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第43号溝跡を掘り込み、第41号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南端が第41号溝に掘り込まれているため、確認できた長さは10.4mである。北端から南東方向(N-142°-E)へ緩曲状に延びている。規模は上幅42~64cm、下幅16~40cm、深さ5~20cmである。断面はU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、南端へ向かって深くなっている。



第134図 第42号溝跡実測図

覆土 2層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子中量

所見 時期は、不明である。

第43号溝跡 (第25・135図)

位置 調査区Ⅱ区北部のG 2 h3~G 2 j6区、標高11.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第42号溝跡、第414号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長さ15.4mで、北端から南西方向(N-130°-W)へ直線的に延びている。規模は上幅32~46

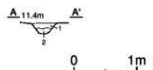
cm, 下幅12~28cm, 深さ4~10cmである。断面はU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、南端へ向かって深くなっている。

覆土 2層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | |
|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 |

所見 時期は、不明である。



第135図 第43号溝跡実測図

第44号溝跡 (第25・136図)

位置 調査区Ⅱ区北部から中央部のH1a0~H2c1区, 標高11.0mの台地平坦部に位置している。

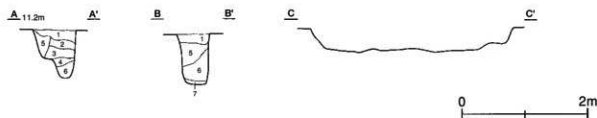
規模と形状 北端が調査区域外へ延び、確認できた長さは6.1mである。北端から南西方向(N-175°-W)へ波状に延びている。規模は上幅50~84cm, 下幅19~50cm, 深さ28~80cmである。断面は不定形及び逆台形で、壁は外傾及び直立して立ち上がっている。また、南端へ向かって深くなっている。

覆土 7層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子多量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量 | 6 暗褐色 | ローム粒子多量 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量 | 7 褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量 | | |

所見 時期は、不明である。



第136図 第44号溝跡実測図

第46号溝跡 (第25・137図)

位置 調査区Ⅱ区北部のG2h2~G2j5区, 標高11.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第436号土坑に掘り込まれている。

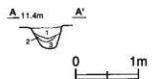
規模と形状 北端を第436号土坑に掘り込まれているため、確認できた長さは14.2mである。北端から南西方向(N-125°-W)へ直線的に調査区域外へ延びている。規模は上幅46~78cm, 下幅14~51cm, 深さ20~48cmである。断面は逆台形で、壁は外傾及び直立して立ち上がっている。また、南端へ向かって深くなっている。

覆土 3層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | |
|-------|------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・砂粒少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 |

所見 時期は、不明である。

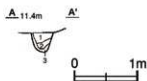


第137図 第46号溝跡実測図

第50号溝跡 (第25・138図)

位置 調査区Ⅱ区中央部のH1d9区、標高10.9mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北端が調査区域外へ延び、確認できた長さは2.8mである。北端から南東方向(N-151°-E)へ直線的に延びている。規模は上幅20~29cm、下幅8~16cm、深さ10~30cmである。断面はU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。また、中央部が深くなっている。



第138図 第50号溝跡実測図

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子少量、炭化物極微量
- 2 灰褐色 ローム粒子微量、炭化粒子極微量
- 3 褐色 ロームブロック少量

所見 時期は、不明である。

表16 その他の時代 溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模 (cm 確認長はm)				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	参考 重複関係 (古-新)
				確認長	上幅	下幅	深さ					
10	F 4a4-F 4b4	N-138°-E	直線状	(2.0)	26-35	12-28	12-28	直立	凹状	人為	—	
15	F 4b1-F 4c2	N-130°-E	直線状	(6.6)	30	10	10-20	外傾	凹状	人為	縄文土器	SK180→本跡
17	F 4c1-F 4d2	N-136°-E	直線状	(2.2)	18-26	7-11	20	外傾	凹状	人為	—	
18	F 4c1-F 4d2	N-137°-E	直線状	(2.2)	23-78	12-67	10-18	外傾	凹状	人為	縄文土器	
24	E 4i2-E 4j3	N-134°-W	直線状	8.2	52-76	40-64	10	外傾	平坦	自然	土層質土器、磁器	
26	G 2b8	N-134°-W	直線状	(3.5)	44-56	20-28	32-36	外傾	凹状	人為	—	本跡→SD25
27	G 2b9-G 2i9	N-43°-W	直線状	5.4	16-28	4-16	6-12	外傾	凹状	人為	—	本跡→SD28
28	G 2b9-G 2i0	N-122°-W	Y字状	8.8	100	30-50	12-18	外傾	凸凹	人為	縄文土器	SD27→本跡→S1025, SK276
29	H 2a8-H 2b0	N-54°-E	直線状	(10.8)	40-80	8-39	34-40	外傾	凹状	人為	—	SD25-40-51-52, SK286→本跡→SK408
31	G 2f7-G 2g7	N-130°-W	直線状	(4.7)	40	30	25	外傾	凹状	自然	—	本跡→SK446
33	H 1a6-H 1j9	N-121°-W	直線状	(14.8)	46-72	24-36	18-22	外傾	凹状	自然	—	本跡→SK335
34	H 1a6-H 1j9	N-116°-W	直線状	(14.4)	46-68	24-32	6-18	外傾	凹状	自然	—	SD37→本跡→SK335-358
37	H 1a6	N-62°-E	直線状	(4.4)	40-46	32-36	6-8	外傾	凸凹	自然	—	本跡→SD4, SK335
39	H 2b8	N-32°-W	直線状	1.9	20	6-10	8-12	外傾	凹状	人為	—	
40	H 2b8	N-151°-E	直線状	(2.1)	22-28	7-12	8-14	外傾	凹状	人為	—	本跡→SD29
41	G 2i4-H 2b8	N-138°-W	直線状	(17.8)	56-80	16-20	12-21	外傾	凹状	人為	—	SD42, SK410→本跡→SD25
42	G 2b4-G 2j6	N-142°-E	扇面状	(10.4)	42-64	16-40	5-20	外傾	凹状	人為	—	SD43→本跡→SD41
43	G 2b3-G 2j6	N-130°-W	直線状	15.4	32-46	12-28	4-10	外傾	凹状	人為	—	本跡→SD42, SK414
44	H 1a0-H 2c1	N-175°-W	波状	(6.1)	50-84	19-50	28-80	外傾・直立	凸凹	人為	—	
46	G 2h2-G 2j5	N-125°-W	直線状	(14.2)	46-78	14-51	20-48	外傾・直立	凹状	人為	—	本跡→SK436
50	H 1d9	N-151°-E	直線状	(2.8)	20-29	8-16	10-30	外傾	凹状	自然	—	

(4) 道路跡

第1号道路跡 (第25・139図)

位置 調査区Ⅱ区北部のG 2g6-G 2a9区、標高11.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第25・41号溝跡、第446号土坑を掘り込んでいます。

規模と形状 両端が不明なため、確認できた長さは7.2mで、北西方向(N-43°-W)へ直線的に延びている。規模は上幅130~173cmである。

覆土 3層に分層される。ロームを含み、締まりの強い堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック多量（締まり非常に強い）
 2 黒褐色 ローム粒子微量

- 3 黒褐色 ロームブロック微量

所見 時期は、不明である。



第139図 第1号道路跡実測図

(5) 井戸跡

第3号井戸跡（第140図）

位置 調査区Ⅱ区南部のI1f8区、標高10.7mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.56m、短径1.11mの楕円形で、断面は漏斗状である。確認面から120cm掘り下げた時点で、崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

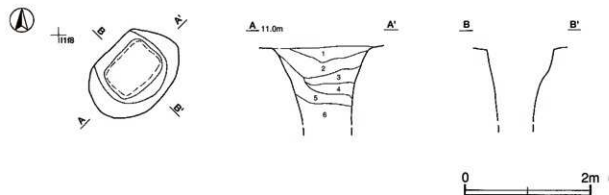
土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
 2 黒褐色 ロームブロック微量
 3 明褐色 ローム粒子多量

- 4 暗褐色 ローム粒子少量
 5 暗褐色 ロームブロック微量
 6 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 流れ込んだ縄文土器片1点（深鉢）が出土している。

所見 時期は、時期判定資料が出土していないことから、不明である。



第140図 第3号井戸跡実測図

第4号井戸跡（第141図）

位置 調査区Ⅱ区南部のI1g6区、標高10.6mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 径0.88mの円形で、断面は箱状である。確認面から100cm掘り下げた時点で、崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

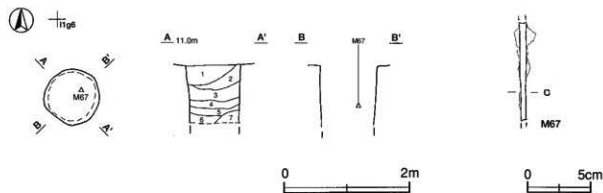
覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|--------|------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量・粘土ブロック極微量 | 5 黒色 | ロームブロック極微量 |
| 2 黒色 | 粘土ブロック・ローム粒子極微量 | 6 黒色 | ローム粒子極微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子微量 | 7 極暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック極微量 | | |

遺物出土状況 鉄製品1点(釘)が出土している。M67は覆土中層から出土している。

所見 時期は、時期判定資料が出土していないことから、不明である。



第141図 第4号井戸跡・出土遺物実測図

第4号井戸跡出土遺物観察表(第67図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M67	釘	(7.9)	0.4	0.4	(10.3)	鉄	角野 両端部欠損	覆土中層	

第5号井戸跡(第142図)

位置 調査区Ⅱ区南部のI 1g8区、標高10.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第32号溝に北部が掘り込まれ、南部は調査区域外へと延びている。

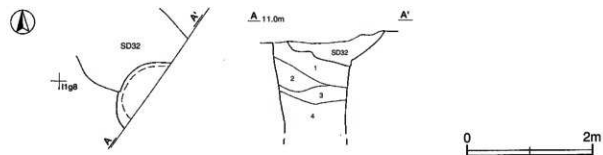
規模と形状 長径1.23m、短径0.45mが確認され、円形と推測される。断面は箱状で、確認面から104cm掘り下げた時点で、崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | 粘土ブロック・ロームブロック微量 | 3 黒色 | ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量、炭化粒子極微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック微量 |

所見 時期は、時期判定資料が出土していないことから、不明である。



第142図 第5号井戸跡実測図

第6号井戸跡 (第143図)

位置 調査区Ⅱ区南部のI 1 b7区、標高10.8mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.85m, 短径0.79mの円形で、断面は箱状である。確認面から90cm掘り下げた時点で湧水したため、下部の調査を断念した。

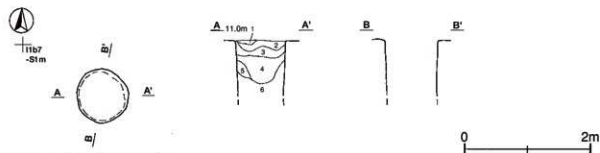
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | |
|--------------------------------|----------------|
| 1 暗褐色 粘土粒子少量, ローム粒子微量, 焼土粒子極微量 | 4 黒褐色 ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 粘土ブロック・ローム粒子微量 | 5 黒褐色 ローム粒子微量 |
| 3 黒暗褐色 ロームブロック少量 | 6 黒色 ロームブロック少量 |

遺物出土状況 流れ込んだ縄文土器片2点(深鉢)が出土している。

所見 時期は、時期判定資料が出土していないことから、不明である。



第143図 第6号井戸跡実測図

第7号井戸跡 (第144図)

位置 調査区Ⅱ区南部のI 1 b9区、標高10.7mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第365号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.68m, 短径1.53mの円形で、断面は漏斗状である。確認面から118cm掘り下げた時点で、崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

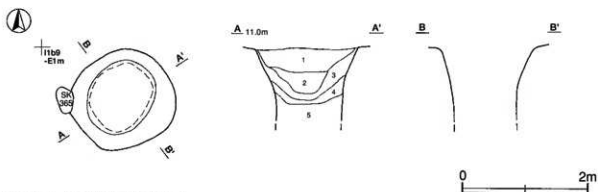
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | |
|-------------------------|---------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量, 粘土ブロック微量 | 4 暗褐色 ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック微量 | 5 褐色 ローム粒子中量 |
| 3 明褐色 ローム粒子多量 | |

遺物出土状況 流れ込んだ縄文土器片1点(深鉢), 土師器片1点(甕), 土師質土器片1点(皿)が出土している。

所見 時期は、時期判定資料が出土していないことから、不明である。



第144図 第7号井戸跡実測図

第9号井戸跡 (第145図)

位置 調査区Ⅱ区中央部のH2h3区、標高11mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第354号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径2.00m、短径1.80mの楕円形で、断面は漏斗状である。確認面から110cm掘り下げた時点で、崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

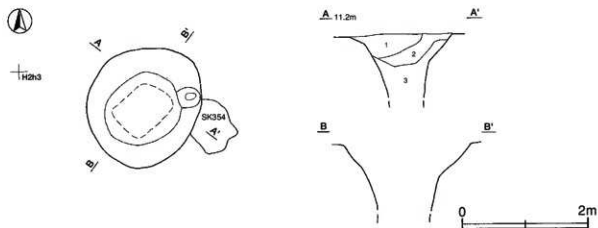
覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量 3 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物極微量
2 褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 流れ込んだ縄文土器片3点(深鉢)、石器1点(石臼)が出土している。

所見 時期は、時期判定資料が出土していないことから、不明である。



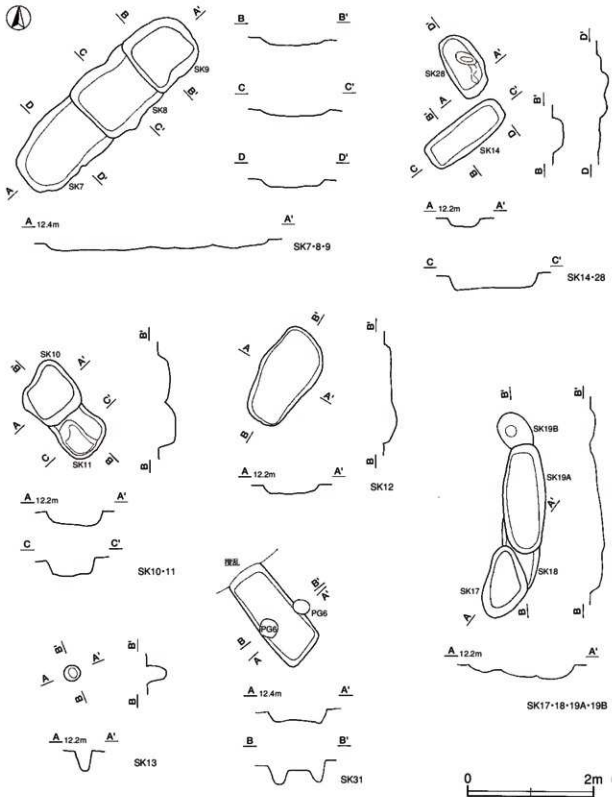
第145図 第9号井戸跡実測図

表17 その他の時代 井戸跡一覧表

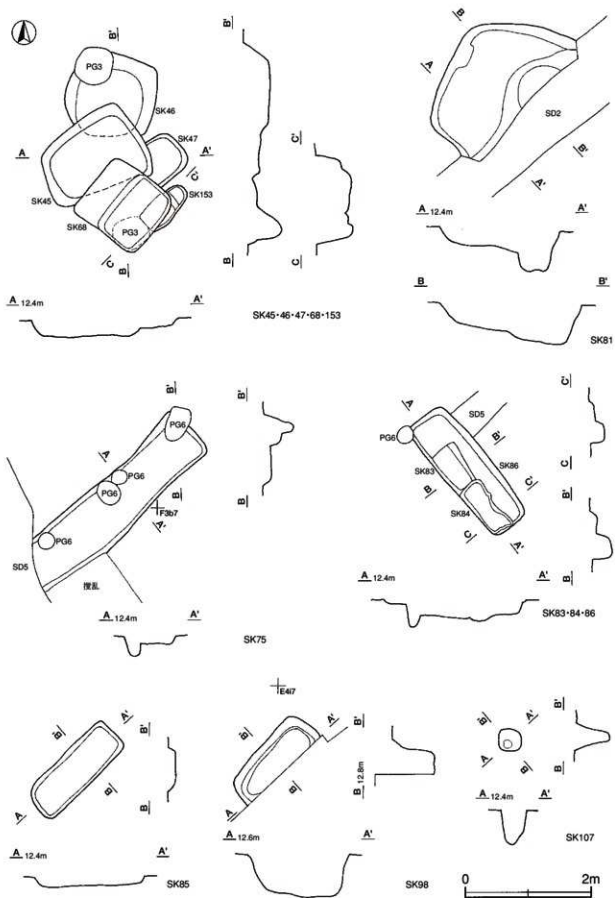
番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m)		断面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (重複関係 古→新)
				長径×短径	深さ (cm)					
3	I 1 f8	N-48°-E	楕円形	1.56×1.11	(120)	漏斗状	不明	自然	縄文土器	
4	I 1 g6	—	円形	0.88	(100)	箱状	不明	自然	鉄製品	
5	I 1 g8	—	[円形]	1.23×(0.45)	(104)	箱状	不明	自然		本跡→SD32
6	I 1 b7	—	円形	0.85×0.79	(90)	箱状	不明	自然	縄文土器	
7	I 1 b9	—	円形	1.68×1.33	(118)	漏斗状	不明	自然	縄文土器、土師器、土師質土器	本跡→SK366
9	H 2 h3	N-50°-E	楕円形	2.00×1.80	(110)	漏斗状	不明	自然	縄文土器、石器	SK354→本跡

(6) 土坑 (第146~163図)

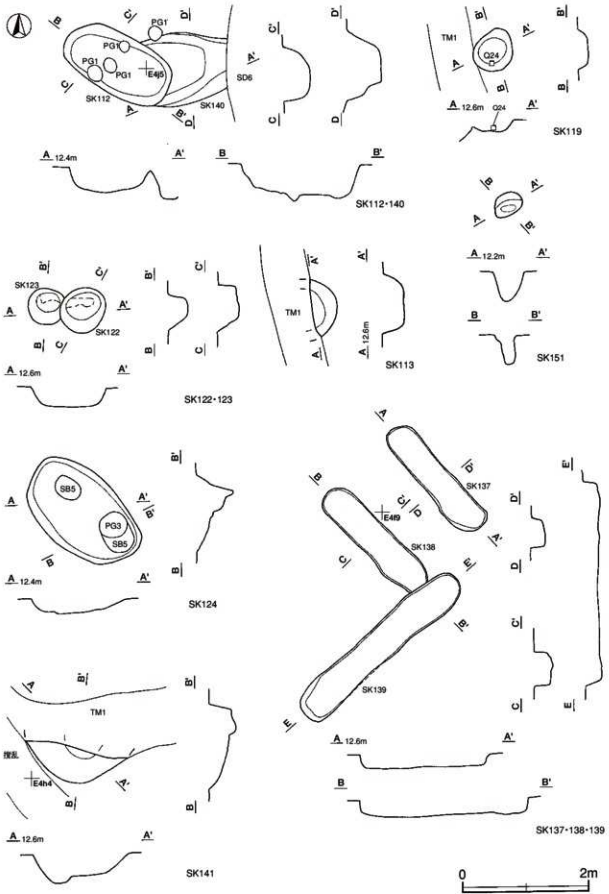
遺物や重複関係から時期及び性格が明確にできなかった土坑は、221基確認されている。以下、これらの土坑について、実測図と遺物及び一覧表を記載する。



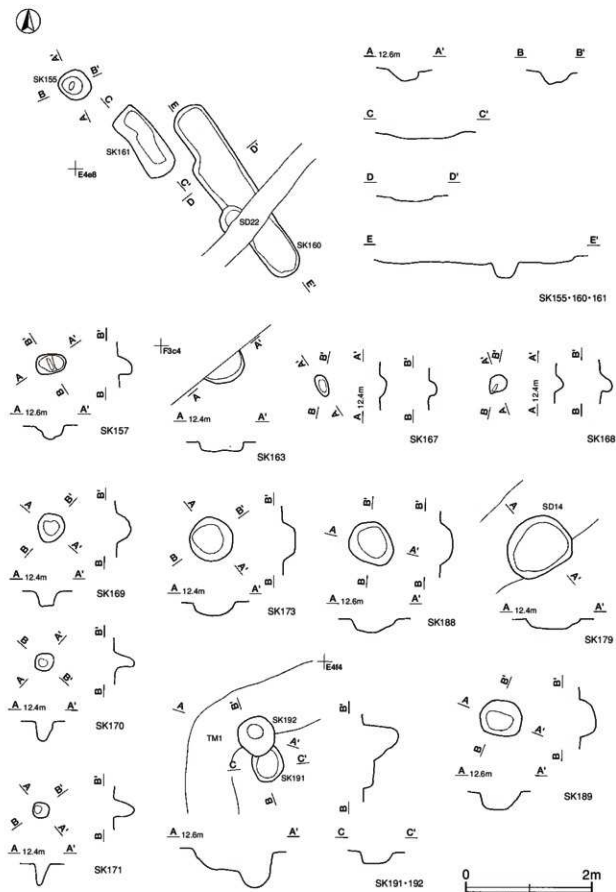
第146図 その他の土坑実測図(1)



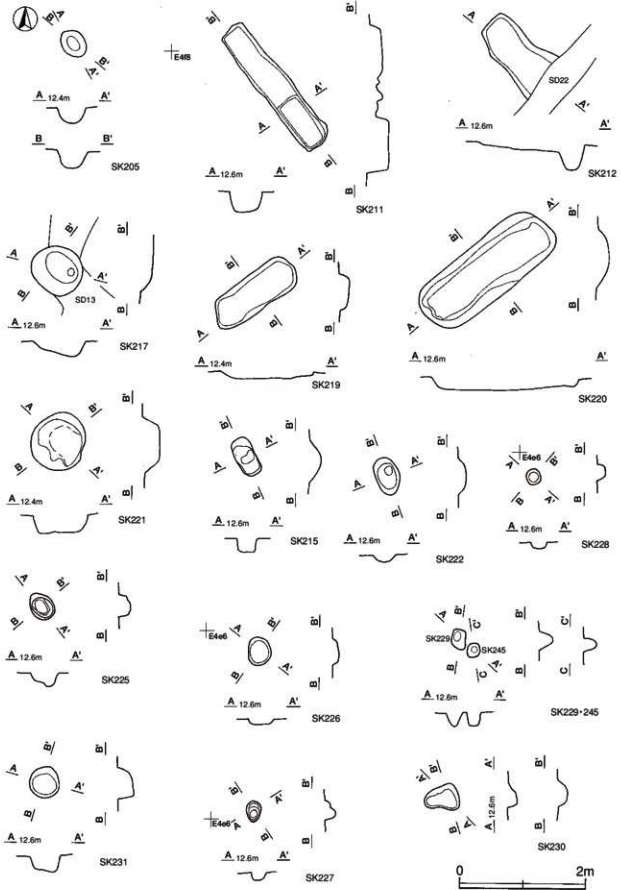
第147図 その他の土坑実測図(2)



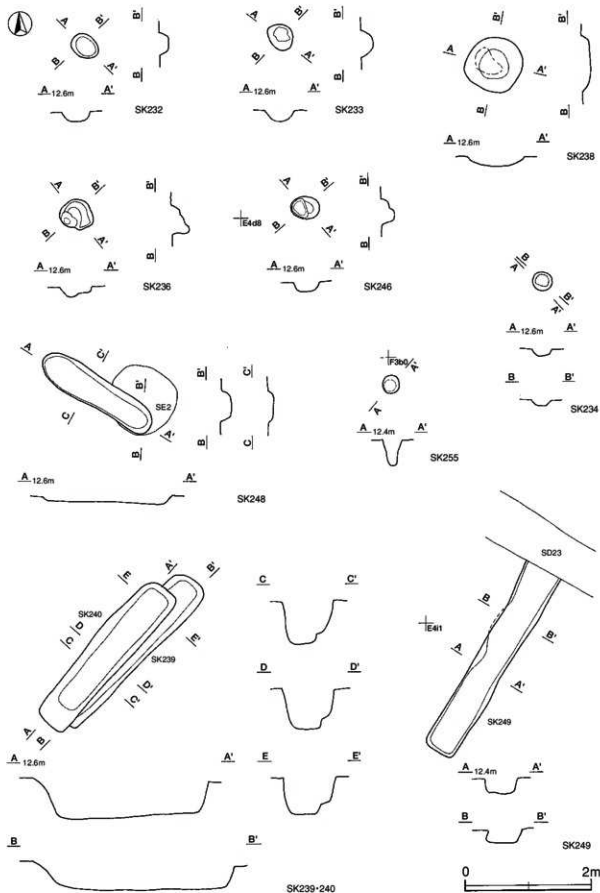
第148図 その他の土坑実測図(3)



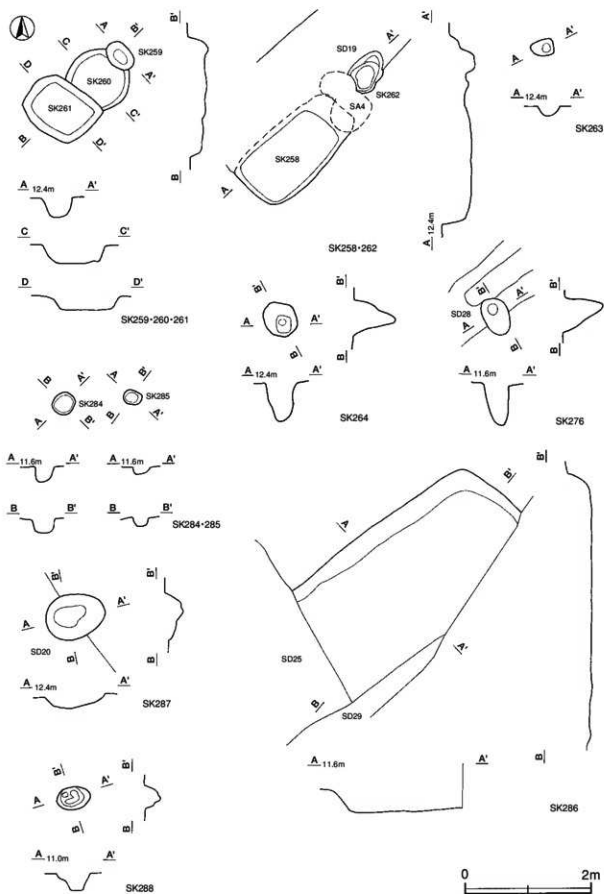
第149図 その他の土坑実測図(4)



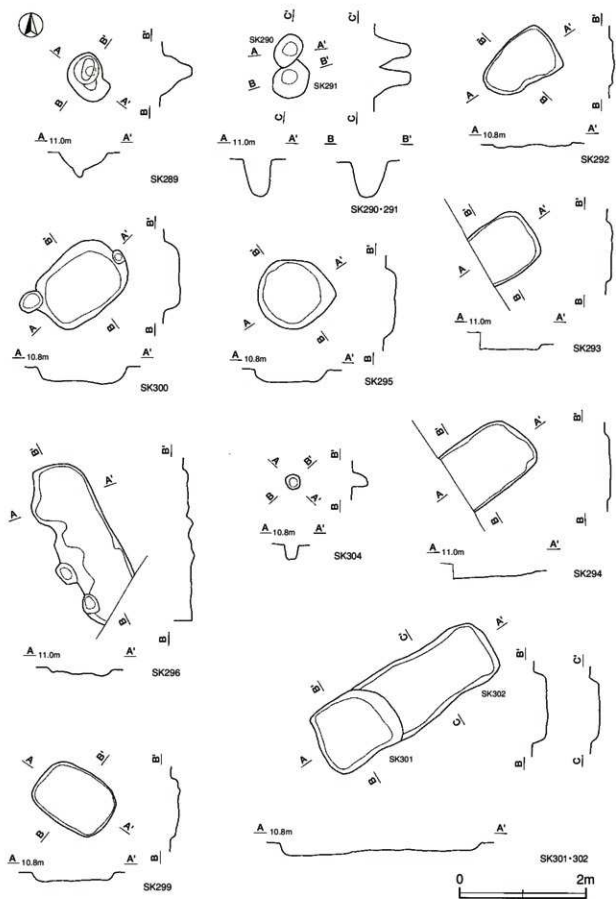
第150図 その他の土坑実測図(5)



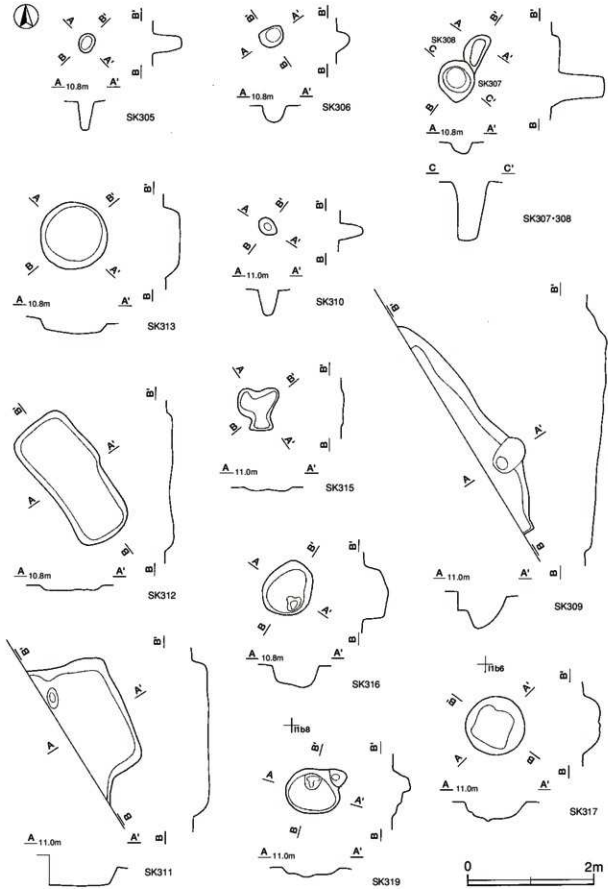
第151図 その他の土坑実測図(6)



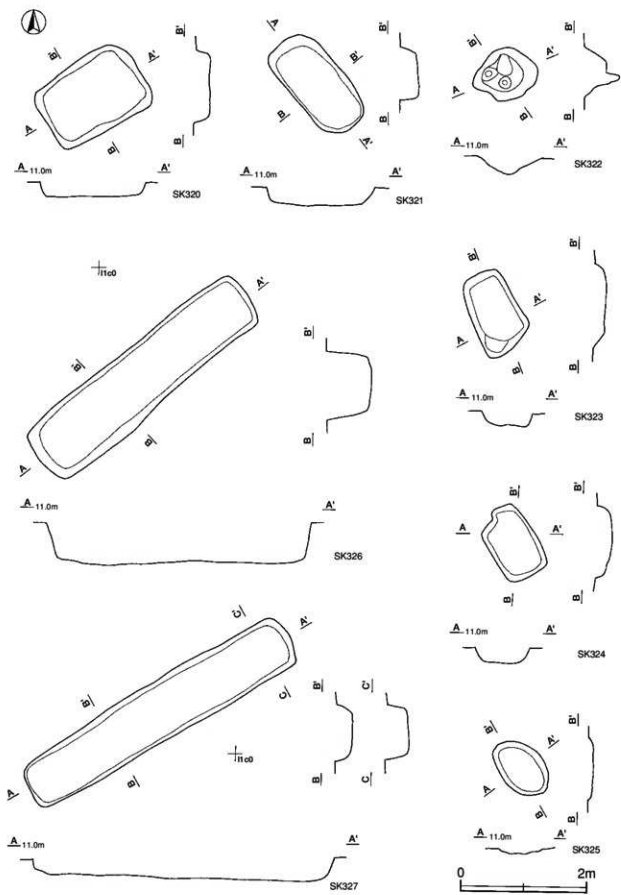
第152図 その他の土坑実測図(7)



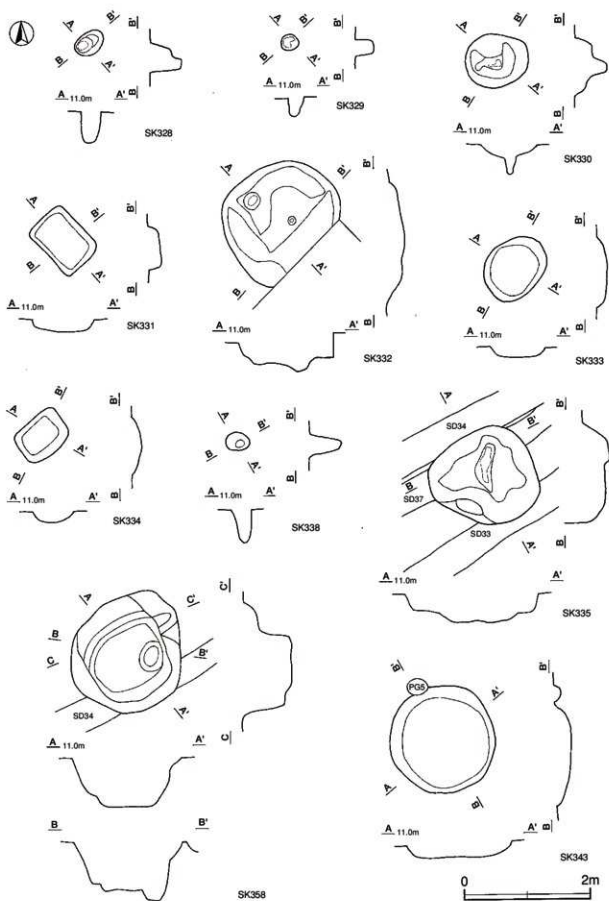
第153図 その他の土坑実測図(8)



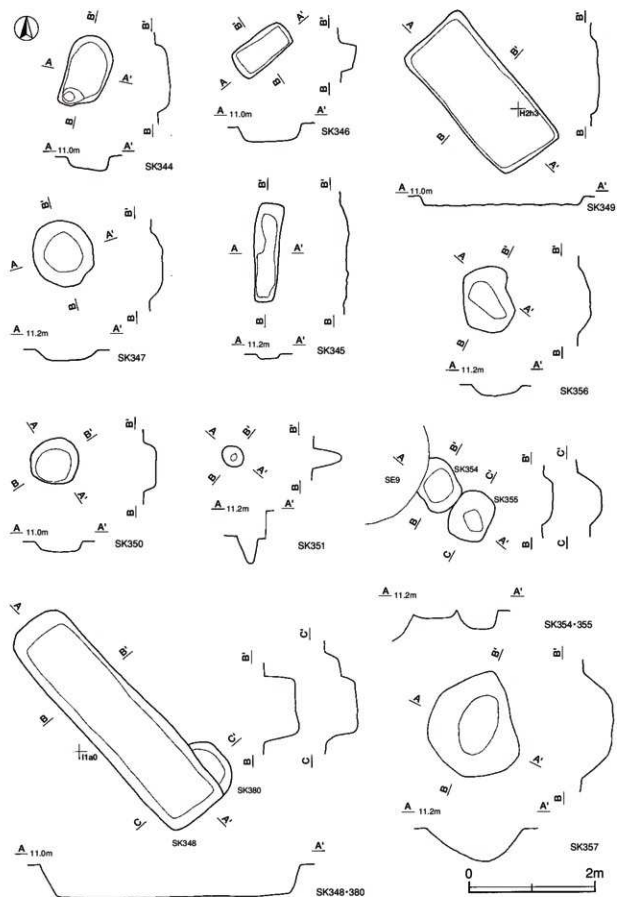
第154図 その他の土坑実測図(9)



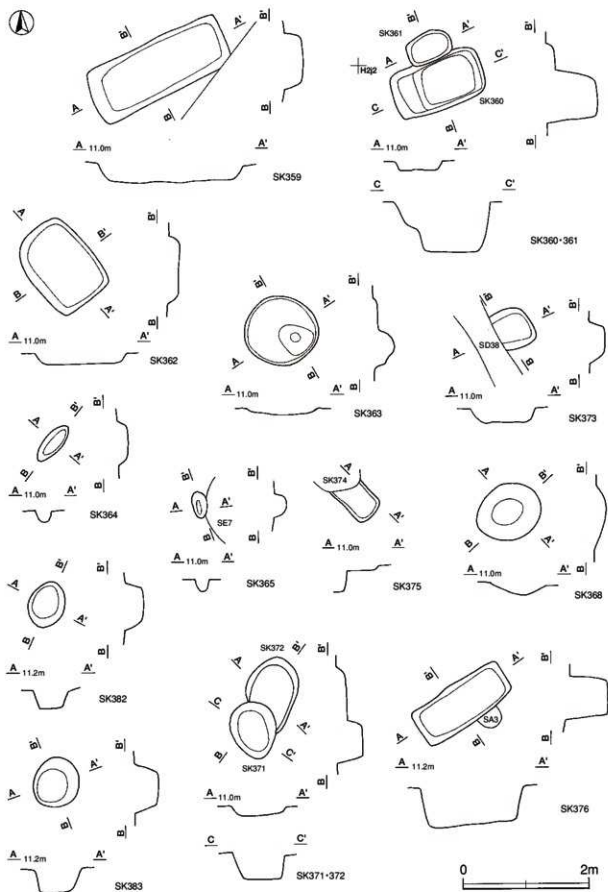
第155図 その他の土坑実測図(10)



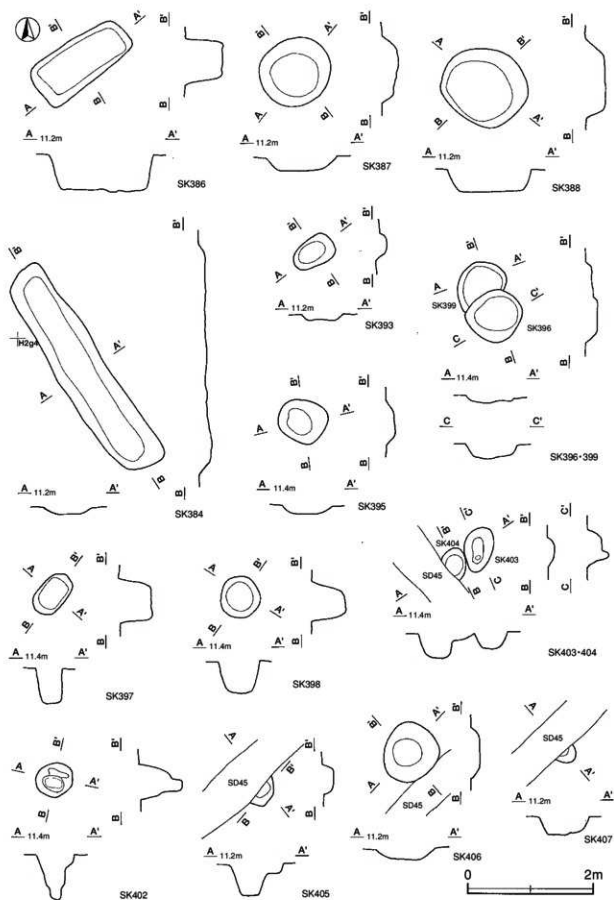
第156図 その他の土坑実測図(11)



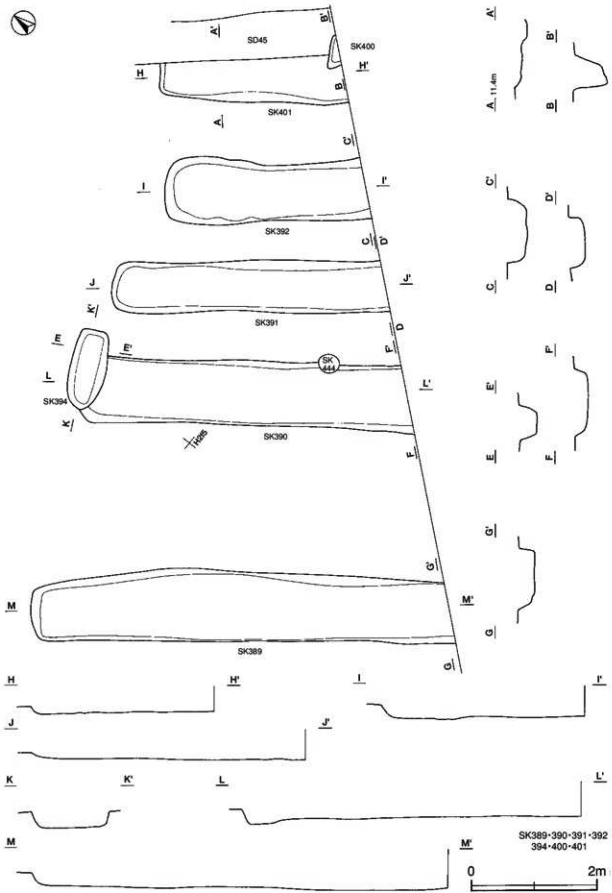
第157図 その他の土坑実測図(12)



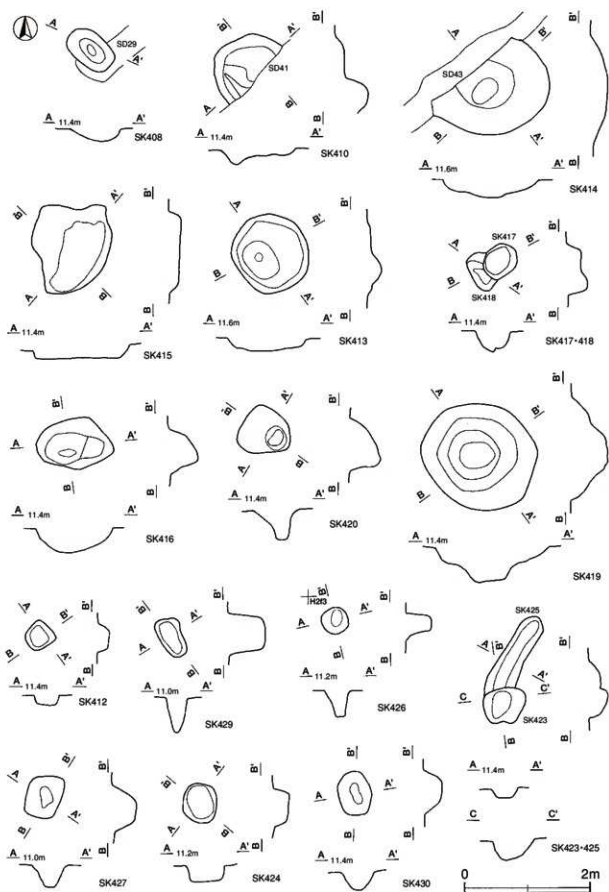
第158図 その他の土坑実測図(13)



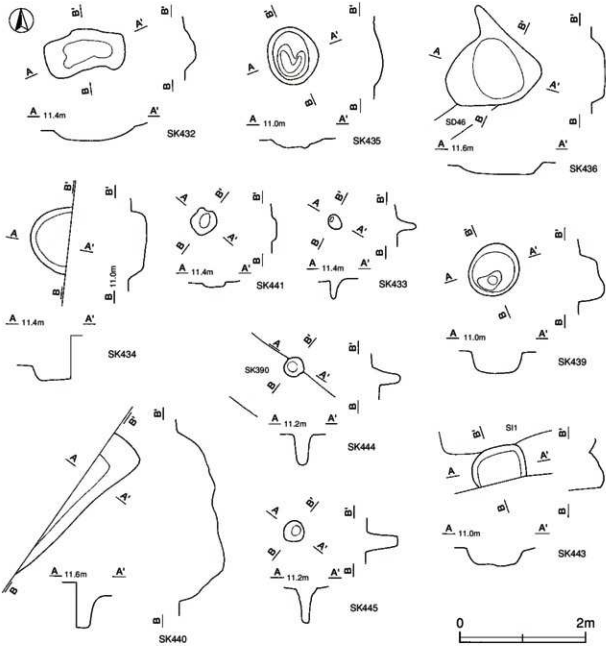
第159図 その他の土坑実測図(14)



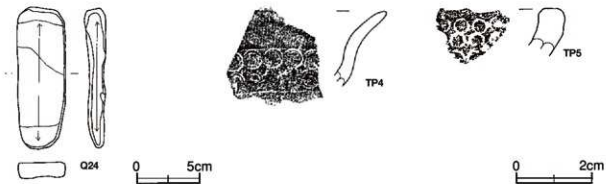
第160図 その他の土坑実測図(15)



第161図 その他の土坑実測図(16)



第162図 その他の土坑実測図(17)



第163図 第119・358・418号土坑出土遺物実測図

第119号土坑出土遺物観察表(第163図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q24	磁石	11.2	3.7	1.3	104.6	凝灰岩	全面磁面 火熱を受けている	底面	PL22

第358号土坑出土遺物観察表(第163図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP4	埴輪土器	香炉*	—	(2.0)	—	長石・石英・雲母	にんい黄粉	普通	ナデ 外面に腐状の押印	覆土中	内面保存者

第418号土坑出土遺物観察表(第163図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP5	埴輪土器	香炉*	—	(1.3)	—	長石・石英・雲母	にんい黄粉	普通	ナデ 外面に腐状の押印	覆土中	

表18 その他の時代 土坑一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模(m, 深さ12cm)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
7	F 3 66	N-47°-E	[長方形]	(1.46)×1.03	11	緩斜	凹状	人為	—	本跡→SK 8→SK 9
8	F 3 47	N-47°-E	[長方形]	(1.07)×1.06	10	緩斜	凹状	人為	石部	SK 7→本跡→SK 9
9	F 3 47	N-36°-W	方形	1.90×0.97	14	緩斜	平坦	人為	—	SK 7→SK 8→本跡
10	F 3 46	N-7°-E	不定形	0.96×0.91	21	外傾	皿状	人為	—	SK11→本跡
11	F 3 46	N-43°-E	不定形	(0.75)×0.72	29	外傾	皿状	人為	—	本跡→SK10
12	F 3 46	N-33°-E	不整形円形	1.55×0.88	15	外傾	凹状	人為	—	
13	F 3 47	N-0°	円形	0.25	30	直立	皿状	人為	—	
14	F 3 48	N-54°-E	長方形	1.40×0.53	21	直立	平坦	人為	—	
17	F 3 48	N-14°-E	楕円形	1.12×0.68	11	緩斜	凹状	人為	—	SK18→本跡
18	F 3 48	N-3°-E	[楕円形]	—×0.58	14	—	凹状	人為	—	本跡→SK17-19A
19A	F 3 48	N-2°-E	楕円形	1.62×0.70	17	緩斜	皿状	人為	—	SK18-19B→本跡
19B	F 3 48	N-15°-W	楕円形	0.54×0.48	17	緩斜	皿状	不明	—	SK18→本跡→19A
28	F 3 48	N-27°-W	楕円形	1.04×0.60	17	緩斜	凹状	人為	—	
31	F 3 46	N-42°-W	[長方形]	(1.66)×0.73	14	緩斜	平坦	人為	—	本跡→PG 6
45	F 3 49	N-67°-E	不整形長方形	1.58×1.22	25	緩斜	平坦	人為	—	SK46-47→本跡→SB 5, SK66
46	F 3 49	N-10°-E	方形	1.40×1.40	42	緩斜	平坦	人為	—	本跡→SK45, PG 3
47	F 3 40	—	[長方形]	0.68×(0.68)	13	緩斜	平坦	人為	—	本跡→SK45-68
68	F 3 49	N-52°-W	長方形	1.11×(0.99)	18	緩斜	平坦	人為	—	SK45-47-15D, PG 3→本跡→SB 5
75	F 3 46	N-48°-E	[長方形]	(3.43)×0.92	13	緩斜	平坦	人為	—	SD 5→本跡→PG 6
81	F 3 45	N-62°-E	不定形	2.64×(1.41)	33	緩斜	平坦	人為	—	縄文土器, 土師質土器
83	F 3 46	N-38°-W	[長方形]	(0.72)×0.47	30	外傾	平坦	人為	—	土師質土器
84	F 3 46	N-37°-W	不整形長方形	0.94×0.40	22	外傾	平坦	人為	—	SK83→本跡, SD 5, SK86
85	F 3 46	N-44°-W	長方形	1.71×0.62	15	緩斜	平坦	人為	—	陶器
86	F 3 46	N-30°-W	長方形	2.24×0.78	12	緩斜	凸凹	人為	—	SD 5, SK83-84→本跡→PG 6
98	E 4 16	N-44°-E	[長方形]	1.60×(0.54)	67	直立	平坦	人為	—	
107	F 3 48	N-88°-W	楕円形	0.38×0.34	54	直立	皿状	人為	—	
112	E 4 14	N-56°-W	楕円形	1.80×0.92	60	外傾	凸凹	人為	—	SK140→本跡→PG 1
113	E 4 43	[N-0°]	[円形]	(0.94)×(0.34)	39	外傾	平坦	人為	—	土師質土器
119	E 4 15	N-45°-E	楕円形	0.70×0.56	18	外傾	平坦	人為	—	土師質土器, 陶器, 石器
122	E 4 44	N-47°-E	楕円形	0.75×0.68	25	外傾	皿状	人為	—	SK123→本跡

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模 (m, 深さ42cm)		崖面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複箇所(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
123	E 4 d4	N-0°	円形	0.60×0.58	22	外傾	皿状	人瓦	—	本跡→SK122
124	F 3 d9	N-40°-W	長方形	1.78×1.04	24	磯斜	平型	人瓦	—	本跡→SB 5, PG 3
137	E 4 e9	N-41°-W	楕円形	2.06×0.46	20	直立	平型	人瓦	—	
138	E 4 f8	N-42°-W	楕円形	2.10×0.51	27	直立	凸凹	人瓦	—	本跡→SK139
139	E 4 f8	N-44°-E	楕円形	3.21×0.32	20	直立	平型	人瓦	—	SK138→本跡
140	E 4 f5	N-79°-E	[楕円形]	(1.14)×1.16	54	磯斜	平型	自然	縄文土器	本跡→SD 6, SK112, PG 1
141	E 4 g4	[N-0°]	[円形]	(1.50)×(0.50)	35	磯斜	皿状	人瓦	—	TM 1→本跡
151	F 3 d4	N-50°-E	楕円形	0.49×0.35	46	外傾	皿状	人瓦	—	
153	F 3 e0	N-45°-E	長方形	0.84×0.40	47	外傾	平型	人瓦	—	本跡→SK08
155	E 4 d7	N-83°-W	楕円形	0.51×0.45	13	外傾	皿状	人瓦	—	
157	E 4 d8	N-77°-E	楕円形	0.48×0.30	21	直立	皿状	人瓦	—	
160	E 4 e8	N-32°-W	不整形楕円形	3.15×0.72	12	磯斜	平型	人瓦	—	本跡→SD22
161	E 4 d8	N-33°-E	楕円形	1.21×0.47	12	外傾	凸凹	—	土師質土器	
163	F 3 e4	N-51°-E	[楕円形]	0.73×(0.32)	14	外傾	平型	人瓦	—	
167	F 3 e6	N-30°-W	楕円形	0.35×0.19	12	直立	皿状	人瓦	—	
168	F 3 d6	N-30°-E	楕円形	0.31×0.26	18	内傾 磯斜	皿状	人瓦	—	
169	F 3 b7	N-30°-E	楕円形	0.47×0.41	23	直立	平型	人瓦	—	
170	F 3 e7	N-53°-E	楕円形	0.34×0.30	31	直立	皿状	人瓦	—	
171	F 3 b8	N-0°	円形	0.26	32	直立 外傾	皿状	人瓦	—	
173	F 4 b1	N-0°	円形	0.70×0.69	20	磯斜	平型	人瓦	—	
179	F 4 a2	N-50°-E	楕円形	1.04×0.88	20	磯斜	皿状	人瓦	—	SD14→本跡
188	E 4 f3	N-50°-W	楕円形	0.74×0.64	21	磯斜	皿状	人瓦	—	
189	E 4 f2	N-80°-W	楕円形	0.66×0.55	32	外傾	皿状	人瓦	—	
191	E 4 f3	N-0°	円形	0.50	16	磯斜	平型	人瓦	—	TM 1→本跡→SK192
192	E 4 f3	N-0°	円形	0.58×[0.58]	56	外傾	皿状	人瓦	—	TM 1→SK191→本跡
205	F 4 a4	N-40°-W	楕円形	0.48×0.36	24	外傾	皿状	人瓦	—	
211	E 4 f8	N-41°-W	長方形	2.31×0.51	40	直立	凸凹	人瓦	縄文土器	
212	E 4 e7	N-42°-W	[不整形円形]	(1.26)×0.79	8	外傾	平型	人瓦	—	本跡→SD22
215	E 4 f5	N-28°-W	長方形	0.66×0.30	21	直立 磯斜	皿状	人瓦	—	
217	E 4 f7	N-0°	円形	0.80	26	磯斜	皿状	人瓦	—	縄文土器、土師質土器、陶器、鉄製品
219	E 4 b2	N-56°-E	隅丸長方形	1.50×0.54	16	直立 磯斜	凸凹	人瓦	—	SD13→本跡
220	E 4 b2	N-42°-E	隅丸長方形	2.34×0.89	19	外傾	皿状	人瓦	—	縄文土器、土師質土器、陶器、磁器、鉄器
221	F 3 d0	N-47°-E	楕円形	0.94×0.85	27	外傾 磯斜	平型	人瓦	—	土師質土器
222	E 4 e7	N-19°-W	楕円形	0.58×0.38	12	磯斜	皿状	人瓦	—	
225	E 4 e6	N-30°-W	楕円形	0.47×0.35	19	直立	凸凹	人瓦	—	土師質土器、陶器
226	E 4 e6	N-0°	楕円形	0.45×0.37	11	外傾	凸凹	人瓦	—	
227	E 4 d6	N-8°-E	楕円形	0.32×0.26	16	外傾	皿状	人瓦	—	
228	E 4 e6	N-34°-W	楕円形	0.15×0.12	13	直立	平型	人瓦	—	
229	E 4 f5	N-3°-W	楕円形	0.32×0.21	24	外傾	皿状	人瓦	—	
230	E 4 g5	N-69°-E	不定形	0.56×0.40	17	磯斜	平型	人瓦	—	
231	E 4 d6	N-0°	円形	0.48	26	直立	皿状	人瓦	—	
232	E 4 b2	N-47°-W	楕円形	0.46×0.34	15	直立	平型	人瓦	—	
233	E 4 b2	N-48°-W	楕円形	0.46×0.38	18	直立 外傾	皿状	人瓦	—	
234	E 3 g2	N-71°-W	円形	0.31×0.28	10	磯斜	皿状	人瓦	—	
236	E 4 b2	N-51°-W	不整形楕円形	0.56×0.44	21	直立 外傾	凸凹	人瓦	—	
238	E 4 e7	N-50°-E	楕円形	0.98×0.89	13	磯斜	皿状	人瓦	—	

序号	位置	长径(轴)方向	平面形	规格 (m, 误差±2cm)		壁面	底面	覆土	出土遗物	编号 重複同标(古-新)
				长径(轴)×短径(轴)	深さ					
239	E 4 i3	N-43°-E	长方形	[3.05]×0.64	35	倾斜	平坦	人为	—	本路→SK240
240	E 4 i3	N-42°-E	长方形	2.28×0.64	57	外倾	平坦	人为	—	SK239→本路
245	E 4 f5	N-0°	円形	0.12×0.10	20	外倾	皿状	人为	板碑	
246	E 4 c8	N-88°-E	楕圆形	0.47×0.36	19	直立	平坦	人为	—	
248	E 3 g0	N-58°-W	楕圆形	2.00×0.52	8	外倾	平坦	人为	—	SE2→本路
249	E 4 i4	N-32°-E	[长方形]	(3.32)×0.53	22	内倾	平坦	人为	磁器, 铁器	本路→SD23
255	F 3 b0	N-0°	円形	0.25	39	直立	皿状	人为	陶器	
258	F 3 b0	N-48°-E	[隅丸长方形]	[1.96]×[1.04]	50	外倾	平坦	人为	—	SA4→本路→SD19
259	F 3 a9	N-49°-W	楕圆形	0.48×0.34	30	外倾	平坦	人为	—	SK260→本路
260	F 3 a9	N-75°-W	円形	1.02×0.97	27	直立 外倾	平坦	人为	—	本路→SK259-261
261	F 3 a8	N-50°-W	长方形	1.10×0.95	22	外倾	平坦	人为	—	SK260→本路
262	F 3 b0	N-23°-E	[不整形円形]	(0.70)×0.47	50	内倾	皿状	人为	土御器	本路→SA4, SD19
263	F 3 a8	N-82°-E	楕圆形	0.37×0.27	15	外倾	皿状	自然	—	
264	F 4 a2	N-30°-W	楕圆形	0.60×0.48	62	外倾	皿状	人为	—	
276	G 2 b0	N-26°-W	楕圆形	0.60×0.40	64	直立	皿状	人为	—	SD28→本路
284	G 2 f8	N-0°	円形	0.33	24	直立	皿状	自然	—	
285	G 2 f8	N-80°-E	楕圆形	0.30×0.22	12	直立	皿状	人为	—	
286	G 2 j0	N-51°-E	[长方形]	(3.84)×2.09	24	倾斜	平坦	人为	—	本路→SD25-29
287	F 3 b8	N-80°-E	楕圆形	1.00×0.73	30	倾斜	凸凹	人为	—	SD20→本路
288	I 1 e7	N-80°-E	楕圆形	0.59×0.42	25	直立	凸凹	人为	—	
289	I 1 d7	N-34°-W	不整形円形	0.77×0.58	48	倾斜	皿状	人为	—	
290	I 1 f8	N-52°-E	楕圆形	0.58×0.39	57	外倾	皿状	人为	土御器土器	SK291→本路
291	I 1 f8	N-63°-E	楕圆形	0.73×0.50	55	外倾	皿状	人为	縄文土器	本路→SK290
292	I 1 b6	N-60°-E	楕圆形	1.46×0.74	6	直立	平坦	人为	縄文土器	
293	I 1 b6	N-57°-E	[长方形]	(0.97)×0.95	8	外倾	平坦	人为	—	
294	I 1 b6	N-55°-E	[长方形]	(1.35)×1.04	5	外倾	平坦	人为	—	
295	I 1 g5	N-87°-E	楕圆形	1.26×1.10	20	直立	平坦	人为	縄文土器	
296	I 1 e8	N-71°-E	[楕圆形]	(2.50)×0.93	18	倾斜	凸凹	人为	縄文土器	
299	I 1 e6	N-57°-W	隅丸长方形	1.27×0.95	15	直立	平坦	人为	—	
300	I 1 f6	N-67°-E	不整形円形	1.82×1.14	27	外倾	平坦	人为	—	
301	I 1 g5	N-29°-E	长方形	1.27×1.11	21	外倾	平坦	人为	縄文土器, 土御器, 原磁器	SK302→本路
302	I 1 f6	N-27°-E	[长方形]	(1.93)×1.09	14	外倾	平坦	人为	—	本路→SK301
304	I 1 d4	N-62°-W	円形	0.26×0.24	25	外倾	皿状	自然	—	
305	I 1 e4	N-32°-E	楕圆形	0.30×0.27	45	外倾	平坦	自然	—	
306	I 1 e6	N-77°-E	楕圆形	0.38×0.30	24	直立	皿状	人为	—	
307	I 1 b7	N-10°-E	楕圆形	0.67×0.57	94	直立	平坦	人为	—	SK308→本路
308	I 1 g7	N-28°-E	[楕圆形]	(0.59)×0.33	16	直立	皿状	人为	—	本路→SK307
309	I 1 g5	—	不明	(3.87)×(0.75)	29	直立	平坦	人为	—	
310	I 1 c7	N-49°-W	楕圆形	0.32×0.25	35	外倾	平坦	人为	—	
311	I 1 e4	N-32°-W	不定形	2.40×(1.13)	43	倾斜	平坦	人为	—	
312	I 1 e6	N-36°-W	长方形	2.21×0.98	9	倾斜	凸凹	自然	土御器土器	
313	I 1 d5	N-36°-E	円形	1.09×1.06	28	外倾	平坦	人为	—	
315	I 1 b7	N-34°-W	不定形	0.77×0.68	4	倾斜	平坦	人为	—	
316	I 1 c7	N-43°-E	楕圆形	0.91×0.77	36	外倾	凸凹	人为	—	
317	I 1 b6	N-20°-E	円形	0.98×0.94	27	倾斜 外倾	凸凹	人为	—	
319	I 1 b8	N-63°-E	不整形円形	1.04×0.79	28	倾斜	凸凹	人为	—	

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模 (m, 深さ42cm)		崖田	底面	覆土	出土遺物	備考 重複箇所(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
320	I 1 a7	N-56'-E	隅丸長方形	1.72×1.20	25	外傾	平坦	人為	—	
321	H 1 f7	N-39'-W	隅丸長方形	1.74×0.83	33	直立	屈状	人為	縄文土器、須恵器、土師質土器、灰質土器	
322	H 1 f5	N-74'-E	不整形四角形	1.05×0.82	35	緩斜	屈状	人為	—	
323	I 1 c8	N-26'-W	長方形	1.31×0.82	21	緩斜 外傾	凸凹	人為	—	
324	I 1 c8	N-33'-W	不整形長方形	1.19×0.76	24	緩斜	平坦	人為	—	
325	H 1 j9	N-47'-W	楕円形	1.07×0.69	8	緩斜	凸凹	自然	—	
326	I 1 c0	N-51'-E	長方形	4.22×1.09	67	外傾	平坦	自然	—	
327	I 1 b9	N-59'-E	長方形	4.81×0.93	36	外傾	平坦	人為	—	
328	I 1 d9	N-56'-E	楕円形	0.48×0.34	50	外傾	平坦	人為	—	
329	I 1 d9	N-77'-W	円形	0.27×0.26	28	外傾	平坦	人為	—	
330	H 1 j9	N-85'-E	楕円形	0.99×0.86	50	緩斜	凸凹	人為	—	
331	H 1 i9	N-43'-W	長方形	0.98×0.70	20	外傾	平坦	人為	—	
332	H 1 j5	N-25'-E	[楕円形]	2.01×1.62	44	外傾	凸凹	人為	鉄滓	
333	H 1 j9	N-43'-E	楕円形	1.08×0.97	16	緩斜	平坦	人為	—	
334	H 1 j9	N-53'-E	隅丸長方形	0.82×0.63	15	緩斜	屈状	人為	—	
335	H 1 j6	N-62'-E	[楕円形]	1.69×[1.50]	81	外傾	凸凹	人為	縄文土器	SD33-34-37→本跡
338	I 1 j5	N-80'-W	楕円形	0.38×0.28	50	外傾	平坦	人為	—	
343	H 2 i3	N-22'-E	円形	1.73×1.69	26	外傾	凸凹	人為	—	本跡→PG 5
344	H 2 g2	N-26'-E	不整形四角形	1.20×0.67	18	外傾	平坦	人為	—	
345	H 2 g4	N-2'-E	長方形	1.56×0.40	13	外傾	凸凹	人為	—	
346	H 2 f1	N-52'-E	長方形	1.01×0.49	26	外傾	平坦	人為	—	
347	H 1 f9	N-25'-W	楕円形	1.08×0.96	19	緩斜	平坦	人為	—	
348	H 1 j0	N-41'-W	隅丸長方形	4.13×1.13	57	外傾	平坦	人為	土師質土器	SK380→本跡
349	H 2 g2	N-41'-W	長方形	2.56×1.17	16	外傾	平坦	人為	—	
350	H 2 h1	N-50'-E	円形	0.80×0.76	27	直立	凸凹	人為	—	
351	I 1 c0	N-45'-W	楕円形	0.37×0.32	41	外傾	屈状	自然	土師質土器	
354	H 2 h3	N-2'-E	楕円形	0.86×0.70	13	緩斜	平坦	人為	—	本跡→SE 9
355	H 2 h3	N-25'-E	楕円形	0.82×0.67	27	緩斜	凸凹	人為	—	
356	H 2 b4	N-8'-W	不整形円形	1.05×0.74	13	緩斜	凸凹	人為	—	
357	H 2 f3	N-16'-E	不整形四角形	1.74×1.51	50	緩斜	平坦	自然	縄文土器、土師質土器	
358	H 1 i8	N-35'-E	不整形円形	1.95×1.78	92	外傾	平坦	人為	土師質土器	SD34→本跡
359	H 2 j2	N-63'-E	長方形	2.30×0.92	37	外傾	平坦	人為	土師器、石器	
360	H 2 j2	N-66'-E	長方形	1.52×0.85	81	直立	平坦	人為	縄文土器	本跡→SK361
361	H 2 i2	N-67'-E	楕円形	0.72×0.41	12	直立	平坦	人為	—	SK360→本跡
362	H 2 i2	N-40'-W	長方形	1.48×1.06	26	外傾	平坦	人為	—	
363	I 1 a0	N-80'-W	円形	1.18×1.09	34	緩斜	屈状	自然	—	
364	I 1 a9	N-40'-E	楕円形	0.70×0.29	17	緩斜 外傾	屈状	自然	—	
365	I 1 b9	N-12'-W	楕円形	0.42×0.25	22	外傾	屈状	人為	—	SE 7→本跡
368	H 1 g9	N-65'-E	楕円形	1.13×0.95	17	緩斜	屈状	人為	—	
371	H 1 h0	N-16'-W	楕円形	0.90×0.74	48	外傾	平坦	人為	—	SK372→本跡
372	H 1 h0	N-19'-E	[楕円形]	(1.10)×0.88	23	緩斜	屈状	人為	—	本跡→SK371
373	H 2 j1	N-65'-E	方形	0.70×0.69	25	外傾	平坦	人為	—	本跡→SD38
375	I 2 a1	N-33'-W	[長方形]	(0.57)×0.46	7	外傾	平坦	人為	—	本跡→SK374
376	H 2 f1	N-56'-E	長方形	1.63×0.70	64	外傾	平坦	自然	—	SA 3→本跡
380	I 1 a0	N-24'-W	[円形]	0.98×(0.39)	27	緩斜	屈状	人為	—	本跡→SK348
382	H 2 d1	N-15'-E	楕円形	0.84×0.59	27	直立	平坦	人為	—	

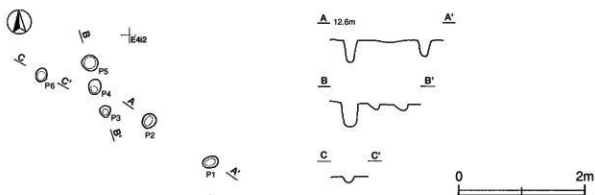
番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模 (m, 長さ12cm)		壁面	底面	覆土	出土遺物	遺 考 重複関係 (古-新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
383	H 2 c3	N-40'-E	楕円形	0.80×0.72	36	外傾	皿状	人為	—	
384	H 2 g4	N-32'-W	長方形	3.71×0.79	20	緩斜	凸凹	人為	土師質土器, 瓦質土器, 陶器	
386	H 2 e3	N-54'-E	長方形	1.65×0.76	63	外傾	平坦	人為	土師質土器	
387	H 2 e3	N-87'-W	円形	1.23×1.17	29	直立	皿状	人為	—	
388	H 2 e4	N-75'-W	楕円形	1.35×1.20	44	外傾 緩斜	平坦	人為	—	
389	H 2 f5	N-52'-W	[長方形]	(6.64)×1.14	20	外傾	平坦	人為	—	
390	H 2 e5	N-51'-W	[長方形]	(4.86)×1.03	16	緩斜	平坦	人為	—	SK444→本跡→SK394
391	H 2 e5	N-40'-W	[長方形]	(4.37)×0.81	26	緩斜	平坦	人為	—	
392	H 2 e5	N-40'-W	[長方形]	(3.23)×1.10	32	外傾	平坦	人為	縄文土器	
393	H 2 d5	N-54'-E	楕円形	0.70×0.42	8	緩斜	皿状	人為	—	
394	H 2 e5	N-44'-E	長方形	1.30×0.56	26	外傾	凸凹	人為	—	SK390→本跡
395	H 2 c5	N-80'-E	楕円形	0.80×0.70	16	緩斜	皿状	人為	—	
396	H 2 d6	N-50'-E	楕円形	0.82×0.74	18	緩斜	皿状	人為	—	SK399→本跡
397	H 2 e7	N-33'-E	隅丸長方形	0.69×0.42	54	直立	平坦	人為	—	
398	H 2 c7	N-0°	円形	0.62	55	外傾	皿状	人為	—	
399	H 2 e6	N-65'-W	[楕円形]	0.80×(0.60)	8	外傾	平坦	人為	—	本跡→SK396
400	H 2 e6	—	不明	(0.51)×(0.20)	43	外傾	平坦	人為	—	SD45, SK401→本跡
401	H 2 e6	N-40'-W	[長方形]	(2.89)×(0.73)	12	緩斜	平坦	人為	縄文土器	本跡→SD45, SK400
402	H 2 d6	N-74'-W	円形	0.58×0.54	70	段状	平坦	人為	—	
403	H 2 b4	N-7'-E	楕円形	0.70×0.50	31	緩斜	凸凹	人為	—	
404	H 2 b4	N-47'-E	[楕円形]	0.42×(0.38)	10	緩斜	平坦	人為	—	本跡→SD45
405	H 2 b3	—	不明	(0.52)×(0.21)	18	外傾	平坦	人為	—	本跡→SD45
406	H 2 b2	N-49'-E	[楕円形]	0.96×0.80	18	緩斜	皿状	人為	—	SD45→本跡
407	H 2 d1	—	[楕円形]	(0.21)×(0.32)	(20)	直立	不明	人為	—	本跡→SD45
408	H 2 b8	N-43'-W	楕円形	0.75×0.54	19	外傾	皿状	人為	縄文土器, 鉄製品	SD29→本跡
410	H 2 a5	N-73'-W	[楕円形]	(0.68)×(0.62)	11	緩斜	平坦	人為	—	本跡→SD41
412	G 2 f	N-51'-E	楕円形	0.63×0.44	19	直立	凸凹	人為	—	
413	G 2 f	N-40'-E	円形	1.27×1.20	23	緩斜	皿状	人為	—	
414	G 2 f4	N-53'-E	[楕円形]	1.76×(1.50)	26	緩斜	皿状	人為	土師質土器	SD43→本跡
415	H 2 d6	N-30'-E	不定形	1.54×1.30	29	直立 緩斜	平坦	人為	—	
416	H 2 a5	N-87'-W	楕円形	1.12×0.80	43	外傾	皿状	人為	—	
417	G 2 f4	N-49'-E	楕円形	0.49×0.46	21	緩斜	平坦	人為	—	SK416→本跡
418	H 2 a4	N-45'-W	楕円形	0.56×0.34	27	外傾	皿状	人為	土師質土器	本跡→SK417
419	G 2 f8	N-47'-W	楕円形	1.86×1.64	57	段状	平坦	人為	—	
420	H 2 b7	N-48'-W	不定形	0.84×0.80	49	直立 緩斜	皿状	人為	—	
423	H 2 a1	N-70'-E	不整形円形	0.70×0.60	29	外傾	平坦	人為	—	SK425→本跡
424	H 2 b1	N-35'-W	楕円形	0.64×0.56	25	外傾	平坦	人為	—	
425	H 2 a1	N-26'-E	[楕円形]	(1.24)×0.40	20	直立	平坦	人為	縄文土器, 石器	本跡→SK423
426	H 2 d3	N-79'-W	円形	0.45×0.43	41	外傾	平坦	自然	—	
427	H 2 f1	N-13'-E	長方形	0.68×0.55	38	外傾	皿状	人為	—	
429	H 1 f8	N-37'-W	不整形円形	0.68×0.40	58	直立	皿状	人為	—	
430	G 2 f3	N-16'-W	楕円形	0.70×0.53	29	緩斜	皿状	人為	—	
432	G 2 f3	N-79'-E	不整形円形	1.28×0.64	21	緩斜	皿状	人為	—	
433	H 2 c7	N-45'-W	楕円形	0.23×0.19	32	直立	皿状	人為	—	

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模 (m, 深さはcm)		崖面	底面	覆土	出土遺物	備考 重要階級 (古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
434	I 2 a1	N-6°E	[楕円形]	1.09×(0.61)	24	緩斜	平坦	人為	石製品	
435	I 1 b0	N-16°W	楕円形	0.92×0.80	15	緩斜	凸凹	自然	—	
436	G 2 g4	—	不定形	1.40×(0.60)	52	緩斜	凸凹	人為	—	SD46→本跡
439	I 2 a1	N-18°E	楕円形	0.87×0.76	41	外傾	皿状	自然	—	
440	G 2 g4	—	[長方形]	(2.70)×(0.34)	49	緩斜	凸凹	人為	—	
441	G 2 j3	N-0°	円形	0.39×0.38	10	緩斜	平坦	人為	—	
443	I 2 b1	N-75°E	隅丸長方形	0.86×0.58	48	外傾	凸凹	人為	—	SI1→本跡
444	H 2 e5	N-0°	円形	0.30	45	直立	皿状	人為	—	本跡→SK300
445	H 2 e6	N-43°W	円形	0.35×0.32	52	外傾	皿状	人為	—	

(7) ビット群

第2号ビット群 (第164図)

調査区Ⅰ区中央部のE 4 i1～E 4 i2区に、6か所のビットが検出された。標高12.3mの台地平坦部に位置し、平面形は長径19～25cmの円形または楕円形で、深さは10～37cmである。時期は、不明である。



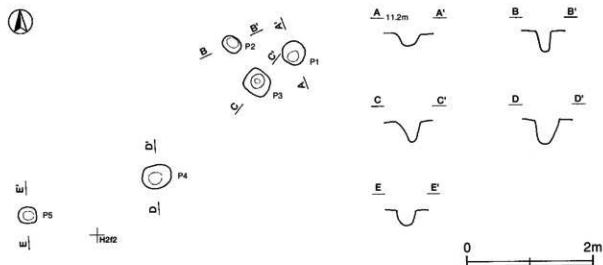
第164図 第2号ビット群実測図

表19 第2号ビット群ビット一覧表

ビット番号	位置	形状	規模 (cm)		ビット番号	位置	形状	規模 (cm)	
			長径×短径	深さ				長径×短径	深さ
1	E 4 i2	楕円形	24×17	23	4	E 4 i1	楕円形	22×20	11
2	E 4 i2	楕円形	21×19	31	5	E 4 i1	円形	25×24	37
3	E 4 i1	楕円形	19×16	12	6	E 4 i1	楕円形	20×18	10

第4号ビット群 (第165図)

調査区Ⅱ区中央部のH 2 e1～H 2 f2区に、5か所のビットが検出された。標高10.9mの台地平坦部に位置し、平面形は長径28～48cmの円形または楕円形や、長軸40cmの方形で、深さは20～37cmである。時期は、不明である。



第165図 第4号ビット群実測図

表20 第4号ビット群ビット一覧表

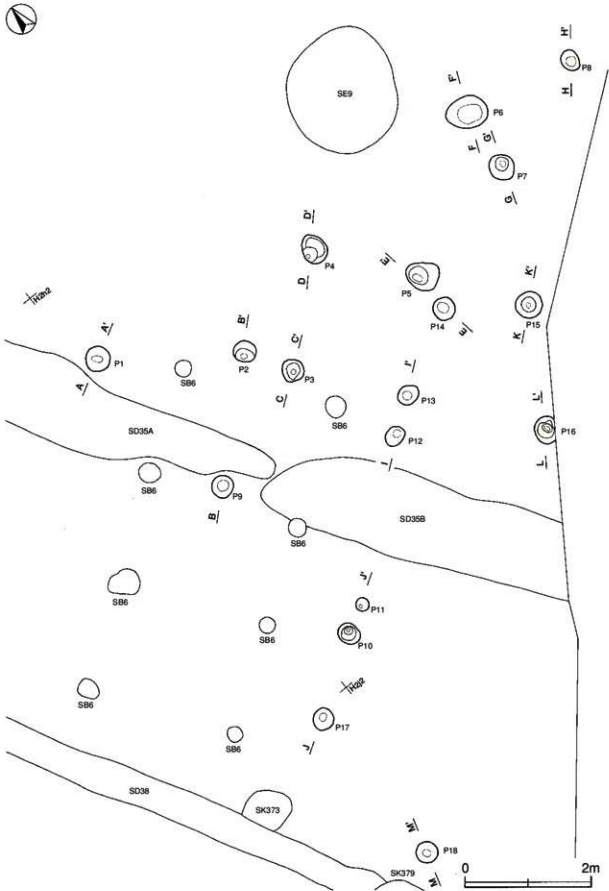
ビット番号	位置	形状	規模 (cm)		ビット番号	位置	形状	規模 (cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ				長径×短径	深さ
1	H 2 e2	円形	36×35	20	4	H 2 e2	楕円形	48×36	37
2	H 2 e2	楕円形	32×24	35	5	H 2 f1	楕円形	28×24	24
3	H 2 e2	方形	40×37	27					

第5号ビット群 (第166・167図)

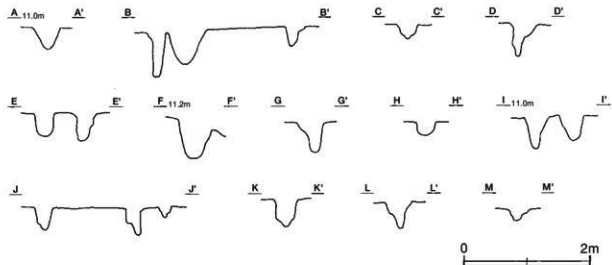
調査区Ⅱ区南部のH 2 h1～H 2 j4区に、18か所のビットが検出された。標高10.9mの台地平坦部に位置し、平面形は長径23～65cmの円形または楕円形で、深さは11～70cmである。時期は、不明である。

表21 第5号ビット群ビット一覧表

ビット番号	位置	形状	規模 (cm)		ビット番号	位置	形状	規模 (cm)	
			長径×短径	深さ				長径×短径	深さ
1	H 2 h2	円形	40×39	31	10	H 2 i2	円形	35×32	42
2	H 2 h3	楕円形	37×32	30	11	H 2 i2	楕円形	23×20	17
3	H 2 h4	楕円形	38×34	21	12	H 2 i2	楕円形	33×25	49
4	H 2 h3	楕円形	47×36	55	13	H 2 i2	不定形	35×24	36
5	H 2 h3	楕円形	52×42	44	14	H 2 i3	円形	38×37	33
6	H 2 h3	楕円形	65×50	59	15	H 2 i3	円形	40	43
7	H 2 h3	円形	43	45	16	H 2 i3	[楕円形]	46×(35)	42
8	H 2 h4	楕円形	33×27	11	17	H 2 j1	円形	33×32	35
9	H 2 i2	円形	36	70	18	H 2 j1	円形	35×33	15



第166図 第5号ピット群実測図(1)



第167図 第5号ピット群実測図(2)

(8) 遺構外出土遺物 (第168・169図)

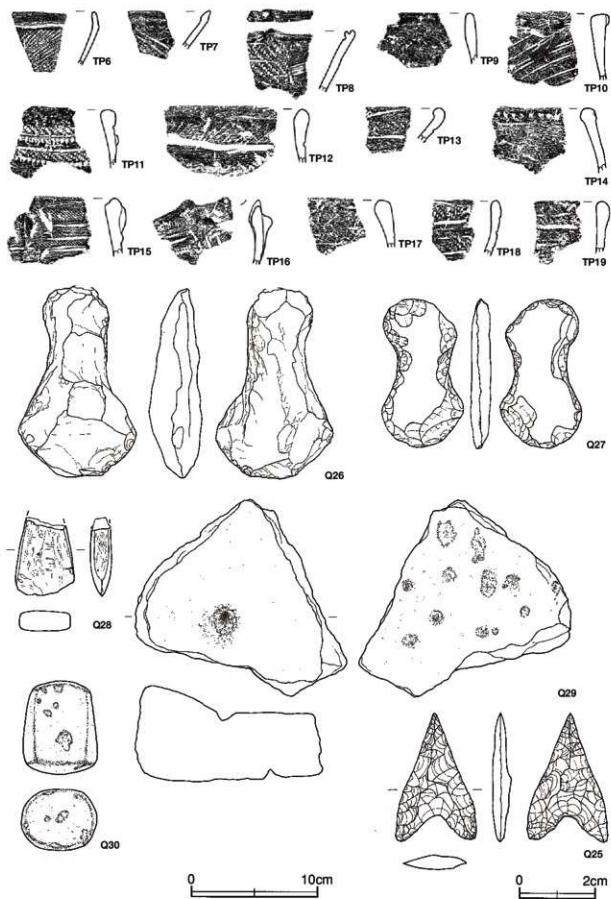
遺構に伴わない主な遺物については、実測図と出土遺物観察表で紹介した。

遺構外出土遺物観察表 (第168・169図)

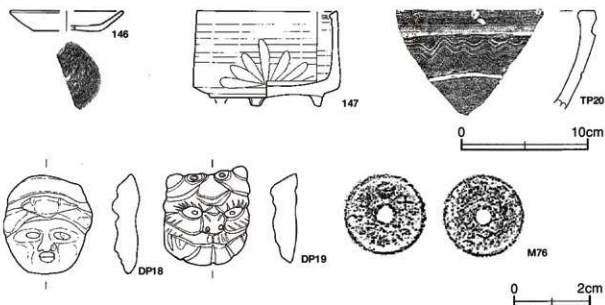
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
146	埴瓦土部	小皿	[8.8]	1.6	[5.2]	長石・雲母	橙	普通	ロクロナデ 底部糸切痕 口辺部火熱痕	調査区1区 表層	30%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土色 輪軸色	成形・ 調整	装飾			印・施 など	製作		出土位置	備考	
								縦付/輪車	文様	装飾特徴		製作地	製作年代			
147	陶器	香炉	[11.2]	7.5	9.0	浅黄 置粉	ロクロ 脚給付	—	—	—	—	—	—	—	—	—

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP6	縄文土部	深鉢	—	(4.2)	—	長石・雲母・小礫	にぶい橙	普通	口辺部磨き 体部外面単R施文 口辺部・体部内面磨き	SD4 層土中	中期後葉 PL20
TP7	縄文土部	深鉢	—	(3.0)	—	長石・石英・雲母	灰白	普通	口辺部ナデ 体部外面ナデ→磨き文 体部内面ナデ	SD 8 層土中	後期 PL20
TP8	縄文土部	深鉢	—	(4.8)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部突起に刺突 体部外面単R施文→ナデ 口辺部・体部内面磨き	SE 2 層土中	後期 PL20
TP9	縄文土部	深鉢	—	(4.1)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	外面縄文R→磨消 内面磨削	SE10 層土中	後期
TP10	縄文土部	深鉢	—	(5.3)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	不良	粗製土器 口辺部磨き帯貼付→磨削押圧 体部外面磨き 3文 口辺部内面ナデ 体部内面ナデ→ベタナデ	SE10 層土中	後期～晩期 PL20
TP11	縄文土部	深鉢	—	(4.6)	—	長石・石英・雲母	にぶい赤橙	普通	外面磨き帯に単R施文→磨き→連続刺突・押引文 内面磨き	TM 1 層土中	後期～晩期 PL20
TP12	縄文土部	深鉢	—	(4.2)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外面磨き文→沈線→ナデ 内面ナデ	SD15 層土中	後期～晩期 PL20
TP13	縄文土部	深鉢	—	(2.6)	—	長石・石英	橙	普通	口辺部・体部内面ナデ→沈線 口辺部内面ナデ 体部内面磨き	第13層 調査区1区 表層	後期～晩期 PL20
TP14	縄文土部	深鉢	—	(5.2)	—	長石・石英・雲母	にぶい赤橙	普通	口辺部連続刺突文 体部外面ナデ 口辺部・体部内面ナデ	調査区1区 表層	後期～晩期 PL20
TP15	縄文土部	深鉢	—	(4.5)	—	長石・雲母	赤橙	普通	口辺部突起貼付 口辺部・体部外面ナデ→単R施文→沈線 口辺部・体部内面ナデ	SA 1 層土中	晩期 PL20
TP16	縄文土部	深鉢	—	(5.3)	—	長石・雲母	橙	良好	口辺部・体部外面突起貼付 外面磨削→磨き 内面磨き	PG 3 層土中	晩期 PL20
TP17	縄文土部	深鉢	—	(3.7)	—	長石・雲母・小礫	橙	普通	口辺部ナデ 体部外面ナデ→沈線 内面ナデ	第13層 調査区1区 表層	晩期 PL20
TP18	縄文土部	深鉢	—	(4.4)	—	長石・石英	にぶい赤橙	普通	外面磨き→磨削に単R施文→沈線 内面ナデ	第13層 調査区1区 表層	晩期
TP19	縄文土部	深鉢	—	(4.1)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	外面単R施文→沈線→磨き 内面ナデ	第13層 調査区1区 表層	晩期 PL20
TP20	埴瓦土部	鉢	[25.6]	(7.8)	—	長石	橙	普通	ロクロナデ 外面波状文・沈線	調査区1区 表層	



第168図 遺構外出土遺物実測図(1)



第169図 遺構外出土遺物実測図(2)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP18	泥面子	2.6	2.4	0.7	(12.1)	長石	人 裏面ナデ	調査区Ⅱ区 表土	PL21
DP19	泥面子	2.6	2.2	3.0	8.3	長石	亀 裏面ナデ	調査区Ⅰ区 表土	PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q25	皿	3.4	2.2	0.5	1.9	チヤート	無草胎 両面押圧剥離調整	調査区Ⅱ区 表土	PL21
Q26	打製石斧	(15.1)	9.4	4.2	(514.0)	安山岩	分銅型 刃部摩滅	SB 2 埋土中	PL21
Q27	打製石斧	11.8	6.4	1.6	136.4	安山岩	分銅型 刃部摩滅	SK140 埋土中	PL21
Q28	磨製石斧	(6.2)	4.7	1.6	(87.1)	雲貴石	磨面琢磨 基部の先端欠損	SE 4 埋土中	PL21
Q29	石皿	(15.6)	(16.7)	7.6	(1760)	安山岩	表面砥面化 凹み1か所 裏面に凹み10か所	第1号製鉄 遺構埋土中	PL22
Q30	磨石	7.4	5.9	4.9	349.0	安山岩	1面にすり痕	SB 1 埋土中	PL22

番号	器種	径	孔幅	重量	初製年	材質	特徴	出土位置	備考
M76	十銭	2.2	0.5	3.1	1922	銅	表面「十銭」「菊紋」裏面「大正十一」の紀年銘	調査区Ⅰ区 表土	PL24

第4節 ま と め

1 はじめに

同所新田遺跡は、今回の調査で、古墳時代の方形周溝墓1基、平安時代の住居跡1軒、中・近世の掘立柱建物跡6棟、欄跡5列、製鉄遺構1基、溝跡29条、井戸跡4基、溜め井跡8基、廃棄土坑4基、土坑49基、ピット群4か所、時期不明の掘立柱建物跡1棟、欄跡1列、溝跡21条、道路跡1条、井戸跡6基、土坑221基、ピット群3か所が確認された。この結果から、古墳時代、平安時代、中世、近世の複合遺跡であることが明らかになった。ここでは、各時代の様相と近世の製鉄関連施設について述べ、まとめとする。

2 各時代の様相（第170図）

(1) 古墳時代

調査区Ⅰ区の北部に、内法が東西軸4.9m、南北軸6.2m、外法が東西軸6.3m、南北軸7.9mで、主体部が擾乱を受けている方形周溝墓が1基確認されているが、その周囲に同時期の集落は確認されていない。方形周溝墓から出土した遺物は、4世紀前半に比定される底部穿孔された壺形土器で、北西コーナ一部に覆土上層から出土している。立花実氏の周溝覆土上層から出土した土器についての想定から¹⁾、本跡から出土した壺形土器は、埋りかけた周溝内で、方形周溝墓における最終的な祭祀が行われた際に使用され、そのまま廃棄されたものと推測される。

(2) 平安時代

調査区Ⅱ区の南部に、焼失住居と想定される住居跡1軒が確認されている。住居内の竈の残存状態は非常に悪く、袖の上部は壊されており、床面には炭化物と焼土が広がっている。また、平面形凸状の掘り方が竈から中央部にかけて確認されている。

(3) 中世

中世の遺構は、調査区Ⅱ区の中央部に溝跡2条、井戸跡1基が確認されている。第38号溝跡と第45号溝跡によって中央部がコの字状に区画され、第8号井戸跡は、その区画外（南西側）に位置している。いずれの遺構からも、中世に比定される常滑系の陶器片が出土していることから、同時期に機能していたと考えられる。調査区域外に同時期の遺構が広がっている可能性もあるが、詳細は不明である。

(4) 近世

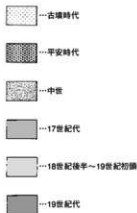
近世の遺構は、調査区Ⅰ・Ⅱ区にわたって、掘立柱建物跡6棟、欄跡5列、製鉄遺構1基、溝跡27条、井戸跡3基、溜め井跡8基、廃棄土坑4基、土坑49基、ピット群4か所が確認されている。ここでは、陶・磁器片により、17世紀代、18世紀後半から19世紀初頭、19世紀代の三期に区分された遺構を中心に述べていく。

17世紀代は、調査区Ⅰ区の南側に確認されている溝跡や井戸跡が中心で、第1～5号溝跡や第1・2号溜め井跡が挙げられ、水の貯水などが行われていたと想定される。

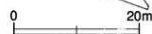
18世紀後半から19世紀初頭にかけては、主に製鉄生産に関わる遺構で構成され、当遺跡の最盛期になる。小鍛冶工房と想定される第1号掘立柱建物跡、製鉄生産が行われていた第1号製鉄遺構、第1号掘立柱建物跡と第1号製鉄遺構から検出された同質の砂鉄が出土している第6・11～13・23号溝跡、倉庫と想定される第2号掘立柱建物跡、溜め井の上部構造と考えられる第5号掘立柱建物跡、多量の陶磁器片や鉄製品・砥石などが廃棄された第10号井戸跡や4基の廃棄土坑などが挙げられる。



I 区



II 区



第170図 同所新田遺跡遺構配置図（時期別）

19世紀代になると、調査区Ⅰ区では第2・3号掘立柱建物跡や第2号欄跡、その周辺に焼土が投げ捨てられていた第273号土坑が位置している。北部の廃棄土坑の確認面付近から、近世末から明治にかけての陶器や磁器が出土していることから、廃棄場として利用されていたものと想定される。焼土や陶器・磁器などが廃棄された状況から、製鉄生産が途絶えたものの、生活の場としては機能していたと推測される。調査区Ⅱ区では、中央部に第6号掘立柱建物跡や第35A・35B・36号溝跡が位置しているが、付近に同時期の遺構が確認されていないため、詳細は不明である。

3 近世の製鉄関連施設について

当遺跡の最盛期である18世紀後半に、製鉄生産に関わる遺構が調査区Ⅰ区に集中して確認されている。それらの遺構について、鉄器生産から廃棄に至る過程を考察して性格を明らかにし、場についても検討していくことにする。

始めに、原料の砂鉄を木炭の燃焼によって還元する「製錬」が行われる。砂鉄が検出された遺構は確認されているが、製錬遺構は確認されていない。砂鉄は、第1号掘立柱建物跡の炉、第6・11～13・23号溝跡などから検出されている。製品を作る場として機能していた工房（掘立柱建物跡）の炉から検出した砂鉄の利用方法は不明だが、溝跡内から検出された砂鉄は、水を流して砂鉄を得る過程で堆積したものと想定される。

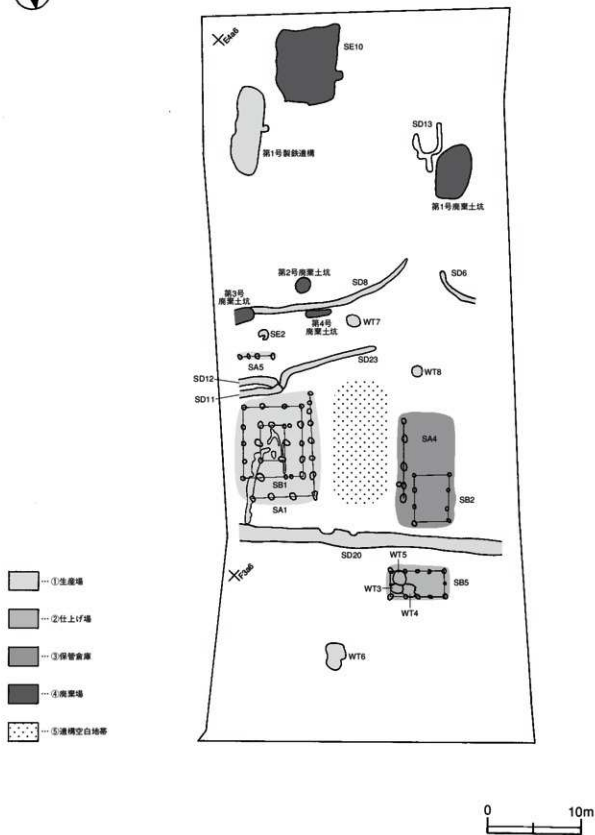
次に、製錬で得られた鉄鉄から炭素を取り出して鋼を得る「精錬鍛冶（大鍛冶）」が行われる。この過程に関連する遺構は、覆土中層にかけて直線的に砂が充填されている第1号製鉄遺構が該当する。埋めこまれた砂は防湿をするための工法と考えられる。また、周囲にピットが確認されていないことから、屋外の生産施設の下部構造のみが遺存している遺構と考えられる。出土遺物は、精錬鍛冶をするために利用された細い羽口や、その作業の過程で発生した椀状滓が出土している。

生産過程の最後として、精錬から得られた鋼を加熱や鍛打により、鉄器・鉄製品を作る「鍛錬鍛冶（小鍛冶）」が行われる。その過程に該当する遺構は、第1号掘立柱建物跡と考えられる。屋内の中心からは、炉が1か所、溝が4条確認されている。炉では鉄製品が生産され、炉付近にある溝は貯水、周囲に位置する第11・20号溝跡に連結する溝は汚水を排水したものと想定される。また、第1号掘立柱建物跡は、東側から南側にかけてL字状に第1号欄跡によって遮蔽されていることから、西側から人の出入りが行われていたものと推測される。

製品は、第1号掘立柱建物跡と遺構が確認されていない空白地を挟んで反対側に位置している桁行3間、梁行1間の第2号掘立柱建物跡で管理されたことが想定される。本跡は北側から西側にかけて第4号欄跡により遮蔽され、南側を第20号溝跡に区画されており、人の出入りが制限されていた状況が見られる。

製品生産に必要な水の供給や貯水として機能していたのは、第1号掘立柱建物跡の北側に位置している第2号井戸跡で水が供給され、第2号掘立柱建物跡の南西側に位置している第5号掘立柱建物跡内に構築された3基の溜め井跡や、掘立柱建物跡3棟の周辺に位置している3基の溜め井跡で、貯水がなされたものと想定される。

廃棄場は、第1号掘立柱建物跡の北側にかけて3か所確認されている。1か所は、第2号井戸跡の北側に位置している第2～4号廃棄土坑が該当する。出土遺物は、陶器・磁器製の食器や容器などの生活用品を中心に、鉄製品、砥石などが廃棄されている。2か所目は、調査区Ⅰ区の最北端に位置している第10号井戸跡である。本跡には、上端から底部にかけて螺旋状のスロープが確認されている。この形状の井戸は、東京都羽村市で同形状の井戸跡が確認されていることから、まがい井戸と想定される。井戸としての機能を終



第171図 製鉄関連遺構配置図

えた後、底面から覆土中層にかけてローム土で埋められ、廃棄場として機能したものと考えられる。本跡は、当遺跡内で最も多く遺物が出土しており、中でも特徴的なことは、釘54点、刀子108点、砥石86点、鉄洋21点、柄状洋23点などが、日常生活で使用される土器・陶磁器よりも多く出土していることが挙げられる。3か所目は第1号廃棄土坑である。遺物点数は、当遺跡内では第10号井戸跡に次いで出土しており、陶器製の製鹽や銅製品の鏡といった結髪道具や化粧道具などの遺物も出土している。また、第10号井戸跡や第1号廃棄土坑からは、19世紀代から生産が始まる瀬戸産の磁器や、相馬焼の陶器などが出土しており、18世紀後半以後も、廃棄場として利用されていたと想定される。

ここまで、鉄生産に関わる遺構や鉄生産に付随して機能していた遺構（鉄製品を納める倉庫、水の供給・貯水、廃棄場）を整理してきた。そこで、整理した遺構の位置関係や鉄生産過程から、調査区Ⅰ区内における配置がどのようなものであったのかを考えると、次のようになる（第171図）。

調査区Ⅰ区の北西側（北西部のエリア外沿い）に、銅を得るための第1号製鉄遺構、鉄製品を生産する第1号掘立柱建物跡など鉄生産に係わる遺構が分布していることから、この地区は鉄製品を作るまでの作業場として機能していたと想定される（第171図-①）。次に、倉庫へ搬入する前に製品として仕上げるための工房（鉄製品を研ぐなど）の存在が推測され、その工房に該当するのは、鉄製品を研ぐためなどに必要な水を貯水し、雨や風を遮るための上部構造がある第5号掘立柱建物跡の可能性が高い（第171図-②）。遺構空白地帯の先にある第2号掘立柱建物跡は、仕上がった鉄製品を建物内に納めていた保管倉庫（第171図-③）と想定される。鉄生産過程や日常生活で生じた廃棄物は、第1号掘立柱建物跡から調査区Ⅰ区の北端へ向かうほど廃棄物が多くなることから、この範囲内は廃棄場として（第171図-④）として機能していたと想定される。調査区Ⅰ区の遺構空白地帯（第171図-⑤）は、生産場、仕上げ場、保管場に挟まれていることから、3つの場を行き来するための通路、遺構空白地帯の縁辺に位置している井戸や溜め井を利用した汚れの洗浄・乾燥の場や、保管製品などの点検場などの可能性が考えられ、様々な用途に利用されていた空間と想定される。

4 鉄製品の供給について

調査区Ⅰ区内に位置している遺構を通して、当遺跡内における空間についての機能を示してみた。最後に、歴史的環境を踏まえながら、当遺跡で生産された鉄製品の供給について想定する。

当遺跡内で出土した鉄製品は、釘、刀子、小太刀、包丁、鎌、鑿、鋸などがあり、出土遺物点数から接合具である釘が主力製品と考えられ、そのほかに刀子などの工具などが生産されていたものと考えられる。

18世紀後半の当遺跡付近には、利根川の対岸に位置し、奥州から江戸へと結ぶ輸送経路の成立によって江戸期に繁栄していた境河岸がある。1737年頃には、境町周辺地域の村々から生産された農産物が、江戸の蔬菜供給を支える大市場である神田市場と千住市場に供給する経路が確立されており、江戸へ供給する品物は、農産物が主流であった²¹。

また、視点をえてみると、1783年に浅間山の噴火から発生した火山灰が原因で、利根川など関東の主要な河川の河床が上昇して水害が頻発する地となり、堤防工事が多くなったことが分かる。その1例としては、1785年に、境町の百戸村や金岡村を利根川から守るために堤防の修復普請が行われていることが挙げられる²¹。

18世紀後半のみという一過性な鉄生産活動がなされている当遺跡の状況と、その当時の地域性や出来事を合わせると、江戸などの他地域へと供給するのではなく、当遺跡周辺で水害による被害にあった地域の復興

のために供給されていたと想定される。

5 おわりに

以上、遺跡内における各時代の様相、18世紀後半に鉄生産が行われた製鉄関連施設について、生産された鉄製品の供給先についてに焦点をしましてまとめてみた。それら3つの焦点の中で、いくつかの特徴が得られたと思われるが、工人集団の詳細や、当遺跡付近を治めていた関宿藩との関わりなどといった景観復元まで至ることができなかった。今後の発掘調査や文献史学的研究からの景観復元に期待したい。

註)

- 1) 立花実氏は、「完形、または半完形の土器が転がったような状態で出土する場合と、数多くのさまざまな土器が破片で出土する場合に大別」でき、「前者についてはほとんどが壺であること、底部穿孔がなされたものがあること、土器の個体数は決して多くないこと」などの特徴を挙げ、「方形周溝墓築造以後に祭祀に使用された可能性がある」として想定している。
- 2) 『下総境の生活史 国説・境の歴史』 pp.156-157
- 3) 『下総境の生活史 国説・境の歴史』 pp.146-147

参考文献

- 立花実「推論・方形周溝墓の立面形態」『西相模考古』第2号 西相模考古学研究会 1993年9月
光永真一「たたら製鉄」吉備考古ライブラリ10 吉備人出版 2003年11月
境町史編さん委員会(編)『下総境の生活史 国説・境の歴史』境町 2005年3月

付 章

同所新田遺跡出土鉄滓等の分析調査 (抜粋)

JFEテクノロジー株式会社
分析・評価事業部
埋蔵文化財調査研究室

1 はじめに

茨城県猿島郡五霞町小福田に所在する同所新田遺跡から出土した鉄関連遺物について、学術的な記録と今後の調査のための一環として化学成分分析を含む自然科学的観点での調査を依頼された。調査の観点として、出土鉄滓の化学成分分析、外観観察、ミクロ組織観察、資料の製造工程上の位置づけおよび始発原料などを中心に調査した。その結果について報告する。

2 調査項目および試験・観察方法

(1) 調査項目 調査資料の記号、出土遺構・注記および調査項目を表1に示す。

(2) 調査方法

(i) 重量計測、外観観察および金属探知調査

資料重量の計量は電子天秤を使用して行い、少数点2位で四捨五入した。各種試験用試料を採取する前に、資料の外観をmm単位まであるスケールを同時に写し込みで撮影した。資料の出土位置や資料の種別等は提供された資料に準拠した。

着磁力調査については、直径30mmのリング状フェライト磁石を使用し、6mmを1単位として35cmの高さから吊した磁石が動き始める位置を着磁度として数値で示した。遺物内の残存金属の有無は金属探知機(MC: metal checker)を用いて調査した。金属検知にあたっては参照標準として直径と高さ等を等しくした金属鉄円柱(1.5mmφ×1.5mmH, 2.0mmφ×2.0mmH, 5mmφ×5mmH, 10mmφ×10mmH, 16mmφ×16mmH, 20mmφ×20mmH, 30mmφ×30mmH)を使用し、これとの対比で金属鉄の大きさを判断した。

(ii) 化学成分分析

化学成分分析は鉄鋼に関するJIS分析法に準じて行っている。

- ・ 全鉄 (T.Fe): 三塩化チタン還元-ニクロム酸カリウム滴定法。
- ・ 金属鉄 (M.Fe): 臭素メタノール分解-EDTA滴定法。
- ・ 酸化第一鉄 (FeO): ニクロム酸カリウム滴定法。
- ・ 酸化第二鉄 (Fe₂O₃): 計算。・ 化合物 (C.W.): カールフィッシャー法。
- ・ 炭素 (C), イオウ (S): 燃焼-赤外線吸収法。
- ・ ライム (CaO), 酸化マグネシウム (MgO), 酸化マンガン (MnO), 酸化ナトリウム (Na₂O), 珪素 (Si), マンガン (Mn), リン (P), 銅 (Cu), ニッケル (Ni), コバルト (Co), アルミニウム (Al), ヴァナジウム (V), チタン (Ti): ICP発光分光分析法。
- ・ シリカ (SiO₂), アルミナ (Al₂O₃), 酸化カルシウム (CaO), 酸化マグネシウム (MgO), 二酸化チタン (TiO₂), 酸化リン (P₂O₅), 酸化カリウム (K₂O): ガラスビード蛍光X線分析法。
但しCaO, MgO, MnOは含有量に応じてICP分析法またはガラスビード蛍光X線分析法を選択。
- ・ 酸化ナトリウム (Na₂O): 原子吸光法。

なお、鉄滓中成分は、18成分(全鉄T.Fe, 金属鉄M.Fe, 酸化第一鉄FeO, 酸化第二鉄Fe₂O₃, シリカSiO₂, アルミナAl₂O₃, ライムCaO, マグネシアMgO, 酸化ナトリウムNa₂O, 酸化カリウムK₂O, 二酸化チタンTiO₂, 酸化マンガンMnO, 酸化リンP₂O₅, コバルトCo, 化合物C.W., 炭素C, ヴァナジウムV, 銅Cu)を化学分析している。分析は各元素について分析し、酸化物に換算して表示している。

羽口・胎土成分は、13成分(全鉄T.Fe, 酸化鉄FeO, シリカSiO₂, アルミナAl₂O₃, ライムCaO, マグネシアMgO, 化合物C.W., 灼熱減量I.g. Loss, 二酸化チタンTiO₂, 酸化マンガンMnO, 酸化ナトリウムNa₂O, 酸化カリウムK₂O, 炭素C,)を化学分析している。なお、粘土については産地検討のためルビジウムRbとストロンチウムSrについても分析した。

鉄製品中成分の化学分析は、13成分（炭素C、シリコンSi、マンガンMn、リンP、イオウS、銅Cu、ニッケルNi、コバルトCo、アルミニウムAl、ヴァナジウムV、チタンTi、カルシウムCa、マグネシウムMg）を化学分析している。

(iii) 顕微鏡組織観察

資料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨（鏡面仕上げ）する。炉壁・羽口・粘土などの鉱物性資料については顕微鏡で観察しながら代表的な鉱物組織などを観察し、その特徴から材質、用途、熟履歴などを判断する。滓関連資料も炉壁・羽口などと同様の観察を行うが特徴的鉱物組織から成分的な特徴に結びつけ製・精錬・鍛造工程の判別、使用原料なども検討する。金属鉄はナイトール（5%硝酸アルコール液）で腐食後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、顕微鏡組織および介在物（不純物、非金属鉱物）の存在状態等から製鉄・鍛冶工程の加工状況や材質を判断する。原則として100倍および400倍で撮影を行う。必要に応じて実体顕微鏡（5倍～20倍）による観察もする。

(iv) EPMAによる観察

真空中で試料面の直径1 μ m程度の範囲に焦点をあて、高速度（5～30kV）の電子線を照射すると試料面から二次電子、反射電子、特性X線などが発生する。その特性X線の波長および強度を測定することにより、存在する元素の定性あるいは定量分析を行う。電子線マイクロプロブX線アナライザー（EPMA）という。試料表面の微小部分（200 μ m程度以下の範囲）に存在する元素の濃度分布を測定できる。光学顕微鏡による視野（140～560倍、500 μ m）を同時に観察できる。

3 調査結果および考察

分析調査結果を図表にまとめて183頁～185頁に示す。表1に調査資料と調査項目をまとめた。表2～表4に資料の化学成分分析結果を表5、表6にEPMA成分分析結果をそれぞれ示す。全資料の外観写真を186頁に、砂鉄と鉄滓の顕微鏡ミクロ組織を186頁に、金属鉄の顕微鏡組織を187頁に示す。EPMAのカラーマッピングと定性分析結果を187・188頁に示す。

鉱物組織の英文、化学式は一括して「5 参考」に示した。

各資料の調査結果をまとめて、最も確からしい推定結果を最後にまとめる。以下、資料の番号順に述べる。

資料番号№1 砂鉄、着磁度：(中)、MC：なし

外観：外観を外観写真に示す。黄土色の小さな粒状化した泥の様に見える砂鉄である。十分水洗しても写真にみられるように色はあまり変わらず、やや黒みが増す程度である。黒色の浜砂鉄などに比べると着磁はやや弱い。磁選分離を試みたが分離せず、風化が十分進んでいない花崗岩の風化鉱物を随伴した砂鉄と思われる。着磁度は測定できないが中程度の着磁がある。メタル反応はない。

顕微鏡組織：組織写真1-1、1-2に100倍と400倍の顕微鏡組織を示す。乳白色の砂鉄粒子に石英などが付着・随伴している。花崗岩の風化が十分でなく砂鉄の分離が十分に進んでいないものと思われる。また、写真には撮影していないが泥や石英とみられる夾雑物も多く存在している。TiO₂を多く含む砂鉄に見られる格子模様を示す組織は観察されず、TiO₂はあまり高くはないと思われる。

化学成分：化学成分分析結果を表2に示す。外観からも予想されたように全鉄（T.Fe）が27.4%と低く、代表的な不純物であるSiO₂は32.3%とT.Feよりも高い。高品位な砂鉄ではない。FeOは10.1%、Fe₂O₃は28.0%でFe₂O₃とFeOの比率は26.5：73.5である。TiO₂は4.99%含まれている。この砂鉄の品質を検討するために化学成分（酸化チタン、全鉄、酸化マンガン）の関係を図1～図3に示した。図1に造滓成分量（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O）とT.Feの関係を示す。全国の砂鉄に比べても鉄分が低く、造滓成分量が非常に高い特徴がある。顕微鏡組織で夾雑物が多く、珪石などの花崗岩由来の鉱物の分離が十分でなかった観察結果と一致する。図2にTiO₂とT.Feの関係を示すが同じくT.Feの低い側にある。本砂鉄の風化が進み、T.Feが55%～60%位まで濃化したと仮定するとTiO₂は10%～10.9%位まで上昇し、関東地方（栃木、茨城、千葉）の砂鉄とはほぼ同じ位置になる。図3はMnO/TiO₂とTiO₂/T.Feの関係を示す図で、土砂や夾雑物の影響を受けない指標である。この図においても関東地方の砂鉄とはほぼ同じ位置にあり、基本的にはこれらの砂鉄と同質と推察される。図4は砂鉄を代表する成分であるVとTiO₂をT.Feで基準化して、夾雑物などの影響を受けない指標として検討する図である。茨城・千葉の砂鉄とはほぼ同じ位置にあり、中国地方の赤目砂鉄よりもTiO₂が高い。

以上の結果を総合的に考えると本資料は花崗岩の風化鉱物との分離が十分に進んでいないT、Feが低くSiO₂などの火砕物が多い砂鉄と位置づけられる。関東地方(栃木、茨城、千葉)の砂鉄と同系統ではないかと思われる。

資料番号No 2 鍛造剥片(⇒錆化鉄薄片), 着磁度:なし, MC:なし

外観:外観を外観写真に示す。重量0.1228g, 長さ7.6mm, 幅5.5mm, 厚さ1.6mm。通常の鍛造剥片に比べ厚みが厚く、両面とも土砂が付着している。灰汁やわら灰などを塗布して、鍛打し生成した剥片のようにみえる。着磁はなく、メタル反応はない。

顕微鏡組織:顕微鏡組織を組織写真2-1, 2-2に示す。典型的なゲーサイト(Goethite: α -FeOOH)などの錆化鉄組織で、雲がかかった鉄にはほんやりした乳白色を呈し、錆化膨張による亀裂などが入っている。薄い鉄が錆化したものと判断できる

本資料は薄い鉄片が錆化したものである。

資料番号No 3 腕型滓, 着磁度:2, MC:なし

外観:外観を外観写真に示す。重量41.8g, 長さ34.6mm, 幅31.5mm, 厚さ24.8mm。割欠面が2つある腕型滓の周縁部の破片である。上側半分はよく溶け緻密であるが、下側半分は炉床の水分と反応、あるいは水蒸気の発生によると思われるが嚙れ発泡している。滓そのものは黒色である。滓としての性格を残していると思われる緻密な部分から調査資料を採取する。着磁度は2で弱く、メタル反応もない。

顕微鏡組織:滓部分の顕微鏡組織を組織写真3-1~3-3に示す。写真3-1, 3-2, 3-3の100倍の写りにみられるように本資料はガラス質の多い滓に鍛造剥片(写真3-1, 3-2)や粒状滓(写真3-3)が溶けていることが明瞭にわかる。写真3-1では鍛造剥片が十分溶けきれずにその痕跡を明確に残し、周囲の鉄滓はファイヤライトとガラス質からなっている。鍛造剥片そのものは乳白色のウスタイト(Whitite:FeO)凝集組織である。写真3-2では鍛造剥片が痕跡をのこし、炉壁などのガラス化しやすい耐火材とおそらく剥片などの鉄滓とが反応し、同化が進んだとみられる組織になっている。溶解・同化の進んだ部分では細い棒状や繭玉状のウスタイトとガラス質になっている。一方、写真3-3では100倍の写りの下側は粒状滓と上側の乳白色のウスタイトとその背後の隠れるような棒状のファイヤライトからなる滓とが反応・同化仕掛けている。粒状滓は400倍の写りにみられるように乳白色のウスタイトとその陰に隠れるような棒状のやや褐色を帯びたファイヤライトからなっている。顕微鏡観察結果は本資料がガラス質の滓と鍛造剥片、粒状滓などの鍛煉鍛冶系の滓が反応して生成したことを示している。

化学成分:化学成分分析結果を表2に示す。全鉄55.7%に対して金属鉄は0.32%と少量の金属鉄が含まれている。FeOは59.1%, Fe₂O₃は13.5%である。SiO₂は11.9%でAl₂O₃は4.66%である。結合水は0.22%で少なく、ゲーサイトなどの錆化鉄はあまり含まれていないと思われる。TiO₂は0.30%と少なく、成分のみでは始発原料が砂鉄か判断できない。CaOは多く含まれ3.67%で、MgOは1.54%含まれている。SiO₂に対するAl₂O₃は通常の鉄滓に比べておおく、炉壁や粘土などがガラス質の素になっていると思われる。造滓成分量(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O)は24.08%である。鉄滓の化学成分の特徴から製鉄工程の位置づけを検討する図5, 6, 7で見ると図5, 図7ではTiO₂の低い鍛煉鍛冶滓グループの位置あり、図6では鍛煉鍛冶滓としては造滓成分量が多い位置にある。これは顕微鏡組織で見られたように炉壁や粘土などが反応しているためと思われる。

以上の結果から、本資料は鍛煉鍛冶滓で生成した炉壁や粘土などの反応が多い、鍛造剥片などを多く巻き込んだ鍛煉鍛冶滓と推察される。始発原料は砂鉄か否かは判断できない。

資料番号No 4 (M39) 2段腕型滓, 着磁度:2, MC:なし

外観:外観を外観写真に示す。重量585.3g, 長さ129.3mm, 幅103.7mm, 厚さ43.9mm。典型的な2段の腕型滓であ、下面はきれいな球面状に湾曲している。上面の半分は酸化土砂と鉄さびにより茶褐色を呈している。滓そのものは黒色であるが、光沢はない。下面は炉床の砂礫状の堆積状態を反映し数mm大の凹凸になっている。着磁度は2で、メタル反応はない。2段階の状態を残すように写真の右下側1/5から試料を採取する。

顕微鏡組織:滓部分の顕微鏡組織を組織写真4-1~4-4に示す。資料の周縁部には組織写真4-1, 4-2に示すように鍛造剥片が多く観察され、資料3と同じ様相を呈している。組織写真4-3では粒状滓が炉壁などの胎土に取り込まれ溶融しかけている。資料3と異なり、この写真では粒状滓の周囲は明らかに耐火材や粘土などが被熱溶融している組織である。組織写真4-4は乳白色のウスタイトが少なく、やや褐色を帯びたファイヤライトやガラス質からなる組織で、造滓成分が多い部分である。顕微鏡組織からは本資料は炉壁など

の粘土と鍛造薄片，粒状滓等が反応して生成したことは明らかである。

化学成分：化学成分分析結果を表2に示す。全鉄38.1%に対して金属鉄は0.39%と少量の金属鉄が含まれている。FeOは39.0%，Fe₂O₃は10.6%である。SiO₂は23.2%，Al₂O₃は8.43%でいずれも多い。結合水は0.77%含まれており，ゲーサイトなどの錐化鉄も存在すると思われる。TiO₂は0.46%で，成分のみでは始発原料が砂鉄か判断できない。CaOは多く含まれ7.34%で，MgOは2.77%含まれている。SiO₂に対するAl₂O₃は通常の鉄滓に比べておおく，炉壁や粘土などがガラス質の素になっていると思われる。造滓成分量（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O）は46.56%である。鉄滓の化学成分の特徴から製鉄工程の位置づけを検討する図5，6，7で見ると図5，図6では鍛煉鍛造滓から炉壁着着の側にずれた位置にあり，図7では鍛煉鍛造滓グループの位置にある。造滓成分量が多い位置のは，顕微鏡組織で見られたように炉壁や粘土などが反応しているためと思われる。以上の結果から，本資料は鍛煉鍛造滓工程で生成した炉壁や粘土との反応が多い鍛造薄片などを多く巻き込んだ鍛煉鍛造滓と推察される。始発原料は砂鉄か否かは判断できない。

資料番号№5（M52） 梃型滓，着磁度：2，MC：なし

外観：外観を外観写真に示す。重量1757.4g，長さ168mm，幅139.7mm，厚さ60mm。比較的大きな梃型滓で，上面には最大で15mm×30mmくらいの本炭痕が明瞭に観察される。凹凸も顕著で中央付近は茶褐色を呈している。側面の破面でもと発泡しており，気泡は全体に均一な感じを受ける。下面はきれいに湾曲しており，炉床の砂礫が噛み込んでいる。上面に割れてガラス質光沢の滓がみられるが局部的と思われる。着磁度は2で，メタル反応はない。写真右下の1/5位を直線的に切断し調査試料を採取する。

顕微鏡組織：滓部分の顕微鏡組織を組織写真5-1～5-3に示す。写真5-1の組織は乳白色の蕭玉状ウスタイト（あるいはマグネタイトとの混晶）とその背後に板状のやや褐色を帯びた灰色のファイヤライトからなる組織で，資料の1/3位を占めている。写真5-2は鍛造薄片が溶融にかけている部分である。写真5-3はやや大きい粒状滓が観察される。資料3，資料4と同じく鍛造薄片と粒状滓が粘土や耐火材などの粘土と反応して生成したものである。

EPMA分析：本資料の代表的と考えられる組織写真5-1の組織について約700倍の倍率下でEPMAによる分析調査を行った。視野内の平均的な組成（200倍で分析）と各鉱物相の定性分析結果を図8～図16に，分析値を表5に示す。面分析結果をマッピング写真1に示す。分析位置は図8～図16に示している。なお，定性分析で貴金属のPt（白金）とPd（パラジウム）が検出されているがこれは資料表面の電気伝導を確保するため真空蒸着したPt-Pd合金が一層に分析されるためである。全体の分析でもと主要成分はFe，Si，Al，Ca，K，Mg等が少量含まれている。表3の化学成分と成分構成の特徴は一致する。始発原料を特定するTiは0.2%で少なく始発原料を砂鉄と特定できない。マッピング写真と分析値からみられるようにウスタイトはほとんど鉄と酸素で構成され，これにわずかなSi，Ti等が存在する。ファイヤライトは化学式2FeO・SiO₂に示されるようにFe，Si，Oが主体でこれにCaやMgが溶化している。またガラス質はSiO₂が主体でこれにAlやKが溶化している。化学成分：化学成分分析結果を表2に示す。全鉄50.5%に対して金属鉄は0.17%と少ない。FeOは47.5%，Fe₂O₃は19.2%である。SiO₂は17.7%，Al₂O₃は4.38%でやや多い。結合水は1.60%含まれており，ゲーサイトなどの錐化鉄が存在すると思われる。TiO₂は0.25%で，成分のみでは始発原料が砂鉄か判断できない。CaOは多く含まれ3.33%で，MgOは1.38%含まれている。SiO₂に対するAl₂O₃は通常の鉄滓に比べておおく，炉壁や粘土などがガラス質の素になっていると思われる。造滓成分量（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O）は29.25%である。鉄滓の化学成分の特徴から製鉄工程の位置づけを検討する図5，6，7で見ると図5，図7では鍛煉鍛造滓に属する位置にあり，図6では鍛煉鍛造滓としては造滓成分量が多い位置にある。造滓成分量が多い位置のは，顕微鏡組織で見られたように炉壁や粘土などが反応しているためと思われる。

以上の結果から，本資料は鍛煉鍛造滓工程で生成した炉壁や粘土との反応が多い鍛煉鍛造滓と推察される。始発原料は砂鉄か否かは判断できない。

資料番号№6 砂鉄，着磁度：（弱），MC：なし

外観：外観を外観写真に示す。資料№1の砂鉄とよく似ている。黄土色で粒状化した泥の様に見える。水洗しても色はあまり変わらず，やや黒みが増す程度である。黒色の浜砂鉄などに比べて着磁はやや弱い。水洗後，磁選分離を試みたが分離せず，風化は十分進んでいないと思われる。着磁度は測定できないが弱い着磁がある。メタル反応はない。

顕微鏡組織：組織写真6-1，6-2に100倍と400倍の顕微鏡組織を示す。顕微鏡組織は資料№1とほとんど

同じである。乳白色の砂鉄粒子に石英などの花崗岩の風化鉱物が付着・随伴している。また、写真には撮影していないが泥や石英とみられる夾雑物も多く存在している。

化学成分：化学成分分析結果を表2に示す。成分は資料1とほとんど同じで、同質の砂鉄と考えられる。全鉄(T, Fe)が2.7%と低く、代表的な不純物であるSiO₂は31.0%とT, Feよりも高い。高品位な砂鉄ではない。FeOは10.9%, Fe₂O₃は28.9%でFe₂O₃とFeOの比率は27.4:72.6である。TiO₂は5.26%含まれている。この砂鉄の品質を検討するために化学成分(酸化マンガン、全鉄、酸化マンガン)の関係を図1~図4に示した。図1に造滓成分量(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O)とT, Feの関係を示す。全国の砂鉄に比べても鉄分が低く、造滓成分量が非常に高い特徴がある。顕微鏡組織で夾雑物が多く、珪石などの花崗岩由来の鉱物の分離が十分でなかった観察結果と一致する。図2にTiO₂とT, Feの関係を示すが同じくT, Feの低い側にある。風化が進み、本砂鉄がT, Feで55%~60%位まで濃化したと仮定するとTiO₂は10.1~11%位まで上昇し、関東地方(栃木、茨城、千葉)の砂鉄とはほぼ同じ位置になる。図3はMnO/TiO₂とTiO₂/T, Feの関係を示す図で、土砂や夾雑物の影響を受けにくい指標である。この図においても関東地方の砂鉄とはほぼ同じ位置にあり、基本的にはこれらの砂鉄と同質と推察される。図4は砂鉄を代表する成分であるVとTiO₂をT, Feで基準化して、夾雑物などの影響を受けにくい指標として検討する図である。茨城・千葉の砂鉄とはほぼ同じ位置にあり、中国地方の赤目砂鉄よりもTiO₂が高い。

以上の結果を総合的に考えると本資料は資料No1の砂鉄と同じものと考えられる。花崗岩の風化鉱物との分離が十分に進んでいないT, Feが低くSiO₂などの夾雑物が多い砂鉄と位置づけられる。栃木、茨城、千葉などの関東地方の砂鉄と同系統ではないかと思われる。

資料番号No7 釘

外観：外観を外観写真に示す。全重量39.6g、大片：34.1g、小片：5.4g、大片：長さ127.4mm、幅13.2mm、厚さ12.9mm、小片：長さ50.5mm、幅9.6mm、厚さ7.8mm。先端から5cmの位置で折損している釘で、錆化膨張により長手方向に両面でも4本の縦亀裂が生じている。外観からは頭部を影らましているように見える。資料全体は厚く錆に覆われ、部分的に錆化瘤もみられる。先端側の折損部を用いて調査する。

顕微鏡組織：10倍の断面組織をマクロ写真1に、100倍と40倍の組織写真7-1、7-2に示す。マクロ写真にみられるように資料は厚く鉄さびに覆われている。全体的に白く、炭素は低いと思われる。写真左側に縦方向の亀裂状のものが観察されるがウスタイトと思われる介在物である。介在物は写真の縦方向に伸びていることから横方向から鍛打されたと推察される。顕微鏡組織は組織写真7-1、7-2に示すように結晶粒の大きさが異なり、写真7-1の方が結晶粒は大きくなっている。写真7-2は結晶粒が小さく写真の面に対して結晶粒は左上から右下方向に伸びており、これと直角の方向から鍛打されている。写真の基底組織はC(炭素)の非常に低いフェライト(α -鉄；C<0.02%)組織で、結晶粒界にわずかにパーライト(フェライトと鉄の炭化物であるセメントイト(Fe₃C)の層状組織)がみられる。顕微鏡組織としてはC量は0.2%以下と思われる。顕微鏡組織からみると浸炭や脱炭の形跡はなく低炭素の軟鉄が素材として使われたと思われる。

EPMA：マクロ写真の介在物についてEPMAにより微小領域分析を100倍の倍率下で行った。面分析結果をマッピング写真2に、各元素の定性分析結果を図17~21と表6に示す。SEM像(走査型電子顕微鏡写真)にみられるようにウスタイトと思われる鉱物相が観察され、基底は一目ガラス質のように見えるが分析結果ではFe、Siが主体でファイヤイトと考えられる。Tiについてはわずかしかなく始発原料が砂鉄か否かは判断できない。精錬鍛冶あるいは鍛錬鍛冶が抜けきれず介在物として巻き込まれて残ったものと思われる。

化学成分：Cは0.092%で純鉄に近い亜共析鋼の範囲にあり、顕微鏡観察と一致する。通常は還元されないSiやAlが少量含まれているがこれらは鉄渣などが非金属介在物として残存し、分析されたものと思われる。不純物は少ない。

以上の結果から、本資料は炭素の低い軟鉄を素材として鍛造により作られた鉄釘と推察される。

資料番号No8 刀子

外観：外観を外観写真に示す。全重量27.7g、大片：23.4g、小片：4.2g、大片：長さ109.4mm、幅26.9mm、厚さ7.1mm、小片：長さ42.6mm、幅12.7mm、厚さ7.8mm。手元側の43mmで折損している刀子状資料である。おそらく錆化瘤で全面が覆われていたと思われるが片面はこれらが剥離し、黒錆が露出している。手元側の折損片を用いて調査する。

顕微鏡組織：10倍の断面組織をマクロ写真2に、100倍と40倍の組織を組織写真8-1、8-2に示す。マクロ写真にみられるように資料は厚く鉄さびに覆われている。マクロ写真で見ると白色の部分と灰色の部分とが存

在する。白色の部分は組織写真8-2の組織でほとんど炭素を含まないフェライト組織である。結晶粒がやや潰れており鍛打の影響が及んでいる。一方、マクロ写真の灰色の部分は組織写真8-1の組織で炭素が0.8%よりもやや低いCがおそらく0.6%位の亜共析鋼の組織である。この部分では元の高温での結晶粒界に沿って初析のフェライトが析出し、基底はパーライトになっている。白色部と灰色部との間には介在物などは観察されず、炭素量に応じた結晶組織も緩やかに変化しており、炭素濃度の異なる素材を接合したものではないと考えられる。また、折り返しなどの痕跡も認められない。白色部は組織写真8-2の組織が加熱鍛打の際に脱炭したと推察される。白色部にみられる黒いシミ状の部分は介在物ではなく錆化部分である。

化学成分：Cは0.14%で低炭素の亜共析鋼の範囲にある。顕微鏡観察とおおよそ一致する。SiやAlが少量含まれているがこれらは鉄滓などが非金属介在物として残存し、分析されたものと思われる。不純物は少ない。

以上の結果から、本資料は炭素が0.6%位の亜共析鋼組成を素材として鍛造により作られた刀子と推察される。加熱鍛打時に脱炭が進んでおり、折り返しや異種の鉄素材を貼り合わせた痕跡はない。介在物の分析からは本資料の始発原料は砂鉄か判断できない。

4 まとめ

本分析調査を以下にまとめた。

1) 遺跡の性格

第1号製鉄遺構、第10号井戸跡、第1号廃棄土坑から検出された資料No3, No4, No5はいずれも顕微鏡組織で鍛造薄片や粒状滓が観察され、成分的にも鍛錬鍛造と判断された。これらの遺構では塊型滓や多量の釘、刀子などの鉄器が出土していることから本遺跡では鍛錬鍛造が行われていたと推察され、これらはそれに関連する遺構と考えられる。

第1号製鉄遺構、第1号掘立柱建物跡から検出された砂鉄資料No1, No6は成分、組織などからみてほぼ同一と見なすことができ、両遺構の間に関連があったと思われる。

第10号井戸跡から出土した鉄製品の釘と刀子はいずれも炭素量が低く、特に刀子は亜共析の組成(C<0.8%)の鉄が脱炭した形跡があり、素材の鉄には铸铁ではなく鋼が使われた可能性がある。調査した資料は2点に過ぎないがいずれも異種の鉄を鍛接した形跡はない。

以上の様に本遺跡が鍛錬鍛造に関わることは確実であるが、なぜ鍛錬鍛造に関わる遺構から砂鉄が出土するのかは不明である。

2) 始発原料

資料No3, No4, No5はいずれもTiO₂が0.25%~0.46%と低く、始発原料が砂鉄か否か判断はできない。鉄製品資料No7の介在物をEPMAで分析調査したがTiO₂を多く含む鉱物相は検出できず始発原料は特定できなかった。No8は介在物がなく、始発原料に関わる情報が得られなかった。しかし、2ヶ所から砂鉄が検出されたことを考慮すれば、砂鉄が始発原料に使用されたのではないかと思われる。

5 参考

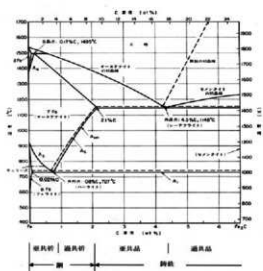
(1) 鉄滓の顕微鏡組織について：鉄滓を構成する化合物結晶には、一般的に表A1のような鉱物組織がある。酸化鉄(Fe₂O₃, Fe₃O₄, FeO)、二酸化ケイ素(シリカ:SiO₂)、アルミナ(Al₂O₃)および二酸化チタン(TiO₂)を組み合わせた化合物(固溶体)が多く、これら鉱物結晶は含有量にも依存するが、X線回折により検出され確認できる。鉄滓中の低融点化合物がガラス相(非晶質)を形成することがあり、X線回折では検出されない。

表A1 鉄滓の顕微鏡観察組織とその観察状況

鉱物組織名(和)	鉱物名(英)	化学式	偏光顕微鏡観察状況
ヘマタイト	Hematite	α -Fe ₂ O ₃	赤褐色~赤紫色
マグネタイト	Magnetite	γ -Fe ₂ O ₃	赤紫色~黒紫色
マグネタイト	Magnetite	Fe ₃ O ₄	白青色、四角または多角盤状
ウスタイト	Wustite	FeO	灰白色、繭玉状または樹枝状
ファイヤライト	Fayalite	2FeO · SiO ₂	薄い青灰色、短棒状の長い結晶
ウルゴスピネル	Ulvospinel	2FeO · TiO ₂	白色、四角~角形板状結晶
イルメナイト	Ilmenite	FeO · TiO ₂	白色、針状・棒状の長い結晶
シュードブルックイト	Pseudobrookite	FeO · 2TiO ₂	白色、針状の結晶
ハースナイト	Hercynite	FeO · Al ₂ O ₃	ウスタイト中に析出、ごま粒状

鉱物組織名(和)	鉱物名(英)	化学式	偏光顕微鏡観察状況
アカゲナイト	Akaganeite	β -FeOOH	組織は不明
モンテセライト	Monticellite	CaO · MgO · SiO ₂	組織は不明
ゲーサイト	Goethite	α -FeOOH	白～黄色、リング状が多い
レピドクロサイト	Lepidocrocite	γ -FeOOH	
石英 (シリカ)	Silica	α -SiO ₂	白色～半透明
クリストバライト	Cristobalite	β -SiO ₂	白色

参考2) 鉄-炭素系平衡状態図



参考図 Fe-C系状態図

合金の凝固組織は、液相または固相の状態からの連続冷却で形成されるものであるから、室温に至るまでに起ったすべての相変化の形跡を留めている場合が多く、状態図と対応させて、組織の内容を説明することができる。

6. 図表・写真

表1 調査資料と調査項目

資料No	出土地点	層位	資料・種別	磁石度	MC反応	外観写真	化学成分	組織写真	EPMA
1	第1号製鉄遺構 X (北側中層砂層付送)		砂鉄	○	○	○	○	○	
2	第1号製鉄遺構 X (北側中層砂層付送)		鍛造鋼片	○	○	○	○	○	
3	第1号製鉄遺構 覆土下層		塊型滓	○	○	○	○	○	○
4	第10号井戸跡 M39		塊型滓	○	○	○	○	○	
5	第1号煉炭土坑 M52		塊型滓	○	○	○	○	○	
6	第1号製鉄遺構跡 9号床面		砂鉄	○	○	○	○	○	
7	第10号井戸跡 覆土上層		釘	○	○	○	○	○	○
8	第10号井戸跡 覆土上層		刀子	○	○	○	○	○	

表2 砂鉄の化学成分分析結果 (%)

資料No	T. Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	Na ₂ O	K ₂ O	比率 (%)	
										Fe ₂ O ₃	FeO
1	27.4	10.1	28.0	32.3	11.3	1.80	4.60	0.73	0.59	26.5	73.5
6	28.7	10.9	28.9	31.0	10.6	1.70	4.62	0.69	0.56	27.4	72.6

資料No	TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	V	C. W.	TiO ₂ /T. Fe	MnO/TiO ₂	V/TiO ₂	造滓成分%
1	4.99	0.30	0.155	0.18	3.56	0.182	0.060	0.0361	51.32
6	5.26	0.30	0.150	0.18	3.38	0.183	0.057	0.0342	49.17

表3 鉄滓の化学成分分析結果 (%)

資料№	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	Na ₂ O	K ₂ O	比率 (%)	
											FeO	Fe ₂ O ₃
3	55.7	0.32	59.1	13.5	11.9	4.66	3.67	1.54	2.08	0.23	81.4	18.6
4	38.1	0.39	39.0	10.6	23.2	8.43	7.34	2.77	4.37	0.45	78.7	21.3
5	50.5	0.17	47.5	19.2	17.7	4.38	3.33	1.38	2.21	0.25	71.2	28.8

資料№	TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	Co	C. W.	C	V	Cu	TiO ₂ /T. Fe	MnO/TiO ₂	造滓成分%
3	0.30	0.14	0.476	0.008	0.22	0.05	0.007	0.14	0.005	0.467	24.08
4	0.46	0.22	0.887	0.005	0.77	0.10	0.010	0.010	0.012	0.478	46.56
5	0.25	0.17	0.505	0.007	1.60	0.07	0.007	0.016	0.005	0.680	29.25

C. W. = 化合水、造滓成分=SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O

表4 鉄塊系遺物の化学成分分析結果 (%)

資料№	C	Si	Mn	P	S	Cu	Ni	Co	Al	V	Ti	Ca	Mg
7	0.092	0.024	0.008	0.17	0.032	0.006	0.015	0.028	0.010	0.009	0.010	0.014	0.005
8	0.14	0.088	0.020	0.25	0.026	<0.001	0.014	0.028	0.064	0.009	0.089	0.076	0.031

表5 資料№5 EPMA分析結果

位置	全体	1	2	3	4	5	6	7	8
Fe	41.2	64.2	80.1	46.3	78.4	82.1	46.0	1.4	1.5
Si	17.2	5.9	0.33	19.0	1.0		19.2	32.7	32.5
Ti	0.2	0.37	0.31		0.26	0.34	0.08	0.11	
O	24.7	21.6	17.7	24.8	19.8	17.5	24.4	31.6	32.2
Al	7.3	1.4	0.69		0.57			16.2	16.2
Ca	4.0	5.8		4.4			5.5		
K	4.2							17.8	17.6
Mg	1.0	0.68	0.89	5.4			4.8		

位置1、4：ウスタイトの裏面部、位置2、5：ウスタイト部、
位置3、6：ファイヤライト部、位置7、8：ガラス部

表6 資料№7 EPMA分析結果

分析位置	全体	位置1	位置2	位置3	位置4
Fe	61.9	81.0	40.3	82.4	41.1
Si	9.8	0.3	20.1		20.4
Ti	0.41	0.66		0.61	
O	21.3	17.4	26.3	16.9	25.6
Al	3.3	0.6	6.0		5.6
Ca	2.0		4.3		4.1
S	0.21		0.46		0.41
K	1.1		2.5		2.6

位置1、3：ウスタイト部、位置2、4：ガラス質部？

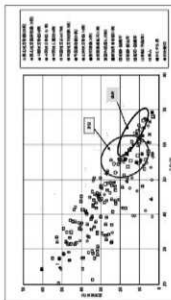


図1 赤土類中の交換性陽イオン量と遊離陽イオン量との関係

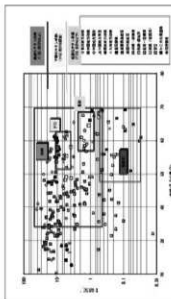


図2 赤土類と黒土類の交換性陽イオン量と遊離陽イオン量との関係

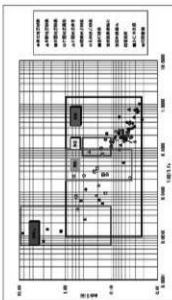


図3 赤土類と黒土類の交換性陽イオン量(TKX)と遊離陽イオン量(MAG)との関係

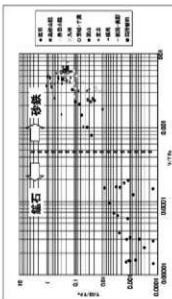


図4 黒土類の分類

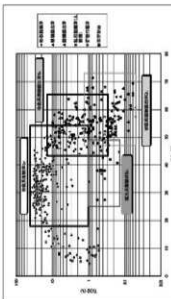


図5 赤土類と黒土類の交換性陽イオン量と遊離陽イオン量との関係

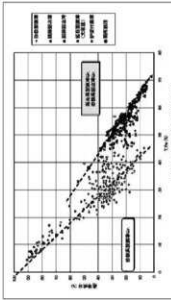


図6 黒土類と赤土類の分類

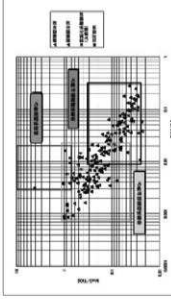
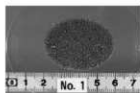
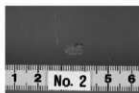


図7 赤土類と黒土類の交換性陽イオン量と遊離陽イオン量との関係

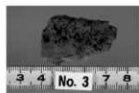
外觀写真



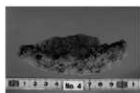
資料 No 1



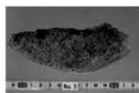
資料 No 2



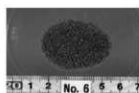
資料 No 3



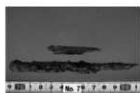
資料 No 4



資料 No 5



資料 No 6

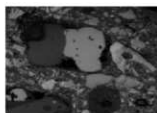


資料 No 7

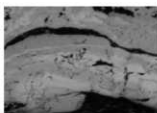


資料 No 8

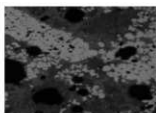
顕微鏡組織写真



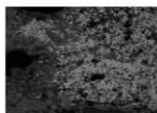
資料 No 1 x100



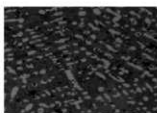
資料 No 2 x100



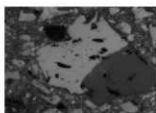
資料 No 3 x100



資料 No 4 x100

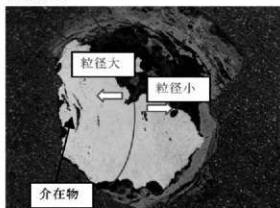


資料 No 5 x100

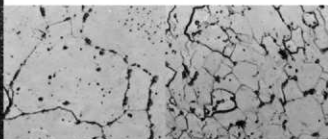


資料 No 6 x100

金属鉄組織

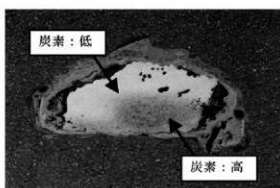


資料 No7 マクロ写真1 x10

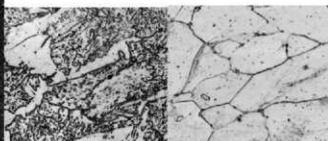


組織写真1 x400

組織写真2 x400



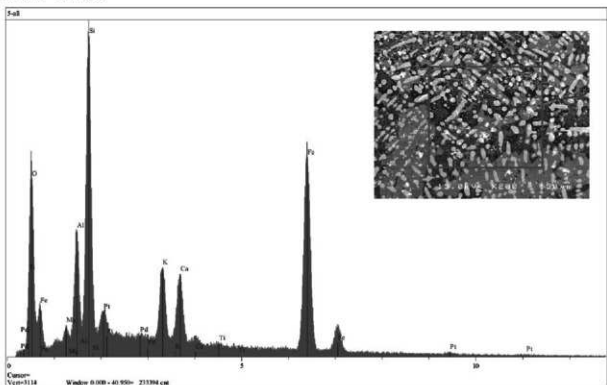
資料 No8 マクロ写真2 x10



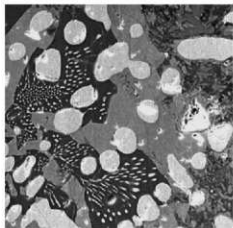
組織写真1 x400

組織写真2 x400

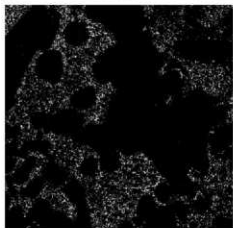
EPMA 分析結果



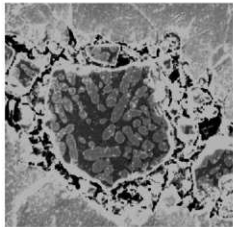
分析結果6 サンプルNo5 全体
※分析結果1～5, 7～14については, 省略



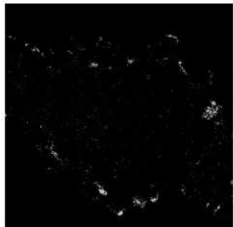
SEM



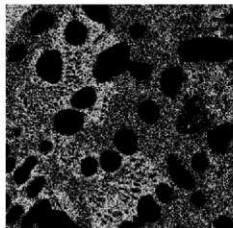
元素: Al



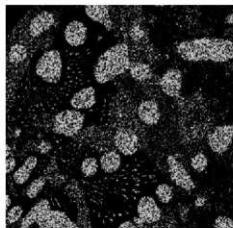
SEM



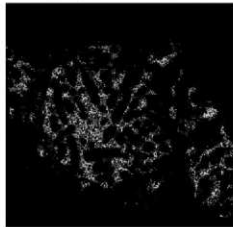
元素: Al



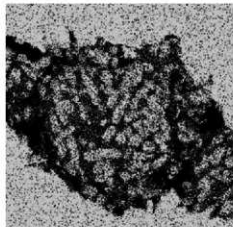
元素: Si



元素: Fe



元素: Si



元素: Fe

マッピング写真1 サンプルNo.5 マッピング分析 x 700

マッピング写真2 サンプルNo.7 マッピング分析 x 1000

写 真 图 版

清 水 遗 迹



清水遺跡遠景

清水遺跡
調査区全景



第2号住居跡
完掘状況



第2号住居跡
遺物出土状況



PL 2



第 2 号住居跡
竈完掘状況



第 2 号住居跡
竈遺物出土状況



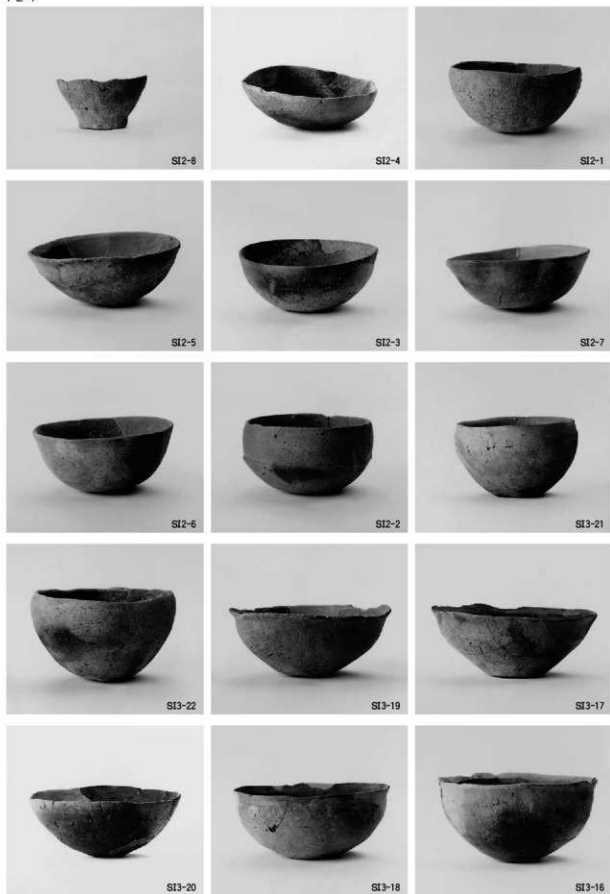
第 3 号住居跡
完掘状況



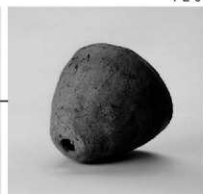
第3号住居跡
遺物出土状況



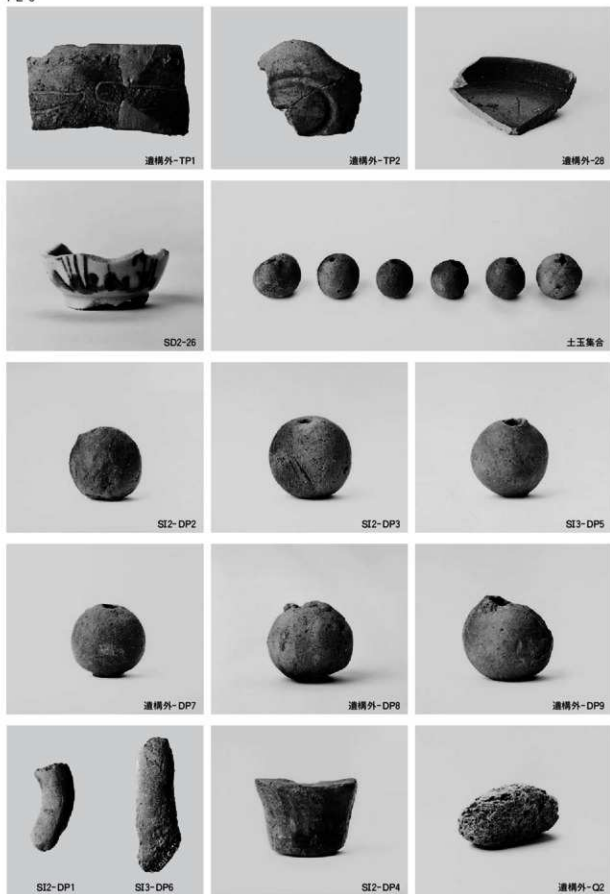
第1・2号溝跡
完掘状況



第2・3号住居跡出土遺物



第2・3号住居跡出土遺物



第2・3号住居跡、第2号溝跡、遺構外出土遺物

写 真 図 版

同 所 新 田 遺 跡



同所新田遺跡遠景

同所新田遺跡
第Ⅰ区全景



同所新田遺跡
第Ⅱ区全景



同所新田遺跡
第Ⅱ区中央部
(第45号溝跡中心に)





第1号方形周溝墓
完掘狀況(俯瞰)



第1号方形周溝墓
完掘狀況



第1号住居跡
焼土検出狀況

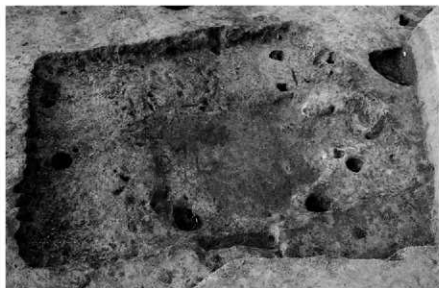
第1号住居跡
遺物出土状況



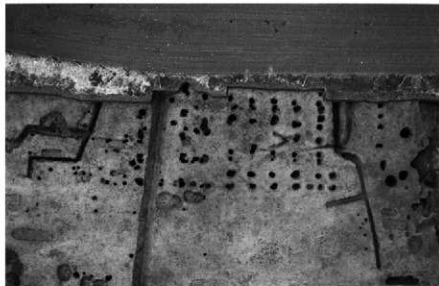
第1号住居跡
竈掘り方状況



第1号住居跡
掘り方状況



PL10



調査区第I区中央部
完掘状況
(第1号掘立柱建物跡を中心に)

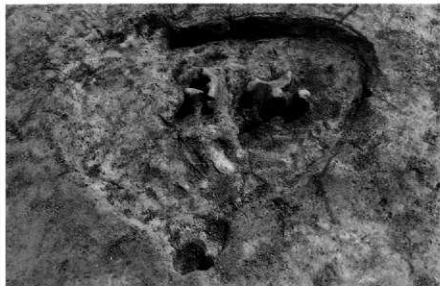


第1・3号掘立柱建物跡
第1号柵跡
完掘状況



第1号掘立柱建物跡
第2号柵跡
完掘状況

第1号掘立柱建物跡
炉掘り方状況



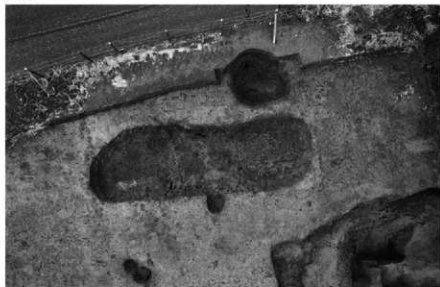
第1号掘立柱建物跡
溝1完掘状況



第6号掘立柱建物跡
完掘状況



PL12



第1号製鉄遺構
完掘状況(俯瞰)



第1号製鉄遺構
確認状況



第1号製鉄遺構
完掘状況

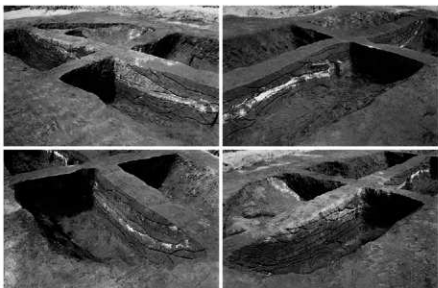
第1号製鉄遺構
遺物出土状況



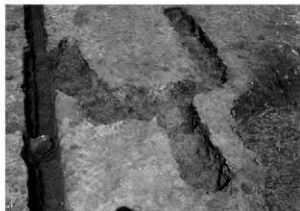
第1号製鉄遺構
遺物出土状況



第1号製鉄遺構
土層セクション



PL14



第13号溝跡完掘状況



第32号溝跡完掘状況



第8号溝跡完掘状況



第20号溝跡完掘状況



第25・26・41・51・52号溝跡完掘状況



第6・7号溝跡完掘状況



第6・7号溝跡完掘状況



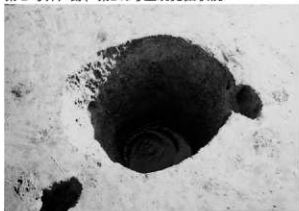
第1号井戸跡完掘状況



第2号井戸跡、第248号土坑完掘状況



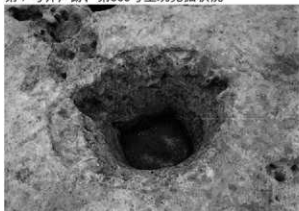
第3号井戸跡完掘状況



第7号井戸跡、第365号土坑完掘状況



第8号井戸跡完掘状況



第9号井戸跡完掘状況

PL16



第10号井戸跡
完掘状況



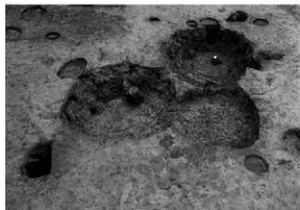
第10号井戸跡
下層部確認状況(俯瞰)



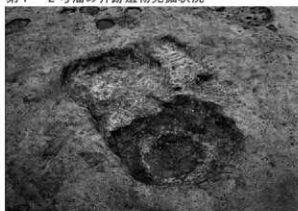
第10号井戸跡
下層部確認状況



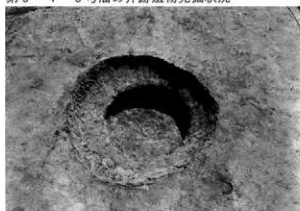
第1・2号溜め井跡遺物完掘状況



第3・4・5号溜め井跡遺物完掘状況



第6号溜め井跡粘土検出状況



第8号溜め井跡完掘状況



第1号廃棄土坑完掘状況



第1号廃棄土坑遺物出土状況



第1号廃棄土坑遺物出土状況

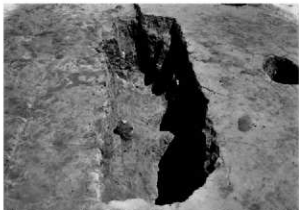


第1号廃棄土坑遺物出土状況(接写)

PL18



第3号柵跡完掘狀況



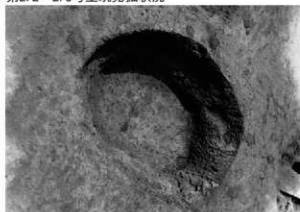
第4号柵跡, 第19号溝跡, 第258・262号土坑完掘狀況



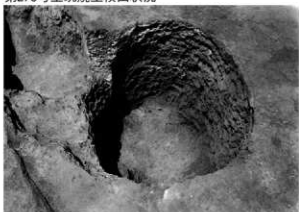
第272・273号土坑完掘狀況



第273号土坑燒土棧出狀況



第108号土坑完掘狀況



第116号土坑完掘狀況



第253号土坑完掘狀況



第390・391・394号土坑完掘狀況



TMI-1



第1号廃棄土坑-106



第1号製鉄遺構-12



第1号廃棄土坑-104



第1号製鉄遺構-14



第1号製鉄遺構-15



第1号製鉄遺構-16



第1号廃棄土坑-103



第1号製鉄遺構-13

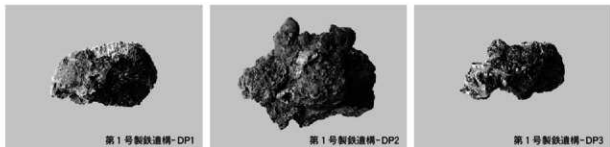
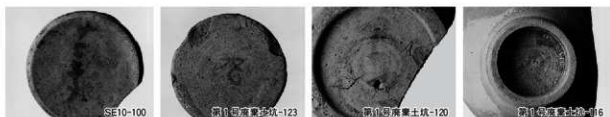
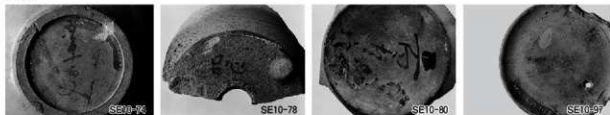


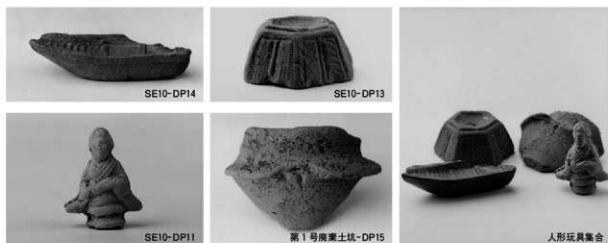
第1号廃棄土坑-108



第1号廃棄土坑-102

第1号方形周溝墓，第1号製鉄遺構，第1号廃棄土坑出土遺物









SD8-M20



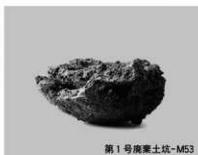
第1号製鉄遺構-M17



SE10-M39



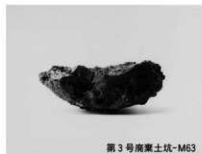
SE10-M38



第1号廃棄土坑-M53



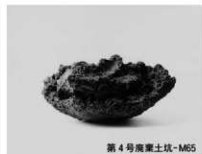
第2号廃棄土坑-M60



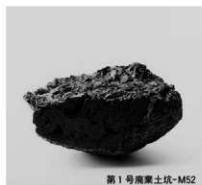
第3号廃棄土坑-M63



SE1-M66



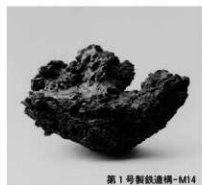
第4号廃棄土坑-M65



第1号廃棄土坑-M52



第1号製鉄遺構-M15



第1号製鉄遺構-M14



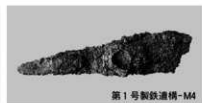
SE10-M47



第1号廃棄土坑-M58



SE10-M40



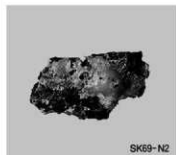
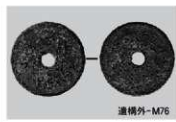
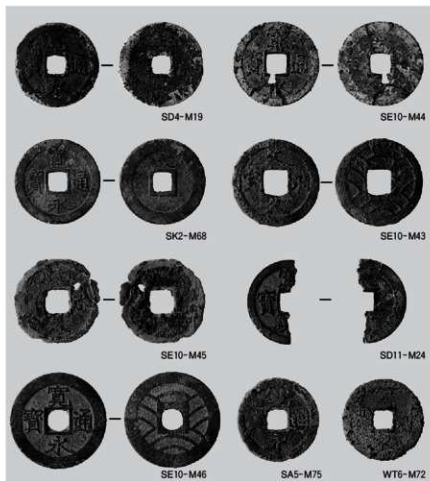
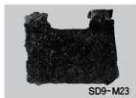
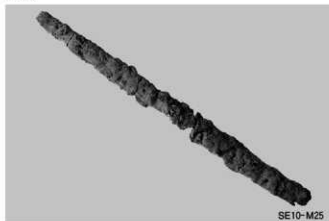
第1号製鉄遺構-M4



SB1-M2



SE10-M26





第1号製鉄遺構、第10号井戸跡、第1号廃棄土坑出土遺物



第1号製鉄遺構, 第10号井戸跡, 第1・2号廃棄土坑, 第120号土坑出土遺物



第1号廃棄土坑-118



WT6-143



SD2-39



第1号廃棄土坑-119



第1号製鉄遺構-34



SE10-94



第1号廃棄土坑-128



SD5-51



遺構外-147



SD4-48



第4号廃棄土坑-134



第1号廃棄土坑-TP2

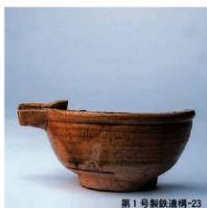


SD8-55



第1号製鉄遺構-24

第1号製鉄遺構、第2・4・5・8号溝跡、第10号井戸跡、第6号溜め井跡、第1・4号廃棄土坑、遺構外出土遺物



第1号製鉄遺構，第10号井戸跡，第1号廃棄土坑出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第290集

清 水 遺 跡
同 所 新 田 遺 跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成20(2008)年 3月19日 印刷
平成20(2008)年 3月24日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
T E L 029-225-6587

印刷 株式会社 須崎印刷
〒315-0013 茨城県石岡市府中1-3-16
T E L 0299-22-4658